

2018



創立55周年記念社員旅行

company trip
55
th anniversary

創立55周年記念
社員旅行
in Europe



in Europe

Italy
France
Germany

おかげさまで55年
技術と情熱を未来へ
Thank you



写真1 大鐘楼から見たヴェネツィアの町並み



写真2 サン・マルコ広場



写真3 ドゥカーレ宮殿



写真4 ゴンドラ遊覧



写真5 高速鉄道イタロ



写真6 ドゥオモから見たフィレンツェの街並み



写真7 ウフィツィ美術館(ヴィーナスの誕生)



写真8 アカデミア美術館



写真9 コロッセオ



写真10 コンスタンティヌスの凱旋門



写真11 真実の口



写真12 サン・ピエトロ大聖堂



写真13 スペイン広場



写真14 トレヴィの泉



写真15 最後にジェラートをおいしく頂きました



写真16 パリの街並み



写真19 モン・サン・ミッシェル



写真17 シャルトル ノートルダム大聖堂



写真20 モン・サン・ミッシェルのオムレツ



写真21 クロード・モネの庭

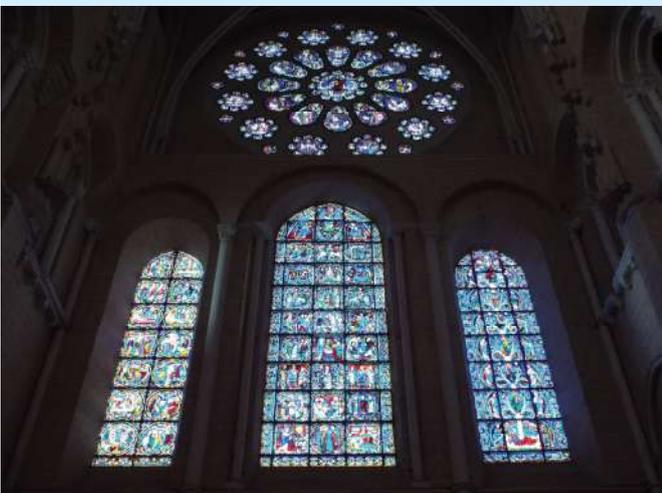


写真18 シャルトルブルーのステンドグラス

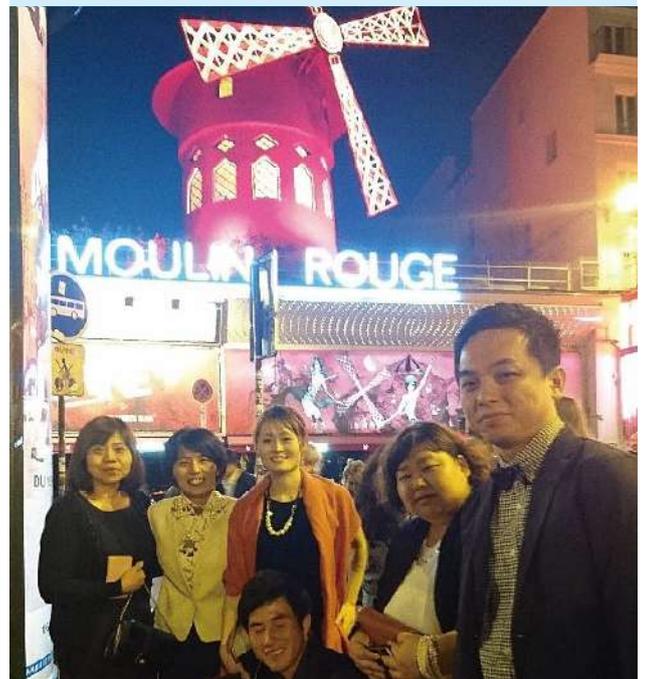


写真22 ムーラン・ルージュ

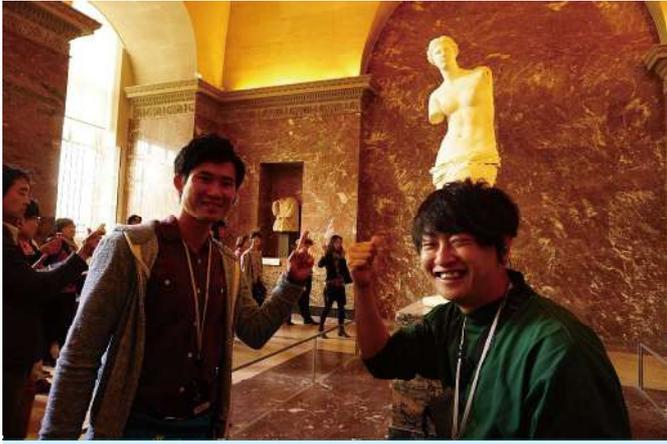


写真23 ルーヴル美術館 (ミロのヴィーナス)



写真24 モンマルトル サクレクール寺院



写真25 ヴェルサイユ宮殿



写真26 エスカルゴ料理を堪能

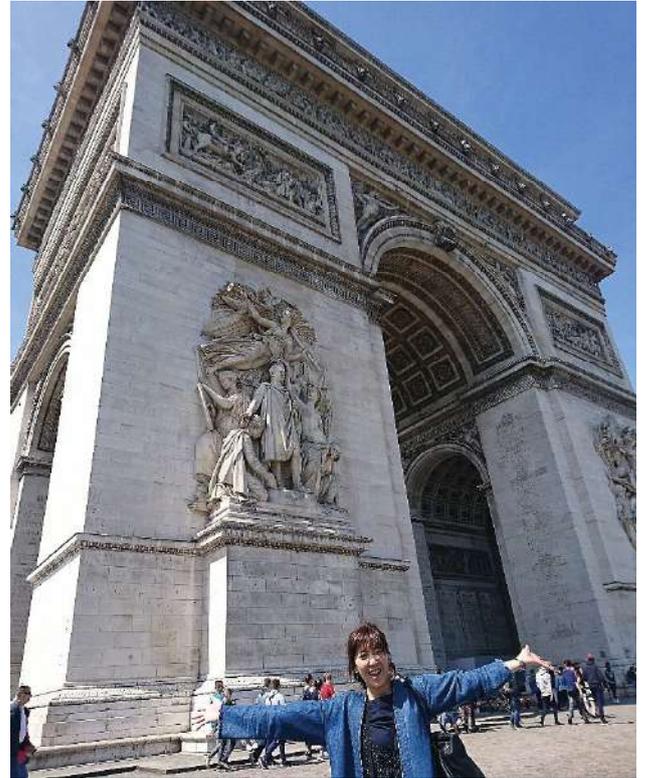


写真27 エトワール凱旋門



写真28 エッフェル塔



写真29 セーヌ川クルーズ



写真30 ドイツ連邦議会議事堂



写真34 ツェツィーリエンホーフ宮殿



写真35 チェックポイント・チャーリー



写真31 ブランデンブルグ門



写真36 ベルリンの壁



写真32 グリーニッケ橋



写真37 ベルリン大聖堂



写真33 サンスーシ宮殿



写真 38 ペルガモン博物館



写真 39 1Lビールで乾杯



写真 40 ヴィース教会



写真 41 ノイシュバンシュタイン城



写真 42 BMW博物館



写真 43 ミュンヘン新庁舎(マリエン広場)



写真 44 アリアンツ・アリーナ



写真 45 レジデンツ(ベルデスバッハ王家の宮殿)

序 文

わが社は昭和 38 年 11 月 29 日に創業しました。今年で 55 周年を迎えます。ひとえに、国土交通省や高知県をはじめとする四国内の官公庁、そして何よりも日々献身的に働いてくれている社員とそれを支えてくれているご家族のお陰であり、心より感謝申し上げます。

私は数年前から社員に、「55 周年には全員でヨーロッパへ行こう」と夢を語り、高い経営目標を掲げてきました。社員はこれによく応え、努力を惜しむことなく懸命に働き、業績を順調に伸ばしてきました。そして平成 29 年度には念願であった受注 20 億円の壁を突破することができました。

行きたい旅行先を社員に尋ねたところ、ほぼ同数でイタリア、フランス、ドイツがあがってきました。これまでは、全員が同じ場所へ行くことが暗黙の約束になっていましたが、今回は社員の希望に沿うようにイタリア班、フランス班、ドイツ班に分かれて行くことにしました。

社員旅行の費用が福利厚生費として非課税扱いになるにはいくつかの条件があります。その一つが旅行日数です。最低でも 5 泊 7 日は欲しいところですが、ゆったりとしたヨーロッパ旅行は次の楽しみに残すこととし、今回は非課税になる 4 泊 6 日としました。

旅行の行程を決めるに当たって、私から次の 4 つの条件を提示しましたが、それ以外は親睦会と旅行会社にすべて任せました。

- ①あまりハードな行程にしないこと。できれば連泊が望ましい。
- ②観光地、中心街に近い便利な場所にあるホテルを選ぶこと。特にヴェネツィアはヴェネツィア本島に泊まること。
- ③羽田空港を利用するなど効率的に移動できるルートを選ぶこと。
- ④イタリア内の移動には高速鉄道を利用すること。

本書は、社員が執筆したヨーロッパ旅行記を綴ったものです。わが社では、平成 25 年の社員旅行から参加者全員に旅行記を執筆してもらっています。旅行記は社員の成長、そして会社の成長の証でもあります。

わが社は建設コンサルタントという仕事を通じて、社員の技術力だけでなく人間力を高めることで、「地域から愛され、必要とされる人づくり」を目指しています。社員旅行はその一環です。社員が同じ釜の飯を食べ、お互いが助け合いながら見聞を広めることで、社員が絆を強め、視野を広げることを願っています。

5 年後には創立 60 周年を迎えます。社員全員で再びヨーロッパに行くことを目標にして、さらなる社業の発展に努めて参る所存であります。

代表取締役社長 右城 猛

目 次

口絵（イタリア、フランス、ドイツ）

序 文

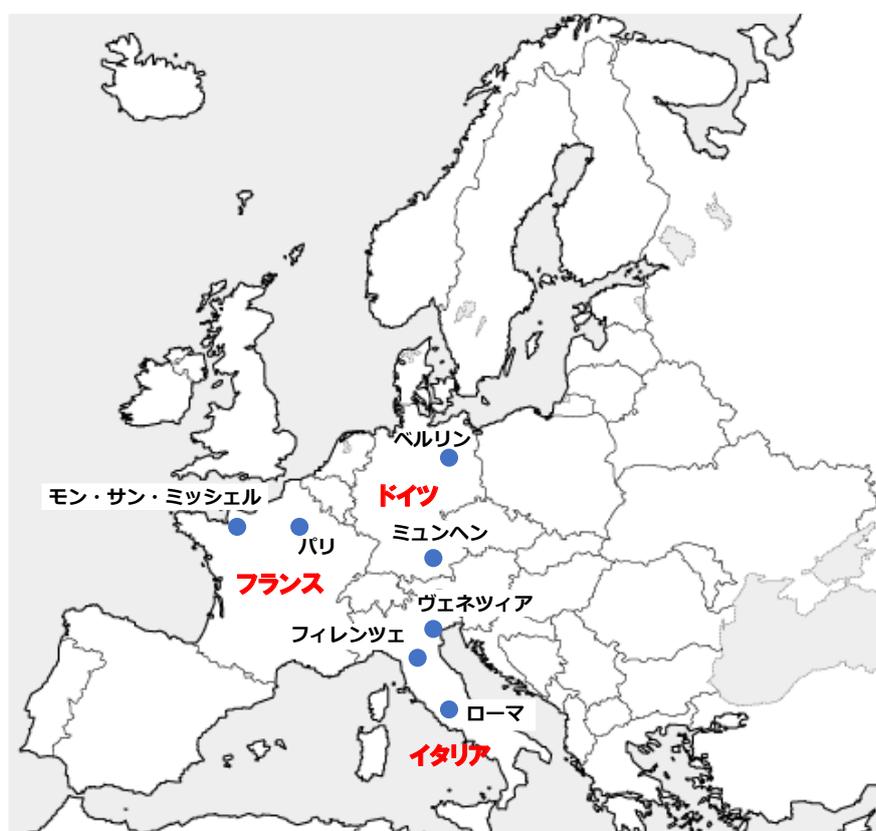
目 次

| | |
|------------------------|-----|
| 第 1 章 ヨーロッパ旅行の概要 | 1 |
| 第 2 章 イタリア | 7 |
| 第 3 章 フランス | 92 |
| 第 4 章 ドイツ | 161 |
| 第 5 章 社員旅行の思い出 | 231 |

ヨーロッパ旅行の概要

3 班の概略

| 行き先 | 月日 | 参加者 | 訪問地 |
|-------|-----------------|------------------|-------------------|
| イタリア班 | 5月7日(月)～12日(土) | 社員30名、家族6名、添乗員2名 | ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ |
| フランス班 | 5月14日(月)～19日(土) | 社員27名、家族2名、添乗員2名 | パリ、フランス西海岸、パリ郊外 |
| ドイツ班 | 5月21日(月)～26日(土) | 社員31名、家族1名、添乗員2名 | ベルリン、ポツダム、ミュンヘン |



創立 55 周年記念社員旅行訪問先

イタリア班の日程

| | | |
|-------------------|-------------|---|
| 5月7日 (月) 晴れ | 羽田からヴェネツィアへ | 高知 10:15→羽田 11:35(ANA564) 松山 9:45→羽田 11:10(ANA584) 羽田 14:05→フランクフルト 18:45(LH717) 所要時間 11:40 時差 7 時間 フランクフルト 21:45→ヴェネツィア・テッセラ空港 23:00(L332) ヴェネツィア泊 |
| 5月8日 (火) 晴れ | ヴェネツィア観光 | サン・マルコ広場、サン・マルコ寺院、ドゥカーレ宮殿 ゴンドラ遊覧 ヴェネツィア泊 |
| 5月9日 (水) 曇り | フィレンツェ観光 | ミケランジェロ広場 サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂 ウフィツィ美術館 フィレンツェ泊 |

| | | |
|--------------------|--------------|---|
| 5月10日 (木) 晴れ | ローマ観光 | コロッセオ、真実の口が展示してあるコスメディアン教会 ヴァチカン市国 サン・ピエトロ広場、システィーナ礼拝堂 ローマ泊 |
| 5月11日 (金) 晴れ | ローマ観光 日本へ | スペイン広場、トレヴィの泉 ローマ 12:10→ミュンヘン 13:40(LH1843) ミュンヘン 16:15(LH714)→ |
| 5月12日 (土) | 日本 | →羽田 10:50 羽田 13:30→高知 14:55(ANA565) 羽田 12:15→高知 13:45(ANA589) |

フランス班の日程

| | | |
|----------------------|--------------|--|
| 5月14日 (月) 晴れ | 羽田からパリへ | 高知 7:15→羽田 8:30(JAL490) 羽田 10:40→パリシャルル・ド・ゴール空港 16:15(JAL045) 所要時間 12:35 時差 7 時間 パリ泊 |
| 5月15日 (火) 晴れ | モン・サン・ミッシェルへ | シャルトル・ノートルダム大聖堂 モン・サン・ミッシェル モン・サン・ミッシェル泊 |
| 5月16日 (水) 晴れ | パリ郊外とパリ | クロード・モネの庭 ムーラン・ルージュ パリ泊 |
| 5月17日 (木) 雨、曇り | パリ | 自由行動 ルーヴル美術館 シャンゼリゼ通り、エトワール凱旋門、エッフェル塔 パリ泊 |
| 5月18日 (金) | パリ観光 日本へ | ヴェルサイユ宮殿 パリ市内で昼食 セーヌ川クルーズ パリシャルル・ド・ゴール空港 20:30(JAL046)→ |
| 5月19日 (土) | 日本 | →羽田 15:25 羽田 16:55→高知 18:15(JAL497) |

ドイツ班の日程

| | | |
|--------------------|------------------|---|
| 5月21日 (月) 晴れ | 羽田からベルリンへ | 高知 10:15→羽田 11:35(ANA564) 松山 9:45→羽田 11:10(ANA584) 徳島 10:50→羽田 12:05(ANA282) 羽田 14:05→フランクフルト 18:45(LH717) 所要時間 11:40 時差 7 時間 フランクフルト 20:15→ベルリン 21:25(LH044) ベルリン泊 |
| 5月22日 (火) 晴れ | ベルリン観光 ポツダム観光 | ドイツ連邦議会議事堂、ブランデンブルク門 ベルリンオリンピック(1936)のメインスタジアム「ベルリン・オリンピアシュタディオン」 ベルリン郊外のアヴス自動車専用道路(1913~1921)(最初のアウトバーン) グリーニッケ橋 ポツダム旧市街のショッピング街ブランデンブルク通りのレストラン Ballhouse で昼食 サンサーシ宮殿(世界遺産) ポツダム会談の舞台 ツェツィーリエンホーフ宮殿(世界遺産) 自由行動 (ベルリン高級デパート KaDeWe) レストラン・マキシミアンス(バイエルン料理) ベルリン泊 |

| | | |
|--|--------------------------------------|--|
| 5月23日 (水) 晴れ ミュンヘン は曇り | ベルリン市内観光 ミュンヘンへ移動 | ポツダム広場 SONY センター チェックポイント・チャーリー、ベルリンの壁イーストサイド・ギャラリー ベルリン大聖堂、ペルガモン博物館 レストラン「Neumann's」で昼食 ベルリン テーゲル空港 16:00→ミュンヘン 17:10 (LH2041) ホーフブライハウス(Hofbräuhaus München)で食事 ミュンヘン泊 |
| 5月24日 (木) 雨、曇り | シュタインガーデン、シュ ヴァンガウ ミュンヘン市内 | シュタインガーデンのヴィース教会(世界遺産)へ シンデレラ城のモデル「ノイシュバンシュタイン城」 昼食 BMW 博物館、BMW ヴェルト(ショールーム) マリエン広場、ミュンヘン新市庁舎 ミュンヘン新市庁舎の地下レストラン「ラーツケラー-Ratskeller」で食事 ミュンヘン泊 |
| 5月25日 (金) 晴れ | ミュンヘン 日本へ | FC バイエرن・ミュンヘンのホームスタジアム「アリアンツ・アリーナ」 ヴェルテルスバッハ王家の宮殿「レジデンツ」 空港で昼食 ミュンヘン 16:15(LH714)→ |
| 5月26日 (土) | 日本 | →羽田 10:50 羽田 12:15→松山 13:45(ANA589) 羽田 13:30→高知 14:55(ANA565) 羽田 13:35→徳島 14:50(ANA283) |

イタリア班

青木正典(青木)、弘田伸(弘田、弘田)、楠本雅博(楠本、楠本)、高橋祐也、渡部清隆(渡部)、工藤頌子、村岡志郎、島村圭太、小島心平、生田万祐子、岡 潔、須内寿男、安地勝江、大和田菊代、小笠原明弘、細川公二、齋藤啓太、小松由和、十河智麻、澤田亜由美、尾崎勝彦、長崎悟史、伊藤哲也、西村研了、山本崇顕、有澤尚可、田中聖一、柴田昭英、那須太郎、那須滉樹

JTB 添乗員 瀧本文雄、竹内季

【ビデオ係】島村圭太、長崎悟史、伊藤哲也、山本崇顕、那須太郎



フィレンツェのミケランジェロ広場(2018年5月9日)



ローマのコロッセオ(2018年5月10日)

フランス班

西川徹、濱田拓也、小野昭彦(小野)、山本幸栄、明神怜佳、森下昌裕、北澤聖司、高橋昌也、横山成郎、芝田和仁、北村暢章、有澤芳則、土居徹平、矢田康久、西村紘寛(西村)、吉田直起、島内司、田村隆幸、中越紀子、小島由佳、西岡徹、西森尚人、谷加奈、窪添智津子、小野裕正、畑中徳雄、吉門祐弥

JTB 添乗員 瀧本文雄、安達晃子

【ビデオ係】北村暢章、西村紘寛、吉門祐弥



モン・サン・ミッシェル(2018年5月15日)



ヴェルサイユ宮殿(2018年5月18日)

ドイツ班

右城猛(右城絹枝)、矢田部龍一、松本洋一、山本裕子、小松俊則、山本剛也、佐藤香奈子、片岡寛志、富永敏絵、堀田朋男、公文海斗、兵頭学、矢野川稔、片山直道、乾隼輔、又川嵩哉、中平隆文、阿部一輝、千葉辰政、徳橋蓮、三浦貢一、児玉翔、山中公貴、岩瀬誠司、池愛夫、森本雅陽、井上敬士、木村卓、宮崎卓巳、杉本梨菜、坪田沙希

JTB 添乗員 眞田直也、安達晃子

【ビデオ係】山本剛也、富永敏絵、兵頭学



ベルリンのブランデンブルク門(2018年5月22日)



ミュンヘンのアリアンツ・アリーナ(2018年5月25日)

2018年5月7日(月)～12日(土)

イタリア

世界遺産イタリア

調査部 取締役部長
弘田 伸 (1987年入社)

1. はじめに

初めての欧州の旅。その中でもイタリアは第一希望。今回は家族の強い希望もあり、出費も嵩むが妻と娘も同行することにした。

2. ヴェネツィア

朝8時前ホテルを出発し水上バスに乗船。世界で最も美しい広場と言われている「サン・マルコ広場」に到着(口絵写真2)。まず、街のシンボル、高さ98mの大鐘楼にエレベーターで昇りヴェネツィアの景色を望む。想像以上の絶景だ(口絵写真1)。

続いて「サン・マルコ寺院」・総監の館「ドゥカーレ宮殿」を観覧(口絵写真3)。その後、6人ずつに分かれボーダーシャツ姿のイケメンが手漕ぎするゴンドラ(口絵写真4)に乗り、当社用に用意していただいたゴンドリエーレの生歌を聴きながら運河をクルーズ。「これぞヴェネツィア観光」。昼食後は夕食まで自由行動となる。

ヴェネツィアは水の都と言われるとおりの大小の運河が張り巡らされている。島内は車の乗入れが禁止されており、交通手段は徒歩または水上バス等である。建物は古く、町並みで特徴的なレンガ色の屋根は想像していたとおりの綺麗だ。また、標高が低く、11月～3月の時期には水位が上がり、サン・マルコ広場や寺院まで海水が入り込んでくることもあるようだ。

私たち家族は、スーパーで土産物を買込み水上バスで一度ホテルに戻り、夕食までヴェネツィアの街を散策した。



記念に80ユーロでヴェネツィアングラスのセットを購入

3. フィレンツェ

3日目はホテルから歩いて直ぐのサンタ・ルチア駅から2時間かけフィレンツェへ。フェラーリカラーの列車を想像していたが、くすんだ色でがっかり(口絵写真5)。

到着後、バスで世界一の眺望と言われ、フィレンツェの町を一望できる「ミケランジェロ広場」へ。広場の中心にはダヴィデ像のコピーが置かれている。ここでは小雨で少し霧がかかっており世界一とはほど遠い。イタリアの名車フェラーリの試乗が行われていたが、時間がなくて残念。

続いて、ミケランジェロ作で世界的に有名な「ダヴィデ像」が展示してある「アカデミア美術館」へ。入場待ちしていると三つ編み女性のジブシーが物乞いに近づいてくる。観光客もわかっており無視すると立ち去る。これもイタリア観光のならではの。美術館に入ると正面奥に「ダヴィデ像」細部まで彫刻してある筋肉隆々の石像は一見の価値あり。

午後からは「サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂」へ。外壁の彫刻や装飾は言葉を失うほどの美しさ。建物自体が芸術作品だ。

これからが大変。ドゥオモ・クーボラの見晴台を目指し464段の階段を上る。汗だくになりながら一人の脱落者もなく登り切る。天気も回復しミケランジェロ広場とは違った町並みが望める(口絵写真6)。

次に「ウフィツィ美術館」を観覧。この美術館はレオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロなど三大巨匠の作品が展示されている(口絵写真7)。美術館などは正直興味なかったが、世界的絵画には圧倒されるばかりだ。



世界一の眺望もあいにくの天気でがっかり



アカデミア美術館 正面に有名な「ダヴィデ像」



サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂



見晴台での家族写真

4. ローマ

フィレンツェ駅から列車で1時間半かけローマへ。

まず、円形闘技場「コロッセオ」に行く。ここは誰もが一度は写真などで目にしたことのある建造物で、ぜひ見てみたい観光地の一つだ。

到着するとすでに大勢の観光客で入場待ちの行列ができています。

コロッセオは西暦80年に完成した約5万人を収容する

巨大娯楽闘技場で、剣闘士同士の戦いのほか、剣闘士と猛獣の命がけの戦いが行われていた。戦いの舞台は木造だったため、現在は朽ち果て、地下がむき出しになっている。隣にはナポレオンが気に入りフランスのモデルとなった凱旋門がある。

ローマ大帝の栄光が感じられる場所である。

続いて映画オードリー・ヘプバーン主演の「ローマの休日」で有名な「真実の口」が展示してある「コスメダイン教会」へ。こんなところに「真実の口」である。勉強不足だが建物の中に展示してあるとは予想してなかった。もともとはマンホールの蓋だったようだ。この口に偽り物が手を入れると抜けなくなるという伝説がある。

全員が順番に口に手を入れる(口絵写真11)。当社に偽り物はいなかったようだ。

昼食はローマが発祥の地「カルボナーラ」、味は旅行の中でも美味しい方だった。



コロッセオと凱旋門



こんな意外な場所に真実の口が・・・

5. ヴァチカン市国

昼食後徒歩でヴァチカン市国へ。

ヴァチカン市国はサン・ピエトロ広場を除き古い城壁

に囲まれている。カトリック教会の総本山サン・ピエトロ大聖堂を中心に面積 0.44km² の世界最小の独立国であり、国全体が世界遺産に登録されている。

まず、「ヴァチカン美術館」に入館。ロビーで荷物と服装のX線検査を受ける。ヴァチカン美術館は歴代のローマ教皇が収集品を展示する世界最大級の美術館で美術館・博物館・ギャラリーなどで構成されている。

地図のギャラリーには 120m の壁面にイタリア各地の地図が展示してある。16 世紀からこんな正確な地図が描かれていたかと思うと西洋文化には驚かされる。

最後に「システリーナ礼拝堂」を拝観。壁面に描かれている「最後の審判」はミケランジェロの絵画の頂点と言われており圧巻である。残念ながら撮影禁止となっている。

続いて「サン・ピエトロ大聖堂」を拝観(口絵写真 12)。その規模と美術品や装飾には圧倒されるばかりだ。



塙の向こう側がヴァチカン市国



長さ 200m 余りある圧巻のサン・ピエトロ大聖堂礼拝堂

6. ローマ→高知

最終日は、「スペイン広場」、「トレヴィの泉」を見学し空港に向かう。

スペイン広場の中央には「バルカッチャの噴水」、広場の東側には 135 段の階段があり、その上には「トリニタ・ディ・モンティ教会」がある(口絵写真 13)。この周辺は有名なブランド店が集まるショッピングエリアとなっており、私たちは早朝の開店前に行ったが、日中は大勢の観光客で賑わっている。

続いてトレヴィの泉を見学(口絵写真 14)。言い伝えに習い、「再びローマに来ることができる」よう一枚のコインを後ろ向きに投げる。叶うことができるか？

12 時 10 分発ローマ空港からドイツのミュンヘンで乗り継ぎ羽田空港を経由し 14 時 55 分高知龍馬空港に無事に到着。

7. おわりに

まずは、参加者の協力、JTB の添乗員のおかげで誰ひとりスリやトラブルに遭うことなく無事帰路につけたことが何よりであった。

今回のイタリア旅行 6 日間で歩いた距離の合計をスマホで確認すると 42.5km。フルマラソンに相当する距離で大変ハードな旅となった。しかし、イタリアは見所が沢山あり、せっかく来たのならこれくらいは当然か。行った所々でそれぞれの歴史を感じ家族を同行させた価値は多いにあった。

建造物に関しては日本の木造に対しイタリアは石造。歴史ある建物を修復しながら今日に至っている。そのスケールの大きさと彫刻などの美しさには言葉を失うばかりだ。

ローマでは古い水道橋なども残っており、インフラ整備も盛んに行われていた。土木技術の先駆者として「すべての道はローマに通ず」と言われたゆえんが垣間見えた。

道路は石畳が多く歩きづらく疲れる。交差点は信号がなくロータリー式がほとんど。複雑だが街並みとマッチしており渋滞は少なく感じた。

美術館や寺院は、教科書や映像で見た世界を目の当たりにし、本物を見ることの大切さを感じさせられた。世界中から観光客が集まるのも納得だ。

食に関してはパスタ、ピザやステーキなどを食したが、味付けが全体的に薄味で塩が欠かせない。前菜のサラダは日本のようなドレッシングはなく、オリーブオイルとバルサミコ酢。正直、日本の方が美味しいと感じた。

旅行で残念に思ったのが、世界的観光地なのにゴミやたばこの吸い殻があちこちに落ちている。掃除している姿も見かけない。国民性の違いなのか。また、街中の壁は至る所ペイントでの落書きだらけ。これも芸術なのか。

今回のイタリア旅行でモチベーションを上げ 55 周年の弾みとしたい。

アーチ構造を見て

技術開発部 部長
楠本 雅博 (2003年入社)

8. はじめに

本レポートでは、古代ローマ時代から採用され、美しさと堅固さを兼ね備えたアーチ構造について記載する。

9. ヴェネツィアのアーチ

ヴェネツィアは言わずと知れた「水の都」である。街の随所に小規模なアーチ橋が見られる。船上からの橋梁点検に出発！

(1) サン・マルコ広場近くの橋

観光用のゴンドラ乗り場に近く、ゴンドラの往来も多い。アーチの下面は大理石で化粧貼りされ美しい。筆者としては、アーチ部材が直接見えないのが残念である。

(2) 高欄が美しい橋

高欄の化粧飾りが美しい橋だが、側面から見るとアーチライズ(アーチの幅に対する高さの比率)が小さい。

アーチライズを大きくすると、支点部の水平力が小さくなり合理的である。しかし水路幅が広い場合にアーチライズを高くすると、アプローチ部を長くするか、階段や急勾配の路面となる。橋上の歩行者に配慮してアーチライズを小さくしたと考えられる。

下面に化粧板はなく、両端が大理石、中央部はレンガで構築されている。アーチクラウン下面のレンガ間に隙間が見える。直下を通るゴンドラへのレンガの落下、アーチ構造の不安定化が懸念される。

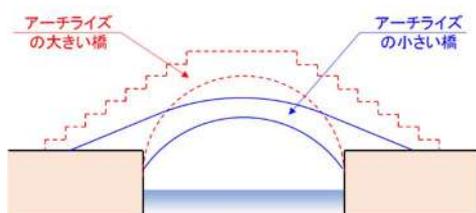


図-1 アーチライズの大小



写真-1 サン・マルコ広場近くの橋(側面)



写真-2 サン・マルコ広場近くの橋(下面)



写真-3 高欄が美しい橋(側面)



写真-4 高欄が美しい橋(下面)

(3) 端部が拡幅された橋

片側端部が拡がったバチ構造を有する橋。

桁下を見ると、当初のレンガの上にモルタルが塗られ、さらに鋼材が配置されている。

水路は海水である。ゴンドラが通過するため、桁下高を確保する必要がある。やむを得ず腐食の懸念がある鋼材を使用したと推察される。鋼材は細く、またアーチとの間に隙間がある。アーチの補強としての効果には疑問がある。モルタルとの併用により、レンガの剥落防止が主目的と考えられる。

(4) 小さなアーチ橋

白い大理石と、オレンジ色の漆喰のコントラストが可愛いアーチ橋である。

下面を見ると、アーチを構築した後、表面にモルタルが塗られたと推察される。その後オレンジ色の漆喰が塗られ、さらに幅員方向に鋼材が配置されていた。鋼材は側面の大きな大理石の変位を拘束していると考えられるが、本来の目的はよくわからない。

(5) リアルト橋

ヴェネツィアのほぼ中央にあり、橋上にアーケードがあることで有名。最も大きな運河カナル・グランデを跨ぐ支間長 28.8m、幅員 22.9m の橋である。

全面が大理石貼りである。詳細構造はわからない。石橋としては 1591 年に架設されたとの記載がある。架設後 427 年である。石橋の前は木橋であったとの事。木橋の架設は 1245 年、日本では鎌倉時代である。

日本で最も有名な石造りの上路式のアーチ橋は、1634 年に架設された長崎の眼鏡橋である。架設後 384 年の橋である。

供用期間を 50 年だ、100 年だという維持管理の考え方を考えさせられる年数である。

橋の構造として歴史が古いのは丸木橋や石造りの桁橋である。しかし、アーチ橋に限れば、石造りかレンガ造りが古く、しかも美しい。私が一番好きな橋梁形式である。



写真-7 小さなアーチ橋(側面)



写真-8 小さなアーチ橋(下面)



写真-5 端部が拡幅された橋(側面)



写真-6 端部が拡幅された橋(下面)

(6) デラ橋

現代のイタリア人がアーチ橋を設計するとうなる、と思わされるデラ橋。

魚の骨をイメージさせる主構を有する。橋面の一部と高欄はガラス製である。有名なヴェネツィア・ガラスが使用されているかどうかはわからない。

主構や高欄は緩やかな曲線を描いている。デザインは細部から全景まで行き届いており、優雅な姿はタメ息が出るほど美しい。



写真-9 リアルト橋



写真-10 デラ橋(側面)



写真-13 アーチ屋根の内面



写真-11 デラ橋(橋面)



写真-14 ヴェッキオ宮内部

10. フィレンツェのアーチ

フィレンツェは、建物の屋根や間口を構成するアーチ構造が美しい街である。

写真-12、13は、最も有名なドゥオモ(大聖堂)のドーム屋根である。ドーム屋根にもアーチ構造の技術が使われている。

写真-14は、シニョーリア広場の中心にあるヴェッキオ宮中庭の柱列である。間口上部の梁としてアーチ構造が使用されている。



写真-12 ドゥオモ(大聖堂)のアーチ屋根

11. ローマのアーチ

ローマで見られるアーチ構造は、歴史が古く、優雅さよりも重厚さを感じる。

写真-15は、コロッセオに向かう途中の道路にある水道橋の遺跡である。残念ながら車道上は撤去されている。歩道上には門型アーチが残っている。

写真-16は、コロッセオの近くにあるフォロ・ロマーノ遺跡である。半割りのドーム屋根が見える。崩壊を防止するため、PC鋼材と鋼製アンカーで補強されている。変位計も設置されている。

写真-17は、コロッセオの外壁、三層のラーメン構造である。よく似た構造として水道橋として有名なポンデュガル橋がある。両者は紀元前後に建設されている。古代ローマ時代を代表するアーチ構造である。

12. おわりに

大規模な土木・建築物は公共事業として行われることが多く、予算的な制約が大きい。これに対して独裁者あるいは宗教的な力が強かった時代は、その権威を象徴する大規模な構造やデザインが重視されたのだろう。アーチ構造は、時代の要求にマッチして進化・拡大したのではないかと思った。

またヴェネツィアのデラ橋を見て、アーチ構造の進化に伴い培われた「構造とデザインの融合」という考え方

は、今でもイタリアに根付いていると感じた。

日本にもアーチ構造を有する土木・建築物は数多くある。先人達の知恵と努力に敬意を持って、ゆっくり見みたいと思った。



写真-15 街中にある水道橋の遺跡

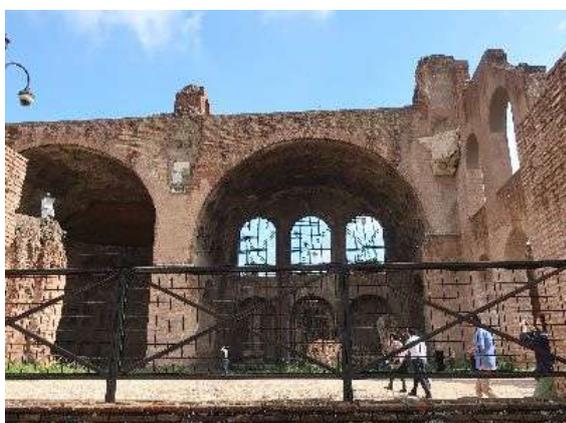


写真-16 古代ローマ時代のフォロ・ロマーノ



写真-17 有名なコロッセオの外壁

美しい景色・美術品に感動

常務取締役

青木 正典 (1983年入社)

1. はじめに

今回の55周年記念ヨーロッパ旅行は、5年前から右城社長が目標に掲げていた記念行事である。

これを実現できたのは社員全員の頑張りによるものだと思う。

弊社は、海外旅行には家族同伴を推奨していたが、まわりが気を遣うのではないかと思い、今まで一度も家族に声をかけたことがなかった。

しかし、今回はなかなか行けないヨーロッパであることと、結婚30周年なので一緒に行くことにした。

創立55周年と結婚30周年の二つの記念旅行になった。

2. 観光

二日目は、水の都ヴェネツィアでサン・マルコ広場、サン・マルコ寺院、大鐘楼96m、ドゥカーレ宮、ゴンドラ(クルーズ)を観光。

ホテル近くの停留所から水上バス・ブアポレットでサン・マルコ広場に移動した。



水上バスで移動中初めて見る景色に感動する社員

初めて見る風景には感動ばかりで全員がカメラから手を離せなかった。



サン・マルコ広場

最初に訪れた美術館はドゥカーレ宮の内部にある美術館。

ドゥカーレ宮はもともとヴェネツィア共和国の総督邸兼政庁であった建物を14世紀から16世紀にかけて現在の形に改修されヴェネツィア市民美術館財団が運営している。

徳島県鳴門市にある大塚国際美術館で陶板に再現された絵画に驚かされたことがあるが、本物はそれ以上に感動した。



ドゥカーレ宮内装の絵画



ドゥカーレ宮絵画の前で家内と記念撮影

ヴェネツィアでは、ゴンドラでの Canal・グランデクルーズが帰国してからも目に焼き付いている。

ゴンドラへの乗船を待っている間、我々の乗っている船が転覆し、それがニュースで流れている光景が頭をよぎった。

大運河に漕ぎ出すには、ゴンドラがあまりにも小さすぎる。

恐るおそるゴンドラに乗り混んだ。

しかし乗ってみればもうそんな心配は吹っ飛んだ、運河の水面が座っている高さと同じように感じた。

5、6隻に分かれて乗船した全員が大運河のクルージングに興奮しているように思えた。



ゴンドラでのクルージング

クルージングは、大運河だけでなく街並みに流れる小運河にも入っていった。

小運河のクルージングは迫力ある大運河とは全くの別物で、情緒溢れる街並み、貫緑のレンガ作りの建物、運河に跨がる橋、箸の上のたくさんの観光客、一緒に乗船したスタッフの生ギターと生歌が建物と建物の間で響き渡るなんともいえない心地良さに魅了された。



小運河に入っていったゴンドラ



小運河のクルージング・橋の上には沢山の観光客

三日目は、ヴェネツィアから真紅フェラーリ特急の列車「イタロ」でフィレンツェに移動した。

フェラーリ車やF1カーのように鮮やかと思いきや、始発なのに少し汚れた姿で現れた。

少しがっかりしたが一応記念写真は撮った。



フェラーリ特急真紅の列車「イタロ」

添乗員の話では、こちらの交通機関は時間にルーズで、10分20分の遅れは日常的で問題にならないらしい。イタリア人はおおらかなのだろうか。

情熱的で気質の荒い性格と思っていたのだが。

観光は、世界一の眺望ミケランジェロ広場、サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂ドゥオモ・クーポラ、アカデミア美術館、ウフィツィ美術館。

三日目の観光で一番印象に残ったのはやはりドゥオモの屋上から見たフィレンツェの街並み。

この絶景を見るためには、464段の階段を上る必要があった。

昼食時にJTBの滝本さんから「お酒は少し控えておいて下さい」と忠告があった。

日頃趣味でゴルフをやっており体力には自信があったが、いざ登り始めると、これがなかなか大変で途中で何度も休憩を余儀なくさせられた。



最後に到着した疲れ果てた二人

先に登り始めた家内と女性社員を心配しながらやっとの思いで上がると、そこには心地よい風とフィレンツェの街並みの絶景がひろがっていた(口絵写真6)。

四日目は、永遠の都ローマ観光、コロッセオ、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会、サン・ピエトロ大聖堂、ヴァチカン美術館を観光。

コロッセオはメディアでよく見る。

実際にどれくらいの迫力があるのか楽しみにしていた。

テレビで見るのは崩れかけた外観だけである。

中の格闘が行われた広場が見えるのかと思いきや、一階部分のアリーナはほとんどなく、少し再現した部分があるだけで地下の部分がむき出しになっていた。



コロッセオの一階部分のアリーナ

現地ガイドに聞くと、運営に国は関与しておらず、公表されている集客数や収益の数字は微妙らしい。

ヴァチカン美術館の入り口のエレベータはとても近代的だったが、中に入ると歴史を感じさせる作りであった。

現地ガイドの説明を聞きながら、「最後の晚餐」などの作品を見ているうちに、あたかもその作品が描かれた時代に生きているような気分になった。

私はキリスト教徒ではないが、キリストについてもっと調べてみたい気持ちになった。

目の前の作品が超一流の本物の芸術だったからだろう。

最終日スペイン広場、トレヴィの泉を観光し、空港へと向かった。

トレヴィの泉は、右手でコインを持ち左肩の上からコインを投げると願いが叶うと言われている。皆はいったい何を願って投げたのだろうか。



トレヴィの泉

3. 食べ物

イタリアといえば、パスタ、ピザのイメージがある。初日に食べたイカスミパスタは少々味が薄かった。

七味のような香辛料をふりかけてくれたので、それを混ぜて食べたのだが、これがなかなかの激辛で大変な思

いをした。後は、ピザもパスタもTボーンステーキもおいしく頂いた。



パスタ&Tボーンステーキ

サラダなど朝食の味が全体的に薄めで、最後に出たデザートがものすごく甘かった。

四日目の夕食時、JTB さんからのサプライズで、この旅行中あるいは近く誕生日を向かえる調査部の伊藤君と松山事務所の工藤さんにケーキのプレゼントがあり、二人とも大変喜んでた。



サプライズバースデーケーキ



サプライズに喜ぶ伊藤君

4. 最後に

今回、イタリアの知識がほとんどないまま旅行に参加した。

美しい景色・美しい美術品に感動させられた。

それにまつわる知識があればさらに楽しい旅になったことだろうと後悔している。

期待と不安のイタリア旅行

総務部 総務課
高橋 祐也 (2014 年入社)

1. はじめに

今年の社員旅行は、ヨーロッパ4泊6日の旅だった。私にとっては2年前のグアム旅行に続き人生2度目の海外旅行である。イタリアは世界遺産の登録数が世界一。文化や芸術など見どころは盛りだくさんである。出発の日を今か今かと心待ちにしていた。いよいよ出発前日、期待と緊張で胸がいっぱいになり、何度も忘れ物がないかチェックして就寝した。

2. 一日目(出国)

初日は高知からヴェネツィアまで飛行機のオンパレード。最長は羽田空港とフランクフルト空港間でフライト時間は11時間40分。もちろん、人生初の経験だった。座席にはモニター画面が付いていたので、機内サービスのドイツビールを片手に映画鑑賞を楽しむことにした。そして、目的地のヴェネツィアに着いた頃には、現地時間で23時過ぎ。移動時間だけでおよそ22時間費やした。さすがに、徘徊できるだけの体力もなく、この日はおとなしく就寝した。



20時とは感じさせない明るさ(フランクフルト空港の外)



イタリアに来たことを実感(0時過ぎのヴェネツィア)

3. 二日目(ヴェネツィア観光)

二日目の朝は、前日遅かったこともあり寝足りない感があったが、何とか起床し、朝食会場へ向かった。当然だが…白ご飯も味噌汁もない。しかし、ベーコンとクロワッサンが美味しかった。朝食後は少し時間があつたためホテル周辺を散歩することに。どこを撮っても絵になる風景は、さすがヨーロッパと感じた。集合後は船に乗

りナポレオンが「世界一美しい広場」とも称賛したサン・マルコ広場に向かった。道中ずっと、右手に持った携帯をしまうことが出来ないほどあちこちを撮影。普段、あまり携帯を使わない私だが、この日は違う。電池の消耗が恐ろしい。



明らかに傾いている塔(サン・マルコ広場への道中)



サン・マルコ広場(朝早いので観光客はまだ少ない)

まず向かったのは、大鐘楼。多少の行列はあったものの、朝早い出発だったこともあり、10分程の待ち時間で入ることが出来た。地上からエレベータで鍾室に上がると、目の前には、迷路のように入り組んだヴェネツィアの街並みが広がっていた(口絵写真1)。地上に降りて、次に向かったのはサン・マルコ寺院。持ち物の制限があり、リュック類は持ち込めない。また、写真撮影は禁止で記憶に残すしかなかった。内装は重厚できらびやかな造りになっており、黄金のモザイク絵画が圧巻だった。ヴェネツィア共和国の政治の中核があったとされるドゥカーレ宮には、壁画や天井画が描かれていた。特に、世界最大の油絵といわれる「天国」は見ごたえがあった。

次は、ヴェネツィアの名産品であるヴェネツィアングラスの工房に向かった。そこで、ほんの数分でガラス細工を作り上げてしまう職人さんの高度なテクニックを見せて頂いた。複雑な部分もあつという間に形にする光景はまさに芸術で、見とれてしまう。その後、少しだけ買い物時間があつた。店内を見て回ると、目を引くような工芸品ばかりだった。



サン・マルコ広場(昼間は観光客でいっぱい)

そしていよいよ、楽しみにしていたゴンドラクルーズ。ヴェネツィアの建物と建物の間を縫うようにゆっくりと揺られながら進むゴンドラは非常に気持ちよかつた。また、後続のゴンドラには演奏者が一緒に乗っており、そこから聞こえてくる生演奏は、心地よく最高だった。



ゴンドラクルーズ(後続ゴンドラは生演奏付き)

クルーズを楽しんだ後は、イタリア料理への期待を胸に昼食会場へ向かった。ここで初めて、イタリアの料理事情を知ることになる。一番衝撃的だったのは、料理の盛り付けがかなり適当だったことだ。同じテーブル内に運ばれた料理でも、お皿によって量や具材の偏り方が大きく異なり、人によっては1.5倍近くの差があつた。このレストランだけかと思つたが、旅行中に行つた全てのレストランで同じことがいえた。味は基本的にどれも薄い。日本で食べるイタリア料理がいかに日本人の舌に合うように作られているか思い知つた。また、イタリアにはコーヒーを冷たくして飲む習慣が無いらしく、アイスコーヒーを注文すると、ホットコーヒーと氷の入つたグラスを用意されることが多いようだ。



イカスミパスタ ヒラメとサラダ ティラミス

昼食後の自由行動時間には、ヴェネツィアの街を気ままに散策した。「迷ったらとりあえずサン・マルコ広場へ」と言われるほど小路が入り組んでおり、すぐ迷う。公衆トイレ(有料€1.5)を見つけるのも一苦労だった。ヴェネツィアの象徴的存在でもあるリアルト橋を観光し、買い物を楽しんだ後は、歩いてホテルへ戻った。

夕食は、海鮮コースであった。昼間の観光の疲れにより睡魔が襲ってきたが、冷たいビールで生き返り、その後は、赤ワインや白ワインと一緒に料理を楽しんだ。夕食後は、ホテル近くのスーパーで少しだけ買い物をした後、就寝した。

4. 三日目(フィレンツェ)

この日はホテルを出発後、高速鉄道(イタロ)に乗りヴェネツィアを後にした。車内は広々としておりフィレンツェ到着までの2時間を快適に過ごすことが出来た。列車を降りると、すぐバスでミケランジェロ広場に向かったが、あいにくの天気で感動が半減した。しかし、さすがは世界一の眺望。今回は残念だったが、ぜひ一度は天気の良い日にここからの夜景が見たいと思った。

次に向かったのは、アカデミア美術館。目玉と言える展示品はなんといってもミケランジェロの「ダヴィデ像」。誰もが知る有名な彫刻だろう。そのダヴィデ像を実際に目の当たりにしたとき、想像を遥かに超える大きさと迫りに圧倒された。

美術館の後は、再びバスに乗り、昼食会場に向かう。昼食はピザでありビールと一緒に頂いた。本場はナポリではあるが、ここでのピザも美味しかった。今度はぜひナポリのピザも食べてみたい。

昼食後は、歩いてサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂に向かい、その最上部まで登った。昼食前のバス移動で説明を受けていたが、464段の階段は非常に辛い。横幅も狭く降りてくる観光客とすれ違う際には、どちらかがバックせざるを得ない程だった。しかし、何とか登り切ると、達成感があり、そこにはフィレンツェの街を一望出来る絶景が広がっていた(口絵写真6)。

フィレンツェでの最後の観光先は、ウフィツィ美術館だった。ここでの見どころは、美術の教科書で必ず一度は目にした事があるボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」。他にも、レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロなど著名な画家の作品が展示されており、思わず立ち止まり見入ってしまう。展示されている作品全てを鑑賞するには半日近くかかりそうだ(口絵写真7)。

美術館を出ると、1時間半程度の自由行動時間があった。行動を共にした同僚が革の手袋の購入に際し、事前にお店をリサーチしていたので、そこに向かった。さすがは、本場の革製品といった質感であった。しかし、物欲が乏しい私は、購入には至らなかった。

その後は、フィレンツェでは有名なヴェッキオ橋やフィレンツェの町並みを気ままに歩きながら、集合場所へと戻った。ヴェッキオ橋のその姿は建物が橋からはみ出

しまくっており、独特な風景であった。

この日の夕食は、前日から期待していたT ボーンステーキ。はじめに、マリネが出てきたが普通に美味しい。期待が高まる。そして、サラダとともにT ボーンステーキが登場した。味は期待通りの味だが、わりかしビッグサイズだったため、最後の方は意地で食べきった。

5. 四日目(ローマ観光)

この日は、朝早くから高速鉄道(フレッチャアルジェント)に乗り、ローマに向かった。前日に乗ったイタロに比べると、座席はやや狭めで快適とは言えなかったが、むしろ、こちらが普通でイタロが良すぎたのかも知れない。ローマまでは約1時間半で到着し、早速バスに乗り込む。

最初に向かった先は、フォロ・ロマーノ(ローマ市民の広場)とコロッセオ(口絵写真9)。フォロ・ロマーノは紀元前に構築された古代ローマ都市で、現在は世界文化遺産に登録されている遺跡である。他の観光地とは少し違った空気を感じた。フォロ・ロマーノから少し歩くと、コロッセオに到着。コロッセオは当時、剣闘士たちが命を懸けて戦っていた場所。年間数千人の剣闘士がここで命を落とすと言われていた。皇帝がローマ市民に娯楽の場を提供することで反乱を抑える目的があったという。コロッセオのすぐそばには、コンスタンティヌスの凱旋門(口絵写真10)が佇んでいた。ローマ最大の凱旋門でパリの凱旋門のモデルとなったとのこと。存在感があった。



コロッセオ内部(剣闘士たちが戦っていた)

次に向かったのは、映画『ローマの休日』で一躍有名になったサンタ・マリア・イン・コスメディン教会の「真実の口」。入場料は無料だが、「真実の口」の前にお賽銭箱があり寄附金を入れるしくみになっていた。到着した時には、すでに行列が出来ており「真実の口」で写真を撮るまでに30分近くかかった。



「真実の口」(映画「ローマの休日」で一躍有名)

次に向かったのは、世界最小の独立国家「ヴァチカン市国」。その国土は東京ディズニーランドよりも小さいが、サン・ピエトロ大聖堂やヴァチカン美術館など歴史的にも重要な建造物がたくさん存在していた。まず驚いたのはイタリアからヴァチカンへの入国には、パスポートが必要なかったことだ。特に、イタリアとの国境もなかったため、あっけなく入国出来た。

ヴァチカン市国内では、サン・ピエトロ大聖堂、ヴァチカン美術館、システィーナ礼拝堂を観光した。その中でも特に印象に残っているのは、システィーナ礼拝堂の祭壇に描かれていた「最後の審判」の壁画であった。残念ながら礼拝堂内は写真撮影禁止で記録に残すことは出来なかったが、祭壇に描かれた大きな壁画はインパクトがあった。また、おしゃべりも禁止で観光客がざわざわしだと警備の人に注意されるなど厳粛さが保たれていた。天井にもミケランジェロの「天地創造」が描かれており、その凄さに圧倒された。

礼拝堂を抜けると、次はサン・ピエトロ大聖堂に向かった。聖堂内はとにかく天井が高く、開放的な空間だった。また、壁だけでなく柱にも豪華な装飾が施されており、どこをみても素晴らしい。

この日の夕食は、ホテルからバスで20分程のところだった。外観はオシャレで豪華そうな場所であり、イタリアでの最後の晩餐ということで今まで以上に期待した。そして期待通り、そこでは素敵なピアノ演奏と店内に響き渡るほどのカンツォーネを聴くことが出来た。料理に関しての好みで言えば、前日のTボーンステーキの方が私的には美味しかった。しかし、素敵な時間を過ごすことが出来、とても良い思い出となった。



イタリア料理店の外観(期待できそうな雰囲気)

6. 五日目(ローマ観光→帰国)

イタリア観光最終日は、前日に引き続きローマ観光であった。この日も朝早くに出発したわけだが、朝食は今までのホテルで一番豪華だった。ただ、ご飯はゆっくり派の私にとっては時間との勝負であり、焦りながら何とか食べ終え、急いで荷物を持ってロビーに集合した。最終日にもなると、長いようで短かったイタリア旅行も、もう終わりかと名残惜しい気持ちになった。バスに乗り、はじめに向かった場所は、スペイン広場。こちらでも、映画『ローマの休日』で一躍有名になった場所である。朝早い観光であったため、観光客はまだ少ない。階段前の「バルカッチャの噴水」には何故かたくさんのコインが沈んでいた。



スペイン広場(噴水にたくさんのコインが沈んでいた)

次に向かったのは、トレヴィの泉。「肩越しにコインを投げると再びローマを訪れることが出来る」という言い伝えは有名である(口絵写真14)。他にも、コイン2枚だと好きな人と結ばれる、3枚だと腐れ縁が切れるという言い伝えがあるようだ。コインの種類は何でも良いそうで、私はローマへの再訪を願い、十円硬貨を1枚投げ入れた。その後は、トレヴィの泉近くのジェラート店で「ティラミス」と「バニラ」のジェラートを注文し、旅の最後を締めくくった。



ジェラート店の前(旅の最後にジェラートを堪能)

ここから少し歩いてバスに乗り、揺られること一時間。フィウミチーノ空港に到着。搭乗手続き、手荷物検査を済ませた上で少しの自由行動時間。最後にお土産を買い足し飛行機に乗り込んだが、再びイタリアが名残惜しくなった。フライト時間も一度11時間40分を経験すると、1時間半はあっという間であった。乗り継ぎ先のミュンヘン空港に到着。ここで、2時間程の自由時間があつたため、ドイツビールとソーセージを頂いた。普通に美味しい。

最後にドイツを堪能したところで、飛行機に乗り込み、日本へ向かう。フライト中は長旅の疲れでほぼ寝ていた。座席の狭さは気にならず、あっという間のフライト時間であった。気になることと言えば、機内が異常に寒く、帰国後風邪を引いてしまったことだ。

7. 六日目(帰国)

無事、羽田空港に到着。日本の地に足を踏み入れた時、イタリアの名残惜しさとは裏腹に、日本語の案内板に安堵した。羽田空港では恋しくなっていた日本料理(寿司)を少しだけ食べ、久々の日本の味に感動した。「ただいま、日本!!」と心の中で呟き、羽田空港から高知龍馬空港へと向かう。そして、今回のイタリア旅行が何事もなく無事に終わった。

8. おわりに

今回、異国の地イタリアまで約一日かけて行き、ワインやパスタなどの食文化やラファエルやミケランジェロなどの著名人の美術品、大聖堂やコロッセオなどの歴史的建造物を実際に見ることができ、とても貴重な思い出となった。また、異文化に直接触れ、違いを知ることで海外にはない日本の良さを再認識することが出来た。

家内同伴の旅

松山事務所 調査役
渡部 清隆 (2016年入社)

1. はじめに

第一班の「イタリアの旅」に家内共々参加させてもらった。

早速、まずイタリアで気になった点を列記したい。

2. ローマのコロッセオ



写真1 地下の通路 ここに猛獣がいた

2,000年前にすでにコンクリート。

コンクリートは、年月が経つにつれてもろくなるのが普通だ。だが、古代ローマ時代に作られた岸壁のコンクリートは、時間が経てば経つほど強度を増しているようだ。古代ローマ時代のコンクリートは、火山灰、石灰、火山岩、海水を混ぜ合わせて作られている。このうち、重要な役割を果たしているのが、最後の材料である海水だそうで、この珍しい材料の組み合わせのおかげで、1,000年以上の時間をかけてコンクリート内で新しい鉱物が形成され、ますます強度を増しているらしい。

現代のコンクリートは、カルシウム系バインダーを用いたポルトランドセメントであるが、古代コンクリートはアルミニウム系バインダーを用いたジオポリマー(英語版)であり、倍以上の強度があったとされる。ローマのコロッセオには古代コンクリートも使用されており、二千年近く経過した現在も存在しているのはそのためとされる。

3. イタリアの地震

これほどの古代建造物群が今に残っているということはイタリアでは地震がないのか？



写真 2 ヴェネツィアの大鐘楼

調べてみるとイタリアも日本同様地震国である。

ただ地震帯は中南部と北東部の山岳地帯に限定されているようで、ミラノやローマなどの主要都市は地震帯から離れているため、殆ど地震を感じることはない。もしこれらの町が地震帯にあったら、ローマの遺跡やミラノのドゥオモなどとても現代まで生き残らなかった。

4. イタリア中部地震

2016年10月30日にイタリアの中心部を襲ったマグニチュード6.5の地震。

これにより多くの建物が損壊した。イタリアで最も有名な建造物にまで被害を及ぼしたと言われている。

今回見学の目玉でもある世界最大の円形闘技場「コロッセウム」でもこの影響でひび割れが増え続けているようだ。

その建造物は、数千年の歳月のせいで壁などにすでにひびが入っていたのだが、先に起きた30年で最悪と呼ばれる地震によって、さらに厄介なひび割れが加わったという。

5. 地震を熟知していた古代ローマ人

もっとも建築家によれば、古代ローマ人は地震の衝撃についてよく熟知しており、建造物にもその対策を組み込んでいるという。

実際コロッセウムのアーチ構造は、振動や動きを吸収するためには最も良い形だとしている。

また地震直後からはすぐに徹底的な建物の検査が行われており、現在は安全が確認されたため観光客にも開放されているようだ。

6. 過去の被害

紀元後80年に建てられたコロッセウムは、これまで何度も地震の被害を受けてきたと言われている。1349年の地震では南側が倒壊。さらに1703年に起きた地震では、震源が隣接したAbruzzo州だったにも関わらず、ダメージを受けたようだ。

ローマとこれらの地震の震源とされる地方には約150キロの距離がある。

7. 2016年10月30日のマグニチュード6.5の地震

震度でいうと150km遠く離れた場所で深度も違うので一概には変換できないが一応文献からすると、マグニチュード6.2~6.7は震度6弱か。レンガ作りの建物はほぼ倒壊する。

私の見た印象では、震度3程度でも大きく崩壊すると思われた。

イタリアは建物が古く、かつ補修などがそれほど進んでいるわけではない。

また、イタリアは国全体として財政が困窮状態で、耐震対策を施せない、また地震が起きても対応を十分に取れないなど、難しい状況にある。



写真 3 サン・マルコ寺院

イタリアは「古代遺跡群」のために新しいものが作れない。その歴史がこれからも何千年と続く。住んでいる住民にとっては近代生活と比べ大変不便な状況だ。コンビニなどはなく、エレベータ、エスカレータ、公衆トイレ、駐車場が作れない(だからイタリアではコンパクトな車が多い)。古代遺産の修繕は至る所で行われているが終わりが無い。多額の維持修繕費がかかる。収入元が観光やお土産品に頼るところが大きく国内の生産性は低いのではないだろうか。

名目上はユーロ圏では3番目に経済規模が大きく、全体のGDPの約16%を占めているが、金融の面だけでなく、経済や財政の面でも脆弱さが目立っている国である。

世界で最初に高度な文明を授かった国は、その遺産に縛られて新しい文化や産業が伸びない。陽気な性格のイタリア人気質で何とか持ちこたえているが、私はこの国で暮らしたいとは思わない。

8. イタリア人の性格

性格は一般的に明るい。言い換えれば脳天気なんだそうで、物事を真剣に受け止め、考えるようなことは人生の無駄。その時が良ければ、その後のことはあまり考え

ない。

基本的には、みんなジョークが大好き、何でも笑って済ませてしまう、失敗しても、うまいジョークで笑い飛ばしたらそれで大丈夫、クヨクヨしない。

なんだか楽しそうな毎日だろうなと思いきや、みんながこうだとかえって何も前に進まない。どうも法律はコロコロ変わるし、みんな言いたい放題、やりたい放題、勝手に、本当にイメージ通りの国なんだそうです。

しかし、イタリア人のプロフェッショナル業界への打ち込みは桁外れで、イタリアの深い歴史に残された、数々の世界一を誇る遺跡や芸術作品、世界遺産、ワインやパルメザンチーズなどの特産物、一級ブランドの発祥地です。これらはイタリア人の計り知れない情熱と洗練された技術をかね合わせたイタリアの貴重な遺産だ。



写真 4 ミケランジェロ作「ダヴィデ像」

また、お店などで列ができてあまり無駄にレジを開けず、また防犯の為か列が少なくなるとすぐ閉めようとするらしい。銀行なども明らかにたくさんの顧客が押し詰められている状況でも一つの窓口しか開けなかったり、イライラしている顧客を前に堂々とマイペースで仕事をする傾向があるとのこと。

実際、観光地への入場で長蛇の列ができていても慌てない。順番もどんなルールで入場させているのか適当にさばいていように見える。

ルーズな国であることは世界的にも有名なのだそうで、イタリア人は時間を守らない。バスの時刻表はあってもいつ来るかわからないバスをひたすら待つんだそうで、実際、鉄道でも到着時間が遅れることは当たり前、フィレンツェからローマまで1時間30分の予定が15分の遅れであった。



写真 5 イタリア最先端の列車「イタロ」

9. 食事のたびに感じる日本人からすると考えられないこと



写真 6 イタリアのカルボナーラ

- ①皿に盛られている料理の量が同じテーブルの人と比べても半分以上差がある。
- ②ペペロンチーノのパスタが片やパスタだけ、片や具沢山などありえない。
- ③各テーブルに運ばれる料理の時間差が大きい。
- ④具材の切り方、大きさがまちまちで、半端なく雑。等々、日本人からすると考えられない対応の仕方。

しかし、こちらが不機嫌になろうとも店員はあくまでも陽気(こちらも酒が入っているのと美人には弱い)。



写真 7 美人ウエイトレスと…

10. 最後に

今回の旅行で見聞を広められたことに加え、家内も同伴させていただき、家内孝行が出来たこと。松山事務所勤務で本社社員との交流が少なかったが、今回の旅行で親睦が図られたことなど良い経験をさせていただき、大変ありがたく感謝しております。



写真 8 真実の口の前で家内と共に

日本を見つめ直した旅

松山事務所
工藤 頌子 (2017年入社)

1. はじめに

去年の社員旅行に引き続き、今回も参加させていただきました。場所はなんとイタリアで、私にとって人生初めてのヨーロッパです。言葉もお金も宗教も異なる海外で、果たして何事もなく過ごすことができるのか。本音を言えば不安が大部分を占める中、まずは東京へ向かうため羽田空港へと向かいました。

2. 1日目

厳密に言えば2日目ですが、行きと帰りの1日はほとんど飛行機の中で過ごしましたので、割愛させていただきます。

11時間以上の飛行機の旅を終えて、無事ヴェネツィアに到着しました。しかし、到着したのが夜中であったため辺りは暗く、朝日が昇ってから街並みを見に散歩に出かけました。

日本とは家や道の造りが異なり、テレビや本でしか見たことのない風景が実際に広がると、『自分は今、海外にいるのだな。』という実感と感動が自然と湧いてきました。

水の都と呼ばれるヴェネツィア。その名の通り街は運河に囲まれていて、とても幻想的でした。



写真 2-1 ヴェネツィアの運河と街並み

1日目のヴェネツィア観光はサン・マルコ広場へ向かい、広場にある大鐘楼の見晴台からヴェネツィアの街並みを一望したあと、サン・マルコ寺院やドゥカーレ宮殿の内部を見学しました。

見晴台から眺める景色も、サン・マルコ寺院内部の黄金に輝く内観も素敵でしたが、とある絵になんとも言えない感動を覚えました。その絵は、ドゥカーレ宮殿「大評議の間」に飾られている、画家ティントレットの『天国』という世界最大の油絵です。



写真 2-2 「大評議の間」とティントレット作『天国』

その迫力には、ただただ息を呑んで呆然と立ち尽くしてしまいました。ですが『天国』はティントレット自身が完成させた訳では無く、ティントレットが亡くなったあとにも制作が続き、ティントレットの息子や工房の人々が引き継いで完成させたものだということや、この絵に描かれると天国へ行けると信じられていたらしく、権力者は大金を払って絵のモデルを志願したなど、様々なエピソードがあって面白いです。

午後からは、ヴェネツィアに来たら一度は乗ってみたいと思っていた、憧れのゴンドラに乗りました。ボーダーの服を着たゴンドリエーレ(楫で漕ぐ人)に身を任せ、生演奏と陽気な歌を聴きながら乗るゴンドラはとても穏やかな気持ちになりました。

ただ、水の透明度が想像していたよりも悪く、最近見た海では桂浜の方が断然綺麗だったな、なんてことが一瞬頭をよぎりました。



写真 2-3 ゴンドラとゴンドリエーレ

3. 2日目

早朝、サンタ・ルチア駅から高速列車のイタロに乗ってフィレンツェに向かいました。

2時間かけて到着したあとバスで移動し、ミケランジェロ広場、アカデミア美術館、ドゥオモ・クーポラ、ウフィツィ美術館と巡りました。

この日の天気予報では一日中天気も崩れ気味とのことで、最初に到着したミケランジェロ広場では曇り空でした。このまま雨さえ降らなければと願っていると、なんと途中から晴れ模様。この時ほど天気予報が外れて嬉し

かったことはありません。

昼食後、ドゥオモ・クーボラを登りました。その高さは90m、階段数は464段。日本で言う金刀比羅宮の階段の約3分の1でしたが、普段鍛えていない私にとってはなかなかの試練でした。昔の造りというのもあってか、急な傾斜の階段が途中で現れたりしながら、螺旋状に上へ上へと一段ずつ登ります。息も切れ切れになりながら、なんとか登り切って見下ろした景色は、まさに絶景でした(口絵写真6)。

運良く天候にも恵まれたのと、食後の運動のおかげで体が火照っていたものの、心地よい風が吹いていて、とても気持ち良かったです。

アカデミア美術館では、かの有名なダヴィデ像のオリジナルが展示されており、像の高さは約517cmと予想外の大きさに大変驚きました。右手の甲に浮かぶ血管の細やかさや、全体のしなやかな筋肉を見事に表現していて、見ていて感嘆の声が漏れ、惚れ惚れとしました。



写真3-1 ミケランジェロ作「ダヴィデ像」

ウフィツィ美術館ではボッティチェリ作『ヴィーナスの誕生』(口絵写真7)や『春』を間近で見ることができました。



写真3-2 ボッティチェリ作「春」

双方に登場する西の神は、『ヴィーナスの誕生』では健康的に描かれているのにも関わらず、『春』では不健康に描かれているのが、何を示唆しているのか気になりましたが、理由は諸説あるらしく、なんとも不思議な絵でした。

この日は5月9日で、おめでたいことにイタリア旅行メンバーの中で誕生日の方がいらっしゃって、ディナーの最中に会社からのサプライズケーキが登場しました。

そして、5日後が私の誕生日だからと一緒に祝いしていただきました。まさか異国の地で早めのバースデーケーキを頂くことになるとは夢にも思っていなかったので、驚きと感動で胸がいっぱいでした。

4. 3日目

フィレンツェ駅からローマへと移動し、始めにコロッセオを観に行きました。かつて4万人ほどの奴隷達が造り上げ、皇帝や観衆の娯楽の為に剣闘士同士や猛獣を戦わせた場所です(口絵写真9)。

映画で言ったら『テルマエ・ロマエ』が有名ですが、その映像と現地の風景がリンクして、自然とそこに剣闘士たちや観衆がいるような気さえします。

コロッセオの見学が終わったあとはバス移動でサンタ・マリア・イン・コスメディン教会へ向かい、真実の口を体験しました(口絵写真11)。

年月が経っているせいか少々不気味で、恐る恐る口の中に手を入れますが、何事もなく写真を撮ることができました。

午後からは、世界最小の国ヴァチカン市国へ入国し、ヴァチカン美術館やサン・ピエトロ大聖堂を見て回りました。ヴァチカン美術館で一度は目にしたいのはやはり、システーナ礼拝堂の壁画『最後の審判』と天井画『創世記』。残念ながら撮影は一切禁止なので手元には残っていないのですが、仮に写真があったとしてもあの壮大なスケールは、直接見ないと伝わらないと思いました。

神様が7日間で世界を創ったという神話がありますが、『創世記』にはその一部始終が描かれています。天井画の為見上げないと見られないのが辛いですが、キリスト信者でない私でさえも魅入り、首の痛さも忘れるくらい眺めてしまえるほど、美しい天井画でした。

ヴァチカン美術館を見終わったあとは、サン・ピエトロ大聖堂を個人で自由に見て回りました。

サン・ピエトロ大聖堂には、イエスの弟子でもあった聖ペテロの遺骸が納められていて、カトリックの信仰の中心にもなっているそうです。周りは聖ペテロに因んだものばかりで、銅像であったり、名前(サン・ピエトロは聖ペテロのイタリア語読み)であったりと、知っているか知らないかで、見る時の面白さが違うなと思いました。

大聖堂の中はとても厳かな雰囲気が漂うと同時に威圧感があり、何だか場違いな所に来てしまったのではないかと躊躇うくらいです。ピエタ像や聖ペテロ像など様々な像や絵が飾られている中、ひときわ目に付いたのが黒くそびえる大天蓋でした。

バルダッキーノと呼ばれるもので、ペテロの墓所と教皇の祭壇を守っているとのこと。



写真 4-1 サン・ピエトロ大聖堂の奥にある大天蓋

バルダッキーノの奥に見える煌びやかなものは、聖ペテロの司教座で、遠目ではわかりませんが木で造られているらしく、教皇だけが座ることが許されているみたいです。

5. 4 日目

イタリア滞在最終日は3日目同様、ローマ観光を楽しみました。

まず向かった場所はスペイン広場。



写真 5-1 スペイン広場

近くにスペイン大使館がある為「スペイン広場」と名付けられたらしく、映画『ローマの休日』のロケ地としても有名な場所です。

早朝にも関わらず、他の観光客がポーズを決めて、思い思いの写真を撮っている姿が微笑ましかったです。

135 段の階段を登ると、目の前にはトリニタ・ディ・モンティ教会がたたずんでいたのですが、ツアーの予定には組まれておらず、中を見ることはできなかったのが少々残念です。

その後、同じく『ローマの休日』のロケ地になった、トレヴィの泉へ向かいました。彫刻の造りは繊細で、湧き出る水も透き通っていて、長く見ても飽きないと思えるほど美しい場所でした。



写真 5-2 トレヴィの泉の彫像

彫像は古代ローマ時代の神話やギリシャ神話に登場する神々をモチーフにしたもので、真ん中に施されている彫像は真実の口の顔のモデルにもなっている海神のネプチューンです。そのほか、豊穡神・地母神ケレースと、健康と繁栄を司る女神サルース、海神ポセイドンの息子とされる海神トリトーンとヒポカムポス(海馬)の彫像が施されていて、まるで地元の人や観光客を見守っているかのように感じました。

トレヴィの泉を背にしてコインを投げると願いが叶うというのは知っていたのですが、投げるコインの枚数によって願いごとの内容が異なるというのをガイドさんに教わりました。1枚だとローマへの再訪、2枚だと好きな相手と結ばれる、3枚だと嫌いな相手と縁が切れる、とのことです。(投げたコインはしっかりとローマ市に回収されるそうです。)

6. 終わりに

約一週間に渡る旅行も、終わってみるとあっという間でした。

イタリアに限らず海外にはスリなどが多いと聞いていたので、日中警戒しながら過ごしたり、和食が恋しくなったりとすることはありましたが、行く前に抱いていた不安は杞憂で終わり、楽しさや感動が大部分を占めて帰ることができたのは本当に良かったです。

今回の旅行をきっかけに思ったことは海外へ行く理由。観光や勉強のためと人によって様々ありますが、私は、自分の生まれ育った国の好きな部分や、苦手な部分を再確認するためでもあったと思います。

芸術の数々は圧倒的にイタリアに残されているものの方が素晴らしいですし、食べ物も美味しい。けど、細かいところの技術などは日本の方が進んでいるように感じ、気遣いなどは日本人ならではのスキルだと思いました。

そういった異文化を肌で感じて、異国の違いを経験していくことは必要であると改めて感じた一週間でした。

～心に刻まれる記念の旅～

設計部 河川砂防課 副技師長
村岡 志郎 (1999 年入社)

1. 出発

ヨーロッパは、芸術、グルメ、歴史的建造物、世界遺産など見どころが盛り沢山である。以前より憧れの地であったが、私の人生の中で一生立ち入ることのない領域と半ば諦めていた。しかし、今回の旅行でその夢が叶うこととなり、約9,870km 離れたイタリアへ出発した。

2. 観光

2.1 ヴェネツィア観光(水の都)

ヴェネツィアは水の都と称され、街中に用水路が張り巡り、移動手段は水上バスと水上タクシーがメインである。私は、ここならではの手漕ぎのゴンドラクルーズを体験した。水上からの町並み観光、カンツォーネの生演奏、のんびりとした遊覧は、旅の醍醐味である非日常間を満喫するに十分であった。少し残念に感じたのは、民家の雑排水による悪臭が漂っていたことである。これは写真や雑誌では感じ取れない実体験による感覚であった。



写真 2-1 水上バスの運行状況

2.2 フィレンツェ観光(花の都)

イタリア 4 大都市で中世の美しい街並みを残す街、フィレンツェ。ヴェネツィアからフェラーリ特急の異名を持つ「イタロ」に揺られ、約2 時間で到着する。駅周辺や民家の壁は、高度なデザインとも感じられる立派な落書きで埋め尽くされている。その光景は、ルネッサンス発祥の地と言われ、古代文化を伝えるイタリア社会の歪みを強く感じた。アカデミア美術館の「ダヴィデ像」、ウフィツィ美術館の「ヴィーナスの誕生」など、教科書や紀行番組の世界を体感した。日頃から芸術への興味が薄く、触れる機会の少ない私は、「猫に小判」の状況であったが、その迫力は十分感じ得た。歴史的建造物が建ち並ぶ狭隘な道路事情から観光スポットへの移動は徒歩に頼らざるを得ず、フィレンツェでは万歩計が17,000 歩を記録した。ドゥオモ・クーポラでは464 段の急な螺旋階段をひたすら頂上を目指して登った。登り降りには分離されておらず、混雑していた。旅行の開放感が

らかすれ違いの際は、「Please」、「Thank You」、「Fight」など、外国人観光客とのコミュニケーションが自然と出来たことを新鮮に感じた。



写真 2-2 フィレンツェの町並

2.3 ローマ観光(永遠の都)

(1) ローマ

イタリアの首都で政治、経済、文化の中心地であるローマまでは、フィレンツェ駅から「フレッチャアツジェント」に乗りし約1 時間30 分で到着する。ここでは、世界遺産を巡る観光となった。

1) 世界遺産コロッセオ

コロッセオは、「ローマは一日にして成らず」ということわざを彷彿させ、ローマ帝国の威厳を保っている。この施設は、紀元72 年にエルサレム遠征の捕虜4 万人以上を動員して8 年がかりで建設した剣闘場(周囲527m、高さ50m、収容5 万人)である。この時代の日本文明は弥生時代にあたる。竪穴建物や高床建物であったことを考えると、西洋文明とのタイムラグを痛感するとともに、先進国として肩を並べている現状が偽りにさえ思える。

2) サンタ・マリア・イン・コスメディン教会

ここでは、イタリア旅行紀でよく目にする「真実の口」を体験した。教会の正面柱廊の奥に飾られた海神トリトネの彫刻の口に手を入れると偽りのある者は手が抜けなくなる伝説がある。もとは、下水道のマンホール蓋、古代ローマは巨大な下水施設が整備されていたことを想像させる。ローマ時代に湿地干拓の一環として下水道工事が行われ、水洗トイレがあったことに驚嘆する。スペイン広場に行く途中には、現存する水道橋も観ることが出来る。



写真 2-3 真実の口

3) スペイン広場・トレヴィの泉

オードリーヘップバーン主演の歴史的な名作「ローマの休日」の撮影場所であるスペイン広場、泉にコインを投げ込むと願いが叶う伝説が有名なトレヴィの泉を観光した。撮影当時のロケ現場と変わらない風景に立つと映画の中にタイムスリップした感覚に陥る。トレヴィの泉では、投げ方やコインの枚数にルールがある。(1枚：ローマに再来できる、2枚：結婚できる、3枚：離婚できる)カメラマンとのタイミングを計りながらコインを投げた(口絵写真14)。

(2) ヴァチカン市国

ヴァチカン市国は、20世紀にイタリアとローマ教皇の合意により誕生したイタリアに囲まれた世界最小の独立国である。国土面積(0.44km²)は東京ディズニーランド(0.49km²)よりも小さい。人口はわずか800人ほどで、そのほとんどはカトリックの修道者とスイス人衛兵である。ヴァチカン市独自のパスポートは存在せず、イタリアとの行き来は自由にできる。ヴァチカン市国は世界でも異例な場所として今回の旅行で楽しみにしていた場所の一つであった。聖書を描写した絵画が飾られたサン・ピエトロ大聖堂は、大規模でキリスト教信者でない私でも身が清められる思いがした。



写真 2-4 サン・ピエトロ大聖堂

(3) ローマの朝

最終日は早起きをしてローマの朝を散策した。イタリアはサマータイム期間中で(3~10月)、昼間の明るい内に仕事を行い、夜時間を長くとり余暇を有意義に過ごす。地下鉄の駅内を足早に通勤する人や、街路で出店準備に追われる商売人の光景を目にした。



写真 2-5 露店の出店準備

3. グルメ

イタリア料理は、日本で「イタリアン」や「イタ飯」等の呼び名で親しまれている。今回の旅行では本場の味が楽しめると期待していた。

3.1 機内食

行き帰りの飛行機はルフトハンザドイツ航空であった。機内食は、味や臭いが強烈で、眉をしかめたが、ワインを注文し、眼下の景色を見ながらほろ酔い気分で機内を過ごした。帰りの乗り継ぎ空港ミュンヘンでは、本場のドイツビールとウインナー、プレッツェルを堪能した。ウエイターの口調は激しく早口であったが、同僚の活躍で無事、注文出来た。海外旅行は語学力が重要である！



写真 3-1 ミュンヘン空港内のレストラン

3.2 ランチ・ディナー

イタリアの食事は、オリーブオイルやチーズをふんだんに使った濃厚なものを想像していた。実際は、一般的に味は薄く、野菜や魚介類などの素材を生かした素朴な料理が出され、意外であった。ワイン生産量の世界一を誇るイタリアではビールが飲めないとの噂であったが、すっきりとしたキレのあるイタリアビールも飲むことが出来た。最終日は、ホテルから30分ほど離れた場所でフルコース・ディナーを堪能した。そこでは、カンツォーネ歌手による聞き覚えのあるイタリア民謡の歌声を聴きながら食事をとることができた。終了間際にオリジナルCDを販売する様子は、イタリア商人魂を感じた。



写真 3-2 カルボナーラ pasta

4. ショッピング

イタリアの通貨単位はユーロ(€)とユーロセント(Cent)、

1 ユーロは日本円で約 130 円、消費税は品物によって変動する付加価値税で 4~20% である。外国人観光客に容赦ない店員の対応と慣れない通貨と格闘しながらのショッピング。イタリア旅行は日程が厳しく、土産は唯一自由時間が取れるヴェネツィアで購入することとした。若干、高額ではあったが、あまりに美しいガラスの魅力に負け、妻にワインを飲むヴェネツィアグラスを購入した。観光地では、イタリア風景をデザインした T シャツや帽子、キーホルダーなどの小物を売る露店が建ち並び、賑わいを見せていた。チョコレートなどの食品関係は、土産物売り場より安価に手に入るホテル近くのスーパーで購入した。地元スーパーに入ると珍しい食品や、慣れない臭いを感じ、地元の生活感を感じることが出来た。



写真 4-1 ヴェネツィアングラス展示場

5. イタリアのインフラ事情

(1) 道路

1) 交通状況

メイン道路は大型観光バスの交通量が多く、観光地周辺は渋滞が発生している。交差点付近を除き車線が引かれていない上、方向指示器を出さずに割り込みする車両が多い。よくこれでトラブルが起きないものと感心する。ロータリー式の交差点が多く、けたたましいクラクションが鳴り響いている。ここでの運転は慣れと度胸が必要である。また、街路は狭隘で障害物の多い通路走行に適したミニバイクが利用されており、イタリアオートバイメーカーの洒落たベスパが多く駐車されていた。

2) 舗装

観光地の道路は、石畳(約 30cm×30cm)又は石材(約 15cm×15cm)によるインターロッキング舗装である。歴史的な景観への配慮と考えられるが、損傷や凹凸が激しいため、乗り心地は悪く騒音が激しい。街の至る所で路面補修の光景をよく目にした。

3) 路上駐車

道路の両サイドは、駐車車両により 1 車線が潰れている。民間駐車場は少なく、路上の縦列駐車当たり前の世界だ。前後の車両間隔は 50cm 程度のため、中央の車両は出られない状況である。その場合、バンパーを当てて前後の車を強制移動させて脱出する。愛車にキズがつくことを極度に嫌がる繊細な日本社会では考えられない習慣である。



写真 5-1 路上駐車状況

4) ユニバーサルデザイン

ヨーロッパはユニバーサルデザインの先進国である。街中には色とりどりの超低床電車が走行し、バリアフリー化したプラットホームが設置されている。

5) 環境問題

イタリアの道路は悲しいことに路上のゴミが多く目立つ。公共の場所での美観に関する住民の罪の意識が低く、歩きタバコや吸い殻のポイ捨てが横行している。



写真 5-2 路上に散乱するゴミ

(2) 河川

ヨーロッパの河川は、日本と比べて延長が長く勾配が緩やかだ。飛行機の座席が運良く窓際で、いろんな川を鳥瞰できた。広く緩やかな流れが大きく蛇行を繰り返しながら流れる様子は、人の気持ちを穏やかにさせる。フィレンツェのアルノ川、ヴェッキオ橋、ローマのテヴェレ川をバスの車窓から眺めることが出来た。橋梁形式は石造アーチのものが多く、日本で見ると落橋防止の付いた桁橋を目にすることはなかった。河道は、掘り込み二面張り構造で、洗掘対策として横工や根固めブロックが設置されている。川沿いに古い建造物が張り出すように立ち並ぶ様子は、水害に縁が薄いように見受けられた。しかし、約 52 年前に発生した 1966.11.4 フィレンツェ大洪水では、アルノ川が氾濫して中心街の 2 階まで浸水した記録が残っている。



写真 5-3 フランクフルト上空

(3) 世界遺産の維持管理

老朽化による外壁のひび割れや剥離などの損傷が顕著な建造物が多い。歴史的に古い建造物の点検、修繕などの維持管理が問題だ。現地ガイドによると、最新技術と職人による修繕工事が繰り返されているとのことであった。高さ約84mのジェットの鐘楼は、外壁補修をクレーンで実施していた。コロッセオ周辺の建造物はPC鋼線による補強や、自動計測装置による観測が行われている。

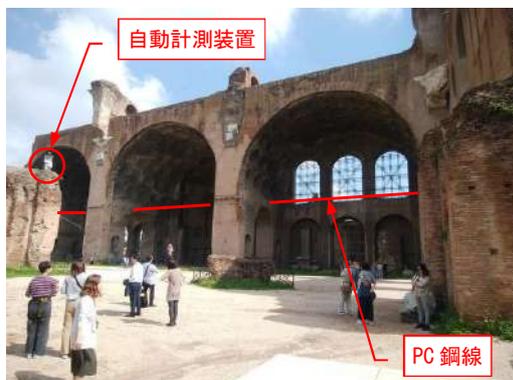


写真 5-4 PC 鋼線と自動計測装置(コロッセオ)

6. イタリアの気候

イタリアは、温暖で雨が少ない地中海性気候である。日本のように梅雨や台風の影響はないが、冬に比較的雨が多い。ローマと東京の気温は年間を通じてほぼ同じである。朝、コートを着て出勤する人の光景を見たと思えば、日中、タンクトップ姿の観光客を目にするなど、一日の寒暖差が激しい。緯度が高く、夏場のサマータイム期間にあたるイタリアは、夜の8時半頃まで明るい。日中は日差しが強く、サングラスを掛けて観光した。

7. 世界遺産の現状と現存する理由

イタリア旅行中に、水没の危機に瀕するヴェネツィアの現状と多くの世界遺産が現存する理由に興味を沸いた。帰国後、そのことについて調べてみた。

(1) 世界遺産の現状

ヴェネツィアのサン・マルコ広場は、「アックア・アルタ」による浸水が発生する。この現象は、高潮と吹き荒れる風に起因する異常潮位である。昔は数年に一度程度であったが、近年は地球温暖化等の影響を受け、年間60日以上発生し、ヴェネツィア存亡の危機と叫ばれている。イタリアはその対策としておよそ7000億円をかけた「モーゼプロジェクト」を立ち上げている。計画内容は、アドリア海からヴェネツィアに入る海流の入口に、高潮の際に浮かび上がる可動式の水門を建設するものである(2018年稼働予定)。プロジェクトには日本企業も参加しており、バイオクリンという塗料を水門に塗ることで貝など海洋生物がつくのを防ぎ水門の機能を保つ技術を提供している。

(2) 世界遺産が現存する理由

1) 地震の影響を受けなかったのか？

イタリアは日本と同様に地震国で、ヨーロッパ有数の災害多発国である。内陸部のフランスやドイツに地震は少ないが、地中海に面した地域は地震が多く発生している。ただし、その多くは活断層がある北部の山側に集中しており、ローマに大きな影響が及ばなかったものと考えられる。

〔イタリアの過去の主な地震〕

1908.12.28 メッシーナ地震 M7.1 犠牲者 82000~10000 人

1997.09.26 ウンブリア州・マルケ州の群発地震 M6.1

2009.04.06 ラクイラ地震 M6.3 犠牲者 309 人

2012.05.20 イタリア北部地震 M6.0

2016.08.24 イタリア中部地震 M6.2 犠牲者 294 人以上

2) 水害の影響を受けなかったのか？

先に記述したとおり、洪水による氾濫被害を過去に経験しているが、遺跡の多くは高台にある立地条件や、建造物が石材であったことから、水害による消失を避けられたものと考えられる。また、日本とイタリアは、「日伊土砂災害防止技術会議」を定期的に開催し、二国間で土砂災害防止技術に関して議論するなどの交流があることを知り、「河川、砂防」を専門とする私は親近感を覚えた。

3) 建築物の強度低下は？

コロッセオなどの大規模な建造物には、現代のコンクリート以上の強度を持つとも言われる古代コンクリートが使用されている。古代コンクリートにはカルサイトと呼ばれる難溶性の炭酸カルシウムが大量含まれている。こその成分により、大気中や土中の炭酸ガス(CO2)を吸収して材料を炭酸化したことで数千年という時を経て現存したと考えられている。

4) 総論

多くの遺跡が現存する理由として、自然災害を受けにくい立地条件であったことや、高度な土木技術と超長期耐久性の建築材料を使用していることが上げられる。コンクリートの配合や混和剤、綿密な防水層をつくるなどの技術をどのように修得したのか不思議である。ただ、先人の知恵と工夫に驚嘆する。日本に比べ降雨が少なく高温多湿な気候も理由として考えられる。なお、イタリア半島全てが、ローマ帝国の本国となっていた歴史的な背景から戦争に巻き込まれなかったことも大きな理由ではないだろうか。

8. 旅を終えて

日本から遠く離れたヨーロッパ旅行は、テレビや雑誌で得た知識を自分の目で見て、肌で感じられたことが何よりであった。これからの人生の中で貴重な経験として活かされることであろう。私にとって、大切な思い出として一生涯、心に刻まれる記念の旅となった。

未知の国イタリア

設計部 河川砂防課
島村 圭太 (2013 年入社)

1. はじめに

この度、参加させていただいた4泊6日の社員旅行は、私にとって見聞を広げるうえで有意義なものとなった。

2. 2日目 in ヴェネツィア

2日目は「サン・マルコ広場」「サン・マルコ寺院」「大鐘楼」「ドゥカーレ宮」を訪れた。

「サン・マルコ広場」は数多くの観光客や現地の人で溢れていた。高知では考えられない状況であった。



人で溢れるサン・マルコ広場

広場内に存在する「サン・マルコ寺院」は金色に輝く天井や壁、数多くの宝石が埋め込まれた衝立には、想像を遙かに超える綺麗さで衝撃を受けた。

内部を撮影できなかったのが残念だ。



サン・マルコ寺院

「大鐘楼」では高さ約96mの位置からヴェネツィア全体の景色を見ることができた。統一された建物がとても美しかった。



大鐘楼から眺めたヴェネツィアの街

「ドゥカーレ宮」には時代を感じさせる牢獄跡があった。現代の牢獄を目にしたこともないが、古いせいか不気味に感じた。

その後は、「サン・マルコ広場」周辺をクルージングし、いろんな景色を堪能した。クルージング中には、現地の人によるカンツォーネ熱唱が披露され、とても楽しい時間を過ごすことが出来た。

その後の自由時間では、ガラス細工で有名な「ムラーノ島」に行き、いろいろなガラス細工を見て、お土産を購入した。



ゴンドラで楽しむ那須



ゴンドラでカンツォーネを熱唱中

3. 3日目 in フィレンツェ

3日目のフェレンツェでは、「ミケランジェロ広場」「アカデミア美術館」「サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂」「ウフィツィ美術館」を訪れた。

最初に訪れた「ミケランジェロ広場」では天候が悪かったが、フィレンツェの街並みを一望できた。天候が良い日の夜に来ればさらに絶景ではないかと感じた。



フィレンツェの街並み

広場中央にはダヴィデ像のレプリカもあった。想像以上の大きさに驚いた。

その後に訪れた「アカデミア美術館」では本物のダヴィデ像が展示されていた(口絵写真8)。レプリカと大きさは変わらないが、とても綺麗に保存されていた。そのほかにもいろいろな彫刻が展示されていた。初めて見る彫刻に見とれてしまい、時間が経つのが早く感じた。

「サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂」は石積み建築のドームで、その大きさは世界一で、今まで見たこともない大きさに驚いた。

また、464段もの階段を駆け上がり、たどり着いた頂上には、ものすごい達成感と絶景が待っていた(口絵写真6)。この時初めて日頃から運動していて良かったと思えた。

3日目の最後に訪れた「ウフィツィ美術館」は、イタリアルネサンス絵画が2,500点ほど展示されている。いろいろな美術館に行ったが、どれも全く違う印象であり、美術の世界観が少し変わった。

4. ローマ

4日目は「コロッセオ」「フォロ・ロマーノ」「サンタ・マリア・イン・コスメディン教会」「ヴァチカン美術館」「サン・ピエトロ大聖堂」を訪れた。

最初に訪れた「コロッセオ」は、テレビ等で見たことはあったが、実物は想像以上の迫力であった。この場所で剣闘士が戦っていたと考え、今の時代に生まれて良かったと思った。闘技場の床は無くなっていた。今後文化的行事や演芸等に利用するために復元しようとの案も上がっているとのことである。

次に訪れた「フォロ・ロマーノ」は、古代ローマ時代の遺跡である。遺跡を見るのが初めてだったので、感動と同時に学生時代に勉強したものを自らの目で確認でき

て良かった。

次に訪れた「サンタ・マリア・イン・コスメディン教会」には、有名な「真実の口」があった(口絵写真11)。高知の街にある真実の口とは迫力が桁違いで、興奮し、周りの目気にせず写真を撮りまくった。「真実の口」が下水道のマンホールという説明にはとてもびっくりした。

その後はヴァチカン市国の「ヴァチカン美術館」に行った。この旅行で数々の美術品を鑑賞した。作品それぞれに違う印象をうけ、同じ絵でもこんなに捉え方が違うのかと感じることが出来た。

4日目の最後は「サン・ピエトロ大聖堂」を訪れた。当施設はユネスコ世界遺産に登録されている。一度の旅で複数の世界遺産を見ることが出来た。また施設がすごく広く、キリスト教会の建築としては世界最大級とのことである。

施設の外で休憩しているとき、たばこの物乞いをする人が来た。恵んだら吸わずにポケットに入れた。恵んだことを後悔した。

5. 5日目 in ローマ～帰国

5日目は「スペイン広場」「トレヴィの泉」を訪れた。

「スペイン広場」は映画ローマの休日でもオードリー・ヘプバーンがジェラートを食べたシーンでも有名。露店で売っていたジェラートを購入し、同じ気持ちを味わってみた。

この後に行く「トレヴィの泉」ほどの規模ではないが、舟の噴水が存在し、たくさんの硬貨が投げられている。



スペイン広場の舟の噴水

その後は、有名な「トレヴィの泉」へ行った。「トレヴィの泉」では硬貨を投げる枚数によって意味が違い、私は永遠の愛を誓うため2枚、泉に投げ込んだ。

6. おわりに

プライベートでは行く機会のないヨーロッパ旅行に参加できたことは良い思い出となった。数々の美術や風景を観覧し、新たな世界観ができた。

このような旅行に再び参加できるように、日々公私共々頑張っただけでいいと思っている。

私が見たイタリア

設計部 河川砂防課
小島 心平 (2014年入社)

1. はじめに

平成30年5月7日から5月12日までの日程で、イタリアへ研修を主目的とした社員旅行に参加した。

イタリアに関する知識といえばゲームや漫画由来のものしか無かった。なぜイタリアを選択したかと言えばイタリアの自動車、特にアルファロメオが好きだからに尽きる。実際、日本では発売されていないモデルを見ることもできた。

ただ、イタリアへ旅行に行ったことのある知人からはスリが多いとか空港で預け入れ荷物が紛失するなど不安要素をかなり多く聞いていた。

実際には懸念していたアクシデントは無かったが、旅行に際しては過去最高レベルに細心の注意を払った。

それらを差し引いても、イタリアでの経験は得がたいものだった。

2. 一日目

イタリアへは羽田、ドイツのフランクフルトを経由して到着した。

最長区間である羽田-フランクフルト間は11時間10分のフライトで、ドイツのフラッグシップキャリアであるルフトハンザドイツ航空を利用した。

機内食が2回出る長距離便の飛行機は初めてののだが、これがなかなかの狭さだった。ほぼ日本人平均体型の私の場合でも前席に膝が当たり、左右も肩が触れあうぐらいである。かなり窮屈で、疲労が溜まった。

しかし、到着すればその疲労はどこへやら、すっかり異国の地に舞い上がっていた。成り行きで入国審査にトップバッターで乗り込むことになり、入国審査官に色々質問されたが、なんとか聞き取ってクリアした。

フランクフルト空港ではもはや日本語は存在しない。ヨーロッパに来たのだと実感した。

未だ夕方の空模様を示すフランクフルトを20時に出発し、いよいよイタリア、ヴェネツィアである。空港に着くと、高知で預け入れた荷物とついに再会である。二度の乗り継ぎを経て外装に傷ができていたものの、無事に受け取ることができた。

その後、バス、水上バスを乗り継ぎホテルに到着した。ホテルに向かう道中、外灯に照らされた寺院、サン・シメオン・ピッコロが出迎えてくれた。

水際に立つ古い寺院。ここにヴェネツィアの玄関口ができたのは地理的な要因が大きいのだろうが、ここから始まるヴェネツィアの観光を予感させるにはこれ以上無い景観だと思った。



サン・シメオン・ピッコロ

3. 二日目

起床すると、朝食の時間まで余裕があったためホテルの近くを散策した。そもそも初のヨーロッパでそれはもう新鮮さしか無かった。道沿いに立ち並ぶ建物がみな美しい。写真写りは完璧である。ただ、路上のごみや歩きタバコなど不衛生であると感じる所は多々あった。

朝食はホテルの一階でビュッフェ形式であった。和食が無いこと以外日本のホテルで供されるものとそう変りは無かったが、ハムなどのバリエーションが豊富だった。

朝食を取り終わると本格的な観光に移行する。

ヴェネツィア島内は一部を除き全ての車の通行が認められていないため、ボートやゴンドラ、徒歩での移動が主となる。

まずはサン・マルコ広場に水上バスで向かう。サン・マルコ広場にはヴェネツィアの守護聖人である聖マルコを奉ったサン・マルコ寺院、かつてのヴェネツィアが独立国家だった時代に法執行機関が設置されていたドゥカーレ宮など主要な観光スポットが隣接しており、有名なため息橋もすぐ近くにあった。1つ観光を終えると次のスポットまですぐに到達できる。いずれも絵画や彫刻がくまなくちりばめられており、その全ての密度が高かった。まさに豪華絢爛である。



サン・マルコ寺院



ドゥカーレ宮内部

その他、ヴェネツィアングラスの工房を見学した。熱されたガラスの塊からいとも簡単に勇壮なユニコーンが形作られる様はまさしく職人、と言ったものである。やたら日本語の達者なセールスに商品の説明を受け、おのおのヴェネツィアングラスを購入していた。私は手頃な価格で勤務中のお茶飲み用のものがあればと思い探していたが、ちょうどよいものがあつた。透明なコップで、白黒のラインが入っている。値段も比較的手頃だったため購入した。

その後ゴンドラにてクルーズを楽しんだ。これぞヴェネツィアという景色だったが、水路特有のにおいが少し気分が悪くなった。クルーズを終えると、昼食会場へ向かった。サラダ、イカスミパスタ、ヒラメのソテー、ティラミスのコースであつたが、いずれもかなり薄味であつた。昼食を終えると解散し、自由時間になった。私は総務課の高橋さんとともに歩いてホテルまで戻りながら散策することにした。道中、二人して体調を崩してしまった。建物の密度が高く気になっていなかったのだが、空を見ると雲がかかっており、風が冷たかつた。やつの思いで有料トイレにたどり着くと、体調はみるみるうちに戻っていった。そこからがヴェネツィア散策の始まりだつたといえる。ヴェネツィア最大の運河カナル・グランデに架かる4橋の内の1橋、リアルト橋で写真を撮り、たまたま見かけたディズニーストアで限定グッズを買い、街中に無数にある露店で小物入れやお皿を見て、細い細い小道を抜けてホテルへと辿りついた。道中では時々ストリートミュージシャンが演奏していた。これも町に彩りを添える重要なパーツの1つだと感じた。

夕食は海鮮コースであつた。マリネ、ペスカトーレ、イカと海老のフリット、パンナコッタのコース。若干体調不良が後を引いていたのでフリットは残そうかと思つたが、私はせつかく出された料理を残すことはできない性分らしかつた。完食した。

その後はホテルに戻り寝た。

4. 三日目

この日はホテルをチェックアウトした後、イタリアにおける高速鉄道『イタロ』にのり、フィレンツェへ向かつた。旅程表には二等席と書かれていたが、搭乗した席はどう見ても一等席だつた。座席は広々、飲み物と軽食のサービス付きである。車内も清潔で実に快適であつた。フィレンツェまでは2時間程度で到着した。

フィレンツェでは町を一望できるミケランジェロ広場、ダヴィデ像の実物を展示するアカデミア美術館、高さ114.5mを誇るサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、ポッティチェリの春、ヴィーナスの誕生などを収蔵するウフィツィ美術館を見学した。

ミケランジェロ広場は世界一の眺望とのことだが、あいにく雨がぱらつく天気だつたため、そこまで心奪われる景色では無かつた。

その後、アカデミア美術館に移動した。特に彫刻が多く展示されている美術館であるが、ここでの目玉はなんと言ってもダヴィデ像である。メディアへの露出が多いので知らない人はいないといつても過言ではないのだろうが、それが実際にそこにあるとなると印象はひと味もふた味も違うものである。なにより大きかつた。普通の人間サイズを想像していたので高さ5mくらいの威容には驚いた。

また、その他の展示物においても特に布の造形に圧倒された。女性の彫刻を覆うそれはまごう事なきシルクの布であつた。それが石でできている。

私の理解の範疇を超えていた。



ダヴィデ像



彫刻による薄布

アカデミア美術館を後にし、昼食になった。ここではピザだつた。日本でも食べる機会が多いピザではあるが、本場の伝統的なピザを知ることには深い価値がある。大変美味だつた。

食事をした後はサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドームの最上部に登つた。464段ある階段を駆け上がると、さわやかな風と共にフィレンツェの眺望が待ち受けていた。このときは晴れになっていて、景色も相当美しく見えた。次にウフィツィ美術館を観光した。ここでも実物の迫力を感じた。

観光を終えると少しだけ自由時間があつた。

フィレンツェと言えば革製品である。かねてから買いたかつた革手袋の店に行った。手を見せるとすぐにぴつたりのサイズを出してくれると評判だつたのだがその通りであつた。

手になじみ、手袋をつけたままでも会計ができそうな程度で、デザインもよくつくりもしっかりしている。さすが革製品の聖地である。迷わず購入した。また、手袋の裏地として使用するシルクやカシミアについても一流である。それらを使用したネクタイやストールなども販売

していた。ネクタイを父親に購入した。大満足である。

その後は街中を適当にぶらついた。革製品を売る露天が立ち並んでおり、どれも衝撃的な安さだった。さわらせて貰ったが特に粗も見つからない。日本で買うと3倍はしそだった。荷物のスペースが満杯に近いことから購入はあきらめたが、後悔が尽きない。

夕食は名物ビステッカ・アッラ・フィオレンティーナであった。別名でT ボーンステーキ。フィレンツェ特有の牛であるキアーナ牛をレアで焼く郷土料理である。やや自分の理想が高すぎた所は否めないが、ボリュームたっぷりの赤身肉は食べ応え抜群だった。この日のホテルは普通のホテルかと思いきや部屋に入るとダブルベットであった。男二人でこれは厳しいと言わざるを得ない。食事中にJTBの添乗員さんが手配に奔走してくれたおかげですぐ近くのホテルに宿泊できた。後になってどのようなホテルに泊まったのか知りたかったのでグーグルマップで検索したが登録されていなかった。オープンしたてのホテルらしく、少し得をした気分になった。

5. 四日目

この日はイタロとは運営会社が別的高速鉄道『フレッチャアルジェント』にのり、首都であるローマへ向かった。所要時間は1時間30分である。

ローマもこれまでの都市と同様歩きたばこ、路上のごみが常態であった。

古代の統治機関が集積されていたフォロ・ロマーノ、民衆の娯楽の場として建造され、5万人の収容が可能なコロッセオ、映画『ローマの休日』において一躍有名となった真実の口、世界最小の国家であるヴァチカン市国及びヴァチカン美術館、キリスト教総本山であるサン・ピエトロ寺院を見学した。

フォロ・ロマーノは他の観光客も少なくゆっくり見学ができた。コロッセオは日本でもサッカースタジアムなどでよく見る形状で少し親近感がわいた。これが紀元100年以前に建築されたことを除けば。



コロッセオ

ヴァチカン美術館では・・・もはや何も言えない。この旅行で名画や彫刻を見すぎた。そもそも私が美術に篤くないので数多ある彫刻それぞれに個別の感想が抱けない。有り難いものなのは理解できるが完全に食傷であった。

あまりなじみのないキリスト教ではあるが、サン・ピエトロ大聖堂は総本山ともあって建物の規模、風格共に

桁外れだった。



サン・ピエトロ大聖堂

一通り見学を終えると、買い物の時間としてローマ三越を訪れた。従業員は全員日本語が理解できるようで、安心して買い物ができる。

ここではおみやげ用にフィレンツェで買いそびれた革製品を買いあさった。

日本で買った場合と比較して半値以下で購入できた。これはお得である。

帰国してから近しい友人に分配したが、やはり made in Italy のブランドは尋常では無く、例外なく好評であった。

イタリア最後の夕食は歌を聴きながら食事をするカンツォーネディナーだった。

サラダ、パスタ、白身魚のソテーフライドポテト添え。音楽を添えた食事というのも乙なものである。完食した。

6. 五日目・六日目

またしても映画ローマの休日で有名なスペイン広場、後ろ向きにコインを投げ入れると願いが叶うというトレヴィの泉を観光した後、移動である。

朝早い時間に赴いたためいずれも比較的開放的に観光できた。スペイン広場の階段を上ると遠くに大きな寺院が見えた。すわあれがヴァチカン市国か？否、更に遠くに朝霧にぼけたサン・ピエトロ大聖堂が見える。太陽と月が見かけは同じ大きさに見えるように2つの寺院が並んでいた。キリスト教総本山、侮り難し。



朝霧のサン・ピエトロ大聖堂

トレヴィの泉は毎週金曜日に掃除を行うようである。ガイドが一言二言清掃員に話しかける。聞くに私たちの観光が終わるまで掃除を待つて欲しい旨伝え、承諾を得

たらしい。おおらかである。

投げ入れるコインは1枚でローマの再訪、2枚で永遠の愛、3枚で腐れ縁の切断が叶うそうだ。

とりあえず2枚投げ入れることにした。



トレヴィの泉

トレヴィの泉に隣接して賞を取ったこともあるというジェラート屋があった。ジェラートを売る店はイタリア中至る所で見かけたが、一度も食べていなかった。チョコレート、フルッティディボスコ(森の果実の意、野いちご等のミックスジャムらしい)の組み合わせで食べたがこれが絶品であった。賞を取るだけあり非常になめらかな口当たりと味わいだった。

その後はバスに乗りローマ郊外にあるフィウミチーノ空港からドイツのミュンヘンを経由し、羽田へと帰り着いた。またしても飛行機は狭かった。羽田に着くと同じく開放感。私感だが長距離便の中は時間が止まっているかのようで、到着すると機内の出来事が驚くほど印象に残っていない。不思議な体験だった。

羽田空港でさすがに小腹が空いたため立ち食い寿司を食べた。5割増しで美味しく感じた。

高知空港へ到着すると、荷物を回収し、解散した。

7. 終わりに

これで私の海外渡航歴はグアムが2回、イタリアが1回となった。

数多くの美術品、建築物を実際に見ることができ、非常に貴重な体験だったと思う。

言語については翻訳アプリを用意するなどしたが、ジェスチャーや英語で話すと察してくれるので助かった。観光客慣れしているというのもあるだろうが、無視せず耳を傾けてくれるのは非常に有り難かった。もう一度行きたいと思わせてくれる。

食文化の違い、生活リズムの違い、仕事への取り組み方の違い等日本では考えられない光景をいくつも目の当たりにした。電車の遅れが日常茶飯事で社会もそれを当然としているそうなので日本の交通機関の律儀さには平伏するばかりである。

事前に聞いていた通り市街のごみや物乞い、露店等の強引な商売には警戒していないとかなり損害を被るポイントだと感じた。心構えと準備の大切さを身にしみて実感した。

～芸術の国 イタリア～

設計部 河川砂防課
生田 万祐子 (2012年入社)

1. はじめに

「創立55周年」を記念し、人生初のヨーロッパ旅行に行くことになった。各班イタリア、フランス、ドイツに分かれて4泊6日の長い旅となる。私は生で有名な絵画が見ることができるとあって、この旅行をとっても楽しみにしていた。

旅行に出発する前からあれやこれや準備を重ね、既に大出費である。一番大きいスーツケースに荷物を詰め込み、帰る頃にはこの中身をいっぱいにして帰ろうと誓った。

2. ヴェネツィア

ヴェネツィアでは96mもある大鐘楼にエレベータで一気に上った。塔の上からはヴェネツィアの景色が一望できる。高知県民なので海は見慣れているが、建っている建物がまさにヨーロッパ!といった感じで、写真やテレビでしか見たことない風景に外国に来たんだ!とはしゃいでカメラを構えた(口絵写真1)。その時の私は次の日に待ち受けている464段の階段の恐ろしさをまだ知ることはなかった・・・。

サン・マルコ寺院、ドゥカーレ宮殿(口絵写真3)などの観光スポットを回った後、心待ちにしていた観光の目玉であるゴンドラクルーズ(口絵写真4)に向かう。このゴンドラの操縦は非常に難しいとのことで、座っている私たちのバランスも重要らしい。なんとなく緊張してしまい、いつになく姿勢良く船に乗っていた。狭い上に曲がり角も多い水路を壁ギリギリでぶつかることなく曲がる場面では、操縦士の渋いイケメンお兄さんの技量に思わず拍手した。イタリア人は褒めるととてもノリノリになる。

ガイドさん曰く、ゴンドラの搭乗は観光者向けでかなりお高いと聞いていたので、二度とないかもしれない優雅なひとときを存分に楽しんだ。

ヴェネツィアの島では車が通行できないため、移動は徒歩か水上バスや水上タクシーなどを利用しており、パトカーも救急車も消防車も貨物車も全部が船だった。波が立つため、速度違反に対して非常に厳しいらしく、まわりの船もゆったりしており、ときおり出動する救急車が競艇のように感じられた。

途中お邪魔したヴェネツィアンガラスの工房では、職人の華麗な早技を見学し、繊細で鮮やかな色とりどりのガラス製品に酔いしれた。



あっという間にユニコーンが!これぞ職人技!



現地ガイドの銀さんことシルバーさんとパシャリ!

現在もムラーノ島にはたくさんのガラス職人がしのぎを削っているようだ。残念ながらムラーノ島に行く時間が無かったので、ヴェネツィアの街を散策し、お土産を買い込む日となった。

3. フィレンツェ

フィレンツェでは絶景スポットであるミケランジェロ広場から街を眺める予定だったが、あいにくの雨で霧に包まれたフィレンツェの景色となった。広場の中央にドーンと建っているダヴィデ像のレプリカを見た後、「アカデミア美術館」で本物のダヴィデ像を拝んできた。最初に思ったのが、「思ったよりでかい」。人間と同じくらいの大きさを想像していたので、なるほどこれは神々しい。その姿はミケランジェロらしい肉体美がよく表されている作品となっている(口絵写真8)。



あいにくの雨・・・残念



オシャレな雰囲気のフィレンツェの街

ランチの後の運動とばかりに、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドゥオモ(大聖堂)の464段の階段に挑んだ。これが本当に辛かった。まず、狭い螺旋階段をひたすら登る。同じ景色をぐるぐると登り続けていると、だんだん催眠にかかったような、なんとも言えない気持ちの悪さを感じた。そこを抜けると、今度は上から降りてくる人とすれ違いながら狭い階段を上り、息切れを起こしつつも、なんとか頂上まで登り切った。ここではフィレンツェの街を180°見下ろすことができる。ヴェネツィアの大鐘楼と違い足下が外に出っ張っていて、高所恐怖症の私には少々レベルが高い。景色をまじまじ見たい気持ちと、少し斜めに傾いた足下への恐怖と葛藤したが、なんとか記念撮影を済ませた。日頃の行いが功を奏したのか、雨模様だった空はスッキリと晴れ、最高のコンディションの中フィレンツェの街をカメラに収めることができた。

また、行き帰りのすれ違いの階段で嬉しいことがあった。それは道を譲ったとき、明らかに外国人である方が「ありがとう」と言ってくれたことだ。日本で外国人が「ありがとう」と言ってくれるよりもずっとすごいことだと思う。かくいう私もこの旅で自然と「グラッチェ」が口癖になっていた。



ドゥオモの頂上からの景色は素晴らしかった

次は心待ちにしていた「ウフィツィ美術館」である。特に有名な作品としてボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」「春(プリマヴェーラ)」(口絵写真7)があげられる。これは誰もが教科書で一度は目にしたことがある絵画ではないだろうか。ガイドさんに厳選して館内を案内してもらったが、あまりの作品の多さと行程の関係上ゆっくりできる時間がなく、早足での鑑賞となったことがとても悔しく思う。「ウフィツィ美術館」の作品は外に持ち出されることがないとのことで、しっかり目に焼き付けようと人の波をかいくぐりながら鑑賞した。私の好きなダ・ヴィンチの絵もあった。ダ・ヴィンチの描く聡明で端正な顔立ちには、秘密めいた魅力がある。私がフランスと悩んだ理由はココにあった。モナリザが見たかったのだ。

美術というものは、生命活動に必要なものではない。しかし、人が何かを表現するための重要なファクターであり、個性を形づくるものである。そしてそれを「見て」「楽しむ」、すなわち美意識に昇華できるのは人だけである。実際に目にした経験は、たとえ興味が無かったとしても、教科書で見るよりもはるかに大きな印象を与えるものだろう。その経験は、昨日までの作品に対するおぼろげな印象に「見た」という価値を付随することで、「興味」となり、より鮮明な「記憶」となる。私自身、美術には少しばかり関心が高いこともあり、今回の経験は非常に刺激のあるものとなった。



受胎告知(レオナルド・ダ・ヴィンチ作)



ガリレオ・ガリレイの肖像画。名言は「それでも地球は動く」



約 3000 円の高級チケット

美術に関心が向いたのは母の影響である。昔からよく美術館を連れ回され、母が1周見終える間、私が3周するなんてこともあった。そんな母からはお土産にスカーフを頼まれていた。フィレンツェは革製品やスカーフも有名らしく、店舗でも露天でもよく目についた。短い自由時間の中言葉の壁に悪戦苦闘しつつも、シルクのスカーフを安く購入することができた。

4. ローマ

ローマでは、コロッセオ(口絵写真9)、フォロ・ロマーノの他に、「真実の口」(口絵写真11)で有名なサンタ・マリア・イン・コスメディン教会やスペイン広場(口絵写真13)、トレヴィの泉(口絵写真14)、カトリックの総本山である「ヴァチカン市国」などへも行くことができた。そして、今回訪れた中で特に印象に残っているのが、ローマの「コロッセオ」、ヴァチカン市国の「システィナ礼拝堂」と「サン・ピエトロ大聖堂」である。

ローマのシンボルともいえる円形闘技場の「コロッセオ」は民衆の娯楽施設として建設されたもので、剣闘士同士の試合や罪人の処刑などを行っていた場所だ。ただの娯楽目的か思っていたが、それを観覧させることで人間の残虐の欲求を解消させ、政府への不満から目をそらす目的があったそうだ。人が殺されるのを見ながら飲酒や食事をしていたなんて、スプラッター映画が大の苦手な私には考えられないことだ。当時は5万人もの観客がたった10分程で出入り可能だったようだが、現在は出入り口が制限されているため入場までに1時間以上待つことになった。どこに行っても行列に並ぶのは苦行である。



コロッセオで記念撮影。私の顔には若干の疲れが(笑)

ヴァチカン市国といえば世界最小の国土面積で有名な国だ。私は「天使と悪魔」という映画の舞台がヴァチカン市国だったこともあり、少しミーハーな気持ちでわくわくしていた。

ヴァチカン美術館にはもちろん、イタリアの美術館には多くの宗教画が展示されており、長い歴史の中でいかにキリスト教が重要視されているのかが覗える。

特に、ヴァチカン宮殿内のシスティーナ礼拝堂の天井に描かれた、巨大なフレスコ画であるミケランジェロの「最後の審判」は、人生で一度は見たい作品の一つであった。事前の説明では、撮影もおしゃべりも一切禁止とのことだったので、厳かな雰囲気を想像していたが、中に入ってみるとあちこちでシャッター音やおしゃべりをする声が耳についた。係員が注意するとピタッと止むのだが、5分後にはまた元に戻ってしまっていた。観光客でごった返していたとはいえ、やはりルールは守るべきである。しかし、そんな中でも、天井一面に描かれたその作品の迫力と美しさは素晴らしく、想像以上に鮮やかな青が目の前に飛び込んでくる様は、言葉に言い尽くせないものだった。一生の思い出である。

また、ヴァチカン市国内にそびえ建つサン・ピエトロ大聖堂は本当に見事だった。その内部の装飾は細部まで豪華さにあふれ、壮大でありつつも厳かで神聖な空気が漂っており、思わず身なりを整えたほどだ。天井から光が差し込む構造になっており、美しく聖堂内を照らしていた。室内はとても広く、時間内に回りきることは出来なかった。ミケランジェロの「ピエタ像」と、祭壇の天蓋と聖ペテロの椅子を見学するに留まった。帰りのお土産もの屋では、訪れた記念にローマ教皇の切手とコインを買った。



ヴァチカン市国の入り口



美しいサン・ピエトロ大聖堂

5. 食文化

今回の旅では、イカスミやカルボナーラなどのパスタや本場のマルゲリータにT ボーンステーキ、またイタリアンジェラートをはじめティラミスやパンナコッタなどのドルチェを堪能した。

イカスミパスタは初体験であったが、味の主体はトマトとガーリックで、想像よりもはるかに食べやすい味だった。本場のカルボナーラは卵とチーズのみを使用したソースにパンチェッタを加えたもので、牛乳や生クリームなどを使用していない分食べ慣れたカルボナーラよりもあっさりしていた。パスタはリガトーニと呼ばれるショートパスタで、あまり食べたことのない形をしていた。パスタは実に種類豊富で、お土産に買ってかえる人も多かった。

イタリアで特に美味しかったのがジェラートである。とても多くの種類があり、2種類からで3ユーロ程度が多く、お手軽にどこでも食べるのできるのも魅力である。私はピスタチオに目がないので、ここでももちろんピスタチオを選択。食べてみるとまったく濃いのに、後味はしつこくなくサッと口から消えていく。本当はもっといろいろなところで食べたかったのだが、時間とお腹の余裕から1度しか食べることが出来なかった。

本場の食事は日本のイタリアンに比べると全体的に素材の味を重視したものが多く、薄味の印象を受けた。男性陣には少し物足りない味だったようだ。やはり日本食と同じで毎日食べるとなるとこれくらいがちょうど良いのかもしれない。実際調べてみると、私たちがイメージしているトマトとチーズかたっぶりのイタリアン料理はナポリなどの南イタリアの料理だそう。ますますもう一度来るしかない。



パンナコッタとティラミス



チーズと卵のみ使用した本場のカルボナーラ



BestFood はレモンとピスタチオのイタリアンジェラート

6. おわりに

イタリア人はよく喋るという印象を受けた。特に男の人は本当によく喋る。そして挨拶をよくする。表情も豊かで明るい人が多く、距離の近さは私たち日本人には少し戸惑うほどだ。

ヴェネツィアを案内してくれた現地のガイドの方は2人とも日本語が堪能で、観光案内を担当してくれたシルバーさんは、終始冗談を交え笑いの絶えない観光を提供してくれた。

今回は私にとって台湾、グアムに続いて3度目の海外旅行であり、全て社員旅行で経験させていただいている。今回は北イタリアを中心に多くの観光地を訪れたが、次は南イタリアにもプライベートで訪れてみたいと思った。至る所で芸術が感じられ、私の人生分では足りないほど見所がある国だった。



またいつか!

イタリアの地形地質と建築材料

設計部 防災まちづくり課 技師長
須内 寿男 (2017年入社)

1. はじめに

本報告書は、自分の興味の対象である地形や地質、古代コンクリート、石材などに着目して記した。

2. イタリアの地形地質概要

イタリアはヨーロッパ大陸から南東に突き出したイタリア半島とその西側のシチリア島などの島々からなる。イタリア半島はアペニン山脈により形成されている。アペニン山脈は、ユーラシアプレートの下にアフリカプレートが沈み込んだ結果生じたアルプス造山運動により、ユーラシアプレート上に形成された(石川、2011)。同山脈の地質は白亜系(およそ1億年前)と中新統(およそ2千万年から1千万年前)で(図1)、半島の中央部が隆起したため、緩やかな起伏を示す丘陵山地である(写真1)。山地の標高は2000m以下で3000m級の山地はない。

イタリア半島はプレート収束域であるため、日本と同様に活火山もあれば地震も頻繁に起きている。20世紀以降の記録で見るとマグニチュード6以上の地震は2か月から15年の間隔で起きており、最近では2016年10月に中部のベルージャでマグニチュード6.6のイタリア中部地震により死者が3名出ている(ウィキペディア)。

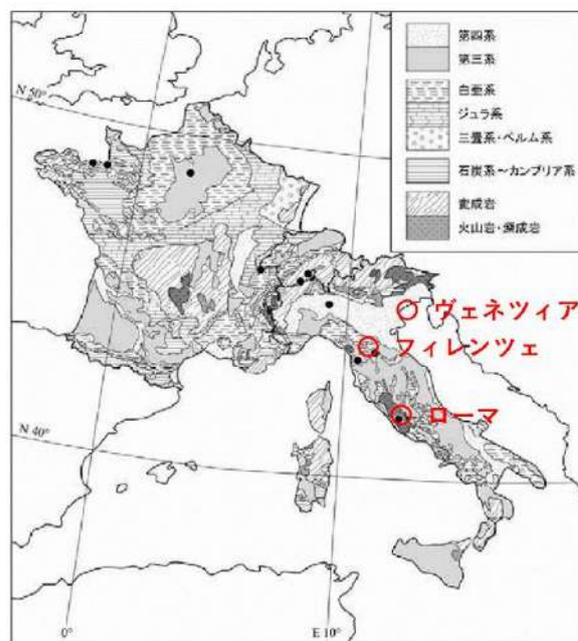


図1 イタリア・スイス・フランスの地質図(山中(2017))



写真1 列車でフィレンツェからローマに向かう途中の風景小麦畑が広がる。5月10日。



写真2 サン・マルコ大鐘楼より東方を望む
手前の細長い島はジュデッカ島。中世にはユダヤ商人が多く居住していた。現在は有名人の別荘地ともなっており、イギリスの歌手エルトン・ジョン氏の別荘もあるとのこと。はるか沖合に見える陸地はラグーンを画するリド島。

3. ヴェネツィアのラグーン

一契約どおり肉を1ポンド取るが良い。ただし血は1滴も流してはならぬー

ラグーンとは、浅海域の一部が沿岸州、砂嘴(さし)、サンゴ礁などの発達によって外海から切り離されて形成された水体を指す(地形の辞典)。ヴェネツィア(英語で Venice)は地中海最大のラグーン(Brambati ほか、2003)の中にある島々の一つである(図2、写真2)。ヴェネツィアは穏やかなラグーンの内に入り、周辺の大水路の水深が10~14mと大型帆船の入港に十分な深さを有し、ドイツやオーストリアにも比較的近いため、中世は貿易港として繁栄したと思われる。現在はいない(ガイドさん談)が、当時はユダヤ商人が多く住みつき、シェイクスピアの戯曲「ヴェニス商人」の舞台ともなった。



図2 ヴェネツィア・ラグーンのASTER画像
(Brambati ほか、2003)

このラグーンを構成するのは厚さ1000m以上にも及ぶ未固結堆積物であり粘性土や泥炭も含まれる、北西に広がるポー平野から運搬されてきた堆積物がデルタを形成し、それが沈下して現在のラグーンを形成している(図3)。自然現象として第四紀の間に0.5-3mm/年の速さで沈降した。ラグーンは6-7千年前から形成されていた。

ヴェネツィア市民を悩ませているのが地盤沈下に伴う浸水被害である。Brambati ほか(2003)によれば、1950年から1970年にかけての過剰揚水により自然沈下の倍以上の速さで地盤沈下が進行して問題化した。その後揚水制限がなされて中央部では収まったが、北部や南部では現在も沈下が続けている。大潮時にはサン・マルコ広場も浸水し、現地では毎朝スマートフォンの浸水アプリで浸水情報を確認してから出勤するのが普通とのこと(現地ガイドのシルバーノさん)。サン・マルコ広場で不同沈下が見受けられたほか、船着き場で満潮時の水位を見ると50cm程度しか余裕がなく、大潮時には冠水すると推測された(写真3)。



写真3 サンタ・ルチア駅前の船着場
満潮時には50cm程度しか余裕がない。右端の人物は工藤さん。カメラガール。

4. ローマの古代コンクリート

ローマの建造物にコンクリートが使われていることは以前から学会誌やテレビ番組で観て知っていたが、実物を見ることができた(写真4、5、6)。古代ローマ人は石灰岩の粉と火山灰(筆者注：凝灰岩であろう)を混ぜてモルタ

ルを作り、さらにレンガ片や土器片、火山岩を骨材として使用していた(久田、2013)。現在のコンクリートはバインダーとしてカルシウムを使用しているが、古代ローマのそれはアルミニウムがバインダーとなっているために、2千年もの長期にわたり耐久しているとされている(ウィキペディア)。



写真4 フォロ・ロマーノ・パラティーノの丘のレンガ建築物板状のレンガの間に古代のコンクリート(モルタル)が使用されている(写真7)。奥に見える樹木は地中海松。



写真5 古代コンクリート
黄土色の板状レンガの内側に、コンクリートが露出している。骨材として赤いレンガ片、緑色岩、黒色のガラス片(?)が見える。



写真6 フォロ・ロマーノ ティトスの凱旋門の基礎部
古代コンクリートが露出している。もともと石積み何かで囲われていたと推測される。

5. 石材

石の文化と言われているヨーロッパの建造物に使用されている石材としてどのような石が使われているか興味が、今回の訪問で各都市の歴史的建造物や宿泊したホテルの壁や床を気をつけて見た。その結果、建造物により異なるが多いのは石灰岩(写真7)、大理石(写真8)、砂岩(写真9)で、火山岩(海底火山の溶岩や凝灰岩)や蛇紋岩も用いられていることがわかった。ローマのコロッセオではトラバーチン(石灰華)も多く使われている(写真10)。ミケランジェロによるダヴィデ像など彫刻で石材を用いているものは、見たところすべて大理石であった(写真11)。大理石は生物遺骸が堆積してできた石灰岩が變成作用を受けて再結晶したものであり、構成鉱物は両者とも方解石(化学式CaCO₃)である。方解石は鉱物としては比較的柔らかい(モースの硬度3)ので加工しやすく、またイタリアに豊富に産出することも多く使われている理由であろう。

石材の色としては、白(大理石)、赤・桃色(石灰岩、大理石)、緑(火山岩、蛇紋岩)、黄色(砂岩)、黒(泥岩、石灰岩)などの色を使用できる。これらを巧みに用いているヴェネツィアのドゥカーレ宮(写真12)やフィレンツェのドゥオモ(写真13)、サン・ピエトロ大聖堂(写真14)がある。



写真7 ヴェネツィアのホテル浴室壁面の石灰岩藻類とその間隙を埋める石灰泥からなる。赤茶色。



写真8 ヴェネツィア リアルト橋 大理石からなるアーチ橋。橋の下を通過しているのは水上バス。当地では、しばしば橋の上に建物が構築されている。アーチは強い。



写真9 フィレンツェ メディチ・リッカルディ宮殿の壁面砂岩。表面は黄色、削られた部分は暗灰色。



写真10 ローマ、コロッセオ かつて多数あった入り口の一つ。ローマ数字でXXXV(35)の刻印。トラバーチン。内部はレンガ造りだが、外壁はトラバーチンで化粧されている。現在はこのように化粧板が残っているのは一部のみである。乳白色。



写真11 フィレンツェ、アカデミア美術館ダヴィデ像の足元大理石。緑色の縞模様(矢印)は恐らく凝灰岩層であったと思われる。

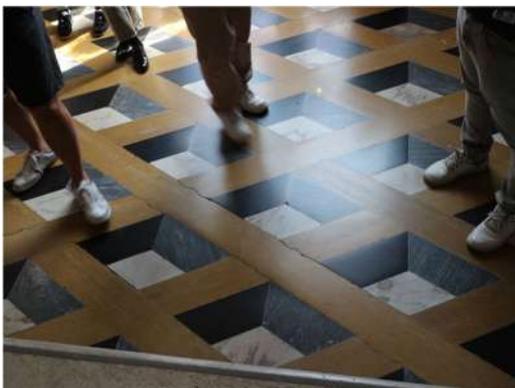


写真12 ヴェネツィア ドゥカーレ宮の階段踊り場。見る角度により立体的に見える。黄色(天端に見える)は恐らく砂岩、緑(壁)は蛇紋岩、白(底)は大理石。



写真13 フィレンツェ ドゥオモ。白色の大理石、桃色の大理石、緑色の蛇紋岩(多分)が効果的に用いられている。屋根の赤色は素焼きの瓦。屋根の白色筋状の部分は大理石。皆で登楼した。



写真14 ヴァチカン市国、サン・ピエトロ大聖堂の床。白(石灰岩またはトラバーチン)、赤(石灰岩)、緑(蛇紋岩)、黄(砂岩)。

6. おわりに

この研修旅行では、これまで見たことのない風景や建造物を間近に見ること、触れることができた。そして建物や生活様式など、文化が地形と地質に大きく影響されていることも確認できた。また古代、中世の建造物の大きさ、緻密さ、そして美しさには圧倒された。石材を利用するには木材よりもかなりの人手と高い測量技術、加工・建築技術が必要と思われる。日本では石器や鉄器を用いて原始的な生活をしていた同時期(縄文～弥生時代)に、イタリアでは道路、水道、浴場などの高い文明がすでに出来上がっていたことは、まことに驚きである。

一時「コンクリートから人へ」というフレーズが言われたが、当時、私はそのパロディとして「コンクリートから石へ」というフレーズを口にしたことがある。今回、石でできた耐久性の高い多くの建造物を目の当たりにし、自分の携わる斜面对策でもメンテナンス・フリーを意識した仕事をしていかねばと改めて感じた。

歴史と人々が織りなすイタリアの街並み

設計部 防災まちづくり課
安地 勝江 (2017年入社)

1. はじめに

これまでも数回、海外へ旅行したことがあったが、ヨーロッパの国を訪ねるのは初めてだった。候補地の3ヶ国はどこも魅力的で行先を決めるのにとても苦労した。その中でも、一度はヴェネツィアを訪れたいという思いから希望したイタリアへ行くことができた。

今回の旅行では、3都市の多くの観光名所を回ったためタイトなスケジュールだったが、それぞれの街の違った魅力を楽しむことができた。

2. ヴェネツィア

12時間以上のフライトを経て最初にたどり付いたのはヴェネツィア。街全体が運河と入り組んだ路地で構成されている。車両の進入が規制されており主な交通手段は徒歩か水上タクシーなどの船となっている。



荷物の運送も船で行われていた

最初に訪れたサン・マルコ広場は、朝から大勢の観光客で賑わっていた。ヴェネツィアでは、秋から春にかけて「アクア・アルタ」と呼ばれる高潮現象により一体が水浸しになるそうだ。この現象は季節風等による水位上昇に満潮が重なることによって発生する。ガイドさんも潮位がすぐに分かるアプリを携帯に入れているようで、アクア・アルタ発生時には通行のために踏み台が設置される。

広場にある鐘楼はもともと見張り台と灯台として建てられたが、1902年に一度倒壊し、10年後に見晴台として再建されている。鐘楼の頂上から見たヴェネツィアの色彩が統一された街並みと、運河や海の青色のコントラストはずっと眺めていたくなるような景色だった(口絵写真1)。



サン・マルコ広場とドゥカーレ宮

ヴェネツィアでは、13世紀頃から生産が始まったヴェネツィアングラスが特産品として有名である。火災による延焼と技術の流出を防ぐため、ガラス工房はすべてムラーノ島という島に集められたため「ムラーノガラス」とも呼ばれる。原料は、鉛を含まないソーダ石灰で、そこに様々な物を加えることによって様々な色合いを表現している。



ガラス工房で製作の様子を見学

午後からの自由時間はお土産を探しつつ、ヴェネツィアの街を散策した。路地を抜けた各所に広場では、飲食店のテラス席や階段などのちょっとした段差に座り込ん

でくつろいでいる人たちの姿が印象的だった。細い道が入り組んでいてすぐ迷ってしまう街並みにも関わらず、案内板はサン・マルコ広場など主要な場所の名前とその方向を示す矢印のみというシンプルなデザインだったことも興味深かった。



広場の様子



案内版は矢印と行先のためのシンプルなデザイン

また、店の看板は周りの景観に配慮された配色となっていた。建物の道路に面した窓のベランダには鉢植え等の植物が多く置かれていて、ゴンドラに乗る人や運河沿いを歩く観光客の目を楽しませてくれた。景観条例などの規制もあるだろうが、住民の意識の中にも街の雰囲気大切にしている様子が伺えた。



景観に配慮された店の看板



ベランダに置かれた鉢植え

3. フィレンツェ

3日目を過ごしたフィレンツェは「屋根のない美術館」と呼ばれており、イタリアの多くの美術品が集まっている。街の中心部は歴史地区として世界遺産に指定されており、多くの教会や美術館、聖堂などが集まっている。

アカデミア美術館のダヴィデ像やウフィツィ美術館の「春」、「ヴィーナス誕生」など誰でも一度は見たことがある作品を実際に鑑賞することができた。



アカデミア美術館のダヴィデ像
近くで見ると目がハートの形をしている



ボッティチェリの代表作「春」

ウフィツィ美術館はメディチ家所有の絵画や美術品を集めたことが始まりで1765年から一般公開が始まった。メディチ家が断絶した後もコレクションが残っているのは、アンナ・マリア・ルドヴィガという女性が「メディチ家がこれで収集した美術品をフィレンツェから持ち出さないこと」という条件で美術館を譲渡した経緯があるようだ。彼女のおかげで、今も数多くの美術品がフィレンツェに残っている。

フィレンツェで最も印象に残っているのは、何と言っても、414段もの階段を上った後のドゥオモからの景色。石の狭い螺旋階段は、いくら上っても景色が変わらず、閉塞感があった。頂上が近づくほど、勾配がきつくなったが、頂上から街並みを見ると一気に疲れがなくなった。見渡す限りのレンガ屋根の景色は圧巻だった。(口絵写真6)一般の建物は高さが制限されているため、教会や聖堂の存在感が増し、統一感のある街並みになっていた。

ドゥオモは1296年に建築家カンピオが建築に着手し、ブルネッレスキらが約140年の月日をかけて完成した。屋根の部分は内側と外側にレンガを少しずつ積み上げていく足場のいらない二重構造方式が採用されている。しかし、7年かけて制作された後、誰にも真似されないように設計図を燃やしたので、詳細は今も不明だそうだ。

フィレンツェや翌日訪れたローマでは、バイクや自転車がほとんど隙間なく停められている光景をよく目にした。車を出すときは、前後の車に当たりながら出していることに驚いた。



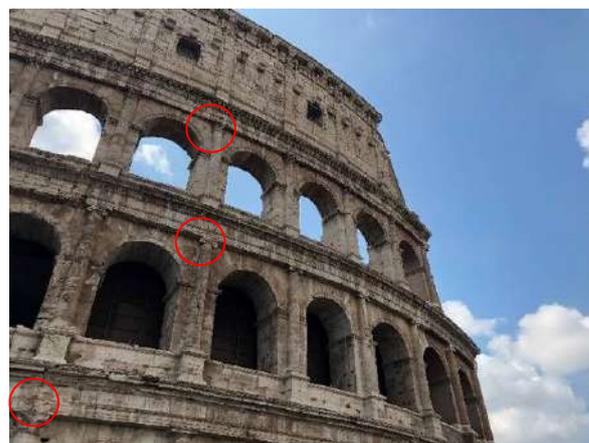
ほとんど隙間なく駐車されている車やバイク

4. ローマ

ローマで最初に訪れたのは、古代ローマの中核として知られるフォロ・ロマーノ。バジリカと呼ばれる裁判所や商業取引に使われた公会堂や凱旋門、神殿などの建物が遺跡として残っている。

紀元80年に完成したコロッセオは格技場として完成した。コロッセオで行われていた催し物はすべての市民が無料で見られたそうだが、その背景には皇帝が市民からの人気を獲得し、社会問題から目をそらさせるためだったという説もある。

コロッセオの柱は階層によってその様式が異なっており、それぞれのアーチの中には一体ずつローマの英雄や神々の像が飾られている。



コロッセオと凱旋門

| | | |
|---|---|---|
|  |  |  |
| <p>【1 段目】 装飾がほとんどなく、上の方に向かって徐々に細くなるドーリア式。</p> | <p>【2 段目】 柱頭に渦巻き模様の彫刻がついたイオニア式。</p> | <p>【3 段目】 柱頭にアンカサスの葉をモチーフにした彫刻のあるコリント式。</p> |

カトリック教会の総本山であり、世界一小さい独立国家としても知られるヴァチカン市国での観光のメインは、ミケランジェロが5年の歳月をかけ一人で完成させた、「最後の審判」の天井画。礼拝堂では撮影も私語も許されていないということで身構えながら入ったが、中は大勢の人のささやき声で意外と賑わっていた。



広場にある最後の審判の解説

大学生の頃に、海外の学生に日本文化を紹介する講義の一環として、高知県の土佐和紙について発表したことがある。その際に、土佐和紙の一種である典具帖紙がサステーナ礼拝堂の「最後の審判」の修復作業に使用されたという話を思い出した。薄くて軽いにも関わらず丈夫な紙質と、本来使用する塩素を使わない製法で経年劣化を防ぐことができるという特性が、イタリアのみならず世界中の美術品の修復に重宝されているようだ。

最後の観光スポットとして訪れたトレヴィの泉では、またローマに来られることを願ってコインを投げた。(口絵写真14)連日、足が棒になるほど歩き回ったイタリア旅

行だったが、振り返ってみるとあっという間の6日間だった。

5. イタリアの街を見て

今回の旅行でイタリアの3つの街を訪ね、印象に残った点がいくつかある。

一つは、歴史的建造物や古くからの建物を活用し機能を加えることで、街並みを保存している様子が見受けられることである。また、世界的にも有名な観光地でありながら、地元住民の生活の場としても確立している。建物の改築に関する法規制などはもちろんあるだろうが、人々の意識の中にも文化や歴史を保存・修復するという思想が浸透しているように感じた。

また、帰国後に調べたところ、歴史的公園の再整備の際には、まちづくりに関するコンペ案を街角に掲示し、市民だけでなく観光客が吟味するなどの手法をとっていることも分かった。より多くの人にまちづくりに関わってもらうことで、市民のみならず観光客にも愛着を持ってもらえるような街になるのではないだろうか。

もう一点は、どの町も車両の出入りが規制されていても、各観光名所を回れるようなコンパクトな街であることである。それぞれの街が小さなコミュニティの集まりで成り立っているような印象を受けた。特に、街の中の教会等を中心として広場が整備され、人々の滞留場所や商業活動の場としての役割を果たしているように感じた。歩いて回れる範囲に様々な機能が集約していることで、人々がコミュニケーションの場がそれぞれの街の様子に馴染んだ形で確保されているのではないかと思った。

6. おわりに

昨年に引き続き2回目の社員旅行への参加であったが、旅行を楽しむことはもちろん、街の様子などから自分が携わる業務に関連することに目が向くようになったと感じる。今後も、日頃の体験からも情報を収集することを心がけていきたい。



芸術を堪能する国イタリア

設計部 橋梁構造課
大和田 菊代 (1998年入社)

1. はじめに

「創立55周年にヨーロッパ旅行に」とは右城社長が5年ほどにわたり私たち社員に語っていたことである。旅費や日程も国内旅行の比ではないのは当然である。本当に決行されるのかと半信半疑であったが、本年になり渡航先アンケートが始まった事をうけ突然現実味が沸いた。

数ある国の中からイタリアを選択したのは、聞きなじみのある観光地が多かったこととメディアで目にする美しい街並みを見たかったからである。

行程はヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ及びヴァチカン市国を一日ずつ訪れるというハードなものだった。

本報告では感動した各地の様子と芸術について少し触れてみようと思う。

2. 水と修復の都ヴェネツィア

まず到着したのが水の都ヴェネツィアである。早速憧れであったオレンジ色のレンガ屋根の街並みを堪能できた。

ヴェネツィアはアドリア海の奥に位置する島々からなる運河都市であり、共和国時代の建造物が数多く残っており至る所で修復が行われている。

車も鉄道も、本土から繋がる3850メートルもの橋長のリベルタ橋のたもと、サンタ・ルチア駅付近までしか走行できず、その先の移動は船か徒歩である。移動手段である船も、波による歴史的建築物の劣化を防ぐため時速5〜7キロ以内という制限がある。そのためか人通りは多いものの早く動くものが無く、街中がゆったりとした雰囲気であった。

石畳の街路も船が行き交う水路も大小様々で、入り組んでは分かれ迷路の様になっており、地図を確認しながら歩いているにも関わらず現在地がわからなくなる。

以前「ベニスに死す」という映画を観たことがあったが、その舞台は砂浜が美しいホテルであった。今回は砂浜を目にしなかったので確認してみると、その舞台は映画祭で有名なリド島という南に位置する大きめの島で、リゾートホテルが立ち並び観光客も比較的少なくゆったり出来る所だという。将来もう一度ヴェネツィアを訪れることができるならリド島に滞在してみたい。

サン・マルコ寺院は聖マルコに捧げられた聖堂であり、外壁にも聖マルコに関するモザイク画が並ぶ。内部は金のモザイクで飾られており薄暗い教会内で静かに光っていた。モザイクのひとつひとつは5ミリメートル四方という小さなサイズであり、補修をするとなると膨大

な日数と手間と根気が必要だそうだ。

共和国時代の総督邸兼政庁であったドゥカーレ宮殿内は美術館として公開されており、大評議会の間の壁一面を使った「天国」は世界最大の油絵である。絵画だけでなく壁や天井の装飾の煌びやかな細工と豪華さに圧倒される。このような日本の芸術ではあまり馴染みのない豪華な作品の連続に、この後の行程も常に驚かされ続けることとなる。



写真 2-1 ドゥカーレ宮殿 大評議会の間 油絵「天国」

3. ルネッサンスの芸術の街フィレンツェ

赤い電車に乗りヴェネツィアからフィレンツェへ。線路沿いには大きな町も無くのどかな風景が続いた。

フィレンツェの中心部は歴史地区として世界遺産登録されており、そこかしこに彫刻や大理石積の建造物が見られ圧巻だった。石畳の町中には馬車が走りすぐ横をすれ違う。芸術の街とはこのような事かと感慨をうけた。

最も有名な彫刻作品の一つであるミケランジェロ作の「ダヴィデ像」は美術学校所有のアカデミア美術館にあった。高さは台座を含めると5.17メートルもあり、広い展示室の端からでもかなりの存在感である。足元まで近づくと真上を見上げる事になる。360度閲覧できるので初めて背中側から見たダヴィデ像を知ることができた。

ウフィッツィ美術館は、フィレンツェの支配者であったメディチ家の美術コレクションを収蔵した美術館であり、誰もが知るような名画の宝庫だ。

入館して早々にボッティチェッリの「春」や「ヴィーナスの誕生」が現れて度肝を抜かれた。両作とも横3メートルほどもある大作であったことを知った。かなり近くで見ることができ、そこにある存在感に私はおそらく今までの人生で一番感動した。

ある程度絵画が好きな人なら一日中鑑賞できる美術品ばかりかと思うが、残念な事に駆け足になってしまった。ピッティ宮殿からこの美術館に繋がるベッキオ橋の上に作られたヴァザリの回廊の中も見たい。

4. 古代帝国が覗く首都ローマ

フィレンツェから電車に乗り首都のローマへ。観光地の色が濃かった先の2都市と比べ、生活の雑踏に溢れている。中型トラックやバイクも多い。そして壁の落書きも多い。歴史を感じる建物だけでなく、少し落ち着いた外観のマンションも立ち並んでいた。



写真 4-1 テルミニ駅周辺の雑踏

そうかと思うと車で数分の距離に、古代ローマ時代の遺跡である闘技場「コロッセオ」や政治や宗教の中心地であった遺跡「フォロ・ロマーノ」が出現する。これは東京でいう明治神宮や皇居のような都会の中に一線を画す存在と同じかもしれない。

写真4-2は発掘された遺跡フォロ・ロマーノであるが、写っている建造物はすべて地中に埋まっていたものである。遺跡は崩れた姿のものが多いが、中にはアンカーのようなもので補強されているものもあった。

コロッセオは無筋コンクリート作りである。地震も起こるこの地で崩れずに残っているのは不思議であるが、円形の構造全体が上手く設計されて強い建造物となっているようだ。コロッセオのように1900年以上前の建築物が現在も健在し、直接触れる事が出来るとは凄いことである。

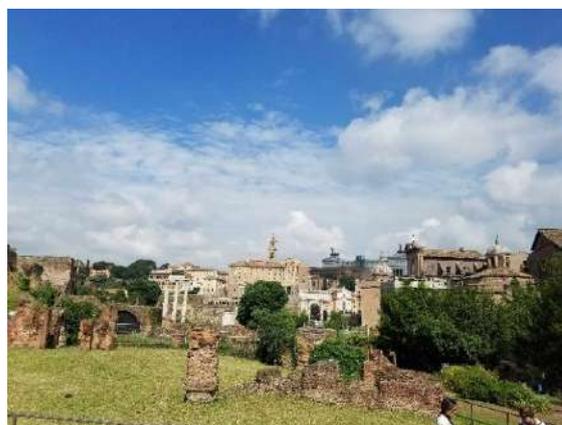


写真 4-2 ローマ帝国の遺跡フォロ・ロマーノ

さて、イタリアでは石畳の道路面が多く見られ、車も走っている。表面が瓦のようにツルツルした正方形の石が敷き詰められているようだが、割れていたり陥没してうねっている箇所もよく見られた。写真4-3の様に清掃車での掃除や敷直しが頻繁に必要なのかもしれない。トンネルの中ではライトが反射して少しまぶしい(写真4-4)。景観と合っており石畳文化ではあるが、少し危険かもしれないと思った。



写真 4-3 フロントでブラシが回転している清掃車、左のほうでは石畳を剥がして工事中



写真 4-4 トンネル内

5. 独立国家ヴァチカン市国

カトリック教会の中心地であるヴァチカン市国に入った。サン・ピエトロ広場とその回廊、それに連なる大聖堂とヴァチカン宮殿、システィーナ礼拝堂、それらすべてが美しく整えられていると感じた。

美術品の量も膨大で天井も壁も全てに装飾が施されており、その情報量の中で溺れてしまう様な錯覚を覚えたほどである。

システィーナ礼拝堂のフレスコ画、天井画の「創世記」と壁画の「最後の審判」はただただ圧巻であった。

ヴァチカン市国周辺にはテヴェレ川が流れ、川に沿って今は博物館のサンタンジェロ城や最高裁判所が並んでいる。その建物へ続く橋はどれもデザインが細かく、高欄には大きな彫刻が配置されていた。設計には彫刻部分も含んでいるのだからとても贅沢な橋である。



写真 5-1 テヴェレ川に架かる橋

6. ミケランジェロという万能人

道中ミケランジェロ・ブオナローティの作品と名前に触れる事が多かった。彼はフィレンツェでのダヴィデ像に始まり、壁画の最後の審判やサン・ピエトロ大聖堂の設計等様々な分野に優れた作品を残しており「万能の人」と呼ばれている。

13歳で弟子入りをしたミケランジェロはすぐに師匠に認められ、20歳代には「ピエタ」や「ダヴィデ像」を生み出し彫刻家としての評価を揺るがないものにしていく。

30歳代に4年かけてシスティーナ礼拝堂の天井画を、晩年の60歳代には同壁画を6年以上費やし作成する。何年もかけ同じ場所に一つのものを描き続ける精神力も凄いが、天井画は足場上がり直接彩色するのだから描く体勢も辛そうである。

建設部門では40歳代にサン・ロレンツォ教会のファサード(建物の正面)の設計を受けたのが最初だと言われているが、設計はしたものの現在も完成していない。メディチ家礼拝堂も完成を見ずにミケランジェロはフィレンツェを去っており、不安定な政治状況に振り回されながら拠点をローマ等に移したようである。そして常に時の有力者から発注があり、沢山の作品を作り続けながら88歳で亡くなっている。

彼の作品で私が最も目を奪われたのは、サン・ピエトロ大聖堂の「ピエタ」である。彫刻に詳しくはないが、とても石とは思えない滑らかな質感や細密な造形はとてつもなく凄いものだと感じ、何より美しい。ミケランジェロは23歳から25歳の2年間ほどでこの作品を生み出したという。



写真 6-1 ミケランジェロ作 「ピエタ」

7. さいごに

ここまで書いてきたが、実際の感動をうまく言葉にすることが出来ず大変歯がゆく思う。

この短期間に芸術界の傑作や古代の遺跡、歴史が詰まった土地や建造物に沢山ふれた。習っただけだった異文化は、直接出会うと考えていたよりも凄かった。どれも凄いので私の脳内は完全に容量超過してしまっている。帰国から1週間過ぎた今もどこか夢うつつな日常を過ごしているが、今回の旅は私の心に大きな影響力を与えたと思う。

世界遺産イタリア

設計部 橋梁構造課
小笠原 明弘 (2017 年入社)

1. はじめに

今回の旅行は私にとって初の海外旅行であった。メインの観光から機内の「Beef or Chicken」などの些細なやりとりまでその全てはもちろん、トラブルまでも楽しんでやろうという気概で空港へと向かった。

2. 初めての国際線

海外旅行が初となる私にとっては、長時間フライトも機内食も初めての経験となった。機内食はおいしいものの食事のタイミングが「体内時計」、「時差」に加え、「景色から判断する時間」、「時計が示す時間」等の情報が入り交じり「いったいこれは何御飯にあたるんだろう？」という、ちょっとした混乱状態で食べることとなった。

最長 11 時間のフライトは私にとっては想像を絶する苦痛となった。出発するまではひたすら眠れば良いと思っていたのだが、いざ飛び立つと困ったことに全く眠れないのである。豊富な映画や音楽にちょっとしたゲームなど様々なコンテンツが機内には用意されていたが、それを楽しんだのは最初の映画一本までであった。起きたまま何時間も座り続けるというのが想像以上に体に堪えるのだ。トイレもかねてストレッチや少し体を動かすために席を外すと数名同じような状況の先客がおり不思議な親近感を覚えた。機内の自分に合った暇の過ごし方については今後十分に検討していく必要があるだろう。



写真 1. はじめての機内食

3. ヴェネツィア

旅のはじめに訪れたのがヴェネツィアだ。到着したのが夜中で部屋につくと長旅の疲れもありその日はすぐに眠りについた。

翌朝水上タクシーでサン・マルコ広場へと向かい、その道中では水の都ならではの海拔ぎりぎりの建物や、船を使った物資運搬の様子を見ることができた。



写真 2. 水上タクシーからの景色

広場へ着くとはじめに大鐘楼へと昇った。大鐘楼からの景色は素晴らしいもので屋根の赤と空の青のコントラストは見事なものであった。イタリアにおける景観規制は 1910 年頃から始まったそうで、現在は材質や広告物の設置場所に至るまで非常に厳しい規制が行われているようだ。



写真 3. 大鐘楼の外観

ヴェネツィアングラスの工房見学では作品制作の実演を見ることができ、職人が二分ほどでユニコーンの置物を作る様子に魅了された。



写真 4. ユニコーン作成

また、周囲の店舗のショーウィンドウには鮮やかなガラス製品が飾られており、いつまでも見ていられそうであった。

次にゴンドラでのクルージングを体験した。ヴェネツィアでは船が主要な交通手段になるので、船の渋滞を体験することもできた。ゴンドラは船頭さんの所有物だそうと同じ会社で予約をしても豪華なゴンドラとそうでない場合があるそうだ。生演奏と生歌のパフォーマンスが有りとても雰囲気のあるものだった(口絵写真4)。

4. フィレンツェ

旅行3日目はフェラーリ特急の名を持つ真紅の列車「イタロ」に乗りフィレンツェへ向かった(口絵写真5)。

フィレンツェに到着して久々に車を見た気がした。前日までのヴェネツィアとは打って変わって多くの車が走っていた。

初めにミケランジェロ広場へと向かったがあいにくの曇り空であまり綺麗な写真が撮れず残念であった。

アカデミア美術館へと向かい多くの彫刻を見た。そこではダヴィデ像をはじめとする様々な彫刻が展示してあった。隣には大理石でなく石膏でできた像が多く展示してある部屋があった。石膏像は彫刻の原型で、その像に穴をあけそれを目印として石を掘っていき作品を造っていたそうだ(口絵写真8)。

昼食をピッツェリアで取り、昼食後はドゥオモ・クーポラへ上った。昼過ぎから天気も回復してドゥオモでの展望は素晴らしいものであった(口絵写真6)。

高所恐怖症の私にとっては上りより下りのほうが恐ろしく感じた。

ドゥオモの次にウフィツィ美術館へと向かった。そこでは「ヴィーナスの誕生」や「受胎告知」など学生時代、倫理の教科書で見た絵画がたくさんありレプリカでない本物を見ることができて興奮した。ただ残念なことに、自分はキリスト教やギリシャ神話への理解が浅いのである。美術館で見た絵画は宗教画や神話の世界が描かれたものが多く、解説を聞いたときにもっと理解が深ければなおのこと楽しめたのではないと思う。

ここにきてようやく気付いたのだが自分は絵画より彫刻のほうが直感的に楽しめるので好きなようだ。

5. ローマ

ローマに到着して初めに気づいたのは落書きの多さである。ヴェネツィアやフィレンツェと比べると段違いに多いように感じた。



写真5. ローマ市街の落書き

コロッセオは今回の旅行で最も楽しみにしていたスポットだ。映画「ジャンパー」を昔見た時からいつか見てみたいと思っていた所である。現在の観光客であふれかえる様子を見ると昔闘技場として多くの人や動物の命が失われたとは到底思えない。西暦70年から80年の10年をかけて作られたそうだが当時の建築技術で今もこうして残っているというところからローマの古代文明の技術力の高さが伺える(口絵写真9)。

ローマの町並みは非常に見通しが良く、それは街の植生に笠松という樹木を使っているからだそうだ。笠松は25m程度に成長するらしく傘を開いたような樹形をしているので、人の視線には幹しかないから見通しが良くなるそうだ。



写真6. 笠松のもたらす視覚的効果

6. ヴァチカン市国

旅の終盤ではヴァチカン市国へも行き、ここではヴァチカン美術館とサン・ピエトロ大聖堂を訪れた。道中見つけた空き缶の山がポイ捨てなのか芸術なのかは分らないが見ごたえがあった。



写真7. 芸術にすら見えるポイ捨て

この美術館はキリスト教に関する宗教画が多く彫刻のほうが気に入った私の目を引いたのは「Sfera con sfera」という黄金の球体の作品だ。ドゥオモの先端にある球体と同じ大きさだそうで、ここからドゥオモの巨大さもうかがえた。



写真 8. Sfera con sferaとドゥオモの先端

サン・ピエトロ大聖堂は美術館と隣接しており、美術館見学を終えると気づけばもう大聖堂の見学に移っていた。

7. イタリア料理

本場のイタリア料理には驚きの連続であった。まず驚いたのはパスタと一緒にパンが出てくることだ。帰国後に調べたところイタリア料理のコース料理では一般的に以下のような順番で提供されるようだ。

- ①食前酒:アペリティーヴォ
- ②前菜:アンティパスト
- ③主菜:プリモ・ピアット
- ④主菜:セコンド・ピアット
- ⑤副菜:コントルノ
- ⑥デザート:ドルチェ
- ⑦コーヒー:カフフェ
- ⑧食後酒:ディジェスティーヴォ

パンはアンティパストにあたり、プリモ・ピアットであるパスタなどができるまでの時間稼ぎの役割があるようだ。しかしコースで出るパンは、日本の食パンのようにフワフワなものでなく、あまり発酵させないのか膨らみが少なくギッシリとした食感であり、単体で食べるよりはソースを付けてみたりした方が食べやすかった。



写真 9. パンとジュース

今回の旅ではパスタを四種類食べた。ソースはもちろんパスタにも様々な種類が有りどれも違ったおいしさがあった。



写真 10. 本場のパスタ

サラダについては正直残念な印象を得てしまった。盛り付けが非常に適当なもの理由の一つではあるが、どうしてもバルサミコ酢の味が受け入れられなかったのである。そして日本のドレッシングの種類の豊富さには感謝しなければならないと感じた。



写真 11. サラダ

デザートはどれもボリューム満点で甘いものは別腹という感覚は世界共通かもしれないと感じた。



写真 12. プリュレ

8. おわりに

今回人生初の海外旅行は非常に刺激的なものとなった。景色、音、香り、味それらの全てが日本で感じるものとは異なり、海外ならではの体験というものがあった。けがも病気もなく全員無事に、また気づいてないだけかもしれないが、誰もスリに合わず無事に帰国できたことは非常に喜ばしいことだ。今後は海外旅行にも臆さず挑戦していきたい。

憧れのイタリアへ

設計部 橋梁調査課
細川 公二 (2013 年入社)

1. はじめに

私にとってはじめての欧州方面への旅となる。ずいぶん昔に旅行好きの友人にイタリアへの旅行に誘われたことがあった。そのときは費用と日程で折り合えず、渡航には至らなかった。諦めていた旅が社の研修旅行として実現できた。とても幸運なことだと思う。

2. ヴェネツィア

研修旅行の初日はヴェネツィアへの移動のみである。9時00分に高知龍馬空港へ集合であった。グアム研修と同様にゆったりした時間設定である。10時15分に高知を出発して、羽田、フランクフルトと予定通り乗り継ぎ、ヴェネツィアに23時に無事に到着した。イタリアと日本との時差は $\Delta 7$ 時間である。飛行機のシートに半日すわるのは大変だったが、機体の揺れは少なく安心して時間を過ごせた。

空港からホテルまでは、専用バスと水上タクシーで1時間ほどであった。腕時計の時差修正をしていなかったもので、割り当てられた部屋で午前1時すぎであることを知った。



ヴェネツィアでのホテル(ボスコロ・ホテル・ベリッニ)

今回の旅行のホテルでの宿泊は4日間で、ヴェネツィアで2日、フィレンツェとローマでそれぞれ1日である。同室していただいたのは村岡副技師長である。翌日の朝食は6時45分と説明を受けた。5時30分に起きるとして、睡眠時間は3時間程度である。明日からの体調が多少心配だったが、無事に初日を終えたことに感謝して眠りについた。

3. ヴェネツィア観光

研修旅行2日目は水の都ヴェネツィア観光である。大小の運河が、古い石つくりの建物の間を迷路のように流

れている。

現地ガイドさんと最初に向かったのはサン・マルコ広場(口絵写真2)だった。世界一美しい広場と言われているようだ。確かに美しいとは感じたが、それ以上に観光客が多いのに驚いた。

広場の中央にそびえ立つ大鐘楼にも、エレベータを使って登ることができた。ヴェネツィアの都が一望できる最高の場所だった。



96mの大鐘楼からの景色

ゴンドラに乗り、小運河をクルーズするメニューも用意されていて(口絵写真4)、運河からの目線でヴェネツィアの都を観光できた。

昼食の時間になり、広場から徒歩で10分ほどのレストランに案内された。イカスミのパスタが濃厚でとてもおいしかった。



本場のイタリアンパスタ

今回の旅行は3食すべて用意されていて、羽田でユーロ換金の際には、お土産とチップのことしか考える必要がなかった。

昼食後は自由行動であった。旅行の日程が決まったとき、私はこの時間を単独行動と決めていた。JTBさんのご厚意で、ヴェネツィア散策MAPが用意されていた。迷うことなく、迷路のような路地を散策して、小さなお土産を2つ購入した。19時にホテルで再集合して、夕食に向かった。夕食は海鮮コースで、冷えたビールとともにおいしくいただいた。



海鮮コースの一皿

4. フィレンツェ観光

研修旅行3日目は花の都フィレンツェ観光である。7時40分にヴェネツィアのホテルを出発し、フェラーリ特急列車「イタロ」(口絵写真5)でフィレンツェへ移動した。車窓には広々とした牧草地がどこまでも続き、ときよりぶどう畑が点在する牧歌的な景色を眺めながら2時間ほどでフィレンツェに到着した。

フィレンツェ観光では、彫刻と絵画を楽しむスケジュールになっていた。彫刻では、ダヴィデ像(口絵写真8)が生きているように感じられ、絵画はヴィーナスの誕生(口絵写真7)や、受胎告知が手で触れるほどの近くで見ることができた。

サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂では、聖堂の塔頂部へ通ずる階段464段を額に汗を流しながら踏破し、大きな鐘楼のある展望所から歴史を感じさせるフィレンツェの都(口絵写真6)を一望できた。3日目に予定されていた名所を廻り終わり、夕食はホテル近くのレストランでTボーンステーキを赤ワインと一緒にいただいた。ほどほどの脂身で私にはちょうどよかった。



赤身がおいしいTボーンステーキ

5. ローマ観光

研修旅行4日目は永遠の都ローマ観光である。フィレンツェのホテルを出発し、前日と同じく列車を使い、1時間半ほどの移動でローマに到着した。

今回の研修旅行は、イタリア、フランス、ドイツの3コースから選択できた。私がイタリアを選んだのは、こ

のローマ観光がとても魅力的に思えたからだ。バスと徒歩で、コロッセオ(口絵写真9)や真実の口(口絵写真11)など、映画や本でしか見ることのできなかった名所を見ることができた。

最後に案内されたのは、ヴァチカン市内にあるシステリーナ礼拝堂である。壁に描かれた、ミケランジェロ作のフレスコ画「最後の審判」を見たときの感動は忘れられない。横にいたJTBの瀧本さんは、「彼はこの大作を4年半かけてひとりで描いたんですよ」とつぶやくような口調で私に教えてくれた。

4日目に予定されていた名所を廻り終わり、宿泊するホテルにチェックインしたあと、夕食をとるためにふたたびバスに乗り込んだ。30分ほどかけてレストランに到着した。店内に入ると美しいピアノ演奏が迎えてくれた。食事はオペラの歌声を楽しみながらの演出で、イタリア最後の夜にふさわしい時間を過ごすことができた。



すばらしい歌声♪

6. ローマ観光・帰国

最終日はもっとも有名なローマ観光地を2時間ほど楽しむことができた。スペイン広場(口絵写真13)とトレヴィの泉(口絵写真14)である。ガイドさんの説明ではトレヴィの泉にコインを1回投げると、再びローマを訪れることができるとのことだった。

このローマの名所を最後にすべての観光スケジュールが終了となり、帰国のためバスでローマ空港へと移動した。12時10分にローマを出発して、ミュンヘン、羽田と機内泊と乗り継ぎを経て、翌日の15時に高知龍馬空港に到着し、今回の研修旅行が無事終了した。

7. おわりに

今回はイタリアでの海外研修という貴重な経験をさせていただいた。イタリアの美しい景色と、すばらしい芸術に出会えた最高の旅だった。

Ciao ! イタリア

設計部道路交通課 係長
齋藤 啓太 (2004年入社)

1. はじめに

今回のイタリア旅行が、ハワイ、グアムに続く3度目の海外旅行である。

イタリアへの旅立ちが日に日に近づくにつれ、期待のあまり胃痛がした。まるで遠足前日の小学生になった気分である。

過去の海外旅行での反省を踏まえて、大きなスーツケースを準備した。中には衣類と溢れんばかりの期待を詰め込んだ。

2. 1日目 ~いざイタリアへ~

高知龍馬空港から羽田、フランクフルトを經由してヴェネツィアへと向かった。

羽田からフランクフルトまでは、シベリア上空を通過した。眼下には白銀の世界が広がっていた。

フランクフルト近郊になると、民家、農地、道路が見えた。上空から同じような様式の民家が並ぶ風景を眺めると、おもちゃのようであった。高速道路のインターチェンジを上空から一望すると、やはり美しいものである。

現地時間の深夜1時にヴェネツィアのホテルに到着した。イタリアに着いたばかりだが、帰路のことを考えると気が重かった。

夕食は機内食を食べていたが空腹であった。チェックイン後、数人でホテル近くの飲食店に行った。ここでは、片言の英語でビールとピザを注文した。本場イタリアのピザを食べ、翌日からのイタリア観光に備えた。



写真 2-1 白銀の世界シベリア



写真 2-2 美しい形状のインターチェンジ



写真 2-3 ピザとビールと仲間と

3. 2日目 ~水の都ヴェネツィア~

時差ぼけのためか予定より早く目覚めたため、早朝のヴェネツィアを散歩した。6時頃であり、通行人はまばらであったが、船の往来はすでに始まっていた。

ヴェネツィアの通行手段は、徒歩と船だけである。車や自転車は利用が禁止されており、船が最も身近な乗り物である。救急車の代わりに救急船がある。



写真 3-1 早朝のヴェネツィア

大鐘楼の展望デッキからは、ヴェネツィアの街並みが一望できた。海・川・街そして綺麗な青空の眺望は、一見の価値がある(口絵写真1)。

ドゥカーレ宮殿の天井にある油絵のいくつかはオリジナルのものではない。ガイドさんによると、過去にフランス人に盗まれたようである。イタリアとフランスは美術品等について、盗った盗られたの関係があり、仲が悪いそうである。2006年のサッカーW杯決勝戦はイタリア対フランスであった。激闘の末、イタリアが優勝した時は、いつにもまして国中が盛り上がったそうである。

ゴンドラクルーズは生演奏つきであった。目の前で数曲を歌っていただき、疲れた体に活力がみなぎった。歌い手、演奏者ともに、イタリアの伊達男という雰囲気であった。年を重ねる度に男性としての魅力が増していくように感じた。私もこのようになれるだろうか…。

昼食後は自由行動であった。水上タクシーのフリーパスがあったが、散策もかねて、徒歩でホテルまで帰ることにした。地元の方が利用されるスーパーで、チョコやパスタ等のお土産を購入した。なかでもパスタ等の乾麺類は格安であり、500gで約70円と日本の1/4程度の価格であった。この程度の金額でないと、主食として成り立たないのであろう。

散策中、工事現場を見かけた。工事車両も通行禁止であるため、人力によるものであった。石畳を外してから作業となるため、時間を要しそうである。日本と比べると、随分軽装であった。



写真 3-2 ドゥカーレ宮殿の天井



写真 3-3 伊達男と共にゴンドラクルーズ



写真 3-4 国内最大のスーパーマーケットチェーン COOP



写真 3-5 オレンジが映える工事現場

4. 3日目 ～花の都フィレンツェ～

フィレンツェは町全体がユネスコ世界遺産に登録されている。

アカデミア美術館の代表作といえば、ダヴィデ像である。等身大程度の大きさかと思っていたが、実物は5m以上あった。百聞は一見にしかずである。1500年代に制作されたもので、男性の肉体美が見て感じ取れた。活発に運動していた頃の私を彷彿させる。これから夏に向けて、もう一度このような肉体美を取り戻そうか…。



写真 4-1 意外と大きいダヴィデ像

ドゥオモは高さ92mで464段の階段を登って展望デッキへ行く。登るにつれて勾配がきつくなり、運動不足の私にとっては非常に酷であった。しかし、展望デッキでの眺望と時折吹く心地よい風を体を受けると、登った甲斐がある。

ドゥオモの横には、高さ82mのジョットの鐘楼がある。これは1387年に完成している。見学中は真横に高所作業車が停まっていた。維持点検のためであろうか。年齢差が60歳以上はある建築物と車両のツーショットは、なんだか不思議なマッチングである。

ウフィツィ美術館の代表作といえば、ヴィーナスの誕生や春である。学校の教科書でよく拝見した。これらの絵画は非常に緻密に描かれていた。また、一枚の絵の中に多くの意味をもって描かれているとのことであり、意味を理解したうえで絵を見ると、一段とこの絵のすばらしさを実感する(口絵写真7)。

美術館の見学後は少しの自由時間があつた。この時間は妻に頼まれていたIL BISONTE(イルビゾンテ)の革財布を買いに走った。帰国日の5月12日は結婚10周年にあたるため、妻への良いプレゼントが買えて安堵した。店舗には日本人スタッフもいることから安心である。



写真 4-2 ドゥオモの展望デッキにて



写真 4-3 ドゥオモと高所作業車



写真 4-4 店内に革の匂いがするイルビゾンテ

5. 4日目 ～永遠の都ローマ～

ローマに入って、まず感じたことは意外にも汚いことである。道路にはゴミが散乱しており、建物の壁には落書きが多い。私には落書きに見えても、ローマの人からするとアートなのであろうか。

ヨーロッパ諸国は無電柱化率が100%に近く、このローマでも電柱を見かけることはなかった。古き良き建造物が多いため、景観保全を重視しているようである。驚いたことに、電柱の代替として、路面電車の架線は近隣の建物に直接固定されていた。景観に配慮してか、車道や歩道は石畳が多く用いられていた。確かに美しいが、その反面、車椅子利用者等の身体障害者にとっては、支障が大きいと感じた。

コロッセオの見学は、人気スポットであるため、入場するのに1時間以上を要した。コロッセオは西暦80年に完成している。日本ではヤマトタケルが活躍していた時代である。あまりにも古い時代であるため、現実味がない。タイムスリップに陥ったようになる。これほどの規模の建築物を造った古代ローマ人の技術力はすごい一言である。1900年以上前の建造物が、このように現存していることに驚いた。所々で見受けられた維持補修工事のおかげであらう。

世界最小の国家であるヴァチカン市国には、カトリックの総本山であるサン・ピエトロ大聖堂がある。聖堂内は豪華絢爛であるが、どこか落ち着く雰囲気もあった。この柱の形状や天井の高さ、太陽光の差し込みなど調和のとれた構造となっているためであろうか。今回の旅行でいくつかの聖堂を見て回ったが、サン・ピエトロ大聖堂が一番神秘的であった。

夕食後、数人でホテル近くの飲食店に行った。ここでは念願であったカルボナーラを食べることができた。今夜がイタリア最後の夜かと思うと寂しくなった。



写真 5-1 路面電車の架線状況



写真 5-2 圧巻のコロッセオ



写真 5-3 神秘的なサン・ピエトロ大聖堂



写真 5-4 イタリア最後の晚餐

6. 5、6日目～ふるさと高知へ～

昨日に引き続きローマ観光をした後、日本 高知への帰路となる。

トレヴィの泉は、コインを噴水の中に投げると願いが叶うという伝説は有名である。願いの内容は3つあり、その願いに応じて、投げるコインの枚数が異なる。私は、ローマに再び来ることができるという願いを込めて、コイン1枚を投げた。慣れない投げ方で、泉を越えるくらい力一杯投げたため、首、肩、背中を痛めた。やり過ぎはよくないと痛感した。

トレヴィの泉の近くにはジェラート店があった。イタリアのジェラートは美味しいと聞いていたため、最後に食べることができた。確かに美味しい。早い・安い・美味しいと三拍子揃った店であった(口絵写真15)。

ローマからミュンヘン、羽田を経由して高知龍馬空港へ帰った。往路と同程度の所要時間であったが、機内ではイタリアでの思い出を夢見ながら熟睡していた。参加者全員がスリの被害に遭わなかったことは幸いである。



写真 6-1 トレヴィの泉を背に山本親睦会長と

7. おわりに

イタリアに到着した時は、その所要時間から金輪際行くことはないと思っていたが、旅行を終えてみるともう一度行きたいと思わせてくれる国であった。

イタリア語で一つだけ確実に覚えた単語がある。おはよう・こんにちは・さようならを意味する「Ciao(チャオ)」である。いつかまたこのイタリアで「Ciao!」と言える日が来ることを夢見る。

また明日から高知 日本のインフラ整備のために尽力しよう。

物語の始まりはいつも天気がよくない

設計部 道路交通課
小松 由和 (2010年入社)

1. はじめに

ヨーロッパ地方で、いちばん行ってみたかった国がイタリアでした。国土がブーツの形をしていることもあって、小さい頃に位置と名前を真っ先に覚えた国のひとつです。

今回の旅行ではヴェネツィアとフィレンツェ、そしてローマを観光しますが、ガイドブックが配られてからというもの、どこに行こう、なにを買おうと楽しみでたまりませんでした。

旅行の準備はけっこう大変で、晴天で暑いときはTシャツでいいかなとか、急に雨が降りだしたとき用の折りたたみ傘もいるかなとか、必要そうなもののチョイスにてんやわんや。あれこれ悩んで、いつもより一回り大きいスーツケースになんとか詰め込みました。足元にもお洒落をと、靴も新調。もちろん、防水スプレーをしっかりかけました。

さて、明日から4泊6日の旅に出ます。現地の週間天気予報は曇りや雨のマークばかり。せっかくだから、晴れてほしいです。

2. 1日目

朝9時、高知龍馬空港に集合。不安定な天候でしたが、羽田空港に向かう飛行機は無事、離陸しました。イタリアへは羽田からフランクフルトを経由し、そこからヴェネツィアへ向かいます。片道せいぜい4時間程度のフライトは経験済みですが、12時間近くも空にいるなんて、想像もつきません。

途中で、機内食が2回、配られました。そんなに期待はしていなかったけど、まずまずの味でした。

フランクフルトで飛行機を乗り換え、ヴェネツィアのホテルに到着したのは日付が変わる頃。部屋で荷物の整理をしたあと、近所にある、これぞBAR！って感じのお店に行きました。ピザは、もちもちした生地に熱々のチーズがたっぷりトッピングされており、ビールとの相性もバッチリ。大移動の疲れを吹き飛ばすおいしさでした。

明日は待ちに待ったヴェネツィア観光。とりあえず早く寝よう、おやすみ。

3. 2日目

朝6時のモーニングコールで起床し、朝ご飯を食べ、ヴェネツィア観光にいざ出発。天気予報は見事にはずれ、気持ちよく晴れました。まずは水上タクシーに乗ってサン・マルコ広場に向かいます。島への車の乗り入れは禁止されているため移動の基本は水上交通(バス・タク

シー)。せわしなくボートが行き交う様子がとても新鮮でした。



写真 3-1 運河を行き交うボート(一家に一隻)

到着後はすぐに、大鐘楼の最上階へ。眼下には太陽に照らされたヴェネツィアの町並みと、青い空と青い海。たしかに絵はがきになる風景だな、と感じました。

大鐘楼を下り、斜向かいにあるサン・マルコ寺院とドゥカーレ宮で歴史ある絵画や彫刻の数々を観覧しました。その後、ヴェネツィア名物のゴンドラクルーズへ。幸運なことに、私たちが乗ったゴンドラにはゴンドラセレナーデという歌手と奏者が乗り込み、美声とギター演奏を間近で聞くことができました。ゆらゆら揺られながら、のんびりと町を一周。みんなに見られて少し恥ずかしかったです。

昼食後は待ちに待った自由行動。私たちはヴェネツィアングラスの工房が集まるムラーノ島へ。水上バスを利用し、30分ほどで到着しました。時間が限られていたため美術館への入館はあきらめ、お土産を探して町をぶらぶら。2時間ちょっとの滞在でしたが、とても有意義に過ごせました。



写真 3-2 ムラーノ島の町並み(けっこうカラフル)

夕食はホテルのすぐ近くにある海鮮レストランへ。サラダやパスタ、海鮮フライをおいしくいただきました。歩きまわってとても疲れたので、今日は早く寝ることにします。

4. 3日目

昨日とおなじ時間に起床。今日でヴェネツィアともお別れです。朝ご飯を食べて、荷物の整理をして、忘れ物がないか確認して、ホテルをあとに。すぐ近くにあるサ

ンタ・ルチア駅から列車でフィレンツェを目指します。

約2時間でサンタ・マリア・ノヴェッラ駅に到着。さっそく、世界一の眺望と呼ばれるミケランジェロ広場に向かいます。そこまでは観光バスで移動しましたが、ギリギリを縫うようにして走行する自動車がたくさんで、さすがに自分では運転したくないな、と感じている間に広場が見えてきました。天気はあまりよくなかったけれど、フィレンツェの町が一望でき、とても気持ちよかったです。フィレンツェでは主に美術館を巡り、ミケランジェロやダ・ヴィンチの作品を多数見学しました。ダヴィデ像は思っていたよりも大きかったです(口絵写真8)。

サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂では464段もの階段を若さで登り切り、フィレンツェの町並みを360°の一大パノラマで目にすることができました。

夜は前々から楽しみにしていたT ボーンステーキ。イタリアに来てから、ほぼ海の幸と野菜しか食べていなかったのが、久しぶりに食べる肉の味に、これでもかというほど感動しました。

5. 4日目

今日も列車移動から始まります。フィレンツェからローマまで約1時間30分。列車が時刻表どおりに運行されることは珍しいらしく、やはり少し遅れて終点のテルミニ駅に到着しました。まずは、あの有名な闘技場であるコロッセオに向かいます。約2000年近くも前にこのスケールの建造物を設計・施工するなんて、人間やればできるんだななんて感心しました。コロッセオ周辺は公園のように整備をされていて、現在でも遺跡の発掘が行われているようです(口絵写真9)。

そしてついに「ローマの休日」で一躍有名になった真実の口を見学しました。高知でいうところのはりまや橋みたいな感じでした。

続いて、世界最小の独立国家であるヴァチカン市国を訪れました。予定があればローマ法王を拝見できるらしいのですが、今日は別件のため不在ということでした。

ヴァチカン市国はスイスの衛兵が警備にあたっているそうで、偶然にも交代式を見学することができました。



写真 5-1 ヴァチカン市国のスイス衛兵(イケメン)

そろそろお土産をと、ローマ三越を訪問。もちろんブランド品には目もくれず、チョコレート等のお菓子を買いしました。

夜ご飯はこの旅行で最も豪華なメニューでした。ピアノの軽快な音色とメリハリのきいた歌声を聞きながら、最高の時間を過ごせました。

6. 5日目

イタリア観光も今日で終わり。最後に向かったのはスペイン広場とトレヴィの泉です(口絵写真14)。朝早くということもあって少し肌寒く、行き交う人がまばらのローマ市内を歩くのはなんだか変な感じでした。泉は思っていたよりも大きくて、背中越しにコインを投げてもほぼ間違いなく投入できるという、ビギナー向けの名所でした。あっ、イタリアと言えばジェラートが有名だそうで、この泉のすぐ隣にもお店がありました。私は食べませんでした。旅行から帰ってきてからジェラートの味の感想を聞くと、やはり食べておくべきだったと後悔しています。とりあえず食べてみるって大事だな。でもまあ、泉にはコインを投げ込んだことだし、また戻ってこられるかも?なんて。

少しずつ小さくなっていく市街地を眺めながら、バスは空港に向かいます。帰りはローマからミュンヘンに空路で移動し、そこから羽田へ。

7. 6日目

余ったユーロを使い切るため、ミュンヘン空港でいくつかお土産を買った。最後の5ユーロ紙幣を手渡したとき、この旅行が終わりに近づいていることを強く実感しました。

離陸してから約12時間後、羽田空港に到着。久しぶりの日本食は、羽田空港で食べたエビの天ぷらそば。琥珀色をした、出汁がよくきいたおツユの味が体中に染みわたります。イタリアの料理もおいしかったけど、食べ慣れた日本食がやっぱりいちばん体に合っている気がします。

飛行機を乗り継ぎ、15時頃に高知に到着。

8. おわりに

あれから一週間。ときどき旅行のことを思い出します。真夜中に食べたピザの味、ヴェネツィアの強烈な日差し、サン・マルコ広場で聞いた鐘の音、フィレンツェの町並み、歩きにくい石畳と雨上がりのローマの匂い。お金を払えばまた行けるけど、あの日のあの場所で、あのグループだったからこそ思い出です。ぎゅっと詰まったイタリアでの4日間、長いようで短くて、短いようで長かった4日間。とても楽しかった。

歴史と文化の国イタリア

設計部 道路交通課
十河 智麻 (2018 年入社)

1. はじめに

旅行の主目的は観光であり、特に美術作品鑑賞と、現在と遺跡群との歴史景観の調和に主眼を置きました。

本レポートでは、これら観光の感想を主体に報告します。

2. ヴェネツィア

ヴェネツィアは「水の都」と呼ばれるとおり、四方を海で囲われており、街には運河が流れています。車はあまり無く、人々の移動手段は水上バスや水上タクシー。個人で船を所有している人も多くいました。

朝は運河が通勤ラッシュ状態。物資を運ぶ船や仕事に向かう人々を乗せた水上バスが多く行き交っていました。

お昼頃、ゴンドラに乗ってヴィン川を周遊した際に家々と川の距離が近くて驚きました。また、建っている家並みが古くから存在している様子がよく分かり、ヴェネツィアの人々にとって街を流れる川は古くから生活に欠かせないものだと実感する事ができました(口絵写真 1)。

3. フィレンツェ

水の都から移動し、次は「花の都」、フィレンツェへ。

ヴェネツィアとは打って変わり、車の通りも多く建物がひしめき合うように並んでいました。

街には高級ブランドの路面店や、スイーツのお店も多く、目を奪われました。時々現れる修道院や教会、礼拝堂には、新しい建物と古くからある建物の融合を見ることが出来ました。



写真 3-1 サン・ジョヴァンニ礼拝堂(手前)と
サンタ・マリア・デルフィオーレ大聖堂(奥)

4. ローマ、ヴァチカン市国

イタリア旅行の最後に訪れた都市は「永遠の都」ローマと、世界最小の国家ヴァチカン市国です。

ローマは石畳の道が多くあり、車の通行量も今まで過ぎた都市の中で一番多く感じました。

信号機は日本と違い縦型で、日本ではあまり見ないラウンドアバウトの標識を結構な頻度で見かけました。この形態の交差点は古代ローマ時代から作られており、当時の馬車を使った移動手段が関係していると言われています。

街にコロッセオや古代遺跡が溶け込んでいるのが日本には無い風景で感動しました。

ヴァチカン市国は国家全体が世界遺産として登録されています。小さな国の中にサン・ピエトロ大聖堂や、システィーナ礼拝堂、ヴァチカン美術館など世界的に有名な建築物がありました。

5. アカデミア美術館(フィレンツェ)

今回のイタリア旅行で特に楽しみにしていたのが各都市での美術鑑賞です。

フィレンツェのアカデミア美術館はフィレンツェ美術学校の美術館で建物の大きさもそれほど大きくなく、絵画より彫刻作品が多い印象でした。

この美術館に展示されている作品で代表的なのがミケランジェロ作のダヴィデ像です。

像はすべてが大理石で出来ており、展示スペースの上にある天井窓から差し込む光がダヴィデ像の美しさを際立たせていました(口絵写真 8)。

ミケランジェロはダヴィデ像を制作する際、人間の持つ筋肉美を表現するために細部までこだわってこの作品を作っています。手の甲に浮き出た血管や、腹筋、ふくらはぎの筋肉など今にも動き出しそうなくらいリアルでした。

作品が完成した 1504 年にヴェッキオ宮殿の前に飾られ人々から親しまれていましたが、天候や歳月による損傷を防ぐために 1873 年に現在の場所に移設されたそうです。

6. ウフィツィ美術館(フィレンツェ)

フィレンツェで 2 つめに入ったウフィツィ美術館は近代的な美術館としてはヨーロッパ最古の 1 つとされています。展示物は 2500 点にのぼり、収蔵品の質・量ともにイタリア国内最大です。

広い館内にあったたくさんの美術品の中から印象に残った作品を挙げていきます。

第 2 室にある「オンニッサンティの聖母」。こちらは 1310 年頃、ジョットによって制作された作品です。

この作品は木の板にテンペラという卵の殻に絵の具を混ぜたもので描かれており、本物の金を使い絵画の存在感を際立たせていました。

中央のマリアとイエスが座る玉座が三次元的に描かれ

ていて、平面の絵なのに立体感を感じることが出来て感動しました。



写真 6-1 ジオット作「オンニッサンティの聖母」

第8室にある「聖母子と二天使」。こちらは1465年頃フィリッポ・リッピによって制作された作品です。

聖母子と天使のモチーフはこれまで数多くの芸術家達が描いていますが、リッピの描く聖母は特に気品が高く感じました。

マリアの髪飾りには真珠を描いており、神の子として生まれたイエスに手を合わせています。そして、天使によって抱えられているイエスは、これから自分の身に起こる未来に視線を向けつつ、自分を生んでくれた母マリアを気遣うように肩に手を添えています。

リッピが制作したこの聖なる群像は、リッピの弟子として制作協力したボッティチェリにも大きな影響を与える事となったとされています。



写真 6-2 フィリッポ・リッピ作「聖母子と二天使」

10-14室にはボッティチェリの作品が展示されており、美術の教科書でも見たことのある「春」を見ることが出

来ました。「春」は1482年頃の作品です。

作品中央にいる女性はヴィーナスで、描かれているのは彼女と庭園の様子です。木には果物が実り、様々な花が咲いている様子からも季節が春、という認識が出来ます。

彼の横にいるシースルーの衣装をまとっている3人の女性は古代から伝わる三美神の姿で、自由を象徴しています。

右端にいる肌が青白い男性は風の精ゼヒュロスです。彼が手を伸ばしている妖精クロリスは後にゼヒュロスと結婚し、彼から花を芽生えさせる能力を与えられます。彼女の口からは花の蔓が伸び、彼女が触れている女性の服は美しい花柄になっています。

クロリスの横にいる花柄の衣装をまとって微笑んでいる女性はクロリスが変容した古代ローマの春の女神フローラであると言われています。

この作品には200種近くの植物が描かれていて、すべて実在するものを作者が写生して描いています。その多くはフィレンツェ郊外の丘で春に花を咲かせるものだそうです。

細部にまで作品のタイトルを意味するものが散りばめられていて、もっと時間をかけて見ていたい作品の一つでした。



写真 6-3 ボッティチェリ作「春」

7. システィーナ礼拝堂(ヴァチカン市国)

システィーナ礼拝堂はヴァチカン宮殿にある礼拝堂で、サン・ピエトロ大聖堂の北隣に位置しています。

ローマ教皇を選出するコンクラーベが行われる場所として有名ですが、内装にミケランジェロ、ボッティチェリ、ペルジーノ、ピントゥリッキオなど盛期ルネサンスを代表する芸術家たちが数々の装飾絵画作品を手がけていることでも世界的に名前が知られている礼拝堂です。

中でも特に有名なのが、ミケランジェロが手がけた天井画と、入り口上の壁に描かれた「最後の審判」です。

礼拝堂の中は写真・ビデオの撮影、私語が禁止されていたので限られた時間でしっかり目に焼き付けていこうと鑑賞に臨みました。

中に入ると、ありきたりな言葉になりますが、圧倒されました。

天井には、旧約聖書に記された「創世記」の9つのエピソード

ソードが描かれています。

この物語はさらに3つに大きく分けることができ、「神による天地創造の物語」「神による最初の人類の創造と神に背いたアダムとイヴが楽園から追放される失楽園の物語」「大洪水とノア一族の物語」の様子が見ることが出来ません。

自分の中で印象的だったのは、大洪水とノア一族の場面です。人類の数が増えすぎて争いが絶えなくなった世界を見かね、ノア一族と動物の雌雄のつがいを箱舟に乗せ神が新たに作った世界に運んだ後、残った他の人類を洪水によって全て洗い流した描写に神の恐ろしさを感じました。

天井画を見て何とも言えない気持ちになった後に、壁に描かれている「最後の審判」を見ていると複雑な気持ちになりました。

人々が死んだ後、天国に召されるか地獄へ墮とされるか審判している中央の人物はキリストなのですが、今まで見てきた絵画の中のキリストは痩せていて細身なのに対し、ミケランジェロが描いたキリストは筋肉がついており、体つきががっしりしています。

このようなタッチになったのは当時ミケランジェロが男性の身体を描く事にこだわっていた為で、「最後の審判」の中にも男性が多く描かれています。描かれた聖人のほとんどが裸だった為、完成時には大きな波紋を呼びました。

ミケランジェロの死後、他の画家によって裸体を隠すためにいくつかの衣装が書き込まれていましたが、1981年～1994年に行われた修復作業の際、一部を除き元の姿に復元されました。この修復作業には日本人も参加しています。

ミケランジェロが手がけた物をこの目で見る事が出来た事、日本も関わりがあった事実を嬉しく思いました。

8. 考察

今回旅行した歴史的景観に優れた建物には、建築後相当期間が経過しているもの、アパートなどとして現在も生活の為に利用されているものもあり、それが文化、景観を形作る基礎となり、その地域に住む住民の町並みを活かしていく意識醸造に繋がっているのではないかと考えられました。

9. おわりに

訪れた都市は世界遺産や古代遺跡が現在の街にも溶け込んでおり、過去から現在まで芸術を大切にしてきた様子を見ることが出来ました。

不安な気持ちもありながら出発した今回の社員旅行でしたが、景色や建物は素晴らしく、料理もとても美味しかったので過ごした日々は充実して楽しい事ばかりでした。

最終日にトレヴィの泉でのコイン投げに成功したので、またいつか必ず訪れようと思います。

初めてづくしの海外旅行

設計部 道路交通課
澤田 亜由美 (2018年入社)

1. はじめに

旅行の一番の目的は観光でした。私は海外旅行の経験がなく、歴史的建造物や美術館を巡ることで文化の違い等を感じることを楽しみにしていました。

本レポートでは、この観光地を巡り、触れた文化への感想と、その過程で気づいた日本との交通事情の違いについて述べていきます。

2. ヴェネツィア

観光1日目は水の都と呼ばれるヴェネツィアでした。その名の通り水に囲まれた街でホテルに向かう時にも水上タクシーでした。その街並はとても美しく、初めて見る光景に始終圧倒されました。全ての建物は高く大きく、色は主に白や薄茶色で統一されたような感じです。街というより、テーマパークに来ているような感覚で、ここで生活している人々の暮らしが見えにくいくらい私にとっては非日常的な空間に感じました。



初めての海外の街並

名所にも数カ所回り、特に印象的だったのは大鐘楼です。エレベータで昇ったのですがドアが開いた瞬間の感動は忘れられません。そこにはヴェネツィアの街並が一望できる景色が広がっていました。屋根の色はレンガで統一され、運河も見えました。高い場所でよく風が通ってとても気持ちよかったです(口絵写真1)。

ドゥカレ宮では外観ももちろんですが中に入ったときの天井画の迫力に驚きました。天井一面に絵が描かれ、まるで宝石箱の中にいるようでした(口絵写真3)。

ヴェネツィアで一番楽しく印象に残っているのはゴンドラクルーズです。かつては市場からそれぞれの館へ品物を運ぶ手段だったというゴンドラですが、現在は移動手段ではなく、旅行客が船上からの眺めを楽しむアトラクションの一種となっているそうです。黒いボディのゴンドラに6人で乗り込んでクルージング開始。乗り込む

際、ゴンドラを漕いでくれる男性に「バランスが大事だから座っている場所から動かないでね」と英語で言われました。座っている位置が少しでもずれるとバランスが乱れ、操縦しにくいようです。



ゴンドラからの景色

ゴンドラに乗り込むと水との距離が思ったより近く驚きました。ヴェネツィアの街中をゆったりとしたスピードで建物の間をすり抜けるというような感じで進んで行きました。途中、前後のゴンドラと一緒に歌を歌ってくれたりしてとても楽しく、とても贅沢な時間でした。イタリア旅行の中で一番の思い出です。移動や運搬手段が全て船やボートなのでとても多くの数が停泊していて、その光景も圧巻でした。



街中を走る沢山のボート

3. フィレンツェ

観光2日目は、シנקの列車「イタロ」で約2時間かけてフィレンツェに向かいました。フィレンツェに到着して一番始めに感じたことは車が多いことです。それと同時にヴェネツィアには車が一切いなかったことによりやく気づきました。車やバイクは禁止されているようです。車がいるかないかで街の印象がだいぶ違って見えます。



ヴェネツィアにはいない大型バス

アカデミア美術館では、かの有名な「ダヴィデ像」を見ることができました。想像していたものよりも大きく、高さは台座を含めると5m以上あるそうです。作ったのは彫刻家で画家のミケランジェロ・ブオナローティ。1504年に29歳という若さで作品を完成させたそうです。まるで石とは思えないくらいで、特に感動したのは筋肉、血管などの細部まで表現されているところです。また、像をグルッと一周して見られたのも感動しました。石なのに人間の体の柔らかさかみも感じられる、その技術に驚きました。現地のガイドさんに教えて頂いたのですが、ダヴィデ像の瞳はハートに掘られているそうです。しかし私には少し違和感がありました。勇ましい姿、表情をしているのになぜ瞳がハートマークなのか。気になったので調べてみると、この当時はまだハートが愛を表すマークとしては使われておらず、それは戦いに向かう、みなぎる闘志を表現するために瞳に差し込む光を彫り込んだものだそうです。瞳の中にまで感情や情景を表していることに驚き、とても感動しました。



ダヴィデ像のハートの瞳

この日の夕食はTポーンステーキでした。イタリアで食べた料理の中で一番インパクトがあっておいしかったです。お肉の味がしっかりしていて感動しました。ナイフとフォークで切り分けて食べたのですが、日本ではなかなか食べることができないのではないのでしょうか。



大きく食べ応えがあったTボーンステーキ



色合いが美しい教会の床

4. ローマ

観光3日目は、フレッチャアルジェントという列車に乗り、約1時間半かけてローマへ。コロッセオを見学に行きましたが大迫力でした。今から約2000年前に造られたなんて驚きです。しかしここでは年間数千人もの剣闘士が命を落としていたとのこと。当時のローマ市民にとって一番の娯楽はコロッセオでの刺激的な見世物、つまりそこで起こる流血や死だったそうです。その事実を知り衝撃を受け、ただその建造物を目で見るだけではなくその歴史とともに学ばなくてはいけないと感じました(口絵写真9)。

サンタ・マリア・イン・コスメディアン教会にある真実の口。これは元々、マンホールだったと現地のガイドさんがおっしゃっていて驚きでした(口絵写真11)。

教会の中に入ると大きな絵画とともに奉られていた骸骨があり驚きました。この方は日本でもおなじみの「バレンタイン」さんだそうです。しかしそれと同じくらい驚いたのは床の美しさです。これは大理石のモザイクで造られており、様々な形や色、配置が繊細で、とても美しかったです。しかも凹凸などもなく、滑らかで歩きやすかったです。この教会に限らず、他に見学した教会の床もこのようなモザイクの大理石で施されているのが多く、私は天井などよりも床を見ているのが楽しかったです。



バレンタインの骸骨

帰国日の午前中にはトレヴィの泉にも行きました。コインを投げ入れるとローマ再訪が叶うという言い伝えは事前に知っていましたが、コイン枚数によって意味が違ってくるとするのは初めて知りました。ちなみに2枚では好きな人に気持ちが伝わる(一緒にいられる)、3枚では腐れ縁が切れるのだそうです。投げ方は泉を背にし、右手にコインを持ち、左の肩越しに投げると教わりました。実際に私も投げきて、すぐに振り返ったのできれいに泉に入っていくところを見られたのでよかったです(口絵写真14)。

トレヴィの泉の隣にあった、BAR TREVIというお店で念願のジェラートを食べました。沢山の種類がありかなり迷いましたが、ピスタチオ・チョコレート・ラムレーズンの3つを選びました。ねっとりとなめらかな食感で味が濃くとてもおいしかったです。旅行の目的の一つだったので良い旅の締めくくりになりました。



多種類の本場ジェラート

5. イタリアの交通事情

イタリアを旅していてフィレンツェ・ローマでは車やバイクが多く、交通事情がいくつか気になりました。一番驚いたことは路上での縦列駐車の高さです。しかも車同士の前後の間隔がほぼないのです。調べてみると、歴史的建造物が多い国なので駐車スペースの為に建物を壊すということができず、その結果このような路上での駐車が多いとのことでした。ではどのように狭いスペースに駐車するかというと、なんと前後の車にぶつけながら入れるそうです。日本では考えられませんが、向こうではこの光景が至る所で見られました。



10センチほども隙間がない縦列駐車

また、ローマなどでは歩行者信号がないところを行き交う車に注意しながら渡ったり、私達が乗っているバスの横スレスレを通っているバイクがいたりなどヒヤリとする場面も多々ありました。



バスの窓のすぐそこにバイクが

これらを見ると、日本の交通ルールやマナー、道路はしっかりしていて安全なのだと感じました。

また、このようなものも見かけました。車両進入禁止の標識ですがアートにされてしまっているようです。おしゃれな街には馴染んでいましたが、標識とは認識しづらかったです。



イタズラされた標識

街中では馬車が走っていました。観光に使用するようです。馬が興奮しないように目にカバーがされており、あまり周りの状況が見えないようにしていました。



初めて見た馬車

道路は石畳が多く、ガタガタしていたり所々で穴が開いていたり歩きにくいところもありました。女性はハイヒールなどではうまく歩けないのではないのでしょうか。

6. 最後に

今回はいろいろと初めてづくしの旅でした。旅行自体普段あまり行く機会がなく、しかも初海外ということで緊張と不安が入り交じった気持ちの方が強かったのですが、集合の龍馬空港で皆さんの顔を見たときに気持ちがスッと楽になり安心し、心強い気持ちで旅行に出発することができました。

旅行期間中は一日一日がとても刺激的で充実していました。同じ地球上なのにこんなにも文化や特徴、構造物が違って驚き、イタリアと日本で同じだったことは空が青かったことしか分からないくらいでした。そしてなにより大きなトラブルや事故に遭うこともなく、参加者全員が無事に帰国できたことが良かったです。私の人生の中でこんなにも素敵で貴重な体験ができると思っていなかったため、今回受けた刺激や経験を忘れず、もっといろいろなことに視野を広げ、チャレンジし、仕事にも励んでいきたいと思います。



ヴェネツィアでの記念撮影

歴史に触れたイタリア旅行

調査部 空間情報課 課長
尾崎 勝彦 (1994 年入社)

1. はじめに

世界の中心としてのイメージが強いヨーロッパへ行く機会がおとずれた。第一希望であるイタリアの3大都市、それぞれの街のみどころを余すことなく目一杯楽しめるプランに期待した。

2. ヴェネツィア

旅行の初日は、高知龍馬空港から羽田空港、フランクフルト空港を経由して、ヴェネツィア空港に到着した。到着時間は日本時間の8時、時差を除くと23時間であった。過去最長9,724kmの移動を経験した。

翌朝、世界遺産「水の都ヴェネツィア」から観光がスタートした。ヴェネツィアは街中に大小の運河が流れる水の都。カーニバルやヴェネツィア映画祭など文化の発祥地でもある。

まず、中心部のサン・マルコ広場にある大鐘楼に上り、美しいヴェネツィアの風景を一望のもとに収めることができた(口絵写真1)。街は統一感のある赤い屋根の景色、遠くにはラグーンに浮かぶ島々が特徴的であった。

続いて、ドゥカーレ宮はカナル・グランデから上陸する賓客を迎えた総督の館で、ヴェネツィア・ゴシック様式の最高峰といわれている(口絵写真3)。かつては、政庁兼宮殿として使用され、大統領官邸や裁判所、国会議事堂、監獄なども見学することができた。



リアルト橋からのカナル・グランデ

中世、開運王国として栄華を誇ったヴェネツィア。運河をゴンドラに揺らながら、迷路のような路地裏を歩きながらの風景も楽しむことができた(口絵写真4)。

ここでは車は通ることができず、すべての移動が船である。ホテルへの帰りは歩いて30分程度であったが水上タクシーを利用することにした。しかし、間違えて逆方向の水上タクシーに乗ってしまった。すぐ気づいたので次の乗り場で引き返すことができたが、別行動してい

た同僚は気づかず終点までいってしまいホテルへの帰りが大変だったようである。

3. フィレンツェ

翌朝はフェラーリ特急の名を持つ真紅の列車「イタリア」で世界遺産「花の都フィレンツェ」へ向かった(口絵写真5)。

フィレンツェは14～15世紀にルネッサンスが開花した芸術の街。美術館や教会など、文化・芸術遺産めぐりが見どころである。

まず、ミケランジェロ広場へ向かい、フィレンツェを一望できる小高い丘の上から世界一の眺望を楽しんだ。

続いて、アカデミア美術館に向かいオリジナルのダヴィデ像をみることができた。美術の教科書でおなじみのミケランジェロの彫刻は、想像以上に大きく迫力と肉体的美に感動した(口絵写真8)。

フィレンツェのシンボルであるドゥオモは茜色の円形ドームが目印の大聖堂。ブルネレスキが発案した二重構造によって、当時不可能といわれていた巨大な石積みのドームが実現されていた。その中の狭いらせん階段や急な階段を464段のぼり、美しい風景を一望できた(口絵写真6)。

ウフィッツィ美術館はレオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロ、ボッティチェリなど、イタリアを代表する芸術家の作品が所蔵されている(口絵写真7)。

ガイドが増員され二班に分かれて鑑賞することになったが、私の班のガイドさんが熱のはいった説明で、みどころを説明してくれたおかげで、深い観賞ができた。

4. ローマ

翌朝は「フレッチャアルジェント」列車にて世界遺産「永遠の都ローマ」イタリアの首都へ向かった。



フレッチャアルジェント

古代ローマ帝国時代の遺跡やバロック教会など各時代の美術や貴重な建造物が多く残される。

まず、紀元80年ごろに完成したといわれるコロッセオに向かった。「コロッセオが滅びるとき、ローマは滅

び、その時世界も滅びる」といわれるほどの威容を誇り、当時ヨーロッパ中に広く知れ渡っていたという。

2,000年もの間、ローマに残り続けている永遠のシンボルは、写真でみるイメージよりはるかに巨大で圧倒された(口絵写真9)。

続いて、ヴァチカン市国はローマ市の北西部に位置する独立国家。世界中のカトリック教会の頂点に立つローマ教皇庁があり、わずか0.44k㎡の国土のほとんどが、教皇が暮らすヴァチカン宮殿やサン・ピエトロ大聖堂(口絵写真12)、ヴァチカン美術館などの施設で占められている。

コロッセオ、ヴァチカン市国とも入用者数が今回訪問した中でもダントツに多いと感じた。イタリアの各都市で先人の残したものを大切につないでいくことの大切さを学ぶことができた。



ヴァチカン美術館の中庭

翌朝は引き続きローマのトレヴィの泉へむかった。トレヴィの泉は8世紀に完成したバロック様式の噴水で、ポーリ宮殿の壁を利用した大理石の彫刻が見事である。ローマでもっとも大きい噴水といわれている。

噴水に背を向けてコインを1枚投げ入れるとローマ再訪が叶うというジンクスがある。2枚、3枚のジンクスもあるが1枚投げ入れることにした(口絵写真14)。

5. 本場イタリアン(料理)

日本ではイタリア料理を食すことが多く、旅先を決める際に重要視した本場のイタリアン。

イカスミパスタからはじまり、海鮮コース、ピザ、Tポーンステーキ、カルボナーラと本場のイタリア料理を食べ尽くすことができた。

全体的にシンプルな味付けで、日本のイタリア料理のほうが正直、美味しいと感じた。

面白かったのは配膳された盛り付けの量と具材のバランスがかなりいい加減で、ケーキにいたってはあまりの厚さの違いに、思わず、みな大爆笑してしまった。

本場イタリアン最高の味という期待が消え、日本のイタリア料理が世界一だと確信した。海外へ出るたびに様々なことで日本の素晴らしさが分かり、愛国心を覚える。



シンプルな味のイカスミパスタ



軽い味のマルゲリータ

6. おわりに

プライベートではなかなか行くことができないヨーロッパ旅行。

55周年記念ということで、イタリア、フランス、ドイツから選択できた社内旅行のおかげでヨーロッパ(イタリア)を肌で感じることができた。

旅行前に注意をうながされたスリにも全員あわず、ホテルの部屋の種類違いのトラブルはあったものの全員無事に旅行を終え、貴重な体験を一緒に分かち合えた。

この経験からか、日本に帰ってからも歴史、文学、芸術、哲学、宗教の分野の情報が目に入ってきやすくなったと感じている。今後も視野を広げ、好奇心を刺激し、仕事に良い影響を与え、人生を豊かにして行きたい。



期待しすぎたイタリア旅行

調査部 空間情報課 課長補佐
長崎 悟史 (2001年入社)

1. はじめに

私にとって海外は、ハワイ、台湾、グアムに続く4度目である。これまでの3回もすべて会社での旅行であり、自身で計画して海外に行くことはまずない私にとっては、ヨーロッパは特に貴重な経験であった。

2. 初日(イタリアへの移動)

初日は、高知龍馬空港→羽田空港→フランクフルト空港→ヴェネツィア空港の順で飛行機を乗り継ぎ、ヴェネツィアのホテル到着時間は深夜0時を過ぎていた。深夜0時といっても、日本とイタリアは時差-7時間なので、実際は高知を10時に出て、次の日の7時に着いたということである。この時の体調は、長時間座っていたことでおしりが痛く、飛行機で窓際だったせいか体が冷えて鼻水が止まらない最悪な状況であった。ホテルにチェックイン後、近くの酒屋でビールを購入し、少し飲んで初日はおとなしく就寝した。

3. 2日目(水の都ヴェネツィア観光)

2日目は、朝の5時頃に自然に起床し、ホテルの前にある橋の上から朝の水の都の景色を楽しんだ。



写真3-1 初日のホテル



写真3-2 朝の水の都の風景

ホテルの朝食ビュッフェをいただいた後、水上タクシーに乗り世界で最も美しい広場といわれるサン・マルコ広場に向かった。広場にはすでに大勢の観光客がいたが、目的の大鐘楼には少しの待ち時間で入ることができた。大鐘楼の頂上からは、屋根の色が茶色に統一された美しい街並みの景色を満喫することができた(口絵写真1)。

次にドゥカーレ宮に向かった。以前の政治の中核であった建物で、総督の住居でもあったそう。世界最大の油絵といわれる「天国」がある大評議会の間など大いに見応えがあった(口絵写真3)。

その後はサン・マルコ寺院へと向かった。寺院内部は黄金のモザイクで覆われており、美しい装飾や目を奪われる像などたくさんあった。

寺院を見学した後は、ゴンドラに乗って水の都を水上散歩した。迷路のような狭い水路を、小舟に揺られて渡り、ゴンドラからしか見られないヴェネツィアを満喫した。前の組のゴンドラから聞こえてくる船長さんの歌声を聴きながら、のんびりとした優雅な時間を過ごすことができた。

昼食は、待ちに待ったイカ墨パスタであった。旅行前から本場のパスタはどんなものか非常に楽しみに期待していたが、麺はかたく味付けも薄くて、イカの臭みだけの残念なパスタであった。



写真3-3 イカ墨パスタ

昼食後は自由行動で、13世紀に架けられた大運河で最初の橋となるリアルト橋を見学したり、マルゲリータピザを食べたりして楽しんだ。

4. 3日目(花の都フィレンツェ観光)

3日目は、フェラーリ特急の名を持つ真紅の列車「イタロ」にて花の都フィレンツェへと向かった。到着後は、まずバスでミケランジェロ広場へと向かい、フィレンツェの街を一望した。広場の中央に置いてある「ダヴィデ像」はレプリカだそうだ。

その後は、本物の「ダヴィデ像」を見るべくアカデミア美術館に向かった。この美術館には、ミケランジェロ作の「ダヴィデ像」の他、数々の彫刻が展示されている。本物のダヴィデ像は5mもあり迫力があつた。ダヴィデが巨人ゴリアテとの戦いで、岩石を投げつけようと狙いを定めている、という勇ましい場面を表現しているそうだ。

その後、昼食にピザを食べて、ドゥオモへと向かった。約600年という歳月をかけて建てられた教会内の464段の階段を登り、見晴台へと到着した。ただただ疲れ、見晴らしはどうしてもよかった記憶しかない(口絵写真6)。

次にウフィツィ美術館に向かった。この美術館には「ヴィーナスの誕生」「春」「受胎告知」などの有名絵画が数多く展示されている。美術館内をガイドしてくれたおじさんは、ここにある美術品が好きでたまらないといった感じで非常に熱意のこもった説明をしてくれた。もう美術館には少々飽きていたが、おじさんのおかげで楽しく鑑賞することができた。

以上でこの日の観光は終了し、ホテルに向かった。ホテルの部屋に入ると、ベッドがまさかのハネムーン仕様(ダブルベッドに1つの布団)だったのには驚いた。おじさん2人寄り添いながら寝るのか、イタリアでは普通なのか、などと思っていたが、やはり手違いであったようで後ほどツインの部屋に変更することができた。

夕食のメインは、Tボーンステーキで肉自体は意外と柔らかく、美味しくいただけた。ただ、味付けは塩こしょうのみであったので、ステーキソースがあればなおよかった。



写真 4-1 ミケランジェロ広場



写真 4-2 Tボーンステーキ

5. 4日目(永遠の都ローマ観光)

4日目は早朝より列車で永遠の都ローマへと向かった。ローマに到着後、旅行前より楽しみにしていたコロッセオを見学した。古代ローマの円形闘技場で、観客席は3階までであり約5万人を収容できたそうだ。観光客も非常に多く、連日の疲れでもう歩きたくない状況であったが、内部を一回りしコロッセオを目に焼き付けた(口絵写真9)。

その後、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会にある「真実の口」へ向かった。40分以上並び口の中に入手を入れて写真を撮っただけであったが、なんだかんだ嬉しいものであった(口絵写真11)。

昼食はマカロニのカルボナーラであった。イカ墨パスタ同様、味付けは薄く、卵はとろとろ固まっており、これまた期待外れであった。

昼食後は、ヴァチカン市国へと向かい、ヴァチカン美術館を見学した。

イタリア最後の夕食は、ホテルからバスにのって街から少し離れたレストランに向かい、ピアノと歌を聴きながら海鮮コース料理をいただいた。パスタは太麺でエビ味が効いており、可もなく不可もなくであったが、盛り付けがとにかく雑であったのには驚いた。なんと、となりの人のパスタにはメインのエビが入っていなかったのである。まわりを確認するとエビの数はバラバラで、エビを食べられない人には大量に入っていたり、雑さ加減に皆で笑い合った。



写真 5-1 カルボナーラ

美しきイタリアを巡る旅

調査部 3D 計測チーム
伊藤 哲也 (2008 年入社)



写真 5-2 ヴァチカン美術館



写真 5-3 エビのパスタ

6. 最終日(永遠の都ローマ観光+帰国)

最終日は、映画「ローマの休日」のロケ地として有名であるスペイン広場へと向かった。スペイン大使館が近くにあったことから「スペイン広場」とよばれるようになったそうだ(口絵写真 13)。

次は、広場のすぐ近くの「トレヴィの泉」に向かった。噴水に背を向けてコインを投げ入れるジンクスがあり、コインの枚数に応じて内容も違うそうだ。

- ・1 枚：ローマ再訪が叶う
- ・2 枚：片思いが実る
- ・3 枚：腐れ縁が絶てる

私は迷わずコインを 2 枚投げ入れた(口絵写真 14)。

以上でイタリア観光は終了となり日本へ帰国した。

帰りの飛行機は、連日の疲れによりほどよく眠ることができ、行きほどは苦しくはなかった。

7. おわりに

今回初めてのイタリア旅行であったが、数多くの世界遺産や芸術作品にふれることができ、よい経験となった。食に関しては期待しすぎていたこともあり、日本の食文化の偉大さを改めて感じているところである。また、普段接することの少ない社員との交流もできたことをうれしく思う。

1. はじめに

海外旅行は人生 3 度目で、ヨーロッパには一生に一度行けるかどうかなので非常に楽しみにであった。

今回の旅行は、イタリア、フランス、ドイツから選択できたが、イタリアを舞台にしたゲームに熱中した時期があり、その舞台を見てみたいという思いでイタリアを選んだ。

2. 水の都ヴェネツィア観光

飛行機を乗り継ぎヴェネツィアに到着したのは 25 時を過ぎていた。長距離移動の疲れにからすぐに就寝した。目を覚まし、景色を見に出てみると、水の都と呼ぶにふさわしい景色が広がっていた。ヴェネツィアは車の通行が禁止なので、大勢の人々が船に乗り往來していた。また、食料品や生活雑貨等も船で運ばれていた。



船の行き交う早朝のヴェネツィア

朝食後、水上タクシーに乗り世界一美しい広場といわれるサン・マルコ広場に向かった。広場にはすでに大勢の観光客がいた。これから向かう大鐘楼、サン・マルコ寺院にもすでに長蛇の列ができており、驚いた。大鐘楼の頂上に到達すると、素晴らしい景色が広がっていた(口絵写真 1)。天気も良く気持ちよい風を感じながらヴェネツィアの風景を楽しむことができた。次々と観光客が昇ってくるので短い時間で降りなければならないのが残念であった。

次にドゥカーレ宮に向かった(口絵写真 2)。ドゥカーレ宮はヴェネツィア共和国の政治の中核施設があった建物で、総督の住居でもあった。世界最大の油絵といわれる「天国」がある大評議会の間や、裁判所、牢獄、十字軍の甲冑や剣などがあり大変見応えがあった。



世界最大の油絵「天国」



13世紀に建設されたリアルト橋



十字軍が使用していた武具

その後、サン・マルコ寺院へと向かった。寺院内部は写真撮影が禁止されており内部の写真を撮れなかったのが残念であった。内部は黄金のモザイクで覆われ、その他にもきらびやか装飾ほどこされていた。

寺院を見学した後は、建物の間を縫うようにゆったりと進む gondola に揺られヴェネツィアの美しさを満喫した。私達の前を進む gondola から聞こえてくる船長さんの歌声を聴きながら優雅な時間を過ごした。



建物の間を進む gondola からの風景

昼食後は自由行動となり、13世紀に架けられた、大運河で最初の橋となるリアルト橋を見学したり、ピザを食べたりと楽しんだ。

3. 花の都フィレンツェ観光

次の日はフェラーリ特急の名を持つ真紅の列車「イタロ」にてフィレンツェへと向かった。

まずバスでミケランジェロ広場へと向かい、フィレンツェの街を一望した。曇り空で少しかすんでいたが絶景であった。

その後、アカデミア美術館へ向かった。この美術館には教科書でおなじみのミケランジェロ作の「ダヴィデ像」や彫刻の数々が展示されている。

本物のダヴィデ像は迫力があり、肉体が美しく表現されており感動した(口絵写真8)。

美術館見学後は昼食にピザを食べ、ドゥオモへと向かった。この建物は約600年という歳月をかけて建てられた教会である。クーポラと呼ばれる巨大ドームの464段の階段を登り、頂上の見晴台を目指した。フィレンツェは徒歩観光が主でありさすがに疲れた。



ドゥオモ

次にウフィツィ美術館へ向かった。この美術館にはボッティチェリ作「ヴィーナスの誕生」「春」、ダ・ヴィンチ作「受胎告知」などの有名作品が数多く展示されている。有名作品の前は大勢の観光客がいるためじっくり鑑賞できなかったのが残念であった。



ダ・ヴィンチの代表作「受胎告知」

4. 永遠の都ローマ観光

4 日目は列車に乗り永遠の都ローマへと向かった。

ローマ到着後、まずコロッセオへ向かった。観客席は3階まであり約5万人を収容できたとされている。観客が入場する門は約80カ所もありスムーズに入退場できたようである。

決闘が行われていた1階部分は木の板を使っていたため現在はなくなっている。見えている部分は地下の檻で、猛獣の飼育場所だった。

当時の風景を想像し、ローマ大帝国の栄光と異様な殺意と熱気を感じた(口絵写真9)。

その後、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会にある「真実の口」へ向かった(口絵写真11)。40分以上並んだと思うが、写真を撮ってすぐ終了した。1分もかかっていない。早すぎる。

マンホールの蓋という説もあるが、こんな蓋は怖い。

昼食にカルボナーラを食べてヴァチカン市国へと向かった。到着後、ヴァチカン美術館を見学した。この美術館にはミケランジェロ作「最後の審判」が祭壇の壁一面に描かれているシステリーナ礼拝堂がある。すべての作品を見学すると最低でも2日間はかかるといわれている。



ヴァチカン美術館



美術館内部

「最後の審判」の写真を撮りたかったがシステリーナ礼拝堂は写真撮影が禁止なので、しっかりと目に焼き付けてきた。礼拝堂内は写真撮影と私語も禁止されているが、普通に喋ったり写真を撮る観光客がおり、注意を呼びかけるアナウンスが何度も流れていた。素晴らしい雰囲気壊れて非常に残念であった。

次に美術館の隣にあるサン・ピエトロ大聖堂を見学した。ここは、世界最大のカトリック大聖堂である。

聖堂には、「バルダッキーノ」というキリスト教で祭壇の上にかざすブロンズ製の大天蓋や、ミケランジェロが25歳という若さで完成させた聖母マリアを表す「ピエタ」という作品が飾られていた。



バルダッキーノ(左)とピエタ(右)

その後、買い物をしてからレストランへと向かった。レストランでは、ピアノと歌を聴きながらイタリア最後の夜を楽しんだ。

次の日は、映画「ローマの休日」のロケ地として有名になったスペイン広場へと向かった(口絵写真13)。スペイン大使館が近くにあったことから「スペイン広場」とよばれるようになった。

この広場はその景観を利用してファッションショーも開催されている。

広場のすぐ近くに「トレヴィの泉」がある(口絵写真14)。ローマ最大の噴水で、噴水に背を向けてコインを投げ入れると、ローマ再訪が叶うというジンクスがある。私も1枚投げ入れた。

5. おわりに

美しい街並み、芸術作品を数多く見ることができ充実した旅行だった。プライベートでは行けない内容だったので参加してよかった。

また、9日に誕生日を迎え、その日の夕食にケーキを用意してくださった。皆様、本当にありがとうございます。素敵な思い出となりました。

世界遺産の宝庫イタリア

調査部 調査測量課 係長
西村 研了 (1997年入社)

1. はじめに

はじめてのイタリア旅行。今までハワイ、グアム、バリ島、台湾と旅してきて今回で4カ国目。一度は行ってみたいかったヨーロッパは特に楽しみだった。

2. 1日目 ~長旅~

1日目は高知龍馬空港 10:15 発 ANA564 便にて羽田空港へ。到着後、シャトルバスで国際線旅客ターミナルへ移動し、軽めの昼食をとり、出国手続きを行い 14:05 発 L H717 便にてドイツ・フランクフルト空港を経由し今回の目的地であるイタリア・ヴェネツィア・テッセラ空港へと向かう。空港到着後、バスと水上タクシーにて宿泊ホテルへと向かう。ホテルに着いたのは現地時間 00:30 頃。日本とイタリアの時差は7時間。日本は早朝。約21時間かけてイタリアにたどり着いた。



自身初の羽田国際線旅客ターミナル内

3. 2日目 ~ヴェネツィア~

2日目はヴェネツィア観光。ホテルを出発し水上タクシーで向かった先はサン・マルコ広場。ナポレオンが「世界で最も美しい広間」と称えたように、ここは壮大なサロンを思わせる空間だった。広場の一角にそびえ立つサン・マルコの鐘楼はヴェネツィアにある観光名所の中でも特に有名であり街のシンボルとされる。高さ約96mからの展望は絶景だった。



鐘楼よりサン・ジョルジョ・マッジョーレ島

サン・マルコ広場に面して建造されているサン・マルコ寺院、ドゥカーレ宮殿。サン・マルコ寺院はヴェネツィアで最も有名な大聖堂である(口絵写真2)。縦横の長さほぼ等しいギリシャ十字の形で、内部はビザンチン風モザイクが覆い尽くしていた。建物内ではいくつかの注意事項があった。写真撮影、肌の露出、飲食、携帯電話、ペット同伴、大きな荷物の持ち込み等は禁止だった。ドゥカーレ宮殿は、総督ドージェの邸宅と政庁、裁判所が置かれていた建物。サン・マルコ寺院と隣接し繋がっている。内部には、ヴェネツィアの繁栄や栄光を讃える作品が所狭しと飾られていた(口絵写真3)。

ゴンドラ遊覧では、「水の都」ヴェネツィアの運河を散策しながら世界遺産の街並みをロマンチックな雰囲気を楽しめた。ヴェネツィアガラス工房では、花瓶作りの実演を見学し、お買い物も楽しめた。

昼食は、本場イタリアのイカスミパスタとヒラメのムニエル。ビールで乾杯し、本場の味を堪能した。

昼食後は夕食まで自由行動。サン・ジョルジョ・マッジョーレ島へ水上バスで向かった。島は小さく、島のほとんどがサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会となっている。教会に取り付けられている鐘楼には、エレベータを利用して上がれ、サン・マルコの鐘楼、ドゥカーレ宮殿等を眺めることができ、サン・マルコの鐘楼とは違った景色を楽しめた。



教会の鐘楼よりサン・マルコの鐘楼等

4. 3日目 ~フィレンツェ~

3日目はフィレンツェ観光。早朝、ヴェネツィア・サンタ・ルチア駅より、イタリア版新幹線「イタロ」にてフィレンツェに向かう(口絵写真5)。

フィレンツェの絶景スポット「ミケランジェロ広場」。小高い丘の上にありフィレンツェ市街を一望できる。また機会があれば夜景を眺望してみたい。



ミケランジェロ広場よりフィレンツェ市街

アカデミア美術館は、美術の教科書でおなじみのミケランジェロの最高傑作「ダヴィデ像」を展示している。写真で見たことはあったが、実物は高さ約5m、重さ約19トンと圧巻のスケールだった。ダヴィデ像は、元々はシニョーリア広場に置かれていたが、劣化を防ぐためにこの美術館へ移動したそうだ。また、ダヴィデ像があるホールへ向かう途中の通路には、ミケランジェロ未完の4体の像も並んでおり、ミケランジェロの芸術作品を見ることができた(口絵写真8)。

昼食後に向かったのは、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、ドゥオモ、サン・ジョヴァンニ洗礼堂、ジョットの鐘楼の三つからなるカトリック教会。

今回、ドゥオモ・クーポラに464段からなる階段を使って登った。通路の幅も狭く、急斜面で蒸し暑かったが頂上に着くと解放感から疲れが吹き飛んだ。高さ約107mからの景色は、フィレンツェ市街のレンガ色の街並みが一望できとても絶景だった(口絵写真6)。また、石積み建築のクーポラとしては現在でも世界最大を誇るとのことで、まさに世界遺産を肌で感じることができた。

ウフィツィ美術館は、ルネサンス絵画で有名な美術館である。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ等の多くの作品絵画が展示されている。その一つ「受胎告知」はダ・ヴィンチ作の最も初期に描かれた代表作。聖母マリアのもとに天使ガブリエルが訪れ、神の子であるイエスを受胎したことを告げるシーンでは、繊細に描かれたルネサンス絵画を見ることができ歴史を学べる重要な美術館だった。



レオナルド・ダ・ヴィンチ作「受胎告知」

ホテルに到着し部屋に入ると何とダブルベット。さすがに男同士で寝るのにはと想いつつ夕食に向かうと、その他8組が同じ状況。ホテル側のミスのため添乗員さんが交渉してくれ、隣にある別のホテル・アンバシアトリーのツインを用意してくれた。ちょっとしたハプニングがあったが無事3日目を終えることができた。

5. 4日目 ～ローマ～

4日目はローマ観光。早朝、フィレンツェ駅を出発しローマへと向かう。到着後、向かった先はコロッセオ。ローマの街中に巨大な廃墟が堂々と建つ姿は圧倒的な迫力だった。構造は、地下、アリーナ、全4階の観客席からなり、現代の巨大スタジアムとほぼ同じ大きさ。地下に

あった施設が現在ではむき出しになっている。地下には猛獣たちの檻、剣闘士たちの待機場所があり、ここから登場し剣闘士同士の闘いなどが行われ、年間数百人もの剣闘士が命を落としたそうだ(口絵写真9)。

その後、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会に向かい「真実の口」で、お決まりのポーズで写真撮影を行う(口絵写真11)。

昼食後は、ヴァチカン市国観光へと向かい、ヴァチカン美術館、システリーナ礼拝堂、サン・ピエトロ大聖堂等の歴史、文化を学んだ。その中の一つ、システリーナ礼拝堂の祭壇に描かれたミケランジェロの代表作『最後の審判』は美しかった。彫刻家でもあるミケランジェロらしいマッチョに描かれなんと印象的だった。

6. 5日目・6日目 ～イタリア最終・帰路～

最終日はローマ観光。午前中にスペイン広場、トレヴィの泉を観光する。

スペイン広場には歴史ある有名な大階段がある。映画「ローマの休日」にも使われたスペイン階段。映画では階段でジェラートを食べるシーンがあるが、現在は文化財保護の観点からスペイン階段での飲食は禁止されている。ジェラートは、イタリア人の夏には欠かせないアイスであり、私も食べたが、味にコクがあり大変美味しかった(口絵写真13、15)。

トレヴィの泉では、後ろ向きにコインを泉へ投げ入れると願いが叶うという言い伝えがあり、投げるコインの枚数によって願いが異なるとされる。コイン1枚だと再びローマに来ることができ、2枚では大切な人と永遠に一緒にいることができ、3枚になると恋人や夫

妻と別れることができると言われる。私は、2枚投げ入れローマを後にした(口絵写真14)。

ローマ空港12:10発LH1843便にてドイツ・ミュンヘン空港を経由し羽田空港、高知龍馬空港へ無事帰高し家路についた。

7. おわりに

ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマは世界遺産の宝庫であり、美術館、教会、広場をはじめ町全体が歴史の香りに満ち溢れており、イタリアの芸術、文化に触れることができた。

天候にも恵まれ、本場イタリアの Pasta、ピザ、魚介類、ビールもワインを美味しく頂くこともできた。

一生忘れることのない楽しい旅行であった。



世界遺産の街

調査部 調査測量課 係長
山本 崇頭 (2005年入社)



イタリア国旗と欧州旗

1. はじめに

今回は、ヨーロッパへの研修旅行である。しかも、行き先はヨーロッパの中でも特に人気が高いイタリアとあって、期待を膨らませながら準備を整えました。事前の情報で、スリが多いので気を付けて下さいとのこと。衣服の下に貴重品などを入れて隠せる小物を用意し、出発の日を待つこととなりました。

高知空港から羽田空港、そして国際線に乗り換え一路ドイツへ、そしてドイツからいよいよイタリアへ入国です。ほぼ丸一日を費やし、イタリアへ到着したころには、深夜を迎えていました。

2. ヴェネツィア

別名『水の都』と称されるヴェネツィアでは、なんと車が入ることができず、その一方で運河が発達していることもあり、本日の目的地サン・マルコ広場に向かう交通手段は、日本ではあまりなじみのない船での移動でした。

サン・マルコ寺院、ドゥカーレ宮殿などの美しい建築物に囲まれた広場は、私の想像を越える広さでした。ヴェネツィアは狭い路地が多いという印象もあっただけに、路地を抜けて目の前に広がるサン・マルコ広場の存在感をいっそう引き立ててくれると感じました(口絵写真2)。

世界一美しいとされる広場に、歴史あるサン・マルコ寺院がヴェネツィアの街のシンボルのような存在感を出していました。聖堂内は残念ながら撮影禁止のため現地ではその美しさを見ることはできませんが、黄金のモザイク画で一面覆われており、完成までにどれだけの労力とお金をつぎ込まれたのか想像もできないほどの装飾で、当時の繁栄ぶりを垣間見ることができました。祭壇の衝立には2000個の宝石が埋め込まれているそうで、豪

華絢爛とはまさにこのことを指すのだと実感させられました。

私が今回の研修旅行で見ておきたいものの一つにドゥカーレ宮殿内部の天井画があります。部屋一面に張りめぐらされた壁画、天井画のとにかくスケールの大きな絵画に圧倒されました。その他にも、宮殿内は裁判所、刑務所、彫刻、武器庫など見どころ満載で、この建物だけで十分満足できるほどのボリュームでした。



ドゥカーレ宮殿内部の天井画と一緒に

ヴェネツィアの最後を締めくくるのは、ゴンドラに乗船してのクルーズです。

船体は全体的に細長くスリムなゴンドラがほとんどです。しかし、簡素な感じではなく、ゴンドリエーリ(ゴンドラを漕ぐ人)の個性がうかがえる装飾が施されていました。細長い形状のため、乗船するときはかなり揺れて不安になりましたが、進み出すとその揺れが心地良く感じました。せまい水路も、巧みな操縦で壁にぶつかることもなく、ゆったりと進むゴンドラに、時間を忘れて水路から眺める景色を堪能することができました(口絵写真4)。

3. フィレンツェ

翌日、高速鉄道『イタロ』に乗り込みフィレンツェを目指しました。フェラーリ特急と呼ばれるだけに真紅の列車です。内部も機能重視というよりも、一人一人が余裕を持って座ることができ、隣を気にすることもなくフィレンツェまでの時間を過ごすことができました(口絵写真5)。

まず、世界一の眺望を体験しにミケランジェロ広場へ向かいました。高台からフィレンツェの街並みを一望することができ、統一されたオレンジの屋根、ドゥオモやジョットの鐘楼などを遠目から見る景色はとても綺麗でした。少し曇りがかってはいましたが、十分すぎるほどの眺望でした。快晴であれば、オレンジの屋根がもっと映えると思われます。今後機会があれば、その景色もぜひ眺めてみたいと思いました(口絵写真6)。

ミケランジェロ広場を後に、オリジナルのダヴィデ像を見にアカデミア美術館へ行きました。館内には様々な

彫刻が展示されていましたが、ダヴィデ像の存在感に圧倒されました。他にも素晴らしい絵画や彫刻が多数展示されていましたが、ダヴィデ像の前にかすんでしまっているように思えました(口絵写真8)。

昼食後、サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂の階段464段を登りました。食後の運動としてはハードに感じましたが、三分の二を過ぎたあたりから見えるクーポラ内側に描かれた天井画『最後の審判』を間近に見た時は幾分か疲れも和らぎました。階段が狭いうえに登りと下りが完全に分かれてなく、譲り合いながらの登頂でした。ミケランジェロ広場からの遠目のフィレンツェ市街も素晴らしいですが、街の中から一望する街並みもやはり素晴らしいと感じました(口絵写真6)。

帰りは、膝をガクガクさせながら階段を降りつつ、運動不足を改めて痛感させられました。

フィレンツェは、彫刻、絵画の美術品が多数存在します。ウフィツィ美術館にも、レオナルド・ダ・ヴィンチの受胎告知や、ボッティチェリのヴィーナスの誕生等数多くの名画が展示されており、普段は本などでしか見られない美術品が、目の前に見られるのは感動です。絵画だけでなく、美術館全体が美術品のような様相でした。

4. ローマ

今回の最終目的地であるローマに到着し、世界遺産コロッセオに向かいました。バスでしばらく進むと、目の前にとてつもなく巨大な建物が現れました。これがコロッセオだと一目でわかりました。約2000年前に建造された円形の闘技場で約5万人以上を収容できたとのこと。私が好きな映画『グラディエーター』で描かれた、剣闘士たちが命をかけて戦いを繰り広げた場所でもあり、私が今回の旅行で最も訪れてみたい場所でした。外観を間近で見ると、高さ48メートルというだけあって、その巨大さに圧倒されます。中に入ると、とてもその時代に建造されたとは思えないほどの広さでした。その他にも、観客に日差しが当たらないように天幕を設置していた跡等もあり、様々な工夫が施されていました。

現在では、当時の床面は無く地下が丸見えの状態でした。これだけの地下空間を建造していた様子を見ることができ、得をした気分になりました(口絵写真9)。

コロッセオのすぐ隣には『コンスタンティヌスの凱旋門』があります。こちらも巨大な門でとても細かく繊細な彫刻が施されていました。さらに驚いたのが、有名なパリの凱旋門は、こちらをモデルに建てられたというのです(口絵写真10)。

午後からは、ヴァチカン市国内にあるヴァチカン美術館・サン・ピエトロ大聖堂に行きました。ヴァチカン美術館は、ミケランジェロ作『最後の審判』、そこに向かう途中の4部屋の総称『ラファエロの間』などスケールの大きな壁画や天井画が、スペースがないほど所狭しと描かれていました。

そしてカトリック教会の総本山でもあるサン・ピエト

ロ大聖堂。その内部奥、中央には大天蓋、四本のねじれた柱がありました。異様なまでの存在感でそびえ立つ天蓋は、力強い形状とブロンズ製のためか重量感もありました。



大天蓋『パルダッキーノ』

最後に締めくくるのは、トレヴィの泉です。ローマは全体的に大きな建造物が多いですが、ここは少しこぢんまりとした印象でした。水は綺麗で、彫刻は水面からの光の反射で輝いていました。

トレヴィの泉では、コイン投げがおきまりだそうです。泉の中には、すでにたくさんのコインが投げ込まれていました。コイン投げにはルールがあります。それに従い泉に背を向け、右手にコインを持って左肩越しにコインを投げ入れ、イタリアを後にしました(口絵写真14)。

5. おわりに

今回、イタリアを訪れ、国内では体験することができない文化の違いを肌で感じることができ、大変勉強になりました。写真や映像では幾度となく見てきた場所ですが、これほどのスケールの大きさだとは思いませんでした。限られた時間なので、十分に見ることができなかった場所も多々ありました。私はトレヴィの泉に、また訪れることができるようにと一枚のコインを投げ入れてきました。

その思いを実現したいと感じさせてくれる旅でした。



初めてのイタリア

調査部 調査補償課 調査役
有澤 尚可 (2017年入社)

1. はじめに—いざイタリアへ—

昨年入社して、初めての社内旅行が、いきなりのイタリア旅行となり、驚きを禁じ得ませんでした。

海外旅行は、生涯2度目ですが、2度ともヨーロッパと言うのも何か不思議な縁を感じます。

イタリアは初めてですが、ローマ時代の遺跡、ルネッサンス期の芸術やヴァチカン市国を始めとするカトリック教の文化に触れる事そして本場のワインとパスタ料理を楽しみに、胸をはずましての6日間研修に行くこととしました。

パスポートの取得を始めとする旅行準備を慌ただしく行くとともに万全なる盗難対策を整え、いざ出発となりました。

イタリアまでの12時間を越える飛行時間には少し辟易としましたが、まだ日本では出回っていないビデオや見ることが出来なかった映画を航空機内でビデオ鑑賞すること事が出来たことは唯一の救いであり、楽しみでした。



写真-1 羽田空港にて

2. 水の都ヴェネツィアと美しき都市フィレンツェ

ヴェネツィアは水の都と言われる様に、水路が街中を走っており、移動は船か徒歩によることとなります。観光地であるため、観光客が目立ちます。

サン・マルコ寺院とサン・マルコ広場は、広々とした広場とそれを取り囲む建物が調和して、開放感のある素晴らしい風景でした。

サン・マルコ寺院の大きさと壁画の美しさに目を見張り、そして大鐘楼から見たヴェネツィアの風景は近くに街並みが遠くに海が広がって見えると言う、非常に美しいものでした。

楽しみにしていたゴンドラクルーズは、2艘が1セットとなり、後ろのゴンドラでは歌と演奏が行われ、その歌声を聞きながら街中の水路を行くものであり、景色と風

情をたっぷりと味わう事が出来ました。

ヴェネツィアガラス工房を見学し昼食後自由行動では、ゆっくりと進む水上バスに乗船し、地中海の香りを味わいながらサン・ジョルジョ・マッジョーレ島にあるサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会へと向かいました。

塔の上より見た対岸のヴェネツィアの街並みは、眼前に広がる海の青さと見事なコントラストを描ききれいでした。

食事は、朝はホテルにてバイキング、昼はイカスマイスタ、夜は海鮮料理。

昼食のデザートには、ティラミスができました。本場のティラミスに少し満足しました。

夕食の地中海料理は、ちょっと残念でしたが、ビールとワインは堪能しました。

また、料理の量が、一皿毎に隣の人と違っていることに驚くも、イタリアのおおらかさか何故か不思議と納得してしまいました。



写真-2 ホテル前の情景



写真-3 ゴンドラクルーズにて

翌日列車にて、麗しの都市フェレンツェへ。イタリアの列車は時間通りでしたし、乗り心地は良く快適でした。

到着後、ミケランジェロ広場より市内を眺望、広がる赤茶色の屋根と教会という、映画「フェレンツェの風に抱かれて」で憧れた美しい風景が広がっていました。

アカデミア美術館にてミケランジェロ作「ダヴィデ像」を鑑賞し、ドゥオモのクーポラの見晴台への464段

の登りは大変でしたが、眼下に広がる町並みは美しく、吹く風は心地よく疲れを忘れてしまう程でした。

ウフィツィ美術館では、ボッティチェリ作「ヴィーナスの誕生」をはじめ、ダ・ヴィンチ作「受胎告知」、ラファエロ作「ヒワの聖母」、カラヴァッジョ作「バックス」とルネッサンス期の絵画を鑑賞しました。

しかし、時間の関係で広い美術館内を走り回りの鑑賞となったのは少し残念でした。

自由時間に、ヴェッキオ橋を散策しましたが、橋の両側に立ち並ぶ金製品の店舗に驚くとともに金製品に目を奪われました。

食事は、朝は昨日と同じホテルにてバイキング、昼はピザ、夜はT ボーンステーキ。

ピザは、マルゲリータをはじめとする三種類で、4人で分け合うこととなりましたが、大変満足しました。

夕食のT ボーンステーキは、期待を裏切ることなく、香辛料を肉にまぶして焼いただけのシンプルなものでしたが、ジューシーな肉の味を十分に堪能することができて、非常に満足のいくものでした。



写真-4 フェレンツェの街並み



写真-5 アルノ川とヴェッキオ橋を背景に

ここで、フィレンツェでの失敗について。

昼食後、ドゥオモに移動したのですが、入場時に昼食をしたレストランに帽子を忘れたことに気がきました。

添乗員さんよりレストランに連絡していただいた所、預かっていただけてとの事でした。

しかし、異国の地にて自分で取りに行く事も出来ず添乗員さんをお願いして、取りに行って頂きました。

添乗員さんに大変ご迷惑をおかけして申し訳なく思い

ました。

これ以降は、忘れることが無いようにと十分に注意をしたのは当然です。

3. 旅の最後は憧れのローマ

前日に続き、列車にてローマ・テルミニ駅へ。

フォロ・ロマーノの遺跡にてかつてのローマ帝国時代に思いを馳せ、次にコロッセオを見学しようとするも入場制限のため入場できず外周に並んだ時、その大きさを実感し、この様な巨大建造物を紀元80年頃に作ったローマ人の偉大さに改めて感服しました。

サンタ・マリア・イン・コスメディン教会では「真実の口」に手を入れ記念撮影。部屋の中にあるものと思っけていましたが、廊下にボンと置かれていたことに、驚きました。

午後からは、ヴァチカン市国へ。カトリック教の総本山だけに、観光客は多く、建物は荘厳で、建物を飾る装飾や彫刻に目を奪われました。

ヴァチカン博物館に入館し、システリーナ礼拝堂にてミケランジェロ作壁画「最後の審判」を鑑賞。透ける様な青色の美しさに目を奪われ、スケールの大きさに感動しました。

礼拝堂の中は撮影禁止で残念でしたが、人混みの中で見たミケランジェロ作の天井画の素晴らしさは、見る者を圧倒する素晴らしさでした。

そして、廊下に飾られていたタペストリーの美しさやイタリアの古地図そして天井画の美しさ。将に「百聞は一見に如かず」とはこの事でした。

この日の食事は、朝はホテルにてバイキング、昼はカルボナーラ、夜はコース料理でした。

朝のパンケーキがおいしかった。昼のカルボナーラは、濃厚なクリームとチーズとのバランスが良くそれだけでも十分でしたが、途中で粒胡椒を加えてみるとピリリと味が締まり満足のいく一品でした。

イタリアでの最後の晚餐は、ピアノ生演奏と生歌付きのコース料理。イタリア語の歌を聴きながらワインと共に、最後の夜を楽しみました。

やはり、ローマかと思ってしまうほど、この日の食事が、最も美味しかったです。

翌日、イタリア最後の日。映画「ローマの休日」のようにスペイン広場で階段に座ってジェラートを食べることは出来ませんでしたが、トレヴィの泉にコインを投げ込みジェラートを食べる、というローマに行つて一度はやりたいたと思っていた事が経験出来ました。

食事は、朝ホテルのバイキングにて、クロワッサンを食べましたが、バターの甘味が口の中に広がり大いに満足しました。

ジェラートは、3日間毎日食べましたが、トレヴィの泉の近くで食べたジェラートが、最も美味しく思いました。



写真-6 コロッセオの内観



写真-7 真実の口に手を入れて



写真-8 ヴァチカン広場



写真-9 朝のスペイン広場

4. おわりに

今回、天気にも恵まれ、初夏のような陽気の中、毎日約1万5千歩前後の距離を歩き疲れましたが、今まで書物や映像でしか見る事のなかった美術品、建造物や風景を実際に間近で見たことは、大変良い経験となりました。

街並みを歩いては、日本ではなかなか見ることのできない市内の至る所にある教会と広場そして石畳の道路、それらが織りなす街並みの一体感の美しさに感銘を受けました。

また、各観光地ともセキュリティは厳しく、美術館等への入館に際しては必ずセキュリティチェックを受けることとなりました。

しかし、入館後は厚いガラスに阻まれる事もなく絵画のすぐ近くまで寄って鑑賞する事ができましたし、名画の間近に立って記念撮影している人もいることに驚きを感じました。

また、街等で機銃を持った兵士の姿をよく見かけ何とも言えない重々しさを感じると同時に、日本国内が如何に安全であるのかという事を再認識しました。

そして、食事についてイタリアと言えばパスタとピザそしてワインですが、パスタとワインそしてビールを毎日十分に楽しみました。

日中強い日差しの中、街中を歩いて移動する事が多かったため、冷えたビールがどうしても恋しくなりワインよりもビールを飲むことが多くなってしまいました。

そして、ビールは、各地でそれぞれ種類が異なりましたが、各ビールとも意外と飲み安くておいしくいただくことができました。

お土産は、ヴェネツィア仮面、ヴェネツィアグラス、ワイン、平打ちのパスタ、オリーブオイル、チョコレートそして妻へのカメオを買い求めました。

また、帰りに乗り継ぎで立ち寄ったミュンヘン空港にて、ビールと缶詰のソーセージ等を買いました。

イタリアまで飛行機で片道12時間以上の旅行でしたが、事故や盗難に遭う事なく、無事高知に帰って来ることが出来たことに今はほっとしています。

最後に、今回、イタリアの文明や文化に触れる貴重な経験を人生の1ページに刻むことができたことは大変喜ばしく思っています。



写真-10 イタリア最後の夜に、乾杯！

はじめてのヨーロッパ・イタリア旅行

調査部 調査補償課 副技師長
田中 聖一 (1987年入社)

1. はじめに

今回の社内旅行は、2015年に心筋梗塞で行けなかった北海道依頼3年ぶりの参加となった。機内での急激な気圧変化やエコノミー症候群に対しては少々不安を感じていたが、主治医より階段を上るなどの上下運動をしなければ大丈夫との言葉を頂き、参加することとした。初のヨーロッパ・イタリア行きを大変楽しみにしていたので良かった。

2. 往路(フランクフルト経由ヴェネツィア行き)

高知龍馬空港では、日頃と異なるラフな出で立ちで皆、定刻前に勢揃いする。懐かしい顔も見られた。いざヴェネツィアへ。初めてのイタリア旅行への期待と、これから始まる長旅に対する不安が交錯する。

LH717便(Boeing747-8)に搭乗する。LHのエコノミーは狭いと聞いていたが、その通りの窮屈なサイズだった。けっしてメタボ体型から来るものではない。各席には専用のモニターが設置されており、最新の映画等の鑑賞できた。寝付きが悪かったせいもあって3本鑑賞した。最後の3時間くらいは、靴の中で足が膨れ上がり、痛さを我慢するあまり体に力が入ったのか不整脈の予兆を感じるほどだった。

ドイツ・フランクフルト空港で、ユーロ圏への入管手続きを取る。乗り継ぎまでの少しの間、自由時間を過ごす。建物の外に出てドイツの空気を吸う。



フランクフルト空港の屋外・遠くに喫煙場所が見える

当たり前だがドイツ車が多い。ベンツなどの高級車が目につく。行き交う車を見ながら立ち止まると、目前にタクシーが泊まり、乗車を促すポーズを取る。「No!」と答えたので通り過ぎたが、大阪のタクシーを思わせる様な積極的な客引きだった。

保安検査場では、アフリカ系の係員が大きなゼスチャーをするのが気になり、順番の列をそちらに移動してみた。案の定その係員は軽快な口調とゼスチャーでバックの中身を見せるように促す。電子機器は全てトレイにひろげるように指示され、タブレット、カメラ、iPhone、

Wifi等と互いにしゃべりながら確認する。最後に私に対して、真顔でズボンと言ったと思うが、下げるゼスチャーをして見せた。さすがに「ズボンNo!」と強く断った。笑いの中検査場を後にしたが、かなりおちょくられていたと思う。

ヴェネツィアに着き深夜のバス移動、ホテルへ向かう。空港からヴェネツィアに架かるリベルタ橋手前のジャンクション付近では、前方小型車が緩慢なハンドル操作センターラインをはみ出した走行をしていたためか、バスの運転手がいらついていたのかは解らないが、ラインをはみ出す事があった。その性かフロントガラス越しに見える道路は少し窮屈に感じた。

バスから水上タクシーに乗り換える。リベルタ橋付近から見たヴェネツィアは、水面に夜景が浮かび上がりこのままホテルへ行き就寝するのがもったいないような光景だった。24時半頃、ボスコロ ホテル ベッリーニ到着、期待と疲労の中、爆睡する。

3. 水の都 ヴェネツィア

ホテルのトイレに奇妙な器具?これは、イタリアやスペインに多く見られる「ビデ」というもので、股間等を洗浄するためのものだそうだ。日本には手軽に使えるウォシュレットがあるのだが…。このホテルにはもう一つおもしろいエレベーターがあった。貴族の古い邸宅を改造したのだろう。かなり狭い。一見普通に思えるが行き先のボタンを押しても光らず、複数階をランダムに押すと階順を無視し、最初に押した階へのみ行く。2度目以降に押した階は無かったことになっている。また、反応がいちいち遅く、昇降スピードも格段に遅い。ゆっくりなお国柄の性か?

翌日の朝は、水上タクシーでサン・マルコ広場へ向かう。徒歩移動中、運河に掛かる“ため息橋”をバックに各々記念撮影。混み合う前に大鐘楼を見学する。展望はすばらしく、世界遺産にふさわしく、どころ切り取っても絵になる光景。皆、それぞれにシャッターを押す。名カメラマンだ!その後サン・マルコ寺院へ、黄金のモザイクがすばらしい。1階(ここでは0階)の床は凹凸がある。特に建物の壁側が沈下しているように見えた。海水に浸かった時の水抜き穴があり、浸水の度に塩水を洗い流すそうだ。老朽化もあり常に修復をしているとの事、世界遺産の維持も大変な努力が必要だ。



外装修理中のサン・マルコ寺院

サン・マルコ広場を北に抜けた先に在るヴェネツィアングラスの工房で実演見学する。その工房で小さいが金ぴかのヴェネツィアンアグラスを購入。(店では輝いていたグラスが、家では普通の色付きの硝子コップに見えるのは何故だろうか?)

次にホテル・パウアー前の上船場より街中を巡るゴンドラクルーズとなった。後ろのゴンドラからオルガンの伴奏に合わせカンツォーネが聞こえる。見知らぬ観光客も笑顔に変わる、思わずシャッターを押す人も!この辺は万国共通か?絵に描いたような光景「水の都ヴェネツィア」を満喫する。JTB の粋な計らいに感謝したい。



ゴンドラクルーズを満喫

遅くなった昼食は、イカスマイスタ、味付けはどこか物足りないが、麺はモチリとしていた。サラダにはワインミネガーではなくドレッシングが欲しい。日本ではイタリアンドレッシングが販売されているのだが、本場では見かけなかった。でも、ワインは美味。(帰国後、ワインにはまる。)

自由時間は、リアルト橋からサン・マルコ広場に戻り水上バスでサン・ジョルジョ・マジョーレ教会のある島へ渡る。またしても教会の塔に昇る。日本もそうだが、観光ではよく高いところへ上がる事が多い。先程までいたサン・マルコ広場を対岸より展望する。硝子工房も近くにあったが、リュック禁止とのことで退散することにした。(この辺りのことは事前のレクチャーが欲しかった)ヨットハーバーが隣接した通路に帆を広げ、折りたたんでいる光景を見ながら帰路に。ここでは日常的な光景に違いないだろうが、異邦人としては、いちいち感動した。

当初は、水上バスで駅の近くまで帰るつもりをしていたが、誰からとも無く町歩きの声が上がり、サン・マルコ広場に引き返す事とした。水上バスは時刻表より15分程度遅れて到着した。ここでも、おおらかなお国柄を感じた。ゆっくりな人生も良い。案外と性に合うかもしれない。

上陸後は、Google の導くまま、幾つもの路地裏を抜け露天の立ち並ぶストリートに出た。台湾・九份老街の路地では良く猫を見かけたが、ここでは注意していても全く見る事はなかった。露天ではフルーツや土産物が売ら

れていた。中には、バックなどの商品を路上にそのまま置いて売っている人もいる。かなり怪しい感じがした。グリエ橋を渡りホテルへ到着。全行程40分足らずの道のりを、重い足の性で倍の時間を掛けた。

水の都ヴェネツィアはまさに世界遺産であり全てが絵になる街、沢山の人が活気ある観光の街だった。

機会があれば是非もう一度訪れたいものだ。

4. 芸術の街 フィレンツェ

カンツォーネのような名前のサンタ・ルチア駅よりItaloの特急に乗りフィレンツェへ。この駅には改札が無いことに驚いた。実はホームに自動検札機があり、チケットに日付と時刻を刻印するシステムで有ったことを後で知った。乗り心地は至って快適、至って古いたとえだが、日本のひかり号のような耳詰まりが無い。

フィレンツェ・サンタ・マリア・ノヴェツァ駅到着後、バスでミケランジェロ広場へ向かう、フィレンツェを一望できる広場だ。小雨と言うことも有り、中国人観光客を数で圧倒し、足早に記念撮影をすませ、アカデミア美術館でミケランジェロ「ダヴィデ像」等を鑑賞する。ここも駆け足だった。

昼から、ドゥオモ・ジオットの鐘楼464段に挑むことに!医者からは止められていた行為だが、ここまで来たらやるしか無いと断行した。途中の階段幅は狭く、上に昇るにつれ、息もあがってくる。途中踊り場などで止まり、下から昇って来る人をやり過ごし、休憩を入れながら、やっとの思いで屋上に立った。そこからの展望は絶景、吹く風が気持ち良い。大げさだが、天国に召されたかの様な気分。いろんな意味で思い出深い場所となった。しかし、この場所に限っては、今生の別れを心に誓う。階段を降りて気づいたが、広場には救急車が4台待機していた。結構危ない場所なのだろうか?



ジェット鐘楼屋上にて安堵の表情

徒歩でシニョーリア広場を抜け、ウフィツィ美術館へ、またしても長蛇の列。早く終わる組とゆっくり廻る組の2班に別れての入館となった。中は大混雑、「ヴィーナスの誕生」等の美術品を足早に鑑賞する。現地ガイドの軽快な話に聞き入るが、すぐに、次へと移動する。ゆっくりじゃなかったの?何故か美術館を出たのは、2班

同時に出ていた。ただ、フィレンツェの大富豪でルネサンスの保護者として知られるメディチ家の歴史などを交えたガイドが心に残った。

自由時間が少し出来たので重たい、本当に重たい足を引きずり気力でヴェッキオ橋方面を徘徊する。途中で喉の渇きを癒すため、ジェラートを食べたが6Euroもした。食べ残しのカップコーンは広場の鳩にあげた。始めは良かったが、集まった鳩が喧嘩を始めたので、一時退散する。

今宵の宿泊は、ホテル ディプロマット、シンプルな外観をしている。ツインとダブルを取り違えると言うホテル側のミスでトラブルがあった様だが、JTBの奮闘で無事到着したようだ。昨日のホテルよりは近代的に感じたが、やはりエレベータの動きはゆっくりで籠自体もコンパクトだ。後から腹回りが1m50cmは優にあらうアル・カポネの様な風貌をした小粋なイタリア人男性が、カップルで乗り込んできた。先に降りることになったら通り抜けは困難に思えたが、予想は的中した。しかし、顔に似合わず一生懸命避けてくれたが、中では避けきれぬわけもなくお互い正面を向き合い、腹を擦り合いながら通った。エレベータの中はおどけた身振りや笑いに包まれた。イタリア人は実に陽気だ。

5. 永遠の都 ローマ

フィレンツェからローマ・テルミ駅までは、イタリア国鉄から民営化したトレニア社の高速列車「フレッチャルジェント」の2等で行く。天井の荷物置き場にスーツケースが置けず、通路に置く事となった。下車の際にはスーツケースリレーとなった。JTBの方、お疲れ様でした。

コロッセオ、フォロ・ロマーノ方面へは、バス移動。フォロ・ロマーノは、カンピドリオ広場、パラティーンの丘などの見所があるが、通った事すらわからない早さでサラリと抜け、足早にコロッセオへ向かった。

コロッセオでも長蛇の列が続く。ガイドが居ないとどこに並んで良いのかさえ分からないほどの混みようだ。入場後は、あっという間に見学を終え、凱旋門付近で集合写真を撮る。

サンタ・マリア・イン・コスメディアン教会へ向かう途中、何かのデモでもやっているのか、規制線が張られていた。しかし、参加者・警備側共に緊張感が感じ取れない。その警備の警官が立っている横を抜けて目的の教会へ行く。そこでは、日本で言う「お賽銭」を入れ、「真実の口」の前で各々が写真撮影。ローマの休日のイメージとはほど遠いが、本物と出会う事が出来た。国籍を問わず皆が、一応に噛まれたポーズをとるのは愉快的な光景だ。



ローマ三越のレプリカでの撮影

昼食後、ヴァチカン市国へ、ヴァチカン博物館、サン・ピエトロ大聖堂を見学。建造物は、とにかく壮大・荘厳であった。

出口で護衛兵の交代を見ることが出来た。交代を終え、扉を開けて去って行くのだが、見えなくなるまで行進を続けるのではなく、最後に普通のしぐさ戻った。何ともゆるりとした空気を感じる。

サン・ピエトロ広場で集合写真を撮る。旅行は体力が必要な事は十分承知していたつもりだが、実際はかなりきつかった。正直なところ歩き疲れていた。もし広場にベンチがあったら腰をおろしたいと探したが全く無い。後で広場が群衆でいっぱいになっている写真を見て、無いことに納得した。

夕食では、テヴェレ川近くのイタリア料理店、「Antico Casale La Carovana」で夕食をとる。ここでは、ピアノ演奏に加えてカンツォーネを生で聞くことが出来た。歌い手はひげ面の濃い顔の人。とても、とても感動した。最後に大量の食器の割れる音がフロアーに響き渡ったが、旅のご愛敬というところか。ただその性で、エスプレッソコーヒーを飲みそびれた。料理に関しては全体を通じて今ひとつと言いたい。どれも、ガイドブックやGoogleで見える料理の紹介とは大違いで少し品祖に感じた。

最後の宿泊先は、テルミ駅の近くにあるUNA・HOTEL・ROMA。その晩は、近くの店で水を買ひ、おとなしく就寝した。翌朝、ホテル周辺を徘徊してみた。6時を少し過ぎた位の時間帯であったが、テルミ駅構内は賑わっている。通勤と思われるが、一応にラフな服装ではあるが、小粋に着こなしをしている。しかし、路上は、タバコの吸い殻が散らばっている。ヨーロッパはもっと進んでいると思っていたがそうでもない様だ。また、車道・歩道を問わず石畳の痛みが目立つ。古い教会や広場、大きな街路樹、モニュメント等が調和したすばらしい街だ。

ホテルに帰り、慌ただしい朝食を取った後、スペイン広場へ向かう。ここで集合写真を撮る。すぐさまトレヴィの泉に行き、ローマへの再来を祈願してコインを投げる。投げ方は、後ろ向き、左肩越しに右手で投げる。入ったと思うがポチャンと言う水の音などは周囲の音に消されて聞こえない。1コインはローマへの再来、2コイン

は相手への思いが叶うように、3 コインは相手との決別を願うそうだ。私は1 コインを投げたが、さて他の皆様は...? 20 分程度の自由時間にガイドお勧めの店でジェラート買い、店の前で立ち食い。付近はテレビのロケや道路工事、泉に流れ込む水の音や雑踏がして大変慌ただしかったが、ジェラートは誠に美味だった。慌ただしくも心に残るイタリア・ローマ観光を終了し、ローマ・レオナルド・ダ・ヴィンチ空港へ、そこからはドイツ・ミュンヘン空港経由で羽田、高知龍馬空港への帰路の始まりだ。

6. 復路(ローマ⇒ミュンヘン⇒羽田→高知)

ミュンヘン空港で乗り継ぎの合間に、ビールとソーセージを頂く。ほんの一時だが、ドイツ観光気分を満喫する。ヨーロッパ、イタリア・ドイツの二カ国踏破か? イタリア・日本間の道中は長く辛い、ちょっと得した気分になる。



ミュンヘン空港にてビールとソーセージで乾杯。

ソーセージを頼んだ時のウェイトারの言葉「One Portion? Three Portion? 年寄り、One Portion!」一同 Shock! 大笑いした。

16 時過ぎ、LH714(A350-900)に搭乗する。後は、11 時間 35 分間ひたすら忍耐の時だ。行きの教訓から靴紐を緩くして首枕などを用意した。しかし、到着する頃には足先がむくみ、大変窮屈な思いをした。加圧パンツなどで、リンパの流れを調整すると良いらしい。(この話は日本に到着してから教えてもらった。)帰りの機内では、疲れて寝た性で映画鑑賞は2 本だった。

翌朝、羽田空港に到着する。ただいま日本。

7. おわりに

出発前の天気予報では、フィレンツェ辺りで雨の予報が出ていたが、傘を差すようなこともなく、ほぼ好天の中無事旅行を終える事が出来た。これは日頃の行いの良い、強運の持ち主の集団であったに違いない。この旅は、ドイツ・イタリアの2 カ国に渡り異国の文化に接し、仕事仲間と寝食を共に出来、大変有意義だった。また、冥土の土産とまでは言わないが、一生の思い出になった。最後に同行の皆様には大変感謝致します。お世話になりました。

イタリア観光 3 都市を巡って

調査部 調査補償課 主任技師
柴田 昭英 (1981 年入社)

1. はじめに

創立 55 周年記念のヨーロッパ社員研修旅行に参加させていただいた。コースはイタリア 6 日間、フランス 6 日間、ドイツ 6 日間のいずれかを選択でき、どれも魅力的であるがヴェネツィアには一度行ってみたいと思いイタリアコースを希望した。

2. ヴェネツィア

日本からフランクフルト経由で 16 時間、夜のヴェネツィア空港に到着。バスでホテルへ。ヴェネツィア市街地は自動車乗り入れが禁止されている。本土との長い橋を渡ったところで水上バスに乗り換えサンタ・ルチア駅近くのホテルへ。観光は明日から。

朝、身に煙を取り込む必要もあり日の出前からカメラをもって周辺をうろろと。ホテルはカナル・グランデにかかるスカルツィ橋の北岸にある。カナル・グランデはヴェネツィア本島を二分する大きな運河で S 字に蛇行しており、右岸か左岸か概念はわからないが、駅やホテルは北岸になる。



夜明け前のカナル・グランデとスカルツィ橋



自転車も乗入れ禁止。これは OK?
サン・マルコ広場にて

水上バスで観光へ向かう。かつてナポレオンが最も美しい広場と賞したサン・マルコ広場へ。ここでは広場を囲むようにサン・マルコ寺院、ドゥカーレ宮、時計台、鐘楼などが並ぶ。南側は海に面しており、古くからヴェネツィアの海上玄関口となっている船着き場がある。

一行はまずエレベータで鐘楼に昇る。ヴェネツィアで最も高い所から島全体を見下ろすことができる。ほとんどの建物が茜色の瓦屋根、合間に見える壁面もベージュ、黄、ピンク、オレンジなどの暖色で、海の暗さとはっきり区別され、島の輪郭がよくわかる。

現地ガイドの案内でドゥカーレ宮へ入館。ペースが速い。イヤホンガイドはよく聞こえるが、少し列から遅れるとガイドがどれをさして説明しているのかわからない。結局一通り観るにはみたが、みどころがよく頭に整理できないまま終わった。残念。

ヴェネツィアガラス店へ案内された。上の階で職人さんの実演があり、息で膨らますものと、火箸でつまんでグイグイ引き延ばすものの2作を見せて貰った。フラスコ型に膨らませ取手を後付してできた花瓶、火箸は赤く溶けた丸い塊から所々クイクイとつまんで引き延ばし、ほんの数秒で馬の形に仕上げた。ただ2作とも透明仕上げで、あの特徴的で美しい色に仕上げるには何を混ぜるのだろう。商品は下の階のショップで販売しているが、派手すぎて好きでもないし、買って帰っても使わないし、高価だし、家に一個だけ派手なグラスが並んでいても変だし、なので買わない。もちろん同じものは二つと無く、工芸品として楽しむものだろうが、琉球ガラスとの違いもわからない自分にとってはもったいない。

ゴンドラに乗ることができた。ヴェネツィアといえばゴンドラでしょう。6名程のグループに分かれて順番に出発する。ボーダーシャツの船頭が船尾で櫂を操り静かに進んでいく。横揺れが楽しい。観光客がごったがえすメイン通りの乗り場から狭い水路へ進むにつれ、周囲はとても静かになってくる。自動車の走らないこの町はもとも静かだが、船着き場のエンジン音や観光客のざわつく音も届かなくなり、とてもリラックスできていい気分だった。入国してからずっと警戒しているスリもここまでは手が出せないはず、思いっきり緊張を解き放つ。

後ろの船にはアコーディオン奏者と歌手が乗っていて、両側壁に囲まれた水路に生の歌声が響きわたる。

どの家からも必ずこの水路に出入りできる勝手口のような入り口がある。ただ、こちら側からは民家なのか店舗なのか、番地すらわからない。生活感もなく、ほとんど利用していないような感じだったがどうだろう。

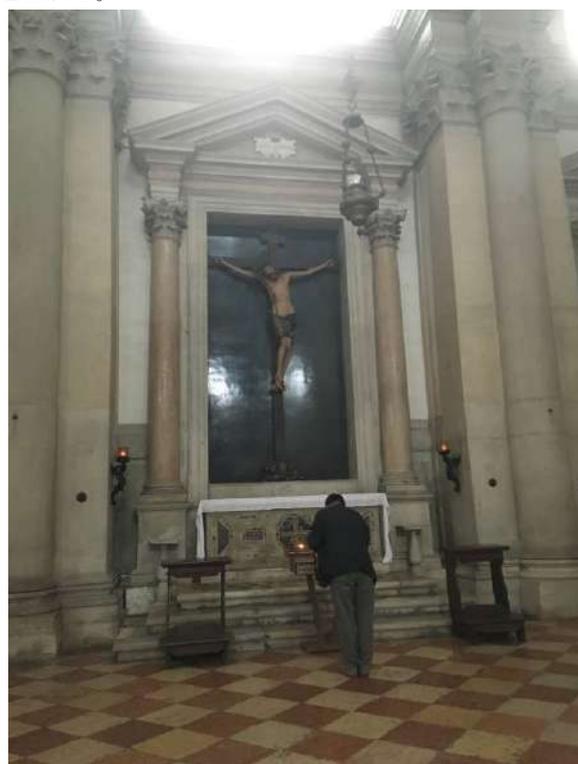
交差する通りの橋の上では観光客がスマホを構えている。もちろんゴンドラの風景を撮っているのだろうが、結構、知らない人のスマホにおじさん6人の画像が保存されたに違いない。

昼食はイカスのパスタ。味が薄い、味が無いという人もいたが、私は「イヤイヤこれでいい。おいしい。」



ゴンドラからの風景

午後は自由行動、夕食までにホテルに帰ればいい。サン・マルコ広場の向かい見える島のまるで海に浮かんでいるような教会、サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会へ行ってみた。ここはさきほど目にしたサン・マルコ寺院の装いとは異なり、彫刻や装飾が少なく厳粛さが感じられる。なかに入ると十字架にかけられたキリスト像もあり、悲しげで会話することも許されないような雰囲気包まれる。



サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会

本島へ戻り、るるぶから引きはがした地図を頼りに徒歩でホテルまで向かう。ずっと壁に囲まれた迷路のような町なので地図を読むセンスの無い人は迷うかもしれない。結構な裏路地を通っている。ショーウインドウの土産店やカフェなどは極端に少ない。メイン通りも裏通りも地図では同じ表示なので通ってみないとわからなかった。建物内部をくぐる通路も普通に道の表示だし、急に直角に折れて前も後ろも見通せない所、すれ違いはできるがかなり狭い所もある。それでもこの先に何があるかわからないところが楽しい。突然、教会前の大広場に出たり、かわいらしい小さな石橋をいくつも渡ったり、広場で楽器を演奏しているグループに遭遇したりした。

夕食はホテルのすぐ隣のレストランで魚介系のコース料理をいただいた。ここでも料理に満足できないという人もいたと思うが、「イヤイヤこれでいい。おいしい。」

3. フィレンツェ

町中がルネッサンスの宝庫といわれるフィレンツェに入ったのは午前10時ごろ、一行はまず、市街が一望できるミケランジェロ広場へ向かう。ドゥオモ(大聖堂)が不自然に、また異様に大きい。たぶん、観光客全員の視線はその一点に集中していたに違いない。他に何が見えた？と訪ねても誰もすぐには答えられないだろう。

旧市街は観光バスの乗り入れが禁止されているらしく、次に向かうアカデミア美術館へは手前から徒歩での移動となる。アカデミア美術館はダヴィデ像が有名。台座もあわせて5m位はあるのか、展示は背中側も観ることができるが、やはりダヴィデ像は正面からの方がよい。ここでもガイドとペースが合わず、適当に観て回った。

ピザの昼食をとり、ドゥオモのドーム屋根クーポラに上る。下から眺めるこの巨大な建築物はもう「すごい」としか言い様がない。ドームの頂上へは予約制で400段以上の階段を上ることになる。入場すると心の準備をするまもなくすぐに階段が始まった。一人分しか通れない狭い階段が延々と続く。時折、通路は向きを変え、また上る。一旦、ドーム内部の天井画が間近に見えるバルコニーに出る。呼吸が荒いので眺める余裕もなく、後ろの人が迫ってくるので立ち止まれない。また階段を上り始める。降りる人も同じ階段を使うところがあり、道を譲ることになる。そんなときは内心ありがたい。息を整える。

到着、風が気持ちいい。上ってみて思ったが、ここから観るフィレンツェの町並みは面白くない。逆にシンボルであるこのドゥオモを眺めてこそフィレンツェの魅力だと思った。広場へ降りて休憩しながら今度は真下からドゥオモを眺める。ジョットの鐘楼、サン・ジョヴァンニ礼拝堂が建ち並び、建物の外壁は白、緑、赤の色大理石が交互に配置され大変美しい。



ドゥオモ広場の賑わい



色大理石が美しい



革製品などの露店市

フィレンツェでもう一つ有名な美術館、ウフィツィ美術館へ、ここはダ・ヴィンチ、ラファエロ、ボッティチェリなどの作品が所蔵されている。後で調べたが、元は役所の事務所で、事務所美術館＝オフィス美術館の意味らしい。ここでも現地ガイドのイヤホン案内付き、今回は遅れまいと思いがガイドにぴったりと張り付く。ガイドも上手に我々をベストなポイントに誘導してくれて、「ヴィーナスの誕生」、「プリマヴェーラ」など知っている作品を前にイヤホンでわかりやすく解説してくれた。「いや、待てよ」ここで失敗に気づく。こんなことならもっとこの美術館について予習しておけば良かった。そしたらもっと深くフィレンツェを味わうことができたのでは無いか？今回の旅行ではヴェネツィアに気を取られ、フィレンツェを軽くみてしまっていたと反省している。

夕食まで1時間弱の自由時間がありヴェッキオ橋まで行ってみた。歩いただけで特に買い物などはしていない。時間があれば土産物店や露店の市場などをのぞいてみたかった。

この日の夕食は郷土料理のピステッカ(Tボーンステーキ)だ。出発前からガイドブックの写真など見て楽しみにしていた。運ばれてきたのは写真と違いちょっと黒い。焼きすぎか？イヤイヤこの豪快さがいい。

4. ローマ

ローマを訪れるのは2度目である。トレヴィの泉にコインを投げれば再度ローマを訪れることができる。その通りになった。観光の行程は古代ローマの遺跡フォロ・ロマーノとコロッセオ、真実の口のあるサンタ・マリア・イン・コスメディン教会、ヴァチカン市国にあるサン・ピエトロ大聖堂とヴァチカン美術館、翌日にスペイン広場～トレヴィの泉のコースを巡る予定だ。いずれも2度目の訪問となる。前回は少人数のツアーで旅行会社が準備したタクシーに乗り石畳の路地をかつ飛ばしながらどこをどう通ったかもわからず連れ回されたことを記憶している。今回はバスと徒歩になる。地図で現在地を確かめながら移動することにする。こう見るとローマの町は意外と小さいと気づく。スペイン広場からトレヴィの泉まで簡単に徒歩で行けるとは思っていなかった。

フィレンツェ駅を朝出発し、10時前にローマに到着。一行はバスに乗り換え古代ローマ遺跡のフォロ・ロマーノ、コロッセオを下車観光。イヤホンガイド付きとはいえ古代ローマのことは生半可な知識ではわかるはずが無い。とりあえず写真とこの眼に焼き付けて、帰ってから暇があれば調べてみようと思った。

コロッセオは迫力がある。今回、中に入ることができたが、内部や間近で見ると少し離れた所から眺めた方が好きだ。実は今回バスで向かう途中に見たコロッセオが最も迫力があつた。バスが左折した瞬間、コロッセオの外壁が手前のいくつかのビルの背景を埋め尽くすような感じで見えた。その一瞬が今でも眼に焼き付いてい

る。

真実の口を観光し、名物カルボナーラの昼食をとり、ヴァチカン美術館へ。ここでのみどころはミケランジェロによるシステリーナ礼拝堂の天井画と壁画。ヴァチカン美術館で使用できるガイド用イヤホン機器は指定のもののみを借りることになる。ただし、システリーナ礼拝堂だけはイヤホンも使用できない。入室中は会話も禁止らしく集合時間を事前に決めての観覧となった。時間も十分あり観覧に集中できた。その後、サン・ピエトロ大聖堂、ヴァチカン広場を観覧。ホテルに一旦入り、夕食はバスで郊外のレストランへ。カンツォーネを聞きながらワインと料理をいただく。

最終日、スペイン広場からトレヴィの泉へ。トレヴィの泉は特に美しい。彫刻の像や背後の建物自体も素晴らしいが、その台座となっている自然地形を模した部分も良いし、流れ落ちる滝の音も良い。池の色も良い。池の縁やアプローチの階段が弧を描いているところがまた美しい。道路から眺める水平目線を基準として、それらの高低差もちょうど良い。



トレヴィの泉

5. おわりに

今回、参加させていただいて大変感謝している。イタリア主要観光3都市を巡るみどころ満載の充実した旅行であった。それでも限られた時間の都合で立ち寄れなかった場所やゆっくり時間をかけて見たかった場所もあった。ヴェネツィアではムラーノ島、ブラーノ島などにも足を運びたかった。フィレンツェは不思議な町で、そのときは騒々しい町だなあと思ったが、あとでじわじわ魅力が湧いてきて再度、訪れたいと思うようになっていく。また、今回もトレヴィの泉にしっかりとコインを投げた。ミラノ、ピサ、ナポリなど今回のコースに無かった所も一度は行ってみたいと思っている。是非イタリアパート2を企画して欲しい。「自分で行け！」と言われるでしょうが・・・。

どんな町か、どんな歴史か、どんな文化か、今はネットですぐに調べることができる。しかし、直接現地に行って本物を見る。現物に触れる。まずはそこから。それこそこの研修の意義だと思う。

世界遺産を巡る

調査部 調査補償課
那須 太郎 (2012年入社)

1. はじめに

イタリアは時差が-7時間である。これほどの時差がある所を訪れるのは初めてである。時差や環境によって体調を崩してしまわないかと不安ではあるが、初めてのヨーロッパ旅行。存分に楽しみたい。



イタリア到着後、景気づけの乾杯

2. ヴェネツィア

ヴェネツィアは、海に連なる潟湖(ラグーン)上に栄えた都市である。水の都として世界的に知られる。世界遺産に登録されており、大運河をはじめ100を超える運河が町全体に網目のように張り巡らされている。今回の旅行で一番楽しみにしていた場所である。

そんなヴェネツィア観光では、「サン・マルコ広場」「サン・マルコ寺院」「96mもある大鐘楼」「ドゥカーレ宮殿」「ゴンドラにて canal・グランドクルーズ」「ムラーノ島の散策」と盛りだくさんの行程である。

サン・マルコ広場は、ヴェネツィアの中心にありサン・マルコ寺院、ドゥカーレ宮殿、コッレール博物館、新政庁、時計塔に囲まれており、世界で最も美しい広場ともいわれている。この広場は高潮が来ると膝下ぐらいまで浸水してしまう。その際は、渡り廊下を張り巡らせて対応するそうだ。天候に恵まれて良かった。



ヴェネツィアならではの狭い路地

ゴンドラで canal・グランドクルーズを堪能することができた。ヴェネツィアの運河と調和のとれた建物に興奮を覚え、まさに水の都であると感じた。私が乗ったゴンドラにはゴンドラセレナーデという歌手と演奏者も同乗していた。ゴンドラに揺られ、歌に耳を傾けながら眺める街並みは、歩きながら見るのとはまた違った趣があった。



演奏中のゴンドラセレナーデ

ヴェネツィア土産といえば、ヴェネツィアングラス。旅行前から、5月3日に結婚式を挙げたばかりの友人に結婚祝いと思い、ペアセットで購入すると決めていた。喜んでくれるだろうか。

3. フィレンツェ

フィレンツェは、イタリアの北西部トスカーナ地方の州都である。ルネサンス発祥の地で、美術館、教会、広場をはじめ町全体が歴史の香りに満ち、赤い瓦屋根の古い町並みが印象的な街である。美しすぎる花の都と称され、街自体が世界遺産に登録されている。

そんなフィレンツェ観光では、「ミケランジェロ広場」「アカデミア美術館」「ウフィツィ美術館」「サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂」などを訪れた。

フィレンツェには、展望台やパノラマスポットが数多くある。その中で、ミケランジェロ広場はナンバーワンと言われている。

この花の都をバックに集合写真を撮った。今回の旅行で数々の集合写真を撮ったが、ここでの写真が一番良かった。



世界一の眺望もあいにく曇り空

アカデミア美術館は、ミケランジェロ・ブオナローティのダヴィデ像。ウフィツィ美術館では、サンドロ・ボッティチェリのヴィーナスの誕生、レオナルド・ダ・ヴィンチの受胎告知などを鑑賞することができた。いずれも代表作である(口絵写真8)。

サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂の頂上に行くため464段の階段を登った。運動不足である私にはとても辛い。頂上に着くと登った達成感もあってか、大パノラマの景色に感動することができた(口絵写真6)。

4. ローマ

ローマは、イタリアの首都である。古代ローマ帝国の時代から、ルネッサンス、バロック、現代と人類の歩みをそのまま今に伝える永遠の都でもある。

ローマでは、「フォロ・ロマーノ」「コロッセオ」「サンタ・マリア・イン・コスメディン教会」の観光。ヴァチカン市国では、「ヴァチカン美術館」「システリーナ礼拝堂」の観光である。

この日の一番の楽しみは、ローマの象徴であるコロッセオの観光。ローマの中心部に堂々と建つコロッセオは、西暦75年に建造が始まり、西暦80年から使用された。周囲527m、高さ48m。実際に見ると、その途方もない大きさが分かる。コロッセオとは巨大な物という意味らしい。これだけの巨大な建造物を、2000年前の人たちが造ったという事実。今もなお巨大建造物が2000年間倒壊せずにこの場所に立ち続けていることに驚きを隠せない。内部はまさにスタジアム。収容人数は約5万人と言われている。東京ドームと同等の収容能力である。その存在を伝える、12世紀の有名な言葉がある。「コロッセオが崩れる時、ローマが滅びる。そして、ローマが滅びる時、世界が滅びる。」それほどまでに、コロッセオとはローマにとって、世界にとって重要な意味を持っていたと考えられる。



コロッセオの内部

続いて、写真撮影定番スポットとなっている、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会の真実の口に訪れた。

皆一人ずつ順番に写真撮影を行った。映画：ローマの休日のワンシーンで、手を口の中に入れて抜けなくなる

というシーンでの撮影はお決まりみたい(口絵写真11)。

5. ヴァチカン市国

ヴァチカン市国は、イタリア・ローマ内にある世界最小の独立国である。国境は壁で覆われており、国土全域が世界遺産として登録されている。



意外と簡単に入国

システリーナ礼拝堂にある、ミケランジェロ・ブオナローティの超大作、最後の審判には圧倒された。これを見るためにヴァチカン市国に訪れたと言っても過言ではない。中央にいるキリストが死者を天国と地獄に分ける裁きを行っている場面が見てははっきりと分かる。向かって左側が天国へと昇天していく人々、右側が地獄へと落ちていく人々で400名以上もの人物が描かれている。写真を撮ろうと思った矢先、警備員に「No Photo」と注意されてしまった。あまりの凄さのせいか、ガイドさんに写真は撮ってはいけないと言われていたことをすっかり忘れていた。



礼拝堂内の通路にある彫刻のモノマネ

最終日となるイタリア観光は、スペイン広場、トレヴィの泉を観光する。

どちらも映画「ローマの休日」でおなじみである。トレヴィの泉はコインを噴水の中に投げると願いが叶うといった伝説が有名で(口絵写真14)、コインの投げ方や投げるコインの枚数に知らずと知れたルールが存在する。まず、噴水を背にして、右手で左肩越しに投げ入れることが基本姿勢である。コイン1枚の場合、ローマに再び来ることが出来る。2枚の場合、好きな人と結ばれる。3枚の場合、腐れ縁が切れる。コインであれば何でも良いみたいだ。皆が何枚投げたかは気になるが聞かないで置こう。

イタリアの名物スイーツと言えばジェラート。中でも特にローマには星の数ほどジェラートの店がある。コインを投げた後、近くのジェラート店で念願のジェラートを食べることができた。しかし、スペイン広場で食べることが出来たらと心残りがある(口絵写真15)。

観光を終え、飛行機でローマ空港からドイツのミュンヘン空港へと向かう。次の出発まで2時間程度あり、余ったユーロで最後の買い物を楽しんだ。



小腹を満たすためピザを食べる

6. おわりに

イタリアは、世界遺産の宝庫で、芸術、文化、観光、食、ショッピングと魅力が満載である。各観光地に訪れても驚きと感動で、テレビや雑誌などで見たことのある景色を実際に自分の目で見て感じることは、全くもって違う物だと思知った。

今回のイタリア旅行で皆とさらに親睦を深めることが出来た。長時間の飛行機移動辛かったが、アクシデントも無く、とても充実した6日間を過ごすことができた。今後はいろいろな国を訪れたい。

料理と芸術を堪能したイタリアの旅

幡多支店 調査測量課
那須 滉樹 (2013年入社)

1. 1日目

9時に高知空港集合で、高知空港→羽田空港→フランクフルト→ヴェネツィアと飛行機を乗り継ぎ、ヴェネツィア到着後、バス、水上タクシーでホテルへ。ホテルに到着したのは25時(日本時間は8時)で、丸一日移動となった。

ホテル到着後近くのお店で小腹を満たし、翌日に備えて休むことにした。



写真-1 ビールと夜食のピザ

2. 2日目

2日目はヴェネツィアを観光。

水上タクシーでサン・マルコ広場へ向かい、まずは大鐘楼へ登った。まだ時間が早かったため、10分ほどで登ることができた。鐘室からはヴェネツィアの街を一望でき、とても綺麗な景色を楽しめた。

ヴェネツィアの景色を楽しんだ後は、サン・マルコ寺院へ、寺院内は写真撮影が禁止で少し残念だったが神聖な場所であるので仕方ないかと思った。

次に、ドゥカーレ宮殿を観光。ヴェネツィア共和国の時代は総督邸や政庁だった。現在内部は美術館として公開されており、ヴェネツィア派の画家達の大作や天井画が飾られている。中でも、世界最大の油絵「天国」は大迫力であった。

ドゥカーレ宮殿の次はゴンドラでカナル・グランデクルーズ。歩いて見る景色とは違った景色をゆったりと楽しむことができ、とても良かった。

次に、ヴェネツィアングラス工房を見学し、昼食後は自由時間。

自由時間はムラーノ島に行くことに。水上タクシーにうまく乗れるか少し不安はあったが無事にムラーノ島に到着。島内を散策した後、サン・マルコ広場に戻り、ヴェネツィアングラスを購入してホテルに戻り、夕食。夕食は海鮮コース料理。あっさりしていてすごくおいしかった。

夕食後、近くのスーパーでパスタや調味料などのお土産を買い、ホテルに戻った。

3. 3日目

3日目はヴェネツィアから2時間ほど列車に乗りフィレンツェ観光へ。フィレンツェ到着後はバスに乗りミケランジェロ広場へ。

10分ほど写真撮影の時間がもらえたので「ダヴィデ像」のブロンズのレプリカと、フィレンツェ市街の写真を撮影した。曇っていたのが少し残念ではあったが、それでもかなりいい眺めだった。ある程度写真を撮影して、フィレンツェ市街をバックに集合写真を撮影して、アカデミア美術館へ。

ここでは、ミケランジェロの「ダヴィデ像」の本物が展示されている。

本物のダヴィデ像はミケランジェロ広場のレプリカよりも大きく迫力があり、かなりリアルで今にも動き出しそうだった。

美術館を出た後は昼食のピザを食べるため、お店まで徒歩で移動した。昼食後はドゥオモ・クーポラで464段の階段を上るので飲み過ぎないようにとの注意があったので、ビールは少しだけにした。

昼食を食べ終わり、いよいよドゥオモ・クーポラへ。階段は思っていたよりも狭く急で、かなりきつかったが、階段を登りきり屋上に上がると、フィレンツェの街が一望できとても気持ちよく疲れを忘れて景色を楽しむことができた。

ドゥオモ・クーポラから降りてくると、次はウフィツィ美術館を観光。

この美術館では「ヴィーナスの誕生」などの有名な絵を見ることができる。

ちょうど混雑する時間帯だったのか、かなり混雑しており、なかなか前に進めなかった。

ウフィツィ美術館の後は夕食まで自由時間となったので周辺のお店でお土産を見て回り、その後歩いてホテルへ。ホテル到着後、部屋に荷物を置いてロビーに再集合し、夕食を食べに近くのお店へ。この日の夕食はTボーンステーキ。歩き回ってお腹がすいていたのもあり、とてもおいしかった。夕食の後は周辺を少し散策した後、伊藤さんとホテルの近くの中華料理の店に行った。伊藤さんはラーメンを食べていたが、私はお腹が一杯で食べられなかったのので、ビールを一杯だけ飲みホテルへ戻った。



写真-2 夕食のTボーンステーキ

4. 4日目

4日目は、列車に乗りローマへ。

まずは、フォロ・ロマーノと、コンスタンティヌス帝の凱旋門を観光。凱旋門といえばパリというイメージがあるが、パリの凱旋門はこのコンスタンティヌスの凱旋門がモデルになっているというのを知り驚いた。

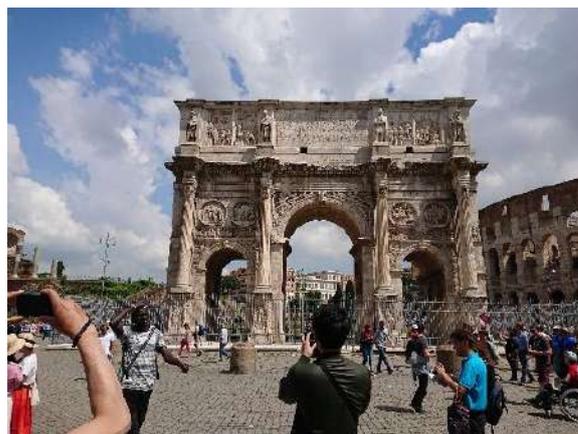


写真-3 コンスタンティヌスの凱旋門

次にコロッセオを観光。入場者が多くなりすぎて一時入場制限がされていたらしく、かなりの列になっていた。入場できるのか少し心配になったけど、無事入場できた。外観はテレビなどで見たことがあったが、中を見るのは初めてだった。

次にサンタ・マリア・コスメディアン教会へ行き、真実の口で写真撮影。30分ほど並び、自分の順番が回ってきたので添乗員さんに写真を撮ってもらった後昼食のカルボナーラを食べてヴァチカン市国観光へ。

ヴァチカン市国への入国はパスポートなどの必要はなく、所持品の検査だけで入国することができた。入国した後は、中庭のようなところでミケランジェロの作品の説明を受けた後、ヴァチカン美術館へ。中でも一番印象に残っているのは、システィーナ礼拝堂に描かれているミケランジェロの「最後の審判」だ。実物は想像していたよりも遙かに大きく迫力があり、色も鮮やかなものだった。写真を撮っておきたかったが、礼拝堂内は撮影が

禁止だった。

ヴァチカン市国観光の後は、スペイン広場に行く予定だったが、歩きっぱなしで疲れていた為、予定を変更し、三越ローマ店で買い物をすることになった。お土産をあまり買うことができていなかったの、ここでお土産を買うことにした。

1時間ほど買い物をし、ホテルに荷物を置き夕食へ。コース料理で、歌とピアノの演奏つきでとても盛り上がった。

夕食の後は、ホテルの近くのお土産屋でお菓子などを買った。イタリア最後の夜だったが、疲れていたの、ホテルに戻って休むことにした。



写真-4 夕食での歌とピアノ演奏の様子

5. 5日目

5日目は、イタリア旅行最終日で、スペイン広場とトレヴィの泉を観光した。

まずは前日行く予定であったスペイン広場へ。スペイン階段の前で集合写真を撮った後は、少しだけ自由時間がもらえたので、写真を撮ったり階段を上ったりした。

自由時間の後は、徒歩でトレヴィの泉へ。

トレヴィの泉には後ろ向きにコインを投げると願いが叶うらしく、コインを1枚投げ再びローマに訪れることができ、2枚だと大切な人と結ばれ、3枚だと腐れ縁が切れるらしい。ローマに再び訪れることができるというのは知っていたが、枚数によって願いが変わるというのは知らなかった。

コインを投げ入れて、写真を撮った後は、バスに乗り空港へ向かった。

空港到着後は免税の手続きをし、帰国へ。

行きはものすごく長く感じたが、帰りはあっという間に日本に到着した気がした。

6. おわりに

イタリア料理は思っていたより薄味だったがとてもおいしく、また普段はあまり見ることのない芸術作品を堪能できとても良い旅行となった。

2018年5月14日(月)～19日(土)

フランス

初めてのフランス旅行

設計部 統括部長
西川 徹 (2011年入社)

1. はじめに

今年のヨーロッパ社内研修旅行の行き先であるが、私は迷わずフランスを選んだ。その理由は、長男が昨年数ヶ月にわたりフランスで料理研修に行っていたこともあり、彼がどのような地で過ごしていたのかを肌で感じたいと思ったからである。

公私共々、ハワイや東南アジアを主体とした国々はよく旅行するのであるが、ヨーロッパは初めてであり、今回のフランス旅行はとても楽しみにしていた。

本文は、この旅行での出来事や感想について、①パリ市街地、②フランス北西部地方、③芸術文化、④食文化についてとりまとめた旅行記である。



写真1 パリの町並みと車の渋滞

2. パリ市街地

(1) パリ市街地の劣悪な道路事情

フランスの地勢は、国土面積55万km²、人口6,600万人、GDP25,830億ドルである。この値を日本と比較すると、国土面積1.45倍、人口0.51倍、GDP0.53倍となる。したがって、広大な国土でのんびりと生活するフランス人をイメージしていた。

しかし、パリ市街地は、古い建物が密集し、多くの渋滞と路上駐車車で溢れかえっており、劣悪な道路事情となっていた。街中も地元住民と観光客で混雑しており、お世辞にも「住みたい!」とは言える街ではなかった。

(2) エッフェル塔

エッフェル塔は、パリ万博に合わせて1889年に完成した高さ324mの鉄塔であり、現在も多くの観光客で賑わっている。建設当時は、その奇抜な外観から批判を受けていたようであるが、現在は鉄の貴婦人と呼ばれラジオ・テレビの電波塔としても利用されている。

エッフェル塔の3階(高さ276m)からのパリの街並みは素晴らしいのであろうが、今回は時間が無く見れなかったことが悔やまれる。

(3) エトワール凱旋門

この凱旋門は、「偉業をたたえ世界最大の門をつくれ」というナポレオンの命により、1806年に着工し1840年に完成した高さ50mの門である。

門の下にはフランス兵をまつた墓があり、多くの献花と追悼の炎が見られた。したがって、この凱旋門は日本の靖国神祇的な役割も果たしているようである。

凱旋門回りのラウンドアバウト交差点内の交通状況は、インドネシアのような無法状態であり、もし私が運転して交差点内に入り込んでしまったら、抜け出せないほどであった。しかし、地元の方は慣れたもので、強引であるが阿吽の呼吸で譲り合いながら運転しており、不思議とクラクションの音は聞こえなかった。



写真2 凱旋門の下にあるフランス兵の墓

3. フランス北西部地方

(1) シャトルルのノートルダム大聖堂

この大聖堂は、1145年から建て始め1220年に完成したものであり、ステンドグラスの美しさや堂内の荘厳さも素晴らしいものであった。

この尖塔の高さは113mであるが、このような大規模な建築物を、日本の鎌倉時代に建築したその技術力の高

さは凄いものと思う。その原動力は、天にいる神に近づこうとする信仰心からなのであろうか。

しかし、大聖堂の回りや堂内は多くの観光客で賑わっており、このような環境下でミサなど祈りを行わなければいけない敬虔な信者が少し気の毒に思えた。



写真3 多くの観光客の中でお祈りをする敬虔な信者

(2) モン・サン・ミッシェルの修道院

パリからモン・サン・ミッシェルへのバスでの移動距離は370kmあり、その間はEU最大の農業大国らしく小麦畑と酪農地が延々と続く単調な景色が続いた。

モン・サン・ミッシェルの修道院は、966年に建築が始まり、増改築を重ねて13世紀にはほぼ現在の形になったそうである。

修道院からイギリス海峡を望むと、遙かかなたに地平線が広がる絶景に驚いた。しかし、これが満潮時には水平性になると思うと、まだまだ世界には凄い絶景があるものだと思った。

修道院の内部は、長年の増改築により礼拝堂、食堂、回廊など様々な部屋が迷路のように配置されていた。

今回は、この絶景を望めるホテルに宿泊することができたので、夜間にライトアップされた荘厳な姿と、早朝の霧に隠れた幽玄な姿を望むことができたのは貴重な体験であった。



写真4 満潮時には+15mの潮位となり海が押し寄せる

4. 文化芸術

(1) ルーヴル美術館

ルーヴル美術館は、歴代フランス王の王宮殿を利用した世界最大の美術館であり博物館でもある。

今回、有名なモナ・リザ、ミロのヴィーナスをはじめとして全てのフロアの作品を見ることができた。しかし、あまりの作品数と広大な展示室のため、5時間もの時間を要してしまった。しかも、観覧途中で現在位置が判らなくなり、恥ずかしくも迷子状態となってしまった。

もし、この建物が戦争の空襲などにより焼失してしまったら、人類の大損失になると確信できる貴重な遺産とその展示数であった。

また、館内は本物の美術作品を前に校外学習や模写の場としても利用されており、質の高い美術の学習を受けられることは羨ましく思えた。



写真5 名画を前にした子供達の校外学習

(2) オルセー美術館

オルセー美術館は、1900年に鉄道の終着駅として建てられた駅舎をそのまま美術館として利用しているものである。ここでは、ルノワール、ミレー、ゴッホ、ピカソなどの絵画を鑑賞することができた。

ここも0階から5階まで、多くの絵画と彫像の展示数があり、鑑賞には3時間程度の時間を要した。

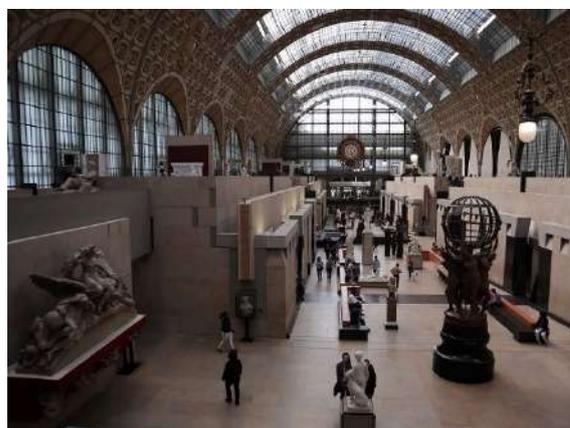


写真6 鉄道の駅舎であったオルセー美術館

(3) オランジュリー美術館

オランジュリー美術館は、もともとはオレンジの温室だったが、1927年モネの「睡蓮」の連作を取めるために美術館として整備されたものである。ここでは、モネの作品の他に、セザンヌ、ピカソ、ルノワールなどの有名な絵画を鑑賞することができた。

特にモネの作品は、事前にジヴェルニーのモネの庭園を訪れていたことから、実際の庭園と絵画が一致し、楽しく鑑賞できた。

ルーヴルやオルセーと比較するとコンパクトな美術館であるが、少ないながらも所蔵している絵画は著名なものが多いと感じた。鑑賞時間は2時間程度であった。



写真7 クロード・モネの睡蓮の一作

(4) ジャンヌ・ダルク

フランスの国民的英雄であるジャンヌ・ダルクの人生を知ったのは、1999年に公開された映画「ジャンヌ・ダルク」である。この映画により彼女がその生涯で成し遂げたことに驚嘆し、憧れの思いを持ったものである。

今回、ルーヴル美術館でドミニク・アングルが描いたシャルル7世戴冠式のジャンヌ・ダルクと、ピラミッド広場でエマニュエル・フレミエの作のジャンヌ・ダルク騎馬像を拝見することができたことは、少年時代の憧れの女性に久しぶりの会うことができたような気持ちになれとても嬉しかった。騎馬像の前には今もなお多くの献花があり、フランスでのその人気の高さが伺えた。



写真8 献花が絶えないジャンヌ・ダルク騎馬像

5. 食文化

今回の旅行では、いわゆる高級なフランス料理を食べることはなかったが、パリ近郊のレストランで一般的な料理を食べることができた。いずれも日本人である私の口に合うもので、美味しくいただくことができた。パリでいただいた牛肉とポテトの料理は、日本の肉ジャガの味にどこか似ていた。そして、見た目が可哀想なエスカルゴは、巻き貝のニンニクソース和えといったもので、美味しくいただいた。しかし、サーモン料理だけは、素材自体が良くないのか、少し残念な味であった。

なお、どこの店でもフランスパンをおかわり自由で食べることができ、それぞれの店で味や風味は異なるものの全て美味しかった。さすが、本場といった感じである。

フランスはワインのイメージが大きいですが、自国をはじめとして近隣諸国であるベルギー、オランダ、ドイツなどの多くのビールがスーパーで売られていた。ビール党の私は、スーパーで様々なビールを買って夜な夜な試飲していた。この内、今回の旅行では、軽い飲み味のブラッスリー・クローネンブルグ社の1664(通称：セーズ)に大変お世話になった。



写真9 パリでの昼食(肉じゃがに似た料理)

6. おわりに

今回の旅行を通じて、フランス人の自国の伝統と文化に誇りを持ち、大切にしている国民性に触れることができた。

このようなフランス人の愛国心を見てみると、様々な情報が溢れている世の中であるが、私自身が自分の住む国や地域の歴史・伝統・文化をどれだけ知り、愛着を持っているのか疑ってしまった。やはり、それを十分に理解し知識として蓄え、他人や他国の人々に自信と愛着を持って説明できるようになるべきであると思った。それが出来て初めて海外でのコミュニケーションや文化交流がとれるのであろうと理解することができた。

また、建物や車など古いものを大切にメンテナンスしながら利用し続けている様子を見ると、環境保全の観点からも大量生産・大量消費が当たり前となっている日本そして自分の意識改革が必要と感じた。まずは、自分の家、車、持ち物は適切に維持管理をし、長年利用できるようにしたいものである。

美しい街並みを大切にする街

設計部 部長

濱田 拓也 (1994年入社)

1. はじめに

私が海外を訪れるのは2013年の台湾以来で、ヨーロッパへ行くのは初めてである。

一生に一度は行ってみたいと思っていたヨーロッパ。

私の班の行き先はフランスである。テレビでよく見るが、いったいどんな国なのだろう。

初めてのフランス旅行に胸を膨らませながら高知龍馬空港を出発した。

2. ノートルダム大聖堂

シャルトルのノートルダム大聖堂は異なる建築様式が使われている二つの塔、世界で最も美しいといわれる青いステンドグラス(シャルトルブルー)が有名である。

実際に見てみると、800年前紀に建設されたものとは思えないくらい大規模でびっしりと彫刻が施された建物の外観に圧倒された(口絵写真17)。

建物の中に入って見るとさらに驚きである。

目を見張るほど広い空間に、彫刻の施された柱と壁、壁には美しいステンドグラスが張り巡らされ(口絵写真18)、非常に手の込んだ彫刻が並べられている。神々しく、天へ吸い寄せられるような錯覚さえ起こさせる。

当時の人々の技術の高さと、物作りへの強い思いに感心した。

3. モン・サン・ミッシェル

モン・サン・ミッシェルは、フランス北西部のブルターニュ半島とコタンタン半島に挟まれた湾の奥にある小島に、島を覆うように建てられた修道院。13世紀ごろに現在の形になったとのこと。ここも世界遺産に登録されている。

近くで見るとまるで要塞。圧巻の姿である(口絵写真19)。百年戦争の時に要塞として使われたというのもうなずける。さらにシャルトル大聖堂と同様に建物の内外に手の込んだ彫刻が施されている。物のない時代にこんな建物を作る昔の人の技術に本当に感心させられる。

見学を終えるとホテルに戻り夕食をとり、翌朝の写真撮影に備える。一泊でここに来た目的は、朝焼けのモン・サン・ミッシェルを見ることである。

朝目覚めて外に出るとあいにくの曇り空。太陽の照りつけるモン・サン・ミッシェルを見ることはできなかったものの、霧に包まれながら柔らかな太陽の光に照らされる幻想的な姿を見ることができた。

太陽が出て、数分するとモン・サン・ミッシェルは霧の中に隠れてしまった。



幻想的な姿のモン・サン・ミッシェル

4. クロード・モネの家と庭園

前日まで見た景色と全く違い、自然が多く豊かな緑に包まれておりとても美しい。

庭園に入ると、色とりどりの花が咲き乱れる庭園と、太鼓橋がある蓮池の庭園がある。この池がモネの代表作である「睡蓮」のモチーフになっているとのことである。

庭園内にある淡いピンクの建物はモネが暮らした家とのこと。中に入ると、当時のままのダイニング、キッチン、家具や、アトリエやモネの膨大な浮世絵コレクションを見学することができた。

モネが浮世絵に興味を持っていることは知らなかったため、ここで膨大な浮世絵コレクションを見たのは意外であった。



モネの暮らした家は当時のままの姿で残されていた

5. エトワール凱旋門

エトワール凱旋門はパリのシャルル・ド・ゴール広場(旧称エトワール広場)にある古代ローマの様式を模した凱旋門。高さ50メートル、幅45メートルの巨大な新古典主義建築の代表作である(口絵写真27)。

凱旋門に着くと、まず周りの道路に唖然。横断歩道がないどころか、周りを凄惨な数の車が縦横無尽に走っている。どうやって道路を渡るか迷っていると、地下道を通って渡るようになっていた。本当に車が多く、走り方もめちゃくちゃで、日本人にはここでの運転は無理だと思った。

凱旋門を近くで見ると、大きくやはり細かな彫刻が施されていたが、前日までにシャトル大聖堂やモン・サン・ミッシェルの修道院を見ていたため思ったほどの感動はなかった。

6. エッフェル塔

エッフェル塔は1889年にパリ万博のために、建築技師のギュスターヴ・エッフェルにより建設された鉄塔で、パリ随一のランドマークとして有名。驚きなのが、2年2ヵ月という驚異的に短い建設期間でつくられ、建設中に一人の死者もでていないということ。高さは324mで東京タワーより少し低い。エッフェル塔を含むセヌ川周辺は、世界遺産に登録されている。

エッフェル塔周辺も凱旋門周辺と同様に凄い賑わいである。観光客も多いと思われるがとにかく人で溢れかえっている。

エッフェル塔の構造はトラス構造。大小の鉄骨が緻密に細かく組み上げられているのが印象的だ。ただ、イメージしていた色と少し違う。シルバー系の色と思っていたが、実はブラウン系でパリの街並み合うように「エッフェルタワーブラウン」特別な色で塗られているようである。街並み非常にマッチしたいい色である(口絵写真28)。

7. 地下鉄

エッフェル塔の見学を終え、ホテル帰ることにしたが、ホテルまでの距離がかなりあったため、地下鉄で帰ることにした。乗り換えなしでホテル近辺まで行けるようである。切符を買うときに言葉が通じるのか不安であったが、切符売り場の方が優しく、すんなり切符を買うことができた。

列車を待ちながらふと他のホームに入ってきた列車を見ると、ドアの開閉方法が列車によって違うことに気づいた。日本では自動ドアが当たり前であるが、手動のドアが多いようである。さらにレバー式、ボタン式など色々あるようである。レバー式の列車が来たらどうしようと思っていたら、自動ドアの列車が来てくれたのでホッとした。



自動ドアの列車にホッとした

8. ヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユ宮殿は、フランス王ルイ14世が1682年に建設したバロック様式の宮殿である。約50年の歳月と莫

大な費用を投じてつくられ、フランス絶対王政の最盛期に建てられた宮殿は、その豪華さと完成度の高さから、各国の宮殿建築大きな影響を与えたとのことである。

宮殿に着くとまず驚いたのが式地の広さと派手な建物。建物の入り口(門)付近が異常に広く、門は金ピカで門の両脇には巨大な宮殿が建てられている。さらに驚いたのが観光客の多さ。朝一にもかかわらず、入り口には大行列ができています。我々の団体は予約をしていたようだが、他の団体客もかなり多く、入場までかなりの時間を要した。



宮殿の入り口付近の大行列

宮殿内に入っても人だらけ。さらにガイドさんの説明も人だかりを避けながら早足で移動しての説明であったため、気が散って何も頭に入らない。もう少し勉強してから来るべきだった。終わってみるとまともに説明がわかったのが鏡の間。宮殿中央に広がる回廊で17枚の巨大な鏡が窓の反対側に設置されており、シャンデリアと燈台をおいて光の空間を演出しているとのことであった。

当時の王朝は派手で目立ちたがり屋というイメージだけが残った。



唯一説明を理解できた鏡の間

建物の見学を終えると、庭園の見学。手入れの行き届いた美しく巨大な庭園にまた驚いた。建物が小さく見えるし、美しい庭園が地平線まで続くようなイメージである(口絵写真25)。

人が多く滞在時間も短かったため、落ち着いて見学することはできなかったが、派手さと広さが強烈に記憶に残る場所であった。

9. セーヌ川クルーズ

旅行最後のイベントであるセーヌ川クルーズ。昨日まで見てきたパリ市内をクルーズ船に乗って見学するという贅沢なものである。天気も良く風が気持ちいい。

セーヌ川沿いにはノートルダム大聖堂、ルーヴル美術館、オルセー美術館といった世界的にも有名なパリの観光スポットや歴史的建造物が凝縮されている。旅行の最後に貴重な体験することができた(口絵写真29)。

10. 道路と街並み

仕事柄移動中ずっと道路を観察していた。フランスの高速道路、国道は広く贅沢に整備され、線形も良好で利便性に富んでいる。山があまりなく地形が平坦であるため、路側構造物がほとんどない。つまり、日本に比べ非常に安価な道路整備が可能である。安価であるがゆえに、郊外の交通量の少ない地域でも十分な道路整備が行われているため、観光を含め、地域間の流通が盛んに行われているのではないかと感じた。

日本では必要最小限、低コスト、メンテナンスフリーという考え方が一般的で、利便性という観点で道路を作ることはない。利便性がよい広域な道路整備が国を豊かにするのではないだろうか。



贅沢に整備されたパリ郊外的高速道路

もう一つ気づいたのは、ラウンドアバウトの交差点がかなり多いこと。凱旋門の周りの大規模なものから、高速道路のランプ部、郊外の小さな交差点など様々な箇所で見かけた。信号機を付けなくてよく、速度抑制の効果も高いため、日本でも最近注目されているが、整備実績はほとんどないし、実際に見たこともない。貴重なものを見ることができた。

バスで通過して感じたが、安全性は高いものの、走行方法にかなり慣れがいて、方向を見失う人がいそうである。凱旋門の周りのように大規模になると、どこをどうやって走ったらいいかわからなくなると感じた。

高齢者ドライバーの多い日本では、あまり受け入れられないのではないだろうか。



車で溢れかえる凱旋門のラウンドアバウト

フランスの街並みは公園、植樹、歩道空間などがとても広く、景観優先で街づくりが行われているため、緑が多く街が美しい。

特に、パリのメインストリートであるシャンゼリゼ通り周辺は、広い車道と歩道、大きな並木が一直線に植えられており、歩道脇には高級ブランドの店舗が建ち並んでいるものの、周りに大きな建物はなく、歴史ある街並みを大切に街づくりが徹底されている。凱旋門までまっすぐ延びるシャンゼリゼ通りとその周辺の街並みの景色姿は本当に美しかった。

日本ではこういった発想は皆無で、公園や歩道空間は必要最小限、景観に配慮した植樹すら嫌う。日本とヨーロッパのまちづくりに対する考え方の違いに驚いた。



凱旋門へとまっすぐ延びるシャンゼリゼ通り

11. おわりに

人生初のフランス旅行は、歴史、文化をととても大切にしたい美しい街並みとそれを邪魔することのない芸術的な道路に魅せられた旅行であった。

日本とヨーロッパでの常識や価値観、考え方の違いを感じ、今まで道路事業に関わってきた自分の視野の狭さを痛感した。

今回の旅行で見たこと、感じたことを参考にし、今後の仕事に生かすことできるよう色々工夫してみようと思う。

フランス紀行

総務部 部長

小野 明彦 (2015 年入社)

1. はじめに

今回は、妻を伴ってのはじめてのフランス旅行となった。ヨーロッパは、まだ未踏の地であり、出発前には何かと準備に気がもめた。例えば、フランスの気温とかによる衣服の準備・持ち物にも少し迷った。

2. ともかく、パリへ

ともかく、空路、羽田へ。そして、空路、多彩な魅力をもつ芸術の都パリへ。所要時間：12 時間 35 分時差 7 時間。着後は専用車にてホテルまで送ってもらい一泊。



ミレニアムホテル パリオペラ近辺

3. モン・サン・ミッシェル修道院へ

世界遺産のなかでも常に上位の人気スポット、神秘的の孤島モン・サン・ミッシェルへ長いバスの旅であった。車窓からどこまでも麦畑が広がり、ポプラ、ライラック、ミモザ、マロニエの花が咲き並ぶ。ガイドさんの話によると、ポプラ花粉症・マロニエ花粉症というのも発症するようだ。菜の花畑も広がり、これは、バイオエネルギーに使用されるようである。忘れがちだが、フランスは食料自給率 120% の国である。

島へは、以前の美しい景観を蘇らせるため、湾の自然環境を損なわない橋が 2014 年に完成した。

周囲 800 メートルほどの島の入り口は南側の 1 カ所のみ。王の門を抜け、途中にもみどころがあり、店やホテルが並ぶ参道ランド・リュの細い坂道を登ると徒歩 15 分ほどで修道院へ到着する。切り立つ花崗岩の上、海と天空の狭間にたたずむこの修道院は大天使ミカエルに護られた聖なる場所とされる。

哨兵の門、大階段、西のテラス、修道院付属の教会、列柱廊、食堂、迎賓の間、聖エティエンヌ大聖堂、騎士の間などを見学した。聖オベール司教が聖堂建築の告知を受けて以来、1300 年にわたり、巡礼地として、または要塞や牢獄として、数奇な運命を辿ってきた。ロマネスク様式・ゴシック様式など、さまざまな様式の混在する建築芸術であるこの修道院は、孤高のサンクチュアリと

して今もなお、世界中の人々を惹きつけてやまない。

海に囲まれたこの島は、時間の移り変わりによってさまざまな表情を見せてくれる。朝もやの中にぼんやりと浮かび上がる姿は幻想的であり、夕方(フランスの夕暮れは午後 10 時頃まで明るい)は少しずつ、灯りが灯り始める光景はととも美しい。また、夜ライトアップされた修道院が水面に映し出される姿を宿泊したホテルの窓から眺められることができたのはラッキーであった。

モン・サン・ミッシェルの名物グルメといえば、ふわふわに焼いたオムレツらしい。これはディナーでワインと食すことができた。

4. モネの暮らした村・ジヴェルニー

パリ北西の小さな村にモネが晩年を過ごした家と庭園がある。連作『睡蓮』のモチーフとなった池や、作品が作られたアトリエがある。彼が収集した莫大な浮世絵コレクションも飾られている。



モネの庭園ジヴェルニー

5. 世界遺産・ノートルダム大聖堂

200 年の歳月をかけて完成した初期ゴシック建築の最高傑作といわれるノートルダム寺院を見学した。別称「白い貴婦人」と呼ばれる優美な姿の大聖堂である。

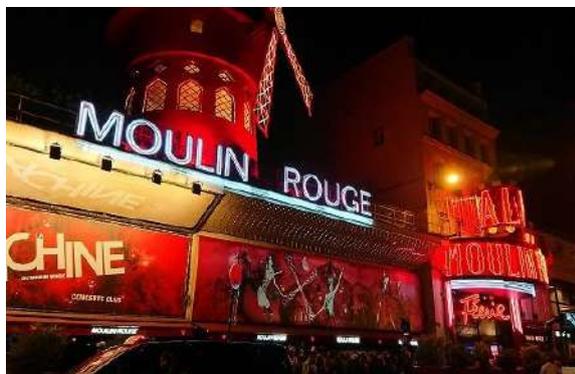
1804 年にはナポレオン・ボナパルトが戴冠式を行っている。花びらの形のステンドグラスは「バラ窓」と呼ばれ、西、南、北側に三つあり、南北の窓は対称にデザインされている。南はキリスト、北は聖母マリアがテーマである。ゴシック建築の内部は中世ヨーロッパの森をイメージしているといわれ、均等に並んだ円柱の間からステンドグラスを通して入る光は、さながら森の中の木漏れ日のようなものである。



ノートルダム大聖堂

6. ムーラン・ルージュ

120年の歴史を持つ老舗キャバレー、「ムーラン・ルージュ」で夕食付きのレビューを楽しんだ。フレンチカンカン発祥の地で、絢爛な舞台の素早い入れ替わりや、音楽、衣装、照明などに驚き、非日常てきパリの夜を過ごした。



ムーラン・ルージュの入り口

7. 自由行動 モナ・リザ、ミロのヴィーナスとの対面

パリ第4日目は自由行動の日で、あらかじめガイドを申し込んであったルーヴル美術館へ向かった。現地に住まいの日本人女性の懇切なガイドもあって広大なルーヴル美術館の古代ギリシャ、古代オリエント、イスラム美術から西洋絵画まで幅広く膨大なコレクションを鑑賞した。『モナ・リザ』や『ミロのヴィーナス』などの初対面を果たした。一生に一度は見ておくべき美の至宝であろう。

次に、単独でオルセー美術館へ足を運んだ。人気の高い印象派を集めた美術館で世界的な傑作をじっくりと鑑賞した。またゴッホ、ゴーギャンをはじめとするポスト印象派「ギャラリー」も見ごたえのありものだった。

この日は、シャンゼリゼ通りや凱旋門のあたりを散策した。途中、道に迷って、タクシーに乗車したが、フランスの交通事情は大変なもので結構、乱暴な運転が普通のようなのである。そう言えば、ガイドさんが、「こちらで運転免許を取得するには攻撃的な運転ができないと無理です」と話していたことを思い出した。

挨拶に厳しい国だと聞いていたが、公衆道徳は日本のほうが勝っているように思う。例えば、加えタバコの人たちは平気で吸い殻を道路に捨てている。

また、フランスのトイレ事情も独特である。無料の公共のトイレが少なく、あまりきれいでない。フランス人は日本人に比べて体温が高く、街に自動販売機もないし、あまり水分を取らないのだろうか。トイレに行く回数が少ない。

ヴェルサイユ宮殿での舞踏会なども招待客は侍従がトイレを持参し、それに用を足して、そのあとは汚物を宮殿の庭に捨てたという逸話を思い出したりした。



モナ・リザ

ミロのヴィーナス

8. ヴェルサイユ宮殿観光

旅も終わりに近づいた。今日はヴェルサイユ宮殿を観光した。あちこちからたくさんの人々が訪れて、観光バスもいっぱいであった。

日本で有名な少女漫画の大作『ベルサイユのばら』の舞台で、マリー・アントワネットがその人生を生きぬいた場所である。きらびやかな宮廷文化の舞台となったが、フランス革命が勃発し、亡命を図ったが失敗し、幽閉され、革命裁判にかけられた。ルイ16世はギロチンで斬首刑となり、マリー・アントワネットもコンコルド広場において処刑された。

このことを頭に置きながら宮殿の見学をすると、より理解が深まる見学となった。目もくらむほどの豪華な装飾、美しい芸術に満ちた部屋たち。かつての華やかな光景を思い描きながら、時々、立ち止まった。また、左右対称の幾何学模様が特徴の庭園見学は敷地が広すぎて、残念ながら時間足りなかった。



ヴェルサイユ宮殿の噴水庭園

9. セーヌ川クルーズ

街を二分するように流れるセーヌ河。クルーズ船でパリの名所をひと巡りすることができた。どの席からでも抜群の景色が楽しめる。エッフェル塔・アルマ橋・ブルボン宮・オルセー美術館・ノートルダム寺院などの美しい眺めに異国情緒を心ゆくまで楽しむことができた



クルーズ船からの眺め

10. 凱旋門

フランス人は大のナポレオン好きらしい。ナポレオンの偉業を称えるフランスの栄光の門「凱旋門」はシャンゼリゼ通りの西淵に毅然と立っている。門の4面にある10の彫刻はナポレオンの偉業がテーマになっている。時間が限られていて展望台に上ることは叶わなかったが、上った人に聞くとらせん階段で結構きつらしい。



凱旋門(シャンゼリゼ通り)

11. おわりに

フランスの2大世界遺産を一度に見学することができた有意義な旅であった。また美術館巡りもあまりのスケールの大きさに驚嘆させられた。フランスまでは、長い道のりであったが、初めてヨーロッパの地を踏み、視野がひろがったように感じている。



ノートルダム大聖堂での集合写真

パリでの出来事

総務部 総務課
山本 幸栄 (2003年入社)

1. はじめに

「創立55周年記念に皆さんをヨーロッパに連れていきます。」という社長からのメッセージを聞いたのは何年前だったか？

それが現実になった今年、その旅は本当に楽しいものとなりました。ひょっとしたら私の人生において最初で最後のヨーロッパ旅行になるかもしれない？と思うとなかなか行先を決められませんでした。

2. フランスへ出発

私が3ヶ国の旅行先の中からフランスを選んだ1番の理由は、乗継の良さからです。飛行時間はフランス直行便で12時間弱、日本との時差は-7時間とのことで、午前10時40分に日本を旅立った私達がパリのシャルル・ド・ゴール空港に着いたのは同じ5月14日(月)の16時15分(日本時間23時15分)でした。パリはまだ、夕方まで半日近くも飛行機に乗っていたとは思えない不思議な感覚です。体は疲れているのに時間は得したような気分でした。

機内食を2回も食べてお腹はそんなにすいていなかったのですが早速ホテル近くのcaféで軽食を頼んで乾杯をしました。ただし、入国しよっぱなということもあり、冒険できず日本語メニューのあるお店を選んでしまったのですが・・・。



日本語メニューでチョイス

3. モン・サン・ミッシェルへの旅

2日目は世界遺産の1つでもあるモン・サン・ミッシェルまで片道約300km(約5時間)をバスで行く1泊2日の小旅行でした。

途中、シャルトルにある世界遺産のノートルダム大聖堂に立ち寄りました。ここはシャルトルブルーのステンドグラスで有名な寺院です。向かって右側の塔はロマネスク様式(石積み)の建築で1145年からのものですが左側は火災で焼失した為に16世紀に完成した後期ゴシック様式の建築になっています。それまでの石造りの建築方法では窓を大きくすることが難しく、建物内部は一般的に

暗く重い印象を与えていたようです。いかに光を建物内に取り込むかという長年の課題を解決に導いたのがゴシック建築(壁を柱に変えることによって大きな窓を作った)でありステンドグラスの普及であったようです(口絵写真17、18)。

シャルトルを後にし、私達のバスは以前から非常に興味を抱いていたモン・サン・ミッシェルへと向かいました。

広い平原を少しずつ進んでいくと巨大な岩山のようなモン・サン・ミッシェルが見えてきました。なにか不気味です(口絵写真19)。

この日は良いお天気でしたが風が非常に強く記念撮影をする私達の髪の毛が乱れに乱れ大変でした。頂上から見る眼下に広がる景色は広大で素晴らしく、はるばる地球の反対側までやってきた価値があったと心から思いました。

翌朝は日の出を見ようと早起きをしたのですがあいにくの曇り空で見えることはできませんでした。少し残念でしたがもう2度と来られないであろうこの場所を、少しでも目にやきつけておこうと何度もカメラのシャッターをきっていました。

朝食のあとバスで290 km移動した先はジヴェルニーという町でした。

4. モネの庭とムーラン・ルージュ

印象派の巨匠クロード・モネが晩年を過ごした町、ジヴェルニー。

広い敷地内には自然を生かした草花が咲き乱れその一角に睡蓮の池が、主がいた頃と同じようにひっそりとたたずんでいます。時おり、そよ風が吹くと柳がそよそよと揺れて心癒されるひと時でした(口絵写真21)。

木々の緑、草花の赤や黄、そして水辺や空の青が太陽の光で鮮やかなコントラストをなしています。モネがこの庭を愛して止まなかった理由がわかったような気がしました。

その夜はフランス班だけに義務付けられていたドレスコードでのディナーに出かけました。場所はムーラン・ルージュ。なんとなく名前は聞いたことはありましたがどういう所なのかとネットで調べてみると、「キャバレー」という風に紹介されていました。「キャバレー」とは、女性が男性をもてなすような場所だと勝手に思っていたのですが中に入ってみるとすばらしいエンターテインメント性をもった施設で、プロの踊り子さん達の迫力ある舞台を見ることができました。

舞台は撮影禁止であった為、写真をお見せできないことがとても残念です(外観：口絵写真22)。

5. 楽しかった自由行動

旅行3日目は丸1日、自由行動の日。当初、「外国で1日放られてどうしましょう？」と不安だったのですが、楽しい仲間と行動をともにでき充実していました。とて

も感謝しています。

まず、ツアーを頼まずに自力でルーヴル美術館のチケットを買い日本語音声ガイドをレンタルしました。ところが頼りにしていた音声ガイドが使いこなせずお目当ての「モナ・リザ」にたどり着くのに1時間弱を要してしまいました。ちょっと焦りましたがその後はすんなりと観覧することができました。3時間ほど見学したあと音声ガイドを元の借りた場所に返すのが一苦勞でした。出られると思っていた入り口にシャッターが降りていた為、回り道をして漸く出発地点にもどれました。実はレンタル時にパスポートを担保にとられていたので絶対にもどる必要があったのです。



チケットをゲット

その後はぶらぶらとコンコルド広場やシャンゼリゼ通りを散策し、昼食をイタリアンらしきレストランでとろうと中に入りました。パリに来て最初の日に入った店で感じていた事があります。それは料理1品の単価が高いことと量が多いことです。今度は注文しすぎないようにと考え、ウェイターを呼びました。ところが彼は私達の注文を聞いても、受け付けてくれません。

よくよく彼が言っていることを聞くと「1人、1品頼め」というような内容でした。実は私達は手始めに大きなピザを1皿だけ注文して分けようとしていました。2、3度トライして別のウェイターに代わりやっとな注文が通りました。でも最後まで怪訝そうな顔をしています。きっととてもケチな東洋人だと思ったのではないのでしょうか？

その夜はホテルから少し離れたカルチュ・ラタン(パリ第5区)のソルボンヌ大学近くにあるお店で最後の晩餐をしました。

フランスの夜は暮れるのが遅く食事が終わって店を出たのが21時だったのですが辺りは夕方くらいの明るさでした。折角だから、と地下鉄(メトロ)をつかってホテルまで帰ることにしました。

パリのメトロは全14線あります。その中の10号線のクリュニー・ラ・ソルボンヌという駅で市内均一料金€1.9(約250円)の乗車券を買い乗り込みました。すべて電光掲示板の情報だけが頼りで、「あと何分で電車が到着します。」とか車内でも「次は・・・駅です。」とかのアナウンスは一切ありません。従って駅構内はざわついてはいませんが慣れない私達は乗り過ぎたりしないように電車に乗っている間中、気が抜けない状態でした。



メトロの乗車券

無事、3つ目のジュシュー駅で7号線に乗り換えることができました。電車に乗る時は自動ドアですが降りる時はドアを手動で開けたり、ボタンを押して開けたりと日本のドアとは少し勝手が違います。うまく降りられるかと緊張しながら現地の乗客の様子をジッと観察していました。改札を出た時にはホッと、ささやかですがパリでの日常体験ができたことがとても嬉しかったです。

6. あこがれのヴェルサイユ宮殿

パリでの最終日はヴェルサイユ宮殿の観光とセーヌ川のクルーズです。子供の頃に漫画「ベルサイユのばら」を愛読書にしていた私はこの地に出向くのを非常に楽しみにしていました。気が付くと架空の人物、オスカルとアンドレに加えギロチンで処刑されてしまったマリー・アントワネットやルイ16世のことを思いながら歩いていました(口絵写真25)。

その後セーヌ川を1時間ほどクルージングしました。

セーヌ川の河岸のうち、シュリー橋からイェナ橋までの約8kmが世界遺産に登録され歴史的価値のある建造物がたくさんあります(口絵写真29)。

コンシェルジュリーはマリー・アントワネットが最後に幽閉されていた牢獄です。



シテ島



コンシェルジュリー(牢獄)

7. 凱旋門からの眺め

旅の最後にエトワール凱旋門に立ち寄りました(口絵写真27)。ナポレオン・ボナパルトが命じて1836年に完成したもので、高さ50m、234段の階段を上って凱旋門の展望台に出ることができます。

凱旋門から一望できるパリ市内の眺望はとても素晴らしいものでした(口絵写真16)。

パリの街にはあまり高い建物がなく古き良き文化と伝統をととても重んじているように思います。道路もコンクリート舗装より石畳の方が多く、駐車場なども日本のように地下に作ったりはあまりしないそうです。

工事のために古い建物に損傷が出ることを恐れているのです。ですから車が多くて駐車場スペースが足りないのも路上駐車はあたりまえのこのようになっていいます。すごく上手に縦列駐車をしている光景を何度も見ました。

日本だったら大変なことになっていると思います。そういう古いものを大事にする文化とは逆に電気自動車の充電施設は道路際に普通に設置されていてたくさんの車が利用していました。環境を考えた対応はやはり日本より優れていると感心しました。日本も見習わないといけないと思います。



充電施設

8. おわりに

3班に分散して会社の業務にできるだけ支障がないように実施された1週間の社内研修旅行。最初は半信半疑だったのですが実現できて本当に良かったです。今回の旅行は社員1人1人の心の中にきっと素敵な思い出となり残ることと思います。

フランス 6 日間の旅

総務部 総務課

明神 怜佳 (2012 年入社)

1. はじめに

私はオシャレな町というイメージがあるフランスを希望した。とはいえ、フランスには有名な建造物がたくさんあるという知識しかない。行くからには少しは知識がないと面白くないだろうと思い、「パリ・ルーヴル美術館の秘密」「ダ・ヴィンチコード」「パリよ 永遠に」の映画 3 作をレンタルした。少し知識がついたところで飛行機の中で読むための「フランス 世界遺産と歴史の旅」という書籍を 1 冊抱えてフランスに旅立った。

2. 1 日目

12 時間のフライトを終えパリに到着。この日の気温は 12 度。日本より少し肌寒い。時差は 7 時間とのこと。空港でバスに乗り換え一時間ほどかけてオペラ座の近くの「ミレニウムホテルパリオペラ」に到着し、すぐに食事に出かけることにした。

ホテルの近くの「SOFA」という店の入り口に日本語メニューを貼っていたため迷うことなくこの店に決めた。料理は一品の量が多く食べきれそうにない。皆で頑張つてフランスパンを食べて終わると、店員さんが間髪入れずに追加を持ってきた。実はフランスパンはサービスだった。お腹も張り自然と皆の手が止まっていたところ、店員さんが「Finish?」と聞いてきてくれたので私はさすが「Yes」と答え、店を出た。

今日は疲れていたため早めにホテルに戻りすぐに就寝。



パリでの食事

3. 2 日目

2 日目はノートルダム大聖堂を經由し、モン・サン・ミッシェルへ行く行程。5 時間 350 km ほどの大移動。モン・サン・ミッシェルで一泊するため、宿泊の用意をして出発だ。

(1) シャルトルのノートルダム大聖堂

ノートルダム大聖堂はパリというイメージが強いが後

から調べてみると、フランスにはノートルダムという名前の教会があちこちにあるようだ。

ノートルダムの意味は「私たちの女性」、つまり聖母マリア様のことを表している。

ノートルダム大聖堂の見所はなんといっても建物内に張り巡らされたステンドグラス。青色のステンドグラスは本当に素晴らしかった(口絵写真 18)。この大聖堂のステンドグラスは美しいだけではなく、窓一つ一つに時代背景や物語が描かれているので面白い。ステンドグラスに物語を描くという発想の素晴らしさ。また、それが現在まで伝えられていること自体が奇跡なのではないかと感じた。

(2) トイレ事情

大聖堂を出て近くの公共のトイレを利用した。入ると鍵はボタンを押すようになっていた。ボタンを押すと外に赤色のランプが光り中に人がいるのが分かる仕組みになっている。トイレを見ると便座がびしょ濡れ。ポケットティッシュで拭いてから済ませたが、今度は流すボタンが見当たらない。悩みながらドアを締めたボタンを押すとドアの鍵が開き、水がすごい勢いで流れた。便座が濡れていたのは洗浄水の勢いだったようだ。

フランスのトイレは便座がないので非常に座りにくい。

(3) モン・サン・ミッシェル

ノートルダム大聖堂を後にし、フランス北西部ブルターニュ半島の付け根にあるモン・サン・ミッシェルへ。フランスに行くからには是非見てみたいと思っていた。

モン・サン・ミッシェルとは、「聖ミカエルの山」という意味。ある日、一人の司教の夢に大天使ミカエルが現れ、岩山に礼拝堂を建てるよう告げたという伝説が残っている。

ホテルに着くと、近くのバス停で専用のバスに乗り替え 5 分ほどで到着。

まるで海にお城が浮かんでいるようで、非常に素晴らしい景色。5 時間かけて来た甲斐があった(口絵写真 19)。しかし、これはお城ではなく修道院ということである。

いざ、修道院の中へ。坂道を登り終え、300 段ほどの階段を経て修道院の入り口にたどり着く。3 階から 2 階に降りる途中の壁に大天使ミカエルの浮彫石膏がある。オベール司教の夢枕に大天使ミカエルが現れ 3 回目の時にオベールの頭に穴をあけたという伝説のシーンがあり、テンションが上がった。

修道院を出て登ってきた階段を降りていくと、行きは開いていたお土産屋さんが 18 時というのに店は閉まり始めていた。通常は 19 時閉店だ。人通りが少なかつたため一人が店を閉め出すと次から次へと締めていったということだ。日本では考えられない。

ホテルに帰ってみると、なんとモン・サン・ミッシェ

ルが目に見える部屋。素晴らしいところに宿泊することができた。



ホテルのベランダから見るモン・サン・ミッシェル

モン・サン・ミッシェルには、名物グルメ「オムレツ」がある。工程を見て食べる時間がないと残念に思っていたが、夕食にオムレツが出てくると聞き大興奮。さらにホテルの中でモン・サン・ミッシェルを眺めて食べるという贅沢さ。徐々に食事が運ばれいよいよお待ちかねのオムレツの登場。期待しすぎたのか、オムレツは確かにふわふわではあるけど、味が付いているのか。薄味でコメントに困った(口絵写真20)。

部屋に戻り、夜は部屋のカーテンを開けてモン・サン・ミッシェルを眺めて幸せに浸っていた。10:00 から1時間ほどライトアップがあり、ここにずっと住みたいと思うほど美しく幻想的な景色を堪能することができた。携帯しか持っていなかったので綺麗な写真は撮れなかったが、誰か撮ってくれていることを期待して就寝。

4. 3日目

早朝 6:20 朝焼けのモン・サン・ミッシェルを見るために外に出た。曇り空のため残念ながら朝焼けが見られず、雲が晴れ朝日が見えた頃には今度は霧でモン・サン・ミッシェルは姿を消した。

昨日の夜の点灯を誰か写真撮っていないか確認したところまさかの誰も撮っておらず。残念。

気持ちを切替え再びバス移動。モネの暮らした村ジヴェルニーを経由し、パリを目指す。

(1) モネの暮らした村

クロード・モネの名画、「睡蓮」とそっくりな風景。ここはモネが43歳からの半生を過ごし、多くの名作を生み出した場所であるそうで、庭園は、今も花が咲き乱れ、絵画の世界にいるような気持ちになった(口絵写真21)。

(2) ムーラン・ルージュ

長いバス移動を終え、ようやくパリへ戻ってきた。

ホテルに戻りすぐにドレスコードに反しない服装に着替えるとパリのキャバレー「ムーラン・ルージュ」に出かけた。ドレスコードということもあり、皆昨日までとは違う雰囲気だ。

ムーラン・ルージュとは「赤い風車」という意味のようで、本当に建物の正面に赤い風車が屋根の上に乗っていた(口絵写真22)。

店に入るとまず荷物検査があり、そこを抜けるとレッドカーペットがひかれていた。その上を歩くだけで気分が盛り上がってきた。

音楽を聞きながら食事をし、その後ショーを見た。あまりの迫力に圧倒された。踊り子はトップレスだがいやらしい感じはなく、歌・ダンス・大芸道などどれも素晴らしいものだった。中でも、長いニシキヘビが5匹ほど入った水槽が下から出てきた場面。どうするのかと思っていたら、水槽の中に女性が飛び込み、蛇を体に巻き付け泳ぎだした。ヒヤヒヤしながらも見入ってしまった。

ただ、移動の連続で疲れのピークがきていたのか、後半は記憶が飛んでしまったのが心残りではない。



店内の様子

5. 4日目

(1) ルーヴル美術館

4日目は終日自由行動。朝8時過ぎからホテルを出発し、ルーヴル美術館に向かった。ルーヴル美術館は入り口が何か所かあるが、寒かったため室内で並べるリヴァリ通り99番入口から入ることにした。

建物の中には映画「ダ・ヴィンチ・コード」で有名になった逆さピラミッドがあった。

開館15分前の8:45に手荷物検査場に到着すると、すでに30人ほどの列ができていた。手荷物検査を終え、チケット売り場へ。朝だったお陰か全く並んでなく、すんなりとチケットとオーディオガイドの交換チケットを購入することができた。

リシュリー翼の入場入口付近で3Dのオーディオガイドを借りるためパスポートと交換。オーディオガイドの返却時にパスポートを返してくれるようだ。オーディオガイドは使いこなせると便利なものであったが、最初の30分ほどは使いこなすのに苦戦した。



オーディオガイドに苦戦中の3人

有名処は見ておきたいということで「モナ・リザ」「ミロのヴィーナス」「サモトラケのニケ」等を回れるところはすべて回った。

有名な作品の周りは人ばかりができていますので分かりやすい。モナ・リザは想像していたよりも小さかった。触られないようにガードされていたが、意外にも他の作品は手の届くところにありカバーも何もないのに驚いた。

色々な作品を見ているうちに、気がつくとすでに4時間が過ぎていた。まだまだ見たい作品はあったが、後の予定を考えしかたなく美術館見学を切り上げることにした。

ルーヴル美術館は想像以上に広く迷路のようだった。



逆さピラミッド

モナ・リザと一緒に

(2) 昼食

美術館を後にし、コンコルド広場を通り凱旋門を目指した。コンコルド広場には黒人の方が露店でいろいろなものを売っていた。私は2日目にサングラスを落とした。日差しを浴びる前に一刻も早く欲しかったためここで購入。値段交渉の結果20ユーロのサングラスを5ユーロでゲット。交渉の甲斐があった。

コンコルド広場を抜け、シャンゼリゼ通りのピザ屋さんで昼食を取ることにした。あまりお腹が空いていなか

ったので3人で1枚のピザを頼むと、2回ダメと断られ、3回目でなんとかオーダーが通った。フランスではマナーとして一人一皿が基本のようだ。風習の違いとはいえ、なんとも理解しがたい。



オーダーに苦しんだピザ

(3) 凱旋門

パリには凱旋門がいくつかあるが、一番有名なのはナポレオン1世の戦勝記念碑であるエトワール凱旋門だ(口絵写真27)。

凱旋門の周りの道路には360度横断歩道がないため、シャンゼリゼ通りから地下道を通って向こうに渡った。凱旋門のそばに来てみると、想像以上にでかい!!展望台に登ることも考えたが、途中でショッピングもしながらだったこともあり、すでに夕方になっていたため下から眺めるだけにした。

露店のクレープを食べながら次の目的地エッフェル塔に向かった。

(4) エッフェル塔

フランスの首都パリのランドマークの一つとなっている鉄塔。1889年に、フランス革命100周年を記念してパリで行われた第4回万国博覧会のために、建築技師のギュスターヴ・エッフェル率いるエッフェル社により建設された塔である。万国博覧会の開催日に合わせるため、2年2ヵ月という短い建設期間でつくられたというから驚きだ。それに建設中は一人も死者が出なかったというからさらに驚きだ。

エッフェル塔はもっとスカスカなイメージがあったが、近くで見ると無数の鉄骨が縦横無尽に絡み合って複雑な幾何学模様を作り出していた(口絵写真28)。

エッフェル塔を後にし、一旦ホテルにかえることに。ホテルからかなり離れたところまで来ていたため地下鉄で帰ることにした。

駅に着くと、自動販売機で切符の購入を試みたかったが、人がたくさん並んでおり、迷惑をかけそうだったので窓口で購入した。パリ市内のメトロの料金は何回乗り換えても1.7ユーロとリーズナブル。物価の高いフランスで珍しく安いと感じた。

駅、電車の中の案内も非常に見やすく親切。地下鉄の路線図も持っていたためスムーズにホテルまで帰ることができた。こんなことなら途中の移動をもっと地下鉄を使えば時間を有効に使えたかもと少し後悔した。



地下鉄の改札口

ホテルに戻るとすぐにタクシーに乗り食事へ。店の名前は忘れたが、セーヌ河を南に渡り、少し遠くまで足を伸ばした。

この店の店員さんはとても感じがよく、4人で3皿でもすんなりとオーダーを通してくれた。

料理のオーダーは英語のメニューを見てなんとなくこんなのかなと想像しながら注文。肉料理から一品。魚料理から一品。後はサンドイッチに飲み物を注文。魚料理はエビがメインの焼きそばで久しぶりの麺は特に美味しく感じた。

食事を終えると、行きのタクシー代が20ユーロと以外に高かったため、帰りは地下鉄で帰ることにした。2回の乗り換えがあったため少し不安もあったが、優しいフランス人が案内してくれ無事にホテルに着くことができた。

帰り着いたのは22時。フランスは22時でもとても明るく時間の感覚がおかしくなりそうだが間違いなく夜だ。



夕食

6. 5日目

(1) ヴェルサイユ宮殿

682年にフランス王ルイ14世によって建てられたヴェルサイユ宮殿。

ヴェルサイユは大きく分けて、宮殿と庭園に分かれている。敷地の広さは約1000ヘクタール、東京ディズニーランドとシー合わせた広さの約10倍とのことだ。ヴェルサイユの広大な敷地のほとんどはこの庭園でできている。ヴ

ェルサイユ周辺にはそもそも水源がなく、約10km離れたセーヌ川から水を引いているそうだ(口絵写真25)。

(2) セーヌ川リバークルーズ

セーヌ川沿いにはノートルダム大聖堂、ルーヴル美術館、オルセー美術館といった世界的にも有名なパリの観光スポットや歴史的建造物がいっぱいある。これらの世界遺産やパリで最も美しい橋と塔を一度に見られるのは魅力的だ。

セーヌ川クルーズで必見の名橋「アレキサンドル3世橋」は、パリで最も美しいと言われる橋で、橋の四隅には芸術、農業、闘争、戦争を意味する女神像がペガサスに乗って輝いている。橋一つとっても絵になる美しさだ。

日差しが強いが風がとても心地よい。セーヌ川リバークルーズを終え、パリの町並みともうすぐお別れだ。

船を下りるとすぐ近くのエッフェル塔前で集合写真を撮った後、飛行機までの時間があつたため、凱旋門に向かった。

昨日は展望台に登れなかったためこの機会に登ることにした。屋上まで螺旋階段の高さは50メートル。日本のビルで12階分。息切れしながら何とか屋上にたどり着いた。

テラスに出ると、パリの絶景が360度パノラマで広がる。眼下には直径250メートルの円形の広場で周囲に12本の大通りが放射状に伸びている。

星のように広がる道路構成からエトワール広場＝星の広場と呼ばれているようだ。それぞれの通りにある見所は違うが統一感があり、色・形が揃った建物・木のラインはとても美しい(口絵写真16)。

7. おわりに

これまでの私の旅行は行き当たりばつりが多かった。今回はフランスの歴史・文化に触れるということもあり、少し勉強していったことでより楽しむことができた。聞いたこと・見たことがあるものに出会うと親しみや興味を持つことができる。特にフランスの建物は歴史とモダンの融合でとても素晴らしかった。

旅行へ行く前に周りからフランス人は冷たいと聞いていたが、道に迷っていたときは向こうから声をかけてくれ、またこちらが訪ねた時も優しく教えてくれた。他人の話を鵜呑みにするのではなく、自分が実際に見て感じることの大切さを感じた。

今の時代は携帯があれば道に迷うこともなければ、分からないことがあればすぐに調べることができる。しかし旅の醍醐味は現地の方と触れあいコミュニケーションを取るのだと思う。

今回は社員旅行ということで普段交流があまりない社員の方とも交流ができ、より素晴らしい旅になった。

フランス道中記

営業部 営業課

森下 昌裕 (2014年入社)

1. はじめに

第一コンサルタンツが創立55周年を迎える節目の年となる。平成30年度の研修旅行は、ヨーロッパへ3班(3カ国)に分かれて4泊6日で行く。

私は、5月14日から19日までの第二班としてフランスへ行った。初のヨーロッパに、期待と不安を入り交らせて出発日を迎えた。

2. 一日目

フランス班の1日目の集合時間は早く、高知龍馬空港がまだ開いていなかった。見送りに右城社長が来られ、第二班の旅行の無事と激励の言葉を頂いた。

高知空港から羽田空港、羽田空港からシャルル・ド・ゴール空港へとJALを使つての旅であった。機内食が美味しいと添乗員が言っていた。ほとんどが移動で終わる1日目は食事が楽しみだ。

機内食は、見た目も味も素晴らしく、非常に満足した。



JALでの機内食

初めての長時間フライトであったが、心配してたほどストレスを感じることもなく、無事にフランスに到着。旅行直前になって変更があったホテルには予定より早い4時頃に着いた。夕食は各自でとることになっていたの、数名でパリの街を見て回ることにした。

気がつけば、日本語が目につく通りに出てきた。まだ特別恋しくもない日本食の店へ入った。

満腹になった我々は、ヨーロッパの日の入りの遅さに驚きながら、ホテルまで帰り、その日を終えた。

3. 二日目

二日目は朝食も早々にモン・サン・ミッシェルへ出発。今回の旅行のメインの一つである。否応にも上がる

テンションを押さえつつ、バスに乗り込む。途中、世界遺産でもある、「シャルトル大聖堂」へ寄る。初めて間近で見る本家本元の聖堂に圧倒されながら、カメラを向けてひたすらに写真を撮った。

その後、耐久レースで有名なる・マンで昼食を取り、モン・サン・ミッシェルへ向かった。

テレビや本、様々な媒体で見ることのあったモン・サン・ミッシェルが少しずつ近づいて来た。感慨深さを感じながら中に入る。



まるで「こんびらさん」の様な通り

建物は、歴史と美を感じさせ、私があこがれイメージする施設そのものであった。長い時間バスに揺られてきた甲斐があった。



モン・サン・ミッシェル修道院 付属教会

モン・サン・ミッシェルを後にし、モン・サン・ミッシェルが見れる程近い距離にあるホテルへ向かった。

夕食は、モン・サン・ミッシェル伝統のオムレツ。期待を裏切られながらも楽しんだ。

4. 三日目

前日の飲み過ぎで頭痛を感じながら三日目が始まった。この日は「モネの庭」の観光。今回の旅行の前に、北川村の「モネの庭」を一度見ておこうと思ったのだが、もし本場と変わらなかったらショックと考え結局行かなかった。ここのモネの庭は、想像以上にスケールが大きく、華やかであった。普段、植物観賞に興味を示さない私でも感銘を受けた。

「モネの庭」を見終わると、パリへと戻った。夜は、今回唯一フランス班だけとなるドレスコードでの夕食である。添乗員の方からは軽くジャケットを羽織り、襟付きのシャツであれば問題ないということだったが、念には念をとということで、普段の仕事着で万全を期して望んだ。私の偏見かもしれないが、キャバレーという言葉から想像するものとはまた違って、非常に品を感じるエンターテインメント性あふれるショーであった。

唯一不満があるとすれば、食事のメニューが昼食と同じサーモンのソテーであったことくらいであった。終わったのは11時を過ぎており、今回のフランス旅行で初めて深夜のパリを経験した。私みたいな者が出歩くと何らかのトラブルに巻き込まれそうな感じが漂う、美しくも妖しい街だった。

5. 四日目

四日目は、一日自由行動であった。一度は行っておかないと後悔しそうな、誰もが知るルーヴル美術館へ行く。



ルーヴル美術館前

ガイドさん曰く、某映画で、ルーヴル美術館のピラミッドの下には、マグダラのマリア様が安置されていると描かれていたが、それはフィクションですとのこと。残念。



近代的なガラス張りの逆ピラミッド

逆ピラミッドがあるルーヴル美術館の下には、カルーゼル・デュ・ルーヴルというショッピングセンターがあり、色んなブランドが売られていて高級ショッピングモールにもなっていた。ここから、美術館に向かう通路へとつながっていた。

ガイドさんに導かれて、歴史の教科書で見た覚えのある歴史的遺物に感動した。



「目には目を、歯には歯を」で有名なハンムラビ法典

学生時代に勉強したものを間近で見られたという意味で、今回、私はモナ・リザよりもこちらが見られてよかったと思った。

とはいえ、やはり一番人気はモナ・リザであった。

28年ぶりのパリ訪問

設計部 河川砂防課 副技師長
北澤 聖司 (2012年入社)



世界で最も有名な絵画の一つである「モナ・リザ」

6. 五日目

五日目はヴェルサイユ宮殿を観光。建物もすごいが、一番は庭。左右対称に配置した平面幾何学式の庭園は非常に美しく、もう少し庭見学の時間を頂きたかった。

午後からはセヌ川クルーズ。前の日行けなかった「オルセー美術館」を見ながら、またいつかと心に誓った。



またいつか行ってみたい「オルセー美術館」

クルーズが終わったあとはシャルル・ド・ゴール空港へと向かい、無事帰国となった。

7. 終わりに

今回のヨーロッパ旅行は、私の人生で二度目の海外旅行であった。初めてはグアムだった。グアムは、周りに日本語があふれていて、日本語でも会話が通じることもあり、あまり異国感を感じなかったが、今回の旅行では、言葉に環境に、存分に感じる事が出来た。

日本にいるときはまったく違う意識を持ち、違うものに触れながら日々を過ごしたことは、すぐにはなくても自分に何らかの影響を及ぼすことは間違いないと思う。それが形になって現れることを楽しみに、また今回の旅行を忘れずに日々を過ごしていきたいと思う。

1. はじめに

28年ぶりのパリ訪問。さらに奇しくも60歳の記念すべき還暦の誕生日を芸術の都パリで迎える幸運に巡りあった。

28年前、格安航空券を使った個人旅行の出国地になっていたことから、子女に好まれる“ブランド品と観光だけの街”的なイメージしか持たず訪れたパリ。どうしてどうして、ルーヴル美術館をはじめとする博物館の圧倒的な数の収蔵品、徹底した都市計画に基づく歴史的な街並み景観などに圧倒された思いがある。あらためて再度訪れたいと願いながら、実現までに随分とかがかってしまった。今回、研修旅行で訪問したパリを中心に感じたことをオムニバスに報告する。

2. パリ街区の景観

前回訪問時にエッフェル塔から街全景を眺めた際、パリ中心街には高い建物がなく、一角のみで高層建築が見られる徹底した都市計画に驚いた記憶がある。

今回はそんな疑問もあったので少しパリの建物規制について調べてみた。

パリといえば石造りの重厚な街並みがほとんどであるが、17世紀以前は木造建築物が主体であったという。1607年の勅令で防火を目的として街路沿いの木造建築が禁止され、木造から石造、煉瓦造へと転換されていた。その後、5階建程度であったアパートの高さは時代を経るごと



写真-2.1 モンマルトルよりパリ南部街区を望む

に高くなり19世紀前半のパリでは6、7階建が標準になっていた。

このような住宅の高層化は日照、採光、通風を妨げ衛生環境を損なうことから、1783年にはパリで建物の高さ制限が実施されたとのことである。さらに1859年の改訂

に伴い美観、日照、防災等の観点から街路幅に応じて建物の高さが細分して制限された。

パリの高台であるモンマルトルの丘から撮影したパリ街区の写真を写真-2.1に示す。最終日、街のど真ん中にある「凱旋門」に登る機会を得た。その際、パリ街区の「背骨」的存在であるシャンゼリゼ大通りを撮影した写真を写真-2.2に示す。

その後、1967年に規制緩和が行われ、その結果として1972年に高さ210m、59階建のモンパルナスタワー(写真-2.2右側の高い建物)が建設された。しかし高層ビルはパリの伝統的な都市景観を損なうとして、再度規制強化がなされたとのことで、現在再開発による高層ビル建築は限られた区域のみとなっている。1970年当時、東京をはじめ世界の大都市で新しい都市像を形成する建築様式として超高層ビルが採用されたなか、一つの「実験」であるモンパルナスタワーの建設を受けて、再び「伝統」を重視したパリ市民の「街づくり」に対する意識の明確さに驚かされる。我々が住む日本ではスクラップアンドビルドが繰り返され、「雑然」とした都市景観が当然になっている現状を顧みるとき、「世紀」を越えて「伝統を守る」意識、その国民性に保守的といったレベルを越えた「理念」を感じ、敬意を表するに値する。

一世紀後における東京の街の形は予想がつかないが、パリの街は大きく変わることはないだろう。



写真-2.2 凱旋門屋上よりシャンゼリゼ大通りを望む

3. セーヌ川

パリの年間降水量は、東京の約46%である。(気象庁・世界の天候データツール) パリ周辺の概略横断面図によると「堀込河道」の地形を呈しており、洪水が溢水氾濫する地形ではない。

流況が豊かで安定しているうえに降雨も少なく洪水の危険度が低いという、日本の河川にはない特徴を有しているセーヌ川の河畔で、パリは都市として発達を遂げたと考えられる。モン・サン・ミッシェルからジバルニーに向かう途中の橋梁より撮影したセーヌ川を写真-3.1に示す。



写真-3.1 ジヴェルニー(モネの家)周辺のセーヌ川



写真-3.2 パリ市内のセーヌ川



写真-3.3 セーヌ川における水辺利用

川幅はパリ市内より狭いくらいである。日本の川であれば下流にいくに従い川幅が広がるが、流況が安定しており高水流量と低水流量の比である河状係数も小さいため、河川幅も一定しているようである。

パリ市内のセーヌ川の様子を写真-3.2、3.3に示す。河岸は直壁護岸が整備され、河川沿いに高水敷的な平場が整備されている。

中世にはパリの街区の骨格ができあがっていたと考えられる。その当時にはまだ河川工学なる学問も存在しておらず、経験的に先人が「洪水」を想定し川幅を固定し街区が整備されていたと考えられる。水辺利用も多様で、平時からパリ市民の憩いの場として利用されていることが観光船からも伺えた。東京の墨田川などの一部に類似した水辺環境が若干見られるが、これほどのオーブ

んさは感じられない。いかに水害による脅威が小さいことかを物語っている。また、石造りのように耐震性に課題のある建物が現在まで存在していることは、パリにおいて地震が極めて少ないことの証左でもある。

パリは、このように自然災害の脅威が日本の都市に比べてかなり小さいと考えられる。「防災」に向けたエネルギーが小さくて済んだ分、芸術や政治など文化的な要素に傾けるエネルギーが旺盛であったように思える。

4. モン・サン・ミッシェル

水平線に忽然とそそり立つモン・サン・ミッシェルの景観は実に素晴らしいものであったが、それ以上に興味深かったのは周辺の砂嘴、砂州地形の大きさである。

丁度我々が訪問した5月15日の午後5時過ぎは干潮から満潮になり始めた頃であった。ガイド女史の説明によるとこの付近はノルマンディー地方でも干満差が大きい場所で、最大の干満差は15mにも及ぶとのこと。昔、陸続きでなかった頃の巡礼者のなかには徒渉中に満ちてくる潮に流されて命を失ったものも多かったと聞く。

日本では有明海の干満差の大きさが有名であるが、それでも干満差は6m程度である。有明海の規模をはるかに越えるような干潮時の砂州の大きさである。移動中見てきたノルマンディー地方の平坦な地形を考えれば、海浜地形もかなり緩勾配で15mも干満差があれば広大な干潟が干出すると予想される。すでに一部に潮が満ちはじめていたため干潮時よりは干潟規模が小さくなっていただけと考えられるが、モン・サン・ミッシェル北側の城壁から見た干潟は沖の小島を遙かに超える規模であった。その干潟状況を写真-4.2に示す。

場内の見学を終えモン・サン・ミッシェルを出る頃には満ち潮になり始めており、その入潮部の前面に砕波が確認できた。その速さは目視で優に2-3m/sを越えていた。有明海など干満差の大きいところでの入潮もそれなりに流速が早い、入潮の先端に砕波を見たのは初めてである。昔、寺院まで巡礼のため徒渉中であった信者が波に吞まれたという史実も頷ける。満ち潮の状況を写真-4.3に示す。



写真-4.1 バスの車窓から見たモン・サン・ミッシェル



写真-4.2 モン・サン・ミッシェル北側に広がる砂州干潟



写真-4.3 砂州干潟上を遡上する満ち潮の砕波部

5. オルセー美術館とクロード・モネ

前回訪問時にルーヴル美術館とポンピドゥー美術館を訪問し、なぜかオルセー美術館には行かなかったのが、今回の自由行動ではオルセー美術館に行くことに決めていた。

オルセー美術館は、19世紀末に建てられた鉄道駅舎を改築したものである。収蔵品もさることながら、その建築物としても随所に素晴らしいところがあった。街区への拘りだけではなく、建築物ひとつひとつにも驚くべき拘りを持っている。オルセー美術館の外観と5Fから見たメイン展示場の吹き抜け空間を写真-5.1、5.2に示す。

オルセー美術館は印象派と言われる画家の所蔵品が有名である。その中に高知県北川村と縁のある「モネの庭」の本家・本元のクロード・モネの絵画も多数展示されている。

今回の旅行では、モン・サン・ミッシェルからパリへの帰途、モネの庭と家があるシバルニーに立ち寄った。その時はモネに対してさほどの感慨もなかったが、美術館の5F「印象派」の展示において、その多彩な画風の変化に魅せられた。「睡蓮」くらいしか知らなかったモネに対する認識が大きく変わった。当然のことながら長く画家を続けて

いれば歳とともに絵に対する価値観や取り組みが変わり画風が変化するのは当然であるが、そういった変化がまた魅力になりうるということをすっかり失念していた。



写真-5.1 オルセー美術館の外観

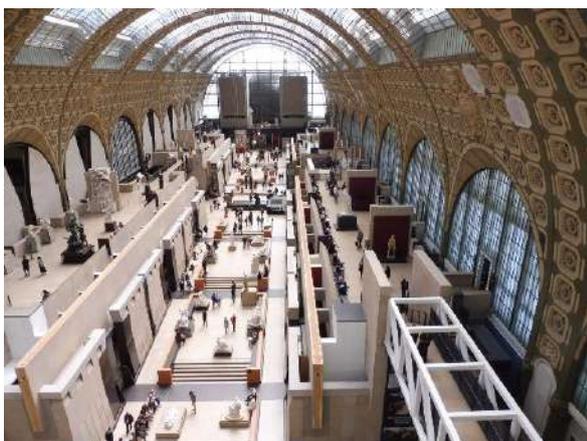


写真-5.2 オルセー美術館のメイン展示空間

あらためて、高知に関わりのある画家について調べてみようという気になった。これも何かの縁である。

次のパリ訪問時の課題は、彼の集大成である「睡蓮」の連作が展示してあるオランジュリー美術館の訪問であろうか。

日本の美術館では当然のごとく作品の写真撮影が禁止されているが、フラッシュを使わなければパリの美術館では撮影可能である。皆カメラを向けているので驚いた。気に入ったモネの作品をこの報告にも1~2枚掲載させていただこう。



写真-5.3 「ジヴェルニーのモネの庭」1900年



写真-5.4 「日傘の女」1866年

6. おわりに

28年前には感じなかったことを色々体験することができたことは貴重であった。これも「歳」による感覚の変化のなせることなのだろうか。

今の日本の状況は、物心両面にわたり何か核になる「信念」のようなものが欠如しているように感じられる。パリの都市計画のように一本筋の通った理念に拘ることも大切ではないかと感じられた。

ただ、往復の12時間に及ぶ飛行機による長旅は結構身体に応えた。これも「歳」の所為だろうか。

■付記-1

今回羽田空港で海外用のwifiルーターをレンタルされた方が多かったと思う。海外で日本と全く同じようにインターネットが利用できる環境に正直驚いた。通信機器はもとより、その情報環境の進歩に驚かされたのは私だけではないだろう。日本と同じ環境で使える地図情報や手軽なスマホ翻訳ソフトなど、海外旅行も随分と楽になってきたものである。

■付記-2

今回の旅を通じて日頃お世話になっているウォシュレットなる日本独自の文明の利器の効能を痛感した方も居られたのではないか。すっかり私の「通旋門」は過保護になっていたようである。

以上

フランスへの社員旅行を振り返って

設計部 河川砂防課
高橋 昌也 (2017年入社)

1. はじめに

今回の社員旅行が私にとって初めての海外旅行であった。言語の壁や環境の違い、治安の問題など少々不安を抱えながらも初めて訪れるフランスへの期待もあった。

レポート作成にあたり、今回の社員旅行で実際に訪れた場所の中でも特に印象に残った事柄について、帰国後にインターネットで情報収集した内容を交えて紹介したい。

2. パリ到着

1日目は旅行先のフランスへの移動がほとんどであった。朝早くに高知空港を出発して羽田空港を経由し合計で12時間以上も飛行機で移動したにも関わらず、パリに着いた頃にはまだ日が高く、時差というものに少々違和感を覚えた。

パリ滞在先のホテルに着いたのは現地時刻17時頃であった。日本時間に換算すると24時になるが、不思議なことに目は冴えていた。パリ到着後は自由時間であったため、日が暮れるまでの数時間をパリ市内の散策に充てた。パリ市内の街並みは辺り一面を見渡すと白を基調とした建物が整然としており、日本では見ることのない景観であり新鮮味を感じた(口絵写真16)。

パリ市内の建物の多くは1階部分が店舗等、2階以上が住居となっている。パリでこれらの住居に住む人々をアパルトマンと呼び、パリ市民の住居のほとんどがこれに該当するようだ。

また、これらの建物は高さが規制されていることが多く、パリにおける景観規制の厳しさを物語っているとも言える。

3. モン・サン・ミッシェル

旅行2日目、私たちは午前中にシャルトルの大聖堂を見学した後、モン・サン・ミッシェルを訪れた。

ここは年間300万人もの人々が訪れる観光地であり、私たちが訪れた日も多くの観光客で賑わっていた。

モン・サン・ミッシェルの修道院から周囲を見渡すと広大な干潟が辺り一面に広がっていた。この地域は世界で最も潮の干満の差が大きい場所の一つらしく、かつての巡礼者の中でもモン・サン・ミッシェルを目前にして満潮に吞まれ亡くなる人も少なくなかったようだ。



モン・サン・ミッシェル島の商店街



モン・サン・ミッシェルの干潟の状況

19世紀末～2014年までは堤防道路によって島との往来をするようになっていた。しかし、それが潮流をせき止める原因となり陸繋島化を引き起こしていた。現在は木道橋によって島の内外を往来するようになり、潮の干満により島が形成されるかつての景観を取り戻している。

この事例はこれから土木技術者として携わっていく上で、「新しく土木構造物を設置した際にそれが周囲の環境にどのように作用するか」ということについて幅広い知識をもって対応する必要のあることの一例であると思った。

4. ジヴェルニー・モネの庭園

次の日、モン・サン・ミッシェルを後にし、次に向かった場所はジヴェルニーという町にあるモネの庭園である。ここはフランス人画家のモネが晩年に制作活動を行っていた家屋と庭園が現存された場所である。画家でもあり庭師でもあったモネ自らが設計し、アトリエとしていたこの庭園は現在、春から秋にかけて一般公開されており、季節によって多種多様な花が見られるようになっている。



モネの庭園の睡蓮

モネの庭園では日本庭園に見立てた箇所もあり、そこには彼の作品に影響を与えた睡蓮も見られた。

高知県には北川村にモネの庭園を再現したものがあるそうだが、そちらにはまだ行ったことがない。機会があれば北川村のモネの庭園にも足を運び、対比しながら見学してみたいと思う。

5. ルーヴル美術館

旅行4日目、この日は1日自由行動であった。そこでまず訪れた場所がルーヴル美術館である。そこは世界最大級の美術館であり、35,000点もの展示品がある。館内面積は60,000m²にもものぼり、事前知識等がなければ要点を押さえて館内を回るのとはとても困難だと思った。そう考えるとオプションツアーを申し込み、ガイド付で鑑賞できたことは正解であった。

ルーヴル美術館の建物は元々12世紀にフィリップ2世が建築した要塞であったそうだ。地下部分をはじめ、ところどころに要塞として使われていた頃の面影が残っていた。

後にルイ14世がヴェルサイユに王宮を移した際にここが美術品の保管場所となり、フランス革命後に美術館として開館されたという経緯がある。



要塞として使われていたルーヴル美術館の地下部分

ガイドの方が「この日は比較的空いている」と話していたものの、年間700万人訪れる美術館である。館内は多くの人で賑わいを見せていた。特に世界的に有名なモナ・リザの展示室には前に進むことも困難なくらいの人

が詰め掛けていた。多くの絵画がそのまま展示されているのに対して、モナ・リザは防弾ガラス内に展示されており、なんとも言えぬ特別感を醸し出していた。

あまり下調べをせずに実物を見たからこそその感想であるが、モナ・リザの絵は意外と小さかった。帰国後にインターネットで調べたが寸法は縦77cm 横53cmであるようだ。

ルーヴル美術館の鑑賞が終わった後は昼食をとり、パリの大規模百貨店であるギャラリー・ラファイエットでのショッピングやパリ市街地の町巡りなどを楽しんだ。

6. ヴェルサイユ宮殿

この旅行の最終日、ホテルをチェックアウトした後、最初に向かった場所がヴェルサイユ宮殿である。ルイ14世がフランス国王であった時代に建てられたこの宮殿を一言で説明するなら「とにかく大きい」に尽きる。

ガイドの方と共に宮殿内を見学した後、噴水庭園を時間の許す限り見学した。こちらもその広さに圧倒された。欲を言えば宮殿内よりも、こちらの見学に時間をかけて見学したかったくらいである(口絵写真25)。

ルイ14世はヴェルサイユ宮殿の建設よりも噴水庭園の造園に人員を多く投入したそうである。ここにはルイ14世の意図が込められているらしくその一つを紹介する。

「水なき地に水を引く」ヴェルサイユ宮殿について調べていく中でこの言葉に目が止まった。当時のヴェルサイユは不毛の地であったが、揚水機を使い、セヌ川から水を汲み上げ、噴水をつくり自然を変えてしまうことを成し遂げているのである。人と水の関係というものは、いつの時代も密接に繋がっているものだと考えさせられる。

7. セヌ川クルーズ

セヌ川のクルーズはエッフェル塔からパリ市街地を1時間かけて周遊するものであった(口絵写真29)。

すれ違う船の乗客や河原でくつろいでいる人々が気さくに手を振ってくれる光景を目の当たりにした。はじめは手を振り返すことすら少々躊躇いはあったが、次第にこちらから手を振るようになっていた。言語や国籍の壁を超えた非言語コミュニケーションに暖かみを感じた。

8. おわりに

今回の社員旅行はパリ到着初日に小雨が降ったものの概ね天気に恵まれ、大きなトラブルもなく終えることができた。

今回の社員旅行で回りきれなかった箇所も多々あるので、個人で行く機会があれば改めて見学したいところも多い。

反省点を挙げるとすると、大聖堂やルーヴル美術館などを見学する際、キリスト教関係の知識などを下調べしてから旅行に臨むべきだったと後悔している。少しでも知識があればまた違った視点で見られただろう。

パリのまちと歴史・文化・芸術に触れた旅

設計部 防災まちづくり課 技師長
横山 成郎 (2016 年入社)

1. はじめに

私は、芸術の都というよりはプライドの高いフランス特にパリへの旅行を希望した。

近代都市の先駆として位置付けられている、パリ、シテ島を中心とした都市構造は、皇居を中心とした東京市区改正に影響を及ぼしている、とされる。そのような背景がありながら、全く違った都市構造が形成されているパリは、果たして現代の社会構造とマッチしているのだろうか、という疑問を解決してみたくなったのである。

私は、都市計画を専門としている技術士として、今回のパリという都市を自分の目で見て、都市計画的な見地から考察を述べてみようと思う。ただし、実際パリ市の一部しか見ていないので確信的な考察とはならないことをご承知いただきたい。

そして、一日自由行動で触れた生活者の視点でのパリの感想、最後に観光地で記憶に残った情景等、についても述べようと思う。

2. パリの都市構造

パリ市は、20 の区で構成されており、最も古い1 区から時計周りに渦巻き状に番号が配置されていて、その形から「エスカルゴ(カタツムリ)」と呼ばれる。面積は、105km²。

なぜ、このような構造になったかという、パリは、もともとシテ島から発展していったその周りを城壁で囲みながら、成長していった都市であり、成長するカタツムリがそのからを大きくするように、6 度にわたって、更に広がった城壁を築いてきたからだそうである。

このように、カタツムリ状の城壁の中に形成されていた都市は、複雑な道路に囲まれた小区画で形成されている。その中に、道路事業により土地を収用したことから、幹線道路は整備され、道路幅員は一定確保されたものの、縦横無尽な道路の存する街となってしまった、ということである。

まさに、私は、そのことを実感した。私は、ホテル到着早々に街中を散策途中、すぐに道に迷い、スマートフォンがなかったら、ホテルに無事帰ることができなかった。

3. 現在のパリ市の道路利用状況

パリ市も人口のピーク時は1920 年代で約290 万人いたそうである。人口密度は320 人/ha を超えていたようだ。その後は、郊外へ人口が拡散したことから、パリ市の人口は減少して、今が底で、再び微増状況にあるようだ。

ここで、高知市とも少し比較してみる。大津・介良を

除いたいわゆる旧高知市が約133km² で、人口が約25 万人なのである。この状態で、中心市街地の車道幅員は、パリ市とあまり変わらない。当然、パリ市の朝は写真1 のとおり郊外から流入する車両で大渋滞となっている。



写真1 流入する車両の渋滞状況

そして、パリ市の中心市街地の主要幹線道路以外の道路利用状況はというと、写真2~4 のとおり慢性的に混雑という縦横無尽な状況となっている。



写真2 車がひしめき合っている7 差路



写真3 路上駐車による交通阻害



写真4 広幅員の歩道を占有しているカフェテラス

さて、街はというと、写真5のようにゴミが道路のいたるところに散乱している。



写真5 散乱しているゴミ

しかし、写真6のように毎日ではないかもしれないが、清掃作業が行われているのである。



写真6 ジェット水流による清掃

前段で私は、道路インフラの主体を車や流れという視点で街を観察していた。一方、主体がパリジャン・パリジェンヌと考えたら、街の見方が変わるのではないかと考え、改めて観察した。

すると、環境整備が十分されている街を目指す以前に、スクラップ&ビルドを不可能としている街で、精一杯のゆとりや賑やかさを大事にした人重視の街を目指していることが写真7~9でも理解できることが改めて分かった。



写真7 自由気ままな交通島



写真8 駐輪が障害にならない歩道



写真9 補修中の建物や歩道

4. 自由さを感じるパリジャン・パリジェンヌ

このレポートを記述するに当たって、少し基礎知識として情報収集した中に、パリ市内に居住する人間活動を見て、フランス人が全てそうである、とは思わないで欲しい、というコメントがあった。

生活者と旅行者の利便性という視点で街をながめると、様々な取組がユニバーサルデザインではないものの、一定整備されている施設が写真10~13のとおり目に入ってきた。



写真10 情報掲示板



写真11 ストリート表示板



写真12 地下鉄から上がるエスカレータ



写真13 バイク占用駐輪場

5. 私が感じたパリ市の将来像

今、パリ市は道路空間の再整備事業に取り組んでおり、街中にあるロータリー状の広場やセーヌ川沿いの道路、幹線道路の歩道空間、などは今後一層ゆとりと安らぎ、憩いの空間として、人重視の道路空間が創造される。写真14のように高台から望むパリ市の建造物は、全く変わらない姿で歴史の時間軸を刻むことだろう。また、シャンゼリゼ通り(口絵写真16)は毎月第1日曜日、自動車通行を禁止しているということである。

そして、一旦街中に入ると、広々とした人重視の空間

と変わらない狭隘な石畳の歩行空間のコラボレーション、が生活者と観光客を引きつけ、世界有数の観光都市として成長し続けることが想像できる。



写真14 モンマルトルの丘からパリ市を望む

6. その他特に印象に残った歴史・文化・芸術

(1) 幻想的なモン・サン・ミッシェル

快晴のモン・サン・ミッシェルに夕方到着、修道院から見た遙か広がる地平線は絶景であった。そして、21時半過ぎの日の入は、宴会後のうつろな頭脳をスキッとさせてくれた。

翌朝、6時半すぎに拝めた日の出に感激、そしてその後これまで見えていた修道院がみるみるうちに霧の中、最後は存在すら感じさせない風景が創出され、幻想的なひとときを味わうことができ(写真15~19)、今回の旅行で一番感激した出来事であった。



写真15 遙か彼方に見える快晴の中の修道院



写真16 ホテル前から見た日の入



写真 17 翌朝遙か彼方に見えた修道院



写真 18 ホテル前から見た日の出



写真 19 霧の中に隠れてしまった修道院

(2) 華やかな夜のひととき

パリはスリヤひったくりが多いので気をつけないといけ
ない、と言われ、夜のとぼりなどもってのほか。私は、
団体で行くムーラン・ルージュを楽しみにしていた。

明るいうちに入ったそこは、赤い照明が社交場の絵画
を思わせるような雰囲気であった。シャンパン付きのデ
イナータイムが終わった後、お待ちかねのショー「フェ
リ」が始まった。羽飾りをまとったダンサーのスタイル
の良さに見とれてしまった。最後はドーリス・ガールズ
のフレンチカンカン、これは見どころで圧倒され満足し
た。

しかし、ショーよりも私は、店の前に出たときの夜の
街の華やかさと賑やかさ、遠い昔に味わった感覚を思い

出した(口絵写真 22)。

(3) オルセー美術館の印象派とモネ

ジヴェルニーにあるモネの庭園は、本当に北川村の拡大
版であった。しかし、花の多さと美しさはとても比較
できない情景だった(写真 20)。



写真 20 ヤナギが脇役の色とりどりのモネの庭

そして、翌日の自由行動で行ったオルセー美術館で
見た印象派は、モネだけでなくマネ、特にルノワールの
「ムーラン・ド・ギャレットの舞踏会」は、前日のショ
ーの印象が残っているのか、前面の姉妹に強く惹かれる
ものがあつた。そして、セザンヌ・ゴッホ、ゴーギャン
と淡い色調から大胆な色彩やタッチに変化したポスト印
象派といわれる画風にも何か人間の内面が映し出されて
いるような気持ちを感じさせられた。

彫刻や絵画をゆっくり鑑賞してしまい、エッフェル塔
に登る時間が無くなってしまったのは、少し残念であつ
たけど、歴史的建造物があつて、その中に収蔵されてい
るところにも、その価値という日本で鑑賞するスケ
ール感とは又違った記憶として、一生の宝となつたと
感じたことだつた。

7. おわりに

今回、55 周年記念旅行に参加することができ、本当に
感謝したい。

日本特に高知は、おもてなし文化が根付いている。私
は、その利点を活かして、歴史・文化・伝統を残しつ
つ、環境に配慮したゆとりと安らぎのある人重視のまち
づくりを目指していきたい。

そしてまた、60 周年にもぜひ参加することができるよ
う、益々(株)第一コンサルタンツの発展に「情熱・謙虚・
誠実」を持って尽くしていきたいと思う。

日本とフランスの社会資本の違いについて

設計部 防災まちづくり課 課長補佐
芝田 和仁 (2003年入社)

1. はじめに

平成 30 年 5 月 14～19 日の 6 日間、フランスへの研修旅行に参加した。

人生初の海外であった。

短い期間であったが、フランスの社会資本を見ることができた。フランスの設計図や設計マニュアルを確認したわけではないが、自分なりに感じたことを記述する。

2. 高速道路

高速道路に関し、感じた事を記述する。

(1) 耐震設計

羽田空港からフランスのシャルル・ド・ゴール空港まで約 11 時間の空の旅であった。

空港からパリ市内のホテルへバスで向かう途中に、空港連絡道路の橋脚が見えた。

橋脚は、日本では考えられない程細い。地震時の影響を考慮していないのだろう。



空港連絡道路の橋脚

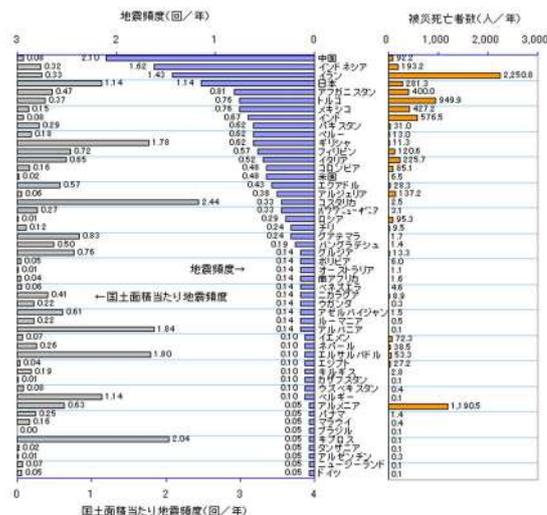
添乗員の話では、フランス国内において、パリからはほとんど地震が起きないとのこと。

調べてみると地震に加え、台風も来ないようだ。

地震・台風等、自然災害の発生が少ないと、社会資本整備に関わる費用も少なくてすみ、社会保障費等に予算を回せるのだろうと思う。

また、予算だけでなく、全国各地で甚大な災害が発生する日本と比較し、住民の安全・安心に対する意識も異なるのだろうと思う。

世界各国の地震頻度・年平均被災死者数(1980～2000年)



(注) 地震頻度の対象はマグニチュード5.5以上の地震。面積当たり地震頻度は日本の面積(38万平方キロ)当たり。
(資料) 国連開発計画(UNDP)「世界報告書:災害リスクの軽減へ向けて」(2004年8月)
面積は世界, World Development Indicators 2004

世界各国の地震発生頻度

(2) 水路について

2 日目、ホテルからモン・サン・ミッシェルへの移動は高速道路をバスで走った。

バスの窓から眺めたり、トイレ休憩で下りた PA で感じた事は、コンクリート製の水路が無いことである。土構造の水路ばかりであった。

日本の高速道路では、日本中、道路端にコンクリート製の水路が設置されており、流末となる河川へとつながっている。これは、降雨量と地形が関係しているだろうと思い調べてみた。



高速道路本線側面



高速道路本線断面



高速道路ランプ部

パリと高知の降雨量の比較

| 都市 | 平均降雨量(mm) | | | | | | | | | | | | 合計 |
|----|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | |
| パリ | 43 | 42 | 43 | 47 | 56 | 47 | 61 | 66 | 40 | 58 | 55 | 56 | 614 |
| 高知 | 58 | 106 | 190 | 244 | 292 | 346 | 328 | 282 | 350 | 165 | 125 | 58 | 2544 |

パリと高知の降雨量を調べると、一目瞭然である。パリは、高知の1/5程度しか雨が降らない。しかも、降水量に大きな変化はなく、月平均50mm程度と安定している。

流下能力を考えると粗度係数が小さいコンクリート製品が優れているが、フランスの降雨量程度であれば、土構造水路で十分なのだろう。

(3) トンネル・擁壁について

トンネルは無い。擁壁はごく限られた範囲にあるのみである。これには、地形が関係していると思い調べてみた。

フランスと日本の森林率の比較

| | 国土面積(ha) | 森林率(%) |
|------|------------|--------|
| フランス | 54,909,000 | 31.03 |
| 日本 | 37,797,000 | 68.46 |

フランスは、日本と比べて約1.5倍広く、森林率は半分以下である。

高速道路は平地・丘陵地を通っており、トンネルはほとんどない。

擁壁は、立体交差部での橋梁・BOXカルバートの取り付け部分の限られた範囲のみであった。

地形は、平地で丘陵地が多いため、大規模な構造物は必要無いようである。

(4) 法面について

高速道路は、平地・丘陵地を通っているため、多段の法面は見かけなかった。日本であれば、多段の法面や法枠・アンカー工等、いたるところで見られるが、法面構造物もない。

日本の道路法面勾配は、土質にもよるが、切土であれば1:0.8、盛土であれば1:1.5が多い。

フランスは、見た感じ切土も盛土も1:0.8程度で高低差も小さい。

3. 幹線道路

日本とフランスの幹線道路で最も異なる点は、ラウンドアバウト(日本でいうロータリー)。

日本では、交差点は基本4枝(十字交差)までで、交通量にもよるが信号交差が当たり前である。

パリの凱旋門では、12本の幹線道路が集まってラウンドアバウトを形成してた。

見た目にも交通量は相当量ある。

(凱旋門周辺の交通量をインターネットで検索したが見つけられなかった。)

路面には、白線が無く車線数は不明である。添乗員の話では、だいたい走っているようだ。

ラウンドアバウトの円の半径は50m程度である。



正面から見た凱旋門



白線が無くても凱旋門周辺を走行する車両

日本人にはなじみの無い形式で、白線も無いと走りづらいと感じた。幹線道路にも水路は無かった。

4. 生活道路

生活道路で感じたことを記述する。

(1) 橋梁

モン・サン・ミッシェルは、フランス西海岸、サン・マロ湾上に浮かぶ小島、及びその上にそびえる修道院である。

モン・サン・ミッシェルで宿泊するホテルに着いて、修道院まで行きは連絡バス、帰りは徒歩であった。

修道院に行くには、1本の連絡道路を通るしかない。その連絡道路も、観光客は連絡バスに乗るか徒歩しか無い。

添乗員の話によると、修道院まで自家用車で行けるのは関係者のみということであった。

修道院へ渡る直前は橋梁形式となっている。

徒歩で帰る途中、橋梁の下を覗いて見ると、シャルル・ド・ゴール空港で見た橋脚同様に、信じられないほど細かった。



修道院から見た連絡道路



橋梁の下側

直径 30cm 程度の鋼管が 2 本、10m 間隔程度に配置されているだけであった。

(2) 水路

高速道路同様にコンクリート製の水路は、極端に少ない。ところどころ集水桝が設置されており、雨水が下水か河川へ流入するようである。



モネの庭周辺の生活道路

(3) 駐車場

日本では、家・アパート・商店の駐車場・コインパーキング・月極駐車場に車を停めるがフランスは路上駐車がが多い。

車を購入する際、日本でいう車庫証明も不要ということである。

縦列駐車されている車の間隔が狭い。真ん中の車出すには、バンパーをコツンコツンと当てて、スペースを作って出すようである。フランス人は、バンパーが当たるのはやむを得ないと思うらしい。大きな傷は嫌なので、みんなサイドブレーキは使用しないそうである。



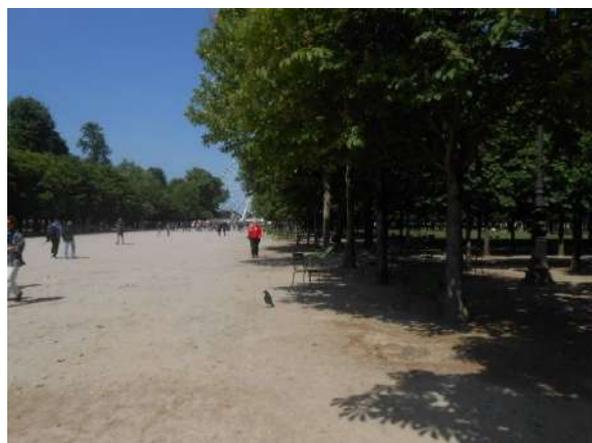
フランスの路上駐車

5. 公園・庭園

普段、公園設計に携わる機会があるので、フランスの公園や緑地を見ることを楽しみにしていた。

散策の途中、公園や緑地、ヴェルサイユ宮殿の庭園を見る機会があったので感想を述べる。

ルーヴル美術館から凱旋門まで徒歩で移動中、道路の両脇に緑地が広がり、途中に公園があった。



道路の両脇に広がる緑地



11 時頃の公園の様子

公園には、ランチを食べながら談笑するフランス人が多く集まっていた。

公園は、ベンチ・芝生・トイレがあるだけのシンプルな作りである。

ヴェルサイユ宮殿の庭園は、壮大で維持管理が行き届いていた。



上から見たヴェルサイユ宮殿の庭園

6. おわりに

初の海外で、文化・習慣・言語が違うことから、戸惑うことも多いだろうと思っていたが、特に困ることは無かった。もちろん、優秀なJTBの添乗員さんが、移動・食事・観光地で完璧にサポートしていただいたおかげである。

英語もフランス語も分からないが、一人でレストランやお菓子屋さんに入り、片言の日本語で話した。どうにかなるものである。日本人観光客等、珍しくも無く慣れているようである。入ったお店の店員は、みんな親切で、話している内容は分からないが丁寧に接客してくれた。



一人で散策したパリの街中

短い期間ではあったが、フランスの文化・習慣・社会資本にふれることができ、有意義な研修旅行であった。

フランスの世界遺産に触れて

設計部 防災まちづくり課

北村 暢章 (2014年入社)

1. はじめに

平成30年5月14日から19日の6日間のフランス旅行へ行った。

海外旅行は、グアムに続いて2回目である。グアムとは違い、時差が-7時間あるため時差ボケにならないかと少し不安であった。また、5月のフランスは平均気温が13.5度とやや肌寒いことが多く、体調面に関して十分に気をつける必要があった。

しかしながら、本研修旅行では天候にも恵まれ多くの世界遺産を回ることができた。それにより、フランスの歴史を身近に感じることができた。

2. ノートルダム大聖堂(シャルトル)

研修2日目は、パリから南西に87kmほど離れた都市シャルトルにあるノートルダム大聖堂を訪れた。フランスで最も美しいゴシック建築と考えられており、ユネスコの世界遺産に登録されている。

頭の尖った尖塔アーチが非常にきれいであった。ガイドさんによると尖塔アーチにすることにより、天井の応力を下方方向に分散することができるためアーチを高くすることが可能になったようである。また、それにもない壁の必要性が少なくなったため、大きな窓(ステンドグラス)を設置できるようになったそうである。きれいなステンドグラスの存在には、建物の力学が大きく関わっていたことに驚いた。



写真1 尖塔アーチ



写真2 外からのステンドグラス

3. モン・サン・ミッシェル

シャルトルを離れ、フランス西海岸のサン・マロ湾に位置するモン・サン・ミッシェルへと向かった。

サン・マロ湾は、潮の干満の差が最も激しい場所であるらしく、モン・サン・ミッシェルでは非常に強い風と潮が猛烈な速度で押し寄せていた。

モン・サン・ミッシェルは、キリスト教カトリックの巡礼地のひとつであり、ユネスコの世界遺産に登録されている。フランス語で「聖ミカエルの山」と意味することもあり、塔の先端に金のミカエル像が確認できた。増築を重ねることにより様々な建築様式を観ることができた。



写真 3 金のミカエル像

特に記憶に残った所は、ラメルヴェイユの最上部にある列柱廊と呼ばれるゴシック様式の回廊であった。元々は、修道僧の休憩場所となっていたようで中央部には花壇があった。柱がズレて設計されていたため長時間いても飽きないと感じた。

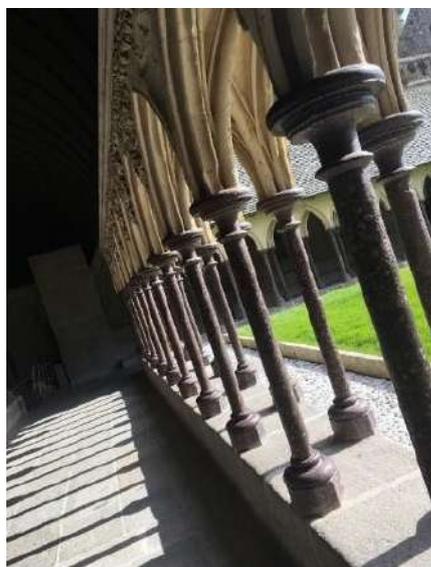


写真 4 列柱廊

4. モネの家(ジヴェルニー)

モン・サン・ミッシェルからパリへ向かう道中、モネの暮らしたジヴェルニー村に立ち寄った。私は、北川村にある「モネの庭」に何度か訪れたことがあったため、なじみのある風景であった。



写真 5 モネの庭園(フランス)

庭園内には、竹林や日本風にデザインされた橋があったり、モネの住んでいた家には、浮世絵が壁中に飾ってあったりとフランスに来たことを忘れる場面がいくつかあった。

日本と異なっていた所は、ジヴェルニーの小川は、川幅が広く流速も非常に緩やかであったことである。村全体的に起伏が少ないためである事が原因でないかと感じた。



写真 6 庭園内の竹林

5. ルーヴル美術館

4日目は終日、自由であったためオプションツアーでルーヴル美術館へ行った。テレビや映画などでよく見ていたが、実際に訪れてみると展示物と人の多さに驚いた。



写真 7 ルーヴル美術館前

ルーヴル美術館といえば「モナ・リザ」と「ミロのヴィーナス」のある所という程度の知識しかなかったが、「古代エジプト美術」、「古代オリエント美術」、「古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術」、「イスラム美術」、「彫刻」、「工芸品」、「絵画」、「素描・版画」の8部門があった。特に古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術部門の大理石彫刻は、石でできているとは思えないものが、たくさんあった。また、「サモトラケのニケ」という女神ニケを題材にした彫刻が有名人らしく自分の勉強不足を痛感した。



写真 8 大理石彫刻



写真 9 サモトラケのニケ

ガイドさんからルーヴル美術館は、元々宮殿であり増築を繰り返して美術品の倉庫のようになっていたと聞き、スケールの違いに驚いた。

6. ヴェルサイユ宮殿

最終日は、ヴェルサイユ宮殿に行った。ヴェルサイユ宮殿もルーヴル美術館と同じくテレビや映画でよく目にしていたが、ボンパドゥール夫人とマリー・アントワネットが住んでいたという程度の知識しかなかった。

ヴェルサイユ宮殿は、バロック建築の代表作であり宮殿の至る所に彫刻や絵画が展示されていた。家具を含めて宮殿の一部であるという考え方に当時の豪華さを感じることができた。また、線対称に強いこだわりがあるということで、開くことのない「形だけのドア」がたくさんあったり、トイレの個室という概念がなかったりと当時の文化の違いを感じた。



写真 10 ヴェルサイユ宮殿内

7. 最後に

4泊6日のフランス研修旅行を終えて、フランスの歴史や文化について深く知ることのできる研修であったと感じた。世界史の授業で習ったことのある美術品や建造物を実際に観ることができ感動した。

また、フランスは特にスリが多いと聞いていたので、実際にスリの遭っている人を見たときは、日本が平和であることを痛感した。

フランスの食事は、野菜や魚が多く健康的であると感じた。また、フランスの日本食街を訪れたところ、全体的に少し味付けが濃いように感じた。

安芸市の国虎屋がパリ支店を出しているのには、少し驚いた。モネの庭などフランスは、高知県と縁の多い国であると感じた。

フランスの文化史に触れる旅

設計部 防災まちづくり課
有澤 芳則 (2015年入社)

1. はじめに

今年の社員旅行は、弊社設立55周年記念としてヨーロッパ旅行に決まった。私は5月14日から19日までの間フランスへ旅行し、パリ、シャルトル、モン・サン・ミッシェル等の都市を訪れた。

この旅行を通してフランスの歴史文化、数多く残るフランス建築、都市計画関連の法規により維持される都市内外の景観等について学んだ。

2. シャルトル大聖堂

「美しきガラス窓の聖母」や「シャルトルの青」として知名度の高いシャルトル大聖堂は、フランス中北部ウール・エ・ロアールの県都シャルトルにある文化遺産である。

ヨーロッパを代表する宗教建築最高傑作のひとつであるシャルトル大聖堂は、西正門を大火事によって焼失した後に再建されている。そのため、異なる建築様式を同時に見る事が出来る稀有な建物として現存している。

西正面の外観は、向かって右側の塔がロマネスク様式の旧鐘塔、左側の塔が後期ゴシック様式の新鐘塔である(口絵写真17)。

3. ル・マンの名産品と街並み

フランス西部サルトの県都であるル・マンは、モータースポーツの聖地である。世界三大レースの一つ「ル・マン24時間レース」は、ル・マン南郊外の一般公道を閉鎖し行われる。今回は昼食のため立ち寄ったため、レースとなる場所に行けないのが残念であった。

昼食のメイン料理として出されたのは、フランスの伝統料理でありル・マンの名産品でもあるリエット。これは小さくカットした豚肉に塩を加え、ホロホロになるまで煮込んだものを瓶詰した保存食である。塩っ気のきいたリエットはパンと一緒に食べると美味しかった。近年では豚肉以外の素材で様々なリエットが作られており、機会があれば野菜のリエットを食べてみたい。

ル・マンの街並みにビッドオレンジが映えるトラムウェイ(路面電車)が駅に停車していた。トラムウェイは20世紀前半に廃止されたが、サルコジ政権下で行われた環境グルネル法や交通法典の制定により一気に復活した乗り物で、フランスの主要な交通手段の一つである。ビッドオレンジのトラムウェイは景観的に大丈夫なのかと思っただけ、走行している姿は街並みに調和していた。

4. モン・サン・ミッシェル

モン・サン・ミッシェルは、フランス北西部ブルターニュ半島近くにある小島である。大天使ミカエルからお告げを受けたオベール司教が708年に礼拝堂を作ったのが始まりとされる。その後、ノルマンディー公リシャール1世が966年建てたベネディクト会の修道院を増改築していった結果、小島を覆い尽くす現在の形となった。

モン・サン・ミッシェル修道院は、百年戦争時は要塞、宗教戦争時はカトリックの過激派グループの拠点、フランス革命後は監獄として使われた。その後、文豪ヴィクトル・ユゴーの訴えにより修道院としての機能を回復し、現在に至る。



フランス伝統料理「リエット」



トラムウェイ(路面電車)



モン・サン・ミッシェルの変遷



身廊

モン・サン・ミッシェル修道院は、主にゴシック様式で建築されている。建物内部は増改築を行った際、様々な中世建築様式が入り混じっている。祭壇を安置する身廊は、建築当ロマネスク様式であったが1421年に崩壊した。その後、ゴシック様式で再建されている。

現在のモン・サン・ミッシェルは、景観維持のため車の出入りを制限している。内陸部から島へ向かう橋を渡るのには、シャトルバスと許可を得た乗り物のみとなっている。徒歩で向かうこともできるが、強い風が吹く中を歩く気にはなれなかった。

観光案内の紹介写真でよく見かける「完全な小島」になったモン・サン・ミッシェルは、12.85mを越える満潮が来ないと見る事が出来ない。我々が行った5月はシーズンを外していたため完全な小島になった姿ではなかったが、朝霧の中海面に写ったモン・サン・ミッシェルの姿はとても幻想的であった。

5. クロード・モネの邸宅と庭園

ジヴェルニーはフランス西部ウール県のコミューン(地方自治体)で、印象派の画家クロード・モネの邸宅がある。バスから望むジヴェルニーの遠景は、北川村にある「クロード・モネの庭マルモタン」付近の風景を想起させた。

モネの庭園は邸宅正面に位置する“ル・クロ・ノルマン(ノルマンディーの囲い庭)”と、モネの代表作の一つ『睡蓮』が描かれた“ジャルダン・ドー(水の庭)”(口絵写真21)があり、この2つの間を道路(昔は鉄道)が通る作りになっている。日本文化(ジャポニズム)や日本の廻遊式庭園に影響を受け造られたジャルダン・ドーは、どこで撮影しても写真映える出来栄であった。自然風景の表現や変化に対する意識が高かったのを窺い知れる。

6. ノートルダム大聖堂

ノートルダム大聖堂のあるシテ島は、パリ中心部を流れるセヌ川の中州であり、パリの歴史が始まった場所でもある。古くは紀元前300年に定住したケルト人のパリシイ族が水上交易の基点にし、ガリアを征したローマ人も船員組合の本部を設置する等の歴史がある。また、ノートルダム大聖堂入口前(ノートルダム広場)には、パリの道路元標“Point Zero des Routes de France”がある。ローマ・カトリック教会にとってノートルダム大聖堂がどのくらい重要な建物であったか窺い知れる。

ノートルダム大聖堂内部は中世の森をイメージした作りとなっており、33mもある左右の柱は木々を表している。それが厳かな雰囲気を生み出し、背筋がしゃんとした気持ちになった。



モン・サン・ミッシェルへの交通手段



満潮時沈む海岸



ル・クロ・ノルマン(ノルマンディーの囲い庭)



ノートルダム大聖堂(内部)

7. パリの街並み

2001年にパリ市長に就任したベルラン・ドラノエ市長は、当時問題であったパリ市内の環境対策として様々な対策を実施した。その中の一つに2002年から「呼吸出来るパリ(Paris Respire)」と称しスタートしたモビリティ改革がある。1937年に廃止したトラムウェアの復活、パ

スや自転車の専用レーンの設置、セルフサービスの貸自転車 Velib' (ヴェリブ)、レンタル電気自動車 Autolib' (オートリヴ)等により一定の成果をあげている。

現在のパリは、自転車利用率を促進するための都市整備計画(ヴェロ 2020)を推進している。これは既存車線に対して交通規制を行う、または自転車専用レーンを整備するためのものである。しかし、慢性的な交通渋滞に苦しむパリ市民や一部産業からは反対する声も多い。

観光客にとって、パリ市内を気軽に移動できる手段が複数あるのは有難い。特にパリみたいな観光スポットが密集している都市において、観光地を巡る上での重要な手段になると思う。



貸自転車 Velib' と貸電気自動車 Autolib'



バス・自転車専用レーン

8. おわりに

今回の社員旅行は、平均寿命の長さ、県制度、固有の文化を有する等で日本と共通する点の多いフランスの歴史遺産を巡る旅行だった。

歴史遺産やその土地の歴史は、観光客の呼び水となる。その時重要になるのは“その土地の雰囲気を感じられること”ではないだろうか。今回の社員旅行はそれを肌で感じる事ができた。県ごとに差はあれ統一された建物の外観、高さや植樹の間隔が一定の街路樹が魅力ある街づくりに一役買っている。

魅力ある街並みは、その風景だけであっても Twitter や Instagram 等の SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)に投稿する動機になるし、投稿を見た他ユーザーの興味を引くきっかけにもなる。携帯電話で撮影した写真を SNS に投稿したら『いいな』や『行ってみたい』といった返事が届いた。

今回の社員旅行で得た経験を、今後の業務に活かしていきたい。

日本との歳を感じる事ができた旅

設計部 防災まちづくり課
土居 徹平 (2015 年入社)

1. フランスに降り立つ

羽田空港を離陸してからの、12 時間のフライト中は映画を見て過ごした。JTB の添乗員の方から、機内で寝ないほうがよいというアドバイスがあったからだ。最近の映画もあり、3 作連続で見て退屈しなかった。到着は予定よりも 30 分早く、時差ボケもなく順調な旅の滑り出しだった。パリ市内の宿泊先ホテルに、到着したのが 18 時頃だったが、フランスの日の入りは 22 時と遅く、荷物を部屋に置いてからホテル周辺を散策することができた。町並みと相まって異国にいることを強く実感した。

2. 見たこともない青

ホテルで朝食をとり、バスでシャルトルに向けて出発した。通勤ラッシュで、パリ市内を抜けるまで大渋滞(写真 1)だった。フランスが、車社会であることを知る事になった。日本に比べ運転は荒く、車線変更と追い抜きが頻繁である。(車線変更というより割り込みに近い)。バイクも多く、車と車の間をかなりのスピードで抜けて行っていた。車は朝でもヘッドライト点灯、バイクはハザードランプ点滅というのが多く見受けられ、事故に巻き込まれない為、自己防衛なのと思った。渋滞を抜け、パリから南西へ 87 km、シャルトルに到着した。「ノートルダム」とは「我らが貴婦人」という意味で「聖母マリア」のことであるというガイドを受けながら、世界遺産のノートルダム大聖堂(口絵写真 17)を見学した。内部から見る 176 窓もの有名なステンドグラス(口絵写真 18)は、色鮮やかで他の場所で見たステンドグラスよりも、印象に残っている。



写真 1. 渋滞するシャンゼリゼ通り



写真2. モン・サン・ミッシェルと対岸を繋ぐ橋



写真4. サーモンとライス



写真3. 司教にお告げをする大天使ミカエル



写真5. モネの「水の庭」

3. 海上の修道院

モン・サン・ミッシェル(口絵写真19)は、サン・マロ湾に浮かぶ島の上に築かれ、巡礼地となっている。歴史は古く708年、大天使ミカエル(写真3)が司教オベールの夢の中で、この場所への聖堂の建設を、告げたのが始まりということだ。サン・マロ湾の干満差は激しく15mもあるそうだ。島の周辺には湿地が広がっており、ラムサール条約に登録されている。2014年に建設された島と対岸を結ぶ橋(写真2)は、全長760m、潮の流れを妨げにくい、環境に配慮した構造で設計されている。島への入場は、関係者以外は徒歩かシャトルバスに限られる。満員電車は、日本だけのものと思っていたが、世界共通であることを、この日乗った超満員シャトルバスにて体感した。

4. 自然に囲まれた長閑な村

モン・サン・ミッシェルを後にして290km、画家のクロード・モネが晩年に暮らした村、ジヴェルニーに到着した。モネの暮らした邸宅と庭園が、当時のまま管理されていて見学に訪れた。この村でとった昼食は、メインのサーモン(写真4)がビールによく合い美味であった。

昼食後に見学した庭園(写真5)は、よく手入れがされていて多くの花が咲き、鳥の鳴き声が聞こえた。この庭で見た風景の一つ一つが、モネの作品のように感じられた。

5. 世界一有名なキャバレー

ムーラン・ルージュ(口絵写真22)のナイトショーを観覧することが出来た。まずディナーを味わい、その後もなくショーが始まった。舞台上では華麗なダンスと歌が繰り広げられ、合間に寸劇などもあり楽しんだ。特に、ステージに水槽が現れるアトラクションは、迫力に圧倒された。フィナーレは、有名なフレンチカンカンで魅了され最後まで圧巻のショーだった。

6. 自由観光

この日は、終日自由観光ということで、午前中は、パリ市内をバスで観光するオプションツアーに参加した。日本人ガイドの説明を聞きながら、モンマルトルの丘にあるサクレ・クール寺院(口絵写真24)、エトワール凱旋門(口絵写真27)、エッフェル塔(口絵写真28)などを周った。昼からは、オランジュリー美術館を訪れた。ここは、モネの「睡蓮」の連作を展示するための美術館である。ジヴェルニーで見た景色が、記憶に残っていたので行ってみることにした。睡蓮が展示された部屋は、中央に長椅子があり、太陽光が上部から自然に入り込む造りになっていて、四方を囲む睡蓮の絵(写真6)と調和していた。絵画を鑑賞するというよりは、風景として楽しむための空間のように感じた。

フランス滞在記

設計部 橋梁構造課 課長
矢田 康久 (1997年入社)



写真6.「睡蓮」の大プレート



写真7.混雑する「鏡の間」

7. 王宮

パリから20km離れた地に建つヴェルサイユ宮殿。外観・内観(写真7)ともに煌びやかで、絢爛豪華とはこのことだと思った。庭園(口絵写真25)も広大で、左右対称の幾何学模様の植栽が、特徴的で美しかった。フランス旅行中に、よく見かけた街路樹にも、植栽へ人工的に手を加える、フランス式庭園の手法は活かされていて、四角に切り揃えられていた(写真8)。なにげない景色の中に、日本にはないフランスの美意識を感じ取ることができた。

8. 最後に

フランスという、あこがれの国に行く機会を頂いた今回の旅行で、多くの事を見聞し体験した事は、貴重な経験となり今後の人生に活かされていくと思う。



写真8.車窓からの街路樹

1. はじめに

今回の旅行は、私にとって初めてのヨーロッパ滞在であった。私は漠然とローマに行きたくて第1班のイタリアを希望していたのだが、希望者が多かったため人数調整で第2班のフランスとなった。フランスといえば凱旋門、エッフェル塔、フランス語、フランス料理、高貴な人種といったイメージが連想される。せっかくの機会なので、歴史と文化に触れることでフランスのことを少しでも理解し、勉強してみようと思いこの旅に望んだ。

2. パリの町並み

朝5時起床で高知を出発し、所要18時間少々でフランスに到着した。現地時間で16時15分であった。シャルル・ド・ゴール空港からパリ市街に到着。まず驚かされたのはパリの町並みであった。美しいは言うまでもないが、同じようなビルが延々と続いており道路も放射状に整備されている。一旦路地に入ってしまうと目標となる施設を視界から失い、方位、位置がわからなくなってしまう。この町並みは19世紀に整備されたものが原型となっている。凱旋門も同時期の建物である。パリにはたくさんの凱旋門があるようだが、日本人の誰もが思い浮かべるのは、フランス革命で高名なナポレオン1世が建設を始めたエトワール凱旋門である。

パリ市街はフランスの知識も興味もない私であっても至る所に聞き覚えのある建物や銅像などが点在しており、バスの車窓越しに息つく暇がないほどであった。なぜパリ市街には歴史ある町並みや建物が当時のまま残されているのか。戦火を免れた、地震に強いなどの理由が考えられる。

まず戦火であるが、第二次世界大戦でフランスはナチス・ドイツに敗北している。しかしパリは無防備都市として無血開城したため無傷であったようだ。その後、ノルマンディー上陸作戦によってアメリカとの連合軍がパリを奪還する訳であるが、その時のフランス解放軍のトップが空港や広場の名前になっているシャルル・ド・ゴールである。地震については、特にパリ近郊は大きな被害が過去にもないようである。調べてみると、強い地震が定期的に観測されているのはアルプスやピレネーといった限られた山間部である。今回旅行の道中でも山というものを確認できなかった。それだけ地殻変動が少ない地域ということであろう。

3. 気候、食文化

フランス滞在中の気候は、朝晩が少し寒くて日中とても暑く湿気がない。高知の気候と似ていて過ごしやすか

った。モネの庭を訪れた際には、睡蓮の花が少し咲き始めていた。私の家のベランダにある睡蓮は5月の連休前に咲いたので、半月くらいジヴェルニーは高知よりも遅いということか。パリの緯度は北海道よりも高いが大西洋の暖流や偏西風の影響によって気温の年較差も少ないようである。このような気候のフランスは農業大国であり、食糧自給率(生産額ベース)が100%を超えている。参考までに日本は70%である。このため外交での立場は非常に強いようである。

農業大国フランスの特産物といえばフランスパンの原料でもある小麦である。ここでフランスの食について報告しておく。パスタや肉料理にサーモン、エスカルゴ、ビールに至るまで味付けには癖がなくて食しやすい。日本で食べるこの手の洋食と遜色はない。そして、どこのカフェ、レストランでも必ずフランスパンが食べ放題である。しかし、この食べ放題のフランスパンが侮れない。絶妙な焼き加減でとても美味しいのである。



麦畑や牧場が雄大に広がる車窓からの風景

4. はなの都

ここまでパリ市街の風景、建物、歴史、フランスの気候、食文化と報告してきた。パリのキャッチフレーズといえば、有名なのは「はなの都」または「芸術の都」だろうか。芸術の都は誰もが納得すると思われるが、パリに花なんかあったかなと思いついて調べてみたら、「華やかな」という意味だろうという意見がベストアンサーになっていた。ベストアンサーを信じて、まず華やかさから報告しよう。今回の旅行において最も華やかなスポットと感じたのはモンマルトルにあるキャバレー「ムーラン・ルージュ」だろう。ムーラン・ルージュはフランス語で「赤い風車」という意味である。

ムーラン・ルージュは、フランス革命100周年を記念するパリ万博博覧会の年(1989年)にエッフェル塔完成と時を前後して始まったということである。ここで活躍した有名人にはプレスリーやフランク・シナトラなど多数おり、数年前にもニコール・キッドマン主演で映画化されている。ショーの内容については、宝塚とストリップが融合したような優雅さと甘美さを兼ね備えた感じといったところだろうか。ショーのせいなのかお酒のせいなの

か、陶酔状態というのだろうか、やたら眠くなり記憶が途切れ途切れにはなってしまったが、有名なフレンチカンカンの中では会場のボルテージは最高潮となりとても楽しかった。

そんな華やかなパリではあるが、美術館など主要な観光地ではテロ対策としてライフルを持った警官がうろろしているような物騒なところでもあった。物騒といえばパリで有名なのはスリである。まず遭遇したのがルーヴル美術館に向かう途中であった。ガイドさんが奴らはスリだと警告した直後、我々のツアーグループの一人に堂々と二人の少女が迫ってきた。その場はなんとか凌いだようだが、今度は自由行動中にコンコルド広場でチーズトーストを食べながら電話をしていた私のところに一人、二人、更にもう一人、計三名の少女が追い込みをかけてきた。なんとかここも無事に逃れたが、これはスリではなく単なる強盗である。ライフルも重要かもしれないが、スリを検挙したほうがパリの観光都市としての価値は高まるのではないと思われる。また、路地では浮浪者がそこかしこに目立たぬように寝ている。私は浮浪者に全く気付かずに突然足下に手が伸びてきて、スリと遭遇した時以上の衝撃を受けた。「心臓が止まる思い」とはこのことである。いずれにしてもパリは華やかさとスリルを兼ね備えた刺激的な街であった。

5. 芸術の都

次に芸術について報告したいと思う。今回私が訪れたのはルーヴル美術館である。芸術に詳しくない私ではあるが事前のパンフレットを確認する限り有名な作品が3つあるので、是非本物をこの目で確かめておきたいと思いつツアーに参加した。

一つ目は入館口であっさりと叶わなくなりました。その作品とは、ドラクロワによって描かれた「民衆を率いる自由の女神」である。特別展に移動しているらしく鑑賞できないということであった。この絵画は1830年のフランス7月革命を主題としているようである。私をはじめ多くの方が女性のリーダーなのでジャンヌ・ダルクと勘違いしているのではないかと思うのであるが、この女性はマリアヌというあくまで擬人化されたイメージ像ということのようだ。ジャンヌ・ダルクはもう少し前の15世紀にイギリスとフランスの百年戦争後期に活躍した実在した国民的英雄の少女であることは知っている方もいだろう。本命は叶わなかったが、ドミニク・アングル作の「ジャンヌ・ダルク」の絵画は観ることができた。

二つ目は「ミロのヴィーナス」である。ミロのヴィーナスは、1820年にエーゲ海にあるミロス島で発見されており、ギリシャ神話における女神アプロディーテーの像と考えられている。制作年は紀元前130年頃だそうだ。

最後にして最大の目的はやはりレオナルド・ダ・ヴィンチ作の「モナ・リザ」だろう。モナ・リザは世界で最も知られ、最も鑑賞された美術作品といわれている。

モナ・リザは1500年頃制作されたようである。気にな

るのはその値打ちである。1962年アメリカでの公開前に保険のための評価額換算が行われたようだが、その結果10,000万ドル(100億円)という査定額となり保険の引き受け手が皆無になったようである。これを現在価値に置き換えると72,000万ドル(720億円)ということなので、値打ちといわれてもピンとこない。

さすがにモナ・リザの展示室は他の展示室とは段違いの混み具合であった。絵の良さや作者にさほどの興味はないが、とにかく世界最高にして唯一の芸術を観たという満足感、達成感のようなものを感じた。そう考えると半日足らずのバスも昼食もない7千円のツアー代金も安い買い物だと納得できるし、もはや鑑賞などという表現は罰当たりであり神様を崇めてきたようなものである。日本のようにお賽銭箱でも設置していれば、莫大な収入が得られるのではないかと低俗なことを考えてしまう。



世界で最も入場者数の多いルーヴル美術館

6. 交通

最後に土木に携わる者としてパリの交通事情について報告しておかなければならないだろう。パリはシャルル・ド・ゴール広場にある凱旋門を中心に放射状に道路網が広がっており、この近辺は車線数が多く常に渋滞している。交差点はヨーロッパでは主流のロータリー式で信号はあくまで歩行者のために設置されている。パリでは自動車免許の取得が難しいらしい。その理由は、運転が上手でなければとてもパリの道路は走れないからである。ぼんやりしてたらクラクションを鳴らされ、おかまを掘られるだろう。滞在中も道中あちこちで追突事故を起こしている現場に遭遇した。ダイアナ妃が交通事故で亡くなったのがパリであることは有名な話である。

セーヌ川のクルージングでは、橋の桁下を見上げることができた。建物同様、鋼橋、コンクリート橋ともに架設年次が古そうな上路式アーチ橋が多かった。詳細には確認できなかったが、劣化が進行しているような橋梁は見られなかった。フランスでは橋やトンネルを見る機会がほとんどなかった。その理由は山や川がないからである。フランスの道路にかかる費用は高知と比べると微々たるものではないだろうか。



車線数が多く混雑するパリの道路



セーヌ川に架かる橋(コンクリート橋)



セーヌ川に架かる橋(鋼橋)

7. おわりに

まだまだ書き足りないが、天候に恵まれとにかく絶景であったフランス西海岸サン・マロ湾上に浮かぶモン・サン・ミッシェル。景観に配慮され周囲に高層な建物がいないため非常に美しかったエッフェル塔。他にもシャルトル、パリのノートルダム大聖堂やヴェルサイユ宮殿など魅力ある観光地を多く訪れることができた。

今回の滞在では、ほんの僅かではあるがフランスの歴史と文化、宗教を学ぶことができた。フランス人はとても高貴で日本人は蔑まれた感じで扱われるのではないかと内心臆病になっていたのだが、道に迷った時、レストランや販売店において英語や日本語で親切かつ気さくに対応してくれた。それにしてもフランス語の発音はさっぱりわからない。理解できたは、「メルシー」、「ボンジュール」の2単語程度である。英語もそうであるが、海外に行く度に語学力の無さを痛感させられる。今回はフランスということもありハードルが非常に高かった。次回海外へ行く機会があれば少しでも語学を勉強して、より有意義な時間となるよう自己研鑽していきたい。

初めてのEURO～フランス～

設計部 橋梁構造課 係長
西村 紘寛 (2008年入社)

1. はじめに

社員旅行は今年で6年連続の開催となる。本年は(株)第一コンサルタンツ創立55周年記念事業としてヨーロッパ旅行を行うこととなった。私は第2班のフランスへ班長という立場で参加した。また、本旅行は家族の同伴が許されていたため、海外に一度も連れて行ったことがない妻を同伴することとした。

2. 世界遺産

(1) シャルトル大聖堂

シャルトル大聖堂はパリから100km南西に位置するシャルトルに11世紀に建設されたノートルダム大聖堂である(口絵写真17)。建設当時はロマネスク様式による建築物となっていたが、火災により大部分を消失しその後ゴシック様式にて再建が行われている。

外観は石積み構造のためかどっしりとした印象を受けた。一方、建物の中に入ると「シャルトルブルー」と称される多数のステンドグラスが外部から差し込む光によってとても美しく輝いていた(口絵写真18)。このステンドグラスには聖書の教えが誰にでも理解できるように絵として描かれているようだ。私は聖書の知識は一切無いが、鮮やかな色調から聖書の場面を感じることができた。

(2) ヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユ宮殿は、1682年にルイ14世によってパリ都市圏の郊外に建設されたものである。

当時の王朝は絶対王政体制となっており、地位の高さを表すために宮殿を丘の上に建設したとされている。

実際にヴェルサイユ宮殿からパリ方面を望むと視線を遮る建物は一切なく、素晴らしい見晴らしであった。

建物奥には広大な敷地に見事な庭園を築き上げていた(口絵写真25)。この庭園はフランス式庭園の代表的存在となっており、多数の噴水と幾何学模様で剪定された植樹により形成されており、日本庭園とは違うエレガントさがあふれ出る風景であった。ガイドさんから庭園奥でピクニックを楽しむことができると聞いていたが、庭園があまりに広がったため庭園の一部分しか散策できなかった。次回ここを訪れたときは時間いっぱい庭園でピクニックを堪能したいと感じた。

(3) モン・サン・ミッシェルとその湾

モン・サン・ミッシェルは、パリから360km西に位置するサン・マロ湾上に浮かぶ島の上に建設された修道院

である。

100年ほど前までは島に渡る道が無く、潮の満ち引きによって満潮時には孤島、干潮時には陸続きとなっていたことから、巡礼者たちは海を直接渡って島へ向い、多くの死者を出していたようだ。こうした厳しい立地条件であったため、修道院の他にも要塞や牢獄として使用されていた時代もあったようで、建物は明るく爽やかな雰囲気、階層と重苦しい雰囲気を漂わせる階層に分かれており、陰と陽を感じさせる建物であった。

宿泊したホテルは、部屋からモン・サン・ミッシェルが一望できる最も近くに建てられたホテルであり、最高のロケーションであった。

(4) セーヌ川河岸

パリ市の中心を東西に流れるセーヌ川周辺には多くの歴史的建造物が建設されており、それらを含めた約8km区間をセーヌ川河岸として世界遺産に登録されている。

最終日にセーヌ川のクルージングを控えていたが、前日の自由行動日にセーヌ川河岸の夜景を観賞した。建物や橋梁に装飾された照明に映えるセーヌ川はとてもロマンチックな情景であり、旅行中最もパリに癒やされた時間であった。



セーヌ川の夜景

最終日のクルージングでは、船から街並みや建築物、セーヌ川に架かる橋梁を見学した。クルージングで周遊した区間がちょうど世界遺産に登録されている区間であり、夜景で味わった感覚とは違ったエレガントな風景を観賞することができた(口絵写真29)。

3. 文化

(1) 国民

旅行前にフランスでは犯罪やスリが多いと聞かされており、さらに旅行出発直前には宿泊したホテルの近隣でテロが発生したニュースを耳にし、自由行動日に予定していた蚤の市や街中でのショッピングに僅かながら不安を感じていた。

最も恐れていたのが蚤の市であったが、露店の店員や地元の買い物客はとても親切であった。一応警戒はしていたもののスリがいるようには感じなかった。また、私の英会話はさっぱりで知っている単語を並べて喋る程度

の英語力だが、ショップの店員は商品の説明や免税について丁寧に分かるまで説明してくれた上に記念撮影にまで応じてくれた。



チーズ専門店のムッシュと

そうこうしている間に旅行前に感じていた不安は無くなっており、日本と同じで安全で平和な街でありパリの人々はみな優しく自由行動日を存分に満喫することができた。

フランス国民とふれあうためには、観光名所などではなく地元の人々が利用する店や施設を訪れた方が何倍もいい経験ができると感じた。

(2) ファッション

フランスはパリコレが開催されるなど、昔からファッションに関して敏感な国である。

私はハイブランドのファッションには興味が無いが、自分の趣味に合うブランドがパリ発祥であることが多く、自由行動日にはいろいろなショップに回れるように事前調査を行っていた。ショッピングでは、お気に入りの革靴を購入できたことが何よりの成果である。

(3) 食事

フランスと言えば、フレンチ、ワインである。私は週末に必ずワインを嗜むほどワイン好きである。(但しワインに関する知識は皆無)

自由行動日の昼食と夕食は各自でとる必要があったため、旅行前に毎年パリ旅行を行っている知人にイチオシの隠れ名店とメニューを教えてもらっていた。

その中でも一番気に入ったメニューを紹介する。マッシュポテトの上に焼き色を入れたフォアグラを乗せた「フォアグラのポワレ」。フォアグラといえば味が濃く、食べ過ぎると胃もたれを起しそうなイメージがあるが、これは口溶けまるやかで後味が軽く、程よい余韻に浸ることができる。「こんなおいしいものがあるのか!」とつい声に出してしまった。この一品で昼間からワイン1本を軽く飲み干してしまった。



絶品だったフォアグラのポワレ

(4) 交通

まず交通ルールについて、日本の常識的な交通ルール(概念)はパリには全くないと感じた。車の運転者は混雑時には車間距離をほとんど確保せずに走行している。車間距離に余裕があるものならば我先にと隣の車線から車が割り込んでくる。

他にも交通量が多いパリ市内に存在するラウンドアバウト形式交差点、中でもエトワール凱旋門の周り(エトワール広場)で危険を感じた。この広場を中心に12本の道路が放射状に延びており、交通が集中する上に車線による規制が行われていないため、みなメチャクチャな運転をしている。移動バスでは前の座席に座っていたため、そのスリルを目の当たりに感じ、生きた心地がしなかった。

市街地では、景観規制から建物の建て替え等が禁止されているため駐車場が存在しない。そのためほとんどの路地では路上駐車するスペースが設けられている。利用者は駐車スペースを確保するため、僅かな隙間を狙って駐車するようだ。ガイドさんから車体のバンパーを前後の車両に軽くぶつけ自分の駐車スペースを確保していると聞き、フランス人にとって車はあくまで“モノ”として位置づけられているようで、我々日本人のように車を大切に使う感覚は一切ないものと感じた。

4. さいごに

私の海外旅行は、台湾とグアムだけであり、ヨーロッパは初めてであった。過去の2カ国は、歴史的に日本との関わりが強い国であったためか観光地でも日本語で記載されている店が多く、日本人観光客の受入れが整っていたため、英語が話せなくても何とかだった。しかし、フランスではそうはいかなかった。世界最大の観光立国フランスともなれば世界標準語とされる英語が話せるのが当たり前。これからのグローバル社会を生き抜いて行くには最低限の英語力が必要であると痛感した。

また、妻を海外に連れ出したのが初めてで、女性が一度は憧れるフランスであったため大変喜んでいて。彼女にとっては時間が全く足りなかったようで、すぐにでも渡仏したいと帰国直後につぶやいていた。機会があれば2人でもう一度訪れたいと思った。

人生最高の海外旅行

調査部 調査測量課
吉田 直起 (2014年入社)

1. はじめに

私は、第2班のフランスに参加した。フランスを選んだ一つの理由は、研修でフランスにいる高校時代の先輩に会うことであった。不安もあったがそれにまさる期待と楽しみでフランスへと出発した。

2. ミレニウムホテルパリオペラ

パリでは、「ミレニウムホテルパリオペラ」というホテルに宿泊した。ホテル周辺には、ヨーロッパ最大規模のデパート「ギャラリー・ラファイエット百貨店」があるなど、多くのブランドエリアが点在している。パリでお土産やブランドの服を調達するなら便利なところであった。日本食を食べられる飲食店もある。夜には屋上からライトアップされたオペラ座をはじめ、ルーヴル美術館、エッフェル塔、ノートルダム大聖堂など美しいパリの夜景が見れ「フランス」を実感した。

3. 世界遺産モン・サン・ミッシェルへ

翌朝は6時に起床し、ホテル周辺を5km走った。日本と違い、極端な高低差もなく気持ちよく走れた。その後、ホテルの1階にあるバイキング形式の朝食を済ませ、シャルトル大聖堂のあるシャルトルの町に向けて出発した。途中は曇りで、綺麗な写真を撮ることができず悔しい思いをしていたが、大聖堂に着く頃には晴れ、大聖堂をアップにした写真を撮ることができ良かった(口絵写真17)。

シャルトル大聖堂の中は広く、献灯台とスタンドグラス越しの日光が辺りを照らしていた。辺り一面が薄暗いため、スタンドグラスはより綺麗に見えた。特に青はシャルトルブルーと呼ばれ、深みがあり、より綺麗に見えた(口絵写真18)。

所々に設置されている献灯台が目についた。献灯台に火をつけるだけで2ユーロ。現在の日本円で270円だ。結構な金額である。世界遺産を維持するには、費用がかなり大変だと思った。



献灯台

シャルトル大聖堂から少しバスで移動し昼食を済ませた後、大潮時に海に浮かぶ小島として知られる世界遺産モン・サン・ミッシェルへバスで移動した。宿泊するホテルに荷物を置き、無料シャトルバスを利用し、モン・サン・ミッシェルに閉館時間の1時間前に到着した。

モン・サン・ミッシェルの入口からは狭い通路が修道院に向けて続いていた。両側には土産店や飲食店が並んでおり、店は閉店時間が近づいているにもかかわらず、観光客で賑わっていた。

狭く急な階段を上り、修道院の中に入る。修道士がお祈り用の白いマントを着てひざまづいて祈っていた。実際にここで生活をしているようだ。



お祈りをする修道士

次は大車輪である。牢獄として使われていたころ、重い荷物を下から運ぶために、6人の囚人が中に入って、ハムスターのように大車輪を回していたそうだ。人権意識の低い中世ならではの感じた。



荷物を運ぶための大車輪

今日は、ルルレサンミッシェルホテルで宿泊ができるので楽しみである。このホテルのレストランは、食事をしながらモン・サン・ミッシェルの景色を楽しめる。また、客室はモン・サン・ミッシェルを眺めつつドリンクや食事を楽しめるようになっていた。

4. パリ最高のディナーショー

3日目は、モネの庭があるジヴェルニーに向けて出発した。バスで4時間30分の移動である。

モネの庭に行くことが事前にわかっていたので、高知県の北川村にあるモネの庭を見学した。モネの庭は睡蓮が有名である。北川村では、所々に睡蓮が咲いていた

が、残念なことにフランスのモネの庭では、睡蓮はあまり咲いていなかった。

夜は、120年の歴史を持つムーラン・ルーージュでの食事だった。ホテルからモンマルトルという地域を通ってムーラン・ルーージュに移動した。モンマルトルは治安が悪いことで有名である。バスからの眺めもホテル周辺に比べ不穏な雰囲気を感じた。女性が一人で出歩くのは控えた方がいいだろうと思った。

ムーラン・ルーージュを舞台にした映画が2001年に制作されている。これも事前に鑑賞し、想像を膨らませていた。踊り子と若き作家のラブストーリーで、参考になる映画ではなかった。劇場内に入場する時は、ドレスコードが行われる。日本から持参したスーツを着て劇場内に入った。劇場内は、日本ではあじわえないような雰囲気であった。舞台から近い位置に座れたのは良かったが、席と席の間が狭く、食事を楽しむ時は窮屈であった。しかし、ショーと豪華な雰囲気を体験でき、大満足である。

残念ながらショーは撮影が禁止されているため、写真に残せなかった。



劇場内の様子

5. 世界最大級のルーヴル美術館

4日目は、自由行動であった。事前にルーヴル美術館のオプションツアーに申し込んでいた。ホテル1Fのロビーに集合し、旅行代理店まで徒歩で行き、そこからガイドさんの案内のもと徒歩でルーヴル美術館まで移動した。その時、ガイドさんがある2人組と話し始めた。その2人組は慈善活動などの署名を求め、記入している間にバッグから金品を盗み取るスリだった。被害は受けなかったようだが、バッグの口を開けられるところまで目撃した。驚くべきは2人が10歳ぐらいの少女だったということだ。貧困の闇の深さ、日本という国がどれほど恵まれているかを思い知った。その後は何事もなくルーヴル美術館の館内に入ることができた。世界三大美術館の一つに数えられる美術館である。世界一有名な絵画モナ・リザや、古代ギリシャ彫刻のミロのヴィーナスなど、誰もが一度は目にしたことがある超有名作品をガイドさんの案内で、効率的に回れた。しかし、館内で配布しているオーディオガイドを活用すれば、ガイドさんなしでも低価格でスムーズに回れるかも知れない。次回来る機会があれば挑戦してみたい(口絵写真23)。

6. フランスにある国虎屋

ルーヴル美術館を見学した後、国虎屋に向かった。安芸市にある国虎屋支店である。フランスの味を比較できるよい機会だ。ちょうど昼食の時間と重なっていたので、少しの間、外で待つことになった。入口付近に貼り付けてあったメニュー表を確認した。高知で食べる国虎うどんが950円に対して、パリの国虎屋は、16ユーロ。日本円で約2160円と倍以上の金額だ。他のメニューも安芸店より割高であった。材料費か、それともフランスのランチは平均的にこれぐらいのものなのだろうか。

店内に入るとほとんどの席がうまっていたので、分かれて座ることになった。私は、窓際の席に座ったが、窮屈であった。机もうどん以外のメニューを置くスペースが無いように思えた。店員もいったん外に出て給仕するという状態である。

私は、国虎うどん、おにぎり、とんかつ、ビールをオーダーした。おにぎりをとんかつで7ユーロ、ビールで5ユーロ。国虎うどんが16ユーロで合計38ユーロ。日本円で約5160円であった。覚悟はしていたが、ここまでとは。味は良かったのでよしとすることにした。

7. フランス最終日

フランス最終日は、ヴェルサイユ宮殿に向けて出発した。ヴェルサイユ宮殿は、本殿と離宮、庭園からなり総面積およそ800万m²である。

時間が限られていたため、本殿と庭園を見学した。ヴェルサイユ宮殿の入口付近に到着。ゲートをくぐるまでは荷物検査のため大勢の観光客で混雑していた。宮殿内の部屋は、それぞれ特徴や雰囲気が異なるが、どの部屋にも共通している事は豪華で美しいことだ。

ヴェルサイユ宮殿の見学を終え、セーヌ川に向けて出発した。パリの市街を二分するセーヌ川沿いにはエッフェル塔、オルセー美術館、ルーヴル美術館などの有名スポットが立ち並ぶ。多くの観光名所を船から眺めながらゆったりと時を過ごせた(口絵写真29)。

最後に、凱旋門に行った。時間がなかったので凱旋門の頂上には、自分を含む体力のある数名の社員だけが登った。10分ほど並び入場し、長い階段を上る。途中売店もあったが、時間がなかったため素通りした。凱旋門の屋上に到着。凱旋門上からのシャンゼリゼ通りやエッフェル塔を見ることができた(口絵写真16)。

その後バスに乗り空港へと向かった。出発までの時間が少なかったため、ゆっくりとお土産を選ぶことができなかった。機内では、疲れていたせいか、ほとんどの時間は寝ていた。

8. おわりに

今回の旅行は、日本ではあじわえないフランス独特の文化や歴史を体験することができとても有意義な旅となった。また、旅の目的の一つであった高校の時の先輩に会うこともできた。私にとっての最高の思い出である。

憧れのフランスへの旅

調査部 調査測量課
島内 司 (2016年入社)

1. はじめに

今回の社員旅行の行き先は、会社の創立55周年を記念しヨーロッパに決まった。私は昔から行ってみたいと思っていたフランスに即決し、出発の日を心待ちにした。

2. 1日目

5月14日の早朝、高知龍馬空港に集合し、憧れのフランスへの出発を今か今かと心待ちにしていた。しかし、待っていたのは12時間の空の旅という過酷なものだった。腰やお尻は痛くボロボロになった。

ホテルまでのバス移動中、パリ市内が目に入ってきた。初めて見るフランスの景色は想像を絶するものだった。有名な高級車ベンツ、レクサスなどといった車が多く走り、町並みはどこを見ても美しく、映画の世界に吸い込まれたような気持ちになった。



映画の世界のようなパリの町並み

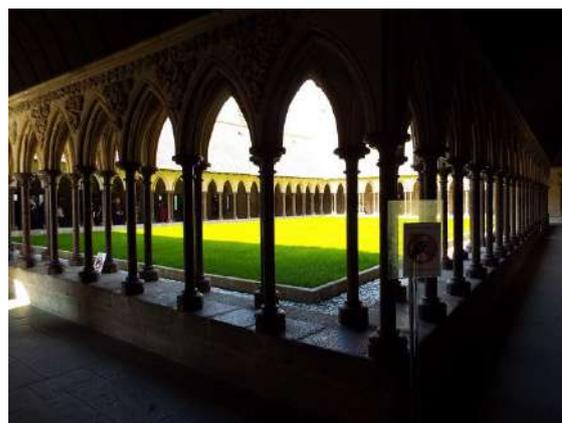
3. 2日目

少しの時差ボケを感じながら迎えた2日目は、フランスの有名な観光名所であるモン・サン・ミッシェルに向かった。

私は小学生の頃、好きだったゲームにモン・サン・ミッシェルが出てきたという単純な理由から「人生に一度でいいからモン・サン・ミッシェルに行きたい」と強い憧れを抱いていた。

特に私が好きなのは修道院の中にある回廊である。昔は修道士たちが瞑想や休憩をする場だったそうで、とても落ち着ける場所であった。他にもたくさん名所と呼ばれる場所があった。すべてあげているときりがない。夜も格別である。残念ながら綺麗な写真を撮ることができなかったが、ライトアップされたモン・サン・ミッシェルは昼の顔とはまた違った顔が見れた。

憧れのモン・サン・ミッシェルは予想以上に素晴らしかった。小学生からの夢がかなって本当によかった。



気持ちの落ち着く修道院の回廊

4. 3日目

3日目は朝焼けのモン・サン・ミッシェルを見るため早起きから始まった。眠たい目をこすりながら人気のスポットに向かうと、雲に隠れたモン・サン・ミッシェルがいた。一度隠れたモン・サン・ミッシェルは二度と姿を見せてはくれなかった。



雲に隠れたモン・サン・ミッシェルと記念撮影

この日はモン・サン・ミッシェルからパリに戻る。1日バスに揺られながら途中、ジヴェルニーにあるモネの暮らした村に立ち寄った。モネといえば高知県民なら一度は耳にしたことがある名であろう。北川村にある「モネの庭」だ。「モネの庭」はモネの暮らした村の中にあるモネの家の庭を再現したものだそう。小学生の時に「モネの庭」にいったことがあるが、幼かったためか全く感動もなく、行った記憶ぐらいしかない。本物の「モネの庭」に来たらどんな気持ちになるかと思っていたが、子供のままなのか特に感動はなかった。普段から現場で自然に触れている私は、自然に興味が無いようだ。ジヴェルニーを後にし、再びバスでパリへ向かった。パリに到着したのは夜である。

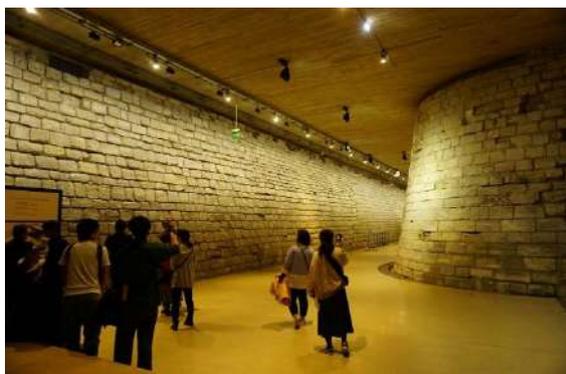
ホテルで一張羅に着替え、有名なキャバレー「ムーラン・ルーージュ」でのディナー。初めてのキャバレーと初めてのドレスコードに胸を躍らせていたが、長旅で疲れていたのと、お酒を飲んだことで、ショーが始まった頃には眠ってしまった。

5. 4日目

4日目は終日自由時間だ。

私はルーヴル美術館をガイドさんと回るオプションを申し込んでいたので効率よく見ることができた。

ルーヴル美術館はその広大な敷地と膨大な作品数により、全部見て回るには、丸三日はかかるそうだ。「ミロのヴィーナス」、「モナ・リザ」などで有名なルーヴル美術館であるが、美術館になる前は何だったのか知っている人は少ないだろう。実はお城だったようで、今もお城だったときの城壁が展示されている。



城の名残が残る管内の城壁

美術館を見学しあとは、お腹もすいていたため昼食をとることにした。向かった先は「國虎屋」。安芸市の國虎屋の支店のようである。フランスに國虎屋があるのにも驚いたが、それ以上に値段に度肝を抜かれた。

私は注文したざるうどんとカツ丼は、計算してみると、30ユーロ(日本円で約4000円)である。びっくりである。物価が高いとは聞いていたがこれほどまでとは思ってもみなかった。しかし、味はおいしく満足のいくうどんであった。



高級うどん國虎屋の店舗

6. フランス最終日

フランス最終日は、午前中ヴェルサイユ宮殿を訪れた。

美しい外観に、美しい展示物。ヴェルサイユ宮殿は美しいというイメージがあったが、ガイドさんから衝撃の事実を聞いた。「ヴェルサイユ宮殿にはトイレが無かつ

た。」耳を疑った。昔はトイレが無かったので庭などでトイレをしていたらしい。だから昔は悪臭漂う宮殿だったとか。きれいな姿からは想像できない。私は思った。「トイレ作れよ」。



昔はトイレがなかったという美しいヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユ宮殿見学後は、パリ市内に戻り、昼食でエスカルゴ料理を頂いた(口絵写真26)あと、セーヌ川クルーズを満喫した。パリ市内の世界遺産などを船から眺めることができ、バスからでは見ることのできない違った角度からのパリの街並みや世界遺産を見ることができた。旅の最後に本当にいい経験をする事ができ、とても良い思い出になった。



エッフェル塔をバックに

7. おわりに

今回の旅行で3度目の社員旅行。しかも憧れのフランス。4泊6日と短い期間であったが、とても貴重な経験ができ、素晴らしい旅であった。また、始めて行ったグアム旅行の時に比べて、周りともコミュニケーションを取れるようになり、緊張することなく旅行を楽しめた。本当に楽しかった。仕事を忘れ、普段接することの少ない仲間との楽しい時間が仕事では築けないよい関係が築けると感じた。

また来年も参加できるよう精一杯仕事に励みたい。

世界遺産を訪れて

調査部 調査測量課

田村 隆幸 (2016年入社)

1. はじめに

初めての海外旅行は「ノートルダム大聖堂」や「モン・サン・ミッシェル」・「セーヌ河岸」などの世界遺産を巡るフランスの旅であった。今回の旅で特に印象に残った事を報告する。

2. 世界遺産 ノートルダム大聖堂

最初に訪れたのはシャトルにある世界遺産ノートルダム大聖堂であった。驚いたのは、建物の大きさである。見上げるほどの大きさで古風な歴史を感じる建築物であった(口絵写真17)。内観は青いステンドグラスや十字架、彫刻などが数多くあった。また、天井が非常に高く窓一枚一枚に絵が描かれていて見入ってしまうほど綺麗であった(口絵写真18)。またノートルダム大聖堂は社会見学にも使われており、たくさんの小学生から高校生が見学に訪れていた。



見学に訪れた子供達

3. モン・サン・ミッシェル

シャトルから約3時間半バスに揺られて世界遺産モン・サン・ミッシェルに行った。モン・サン・ミッシェルがあるのはサン・マロ湾上に浮かぶ小島であり修道院などがある。遠く離れたシャトルバスからでも見えるほどの大きさであった。バスから降り近くで見るとさらに大きく感じた(口絵写真19)。門をくぐり中に入ると参道の両側にレストランや土産物店などがあった。参道を抜けると建物の上の方へと続く階段があった。

日頃、測量業務で歩き慣れている私でも階段を登りきった頃には座り込んでしまう程であったが、頂上から見る景色は綺麗であり疲れを忘れてしまう程だった。建物内には中庭があり、現在は花壇として利用しているが昔は中庭で菓草などを育てていたそうだ。建物内を見終わった後は参道を歩いた。

参道にはたくさんの土産物店が有り店内に入るとモ

ン・サン・ミッシェルが描かれたキーホルダーやトランプ、コップなど販売されていて、たくさんの観光客で賑わっていた。

4. モネの庭 ジヴェルニー

モン・サン・ミッシェルからモネの暮らした村、ジヴェルニーに向かった(口絵写真21)。私の地元である北川村にもモネの庭がある。ジヴェルニーとどのような違いがあるか見るのが楽しみだった。ジヴェルニーに到着するとたくさんの観光客が訪れていた。園内に入り一番に目に入ったのが日本庭園である。ここに日本庭園がある事に驚いた。モネは日本庭園が好きであったため自分の庭にも取り入れたそうだ。モネの庭を見終わった後は、クロード・モネが住んでいた邸宅に入った。モネの家は、窓がたくさんあり室内が明るく室内にはモネがコレクションしていた日本画などの絵が多数展示されていた。

園内には土産物店があり睡蓮が描かれたカバンやTシャツなどが販売され、睡蓮が描かれたカバンなどはたくさんの観光客に人気であった。

5. ルーヴル美術館

テレビでは何度か見た事はあるが、実際に見ると美術館とは思えない程の大きさであった。館内に入ると多くのレストランや雑貨店などの店舗が入っていた。ルーヴル美術館は国王の宮殿であった建物をそのまま美術館に利用されていて、彫刻や実際に使われていた道具類が数多く展示されていた(口絵写真23)。

また、絵画の展示物も多くあり特にレオナルド・ダ・ヴィンチが描いた「モナ・リザ」の前には絵を一目見ようと大勢の観光客で行列が出来ていた。本物のモナ・リザを見る事ができ良かった。

6. ギャラリー・ラファイエット

自由行動でパリ市内にある有名デパートに出かけた。デパート内はとても広く日本で例えるとイオンのような感じであった。中にはレストランや有名ブランド店が入っており、食料品店には日本では見る事のないチーズ専門店、ワイン専門店などが多く並んでいた。フランスはワインやチーズなどが有名である事が分かった。



ギャラリー・ラファイエットからの景色

7. 国虎屋

安芸市に店舗のある国虎屋をフランスで見つけた。メニューもほぼ安芸市と同じだった。従業員の中には岡山県出身の方など多くの日本人がいた。うどん一杯の値段は平均「16€」日本円で約2000円と高かったが、四日ぶりに食べた日本食はとても美味しく感じた。店内には多くの人がおり、店の外に行列が出来る程の人気ぶりであった。



国虎屋

8. パリ市内観光

セーヌ河から舟に乗りクルージングを楽しんだ。舟乗り場から大迫力のエッフェル塔を間近で見る事が出来た。また、舟からは堤防で読書している人や寝ている人などを発見でき日本との生活の違いを感じた(口絵写真29)。

次にこの旅行で一番行きたかったエッフェル塔の前で記念撮影を行った(口絵写真28)。

最後に、凱旋門に向かった。移動中のバスから何度か見ていたが実際に近くで見るとその大きさに圧巻された。

凱旋門近くに着くとエッフェル塔と並ぶ有名スポットだけに大勢の観光客で賑わっていて、パリの象徴だと思った(口絵写真27)。

9. おわりに

今回の旅行で貴重な美術品や世界遺産を見る事ができフランスの素晴らしさを感じる事が出来た。日本からフランスまで飛行機で約12時間かかり近くはないが、機会があれば今回行く事の出来なかったサルト・サーキットに行きたいと思う。海外にはまだ自分の知らない素晴らしい場所があると思う。次はプライベートで海外旅行に行けるよう精一杯仕事に励みたい。

世界遺産に触れた旅

調査部 調査測量課
中越 紀子 (1993年入社)

1. はじめに

今年は創立55周年で、社員旅行はヨーロッパに行くことになりました。

私にとって初めてのヨーロッパ。

イタリア、フランス、ドイツの中から自分の行きたい所を選択する事ができたので、一度は行ってみたい国、フランスを選びました。事前の情報でスリが多いと聞いていた事もあり、楽しみと不安な気持ちを抱きながら初めてのフランス旅行へ出発しました。

2. 観光

(1) ノートルダム大聖堂

聖母マリアを称える目的で1163年に着工し、200年の歳月をかけて完成したゴシック建築様式の大聖堂です。ノートルダムとはフランス語で、「我らの貴婦人」という意味で、聖母マリアを指すそうです。

「初期ゴシック建築の最高傑作」と言われる建物だけあって、外観だけでなく、その内装も非常にきれい。ステンドグラスのばら窓は、直径13mもあり、世界の大聖堂のばら窓の中でも特に有名なものらしい。

(2) モン・サン・ミッシェル

パリ市内からバスで約4時間半。車窓から見る景色は、羊、牛、馬が放牧されていて北海道の大草原を思わせるようなとてもどかな風景です。

まずは、今夜泊まるホテルに到着し、修道院に向かいます。強風で風が冷たい。城壁内に入ると一気に世界が変わり、頂上にある修道院の入口まで参道のレストランやお土産屋さんを横目にひたすら登って行く。頂上から眺める潮の満ち引きは自然の偉大さを感じました。

この日はモン・サン・ミッシェル泊。ホテルの部屋から望む夜景、ライトアップは感動そのもので、絶景を部屋から満喫することができました。塔や城壁など、現代のように発達した技術もなかった時代に、これら全てを人の手で造られたということは本当に凄いことだと思います。



部屋からの風景

(3) モネの庭

モネの暮らした村ジヴェルニー。モネが86歳で生涯を閉じるまで晩年43年間を過ごした場所。なにげない通りにもたくさんの花があり、のどかで美しい。モネのアトリエや庭のあるところから地下道を通して睡蓮の池に移動すると、モネが描いた睡蓮の池が目の前に表れる。水面に睡蓮の茎が漂い花がポツポツ咲き出しているようにも見えた。庭にはたくさんの花が植えられていて、日本でもよく目にする、パンジー、デイジーなども植えられていました。ガーデニングが趣味の私としては、滞在時間が短かったので残念でした。



庭

(4) ムーラン・ルージュ

フランス語で「赤い風車」

120年の歴史を持つキャバレー鑑賞。ドレスコードとと言うことだったので、着替えをして出発。事前に席が狭いとは聞いていたが、案内されるとやはり狭い。コース料理とワインをいただき、21時からのショーを鑑賞。羽根踊りとゴージャスなコスチュームのダンサーによる華麗な踊り、大水槽の中で「美女と蛇」のショー。絢爛な舞台の素早い入れ替わりや、音楽、衣装、照明などすべてが見事。オープニングからフィナーレまで、夢の世界へ吸い込まれたような圧巻のショーでした。2時間があつと言う間に過ぎていました(口絵写真22)。

(5) 自由行動(ルーヴル美術館他)

この日は終日自由行動。朝、8時30分にホテルを出てルーヴル美術館へ。メトロで行く予定だったが、切符がカードでの購入しか出来なかった為、歩いて行く事に。地下の入口から入りチケットを購入。日本語版の案内図を手に取り中へ。とにかく広くて案内図があるとはいえず、迷路のような中を進んで行く。エジプト、ギリシャ、ローマ美術、彫刻、絵画など展示品が次から次へと目の前に現れる。

世界でもっとも有名なモナ・リザ！レオナルド・ダ・ヴィンチの作品。見慣れた絵ですが、実物は以外に小さくて暗かった。



ルーヴル美術館地下

美術館見学後、事前に調べていた有名なカフェでランチをし、パリのパワースポットのカトリック礼拝堂「奇跡のメダイユ教会」へ。

1830年、修道女カタリナ・ラブレが MARIA 様からお告げを受けて作ったメダイユ。その2年後にパリでコレラが流行し、このメダイユを人々に配ったところ、コレラが激減したとされる。その後、メダルを手にした人に奇跡が起き、幸福が訪れると広まり、恵みをもたらす「奇跡のメダイユ」が世界中で有名になったそうです。私も奇跡のメダルを購入しました。その後、メトロでシャンゼリゼ大通りに戻り、お土産を買ったり、ブランド店を見に行ったりと終日楽しむことができました。

(6) ヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユ宮殿は、1682年にフランス王ルイ14世が建造した宮殿。宮殿前には既に開場を待つ人達で長蛇の列。

ルイ14世の騎馬像が凛々しい。セキュリティチェックを意外なほど簡単に終えて、ついに宮殿敷地内に入りました。宮殿の中はまるで美術館のようで、何時間でも眺められるような見事な装飾。一つ一つじっくり見たら何時間かかるか分からない。全長73mの回廊、17のアーチ型の開口部に357枚の鏡の回廊が圧巻。ゴールドの世界。大きな絵画がところ狭しと飾ってあり、まるで美術館のようです。様々な歴史が繰り広げられたことを感じることが出来ました。

(7) セーヌ河クルーズ・河岸観光

市街を二分するように流れるセーヌ河。イェナ橋からジュリー橋までの河岸約8kmは、世界遺産にも登録されている美景スポット。いい気分に恵まれ、2階のデッキに上がり風を感じながらのクルーズ。川沿いにはノートルダム大聖堂、ルーヴル美術館、オルセー美術館といった世界的にも有名なパリの観光スポットや歴史的建造物が建ち並び、世界遺産の集まるスポットを効率よく楽しむことができました。また、橋をくぐる時は橋が迫ってくるようで迫力があり、橋の上の人と手を振り合ったりできるのも楽しかった(口絵写真29)。

パリの象徴とも言えるエッフェル塔は、1889年のパリ万国博覧会に、革命100周年記念として建造された。近

くで見ると、その建築とデザインと技術に感嘆しました(口絵写真28)。

シャンゼリゼ通りの西端に毅然と立つ凱旋門は、軍隊の勝利と栄光を称えるための建造物。道路の真ん中に建っていて目の前で見ると迫力満点で存在感が大きい(口絵写真27)。

ノートルダム寺院は正面から間近で見上げると、壮大できれいでした。入口近くには、自分の首を手を持った像があり、隣の天使たちも何かか気にかけている様子。アーチ上の入口にある彫刻を見るだけでも様々なストーリーがあり、彫刻の数々は圧巻の一言です。

最終日のランチにはエスカルゴが出されました。食べるのは無理と思っていたが、食べてみるとバジルとにんにくオイルで味付けされていて意外に美味しかった。

3. お土産

事前に調べていたので購入する物は大体決まっていた。パリ在住の日本人がおすすめするマドレーヌやクッキー、スーパーモノプリのエコバックなど。お土産は何でもそろっている、「モノプリ」のスーパーで購入することができたが、エコバックの種類が少なかったのがちょっと残念でした。たくさんのお土産を購入しました。

4. パリの交通

「右側優先」これが一番重要なルールらしい。パリ市内の、特に朝夕の通勤時には渋滞でほとんど進まない。

更に、白線も無い。信号の手前に車線が無いところが殆どで信号のない交差点などは、右から来る車が優先というルール。大きな道を走っていて、小さな道が交差しているようなところも、横から普通に車が飛び出してくる。渋滞の際、車では通れない細いスペースをバイクはスイスイ運転し、走っている車の脇をものすごいスピードで、蛇行運転しながら抜き去る。常にものすごいスピードで走るし、信号待ちの時など、必ず最前列の車の前に出てこようとする。更に、ぎっしりと路上に駐車されたクルマの列に驚く。駐車方法は、いわゆる縦列駐車。本当にすきまなくぎっしりと駐車しているので、出入りは難しくなる。バンパーをコンコンとあてながら出入りというのがパリの流儀ようです。

根本的に、クルマに対する考えが、日本とは違うことに驚きました。

5. おわりに

初めてのヨーロッパ旅行。個人では行く事はなかったと思います。今回、誰もが憧れるパリに行く機会をいただき、天気にも恵まれ、観光を通して歴史や文化に触れる事ができ、貴重な体験が出来ました。バス移動も多く、体力的にきつかった日もありましたが、大変有意義で楽しい旅行でした。

フランスでの思い出

調査部 調査測量課
小島 由佳 (2015年入社)

1. はじめに

出発6日前になって、急にパリでの宿泊先のホテルが変更になった。しかも、変更後のホテル近くで、出発前日に小規模なテロが起こったというニュースがあり、不安が8割・わくわく2割といった気持ちになる。

2. Day1

朝6時15分に高知空港に集合。高知から羽田まではあつという間の1時間と15分くらいで到着。しかし、羽田からパリが飛行機で12時間と35分。遠い…。長時間座りっぱなしで、腰が砕けそうに痛い。

海外旅行に行った際に到着して思うのは、着いた国ごとに特有のにおいがあることだ。フランスにはなかった。「あれ?」と思いながらイミグレーションを通る。ちなみに台湾に着いた時はかすかに八角のにおいがしたし、ベトナムに着いた時にはニョクナムのにおいがした。

パリの空港からホテルのあるパリ市街までは車で40分ほどの距離があった。高速でも下道でも全席シートベルト着用の義務があるそうだ。ついに初フランスということで、車窓からの景色に釘付けになる。どこを見てもオシャレで絵になる。道路沿いには必ずといって良いほど街路樹が植えられている。木の背が高く、よく育っていた。

ホテルに着いた後、まだ夕方だったので、スーツケースを置いてからホテル周辺の散策にでかけた。歩いてみて感じたのは、パリの市街は見分げがつかない。右も左も同じようなベージュ色の古い様式の建物で、高さも大体同じくらいだった。景観を守るために看板も控えめで、観光客からすると、道を覚えづらいことこの上ない。目印が少なすぎるのだ。道路を挟んで、ものすごくシンメトリーな街の作りになっていた(口絵写真16)。

3. Day2

バスでモン・サン・ミッシェルへと向かう。日本なら、信号のある交差点や立体交差で車の流れをコントロールしているが、パリは大きな幹線道路でも平面的に交わる。普通に横から強引に車線変更して突っ込んでくるし、まず、ロータリーに信号がない。車の流れを見て進入し、車線すらない中を、行きたい方向に出る。事故が起きないわけがない。自分は絶対にフランスで運転出来ないと思った。

途中、シャルトルにある世界遺産のノートルダム大聖堂に寄った。ノートルダム大聖堂のステンドグラスは「シャルトルブルー」と言われ、より細かく美しいこと

で有名らしい。天井が高い。ステンドグラスが色彩豊かですごくキレイだった。確かに青が際立っていた。

私は今までステンドグラスは、キレイなただの装飾品だと思っていた。ガイドさんの説明では、昔はヨーロッパでの識字率が低く、文字を読めない人々へキリスト教を普及させるために、神の教えを伝える手段として教会にステンドグラスが使われていたというのだ。ただキレイだと思っていたものが、そんな宗教的側面も持っていたとは思わなかった(口絵写真18)。

ランチを食べたあと、バスでモン・サン・ミッシェルまでひたすら向かう。パリ市街はどちらかといえば、建物がぎゅうぎゅうに詰まっっていて薄暗い印象だが、郊外に出れば一気に景色が変わる。明るく広々としている。ここは北海道かニュージーランドだろうかと思ってしまうほど地平線の向こうまで麦畑だったり、牛やひつじが放牧されていたりする。のどかな景色に癒やされながらバスの揺れもあいまって、うとうとしていた。

モン・サン・ミッシェルは、モン・サン・ミッシェルの単語に分かれており、モンはMount(山)、サンはSaint(聖人)、ミッシェルはMichael(ミカエル)で、直訳すると「大天使ミカエルの山」という意味になる。島の中央にある教会堂の1番上には大天使ミカエルが空に飛び立つように飾られていた。また、カトリックの巡礼地の1つである。修道院がメインだが、地理的な要因のために要塞として軍事的な役目もあったらしい(口絵写真19)。

フランス本土と島をつなぐ橋をバスで渡る。バスを降りた瞬間に台風かと思うほどの風にあおられた。顔をあげて気付いたが、島の上を通過する雲の流れが速すぎる。そこだけタイムラプスの空の映像が流れているみたいに、雲が見たことがない速さで流れていた。

モン・サン・ミッシェルのあるノルマンディー地方には、りんごで作ったシードルとカルバドスというお酒が名物である。泊まったホテルで夕食の時に飲んでみた。シードルはりんご風味のビールのような感じで美味しかった。モン・サン・ミッシェルの地ビールもある。まったくした感じだった。個人的には日本の炭酸の効いたビールの方が爽やかで好きだ。



左：シードル

右：地ビール

このショートトリップで泊まったホテルからの眺望が素晴らしかった。ベランダからモン・サン・ミッシェルがどーんと見えるのだ。景色をさえぎるものがない。ベランダがものすごく贅沢な空間だった。「風邪をひくかもなー。」と思いながらも、ベランダのイスに座り、夜1時間ほど景色を堪能した。寒くてもずっと見ていられた。



ベランダからの眺め

4. Day3

モン・サン・ミッシェルからパリ市街へ帰る途中、印象派のモネの邸宅と庭を訪れた。

何種類の植物が手入れされているんだろうか。スケールが違う。日本の庭という概念とは規模が違う。色とりどりの花々が咲き乱れながら、睡蓮の池を囲んでいた。池の周りの遊歩道のどこから見てもキレイだった。所々にベンチがあった。座ってぼんやりと景色を堪能したかったが、タイトなスケジュールの都合で足早な観賞になったのが心残りだ。モネもそこいらのベンチに座りながら、庭の景色を描いていたのだろうか(口絵写真21)。

パリ市街に着き、ホテルに到着する。すぐにドレスコード用の服に着替え、ムーラン・ルージュへ向かう。120年の歴史を持つキャバレー。ドレスコードがあるということ、お客さんみんなが華やかにオシャレをしている。薄暗い店内はステージを正面に扇形に、遠くなるにつれ高くなるように造られていた。ショーを鑑賞する前に夕食が出てきた。前菜で出てきたモッツァレラチーズが美味しかった。フランスのトマトは果肉が少し固く、モッツァレラチーズと一緒に食べたカプレーゼが絶品だった。

初めてキャバレーというものを鑑賞した。圧巻だった。キレイのあるダンスとダンサーの締まった身体、華やかな衣装。日本人とは骨格が違うと分かっているが、なぜあんなにも外国の人は足が長いのだろう。羨ましい限りだ。帰りの道中、ショーで使われていた曲がずっと耳に残っていた(口絵写真22)。

5. Day4

朝イチに徒歩でルーヴル美術館に行く。ホテルから迷

うこともなく、すんなりと到着した。元々、王様の住むパレスとして建築された建物だけあり、広い。本当に広い。「こんなに歩いたのに地図上ではまだここの？！」といった具合だ。散々迷いながらも、見てみたかったモナ・リザやミロのヴィーナスを見ることができた(口絵写真23)。教科書で見てきたものが目の前にあるという不思議。有名な絵画や銅像の前では人があふれていた。モナ・リザは一体今まで何万人の人に微笑みかけてきたのだろう。

芸術鑑賞もそこそこに、お昼ごはんを食べにセーヌ川左岸のサンジェルマン地区にある老舗のカフェ「Café de Flore」に向かった。サルトル、カミュ、ヘミングウェイ、ピカソ、ダリなど様々な哲学者、作家、画家が集まったというこのお店。運良くテラス席が空いていたので、そこに陣取りながらメニューを見る。高い。しかし老舗、もしくは高級店の店員さんはもれなく愛想が良い。このカフェの私たちのテーブル担当のギャルソンの人も、すごくお茶目な感じの良い人だった。

ランチとして、アイスコーヒーとクラブサンドウィッチを注文。サンドウィッチの間のスペースにチップスが盛られているというこのボリューム。このお店の外観から、ギャルソンから、メニューから、ザ・王道のパリのカフェという雰囲気を十分に楽しむことができた。

次はカトリックの礼拝堂、奇跡のメダイユ教会へ向かう。この教会は名前の通り、奇跡のメダイユまたは不思議のメダイユと言われるメダルが有名。メダルを手にした人に奇跡が起こる、幸福が訪れるといった話がある。日本で言うお守りみたいなものなのだろう。

ちょうどこの教会に着くと、ミサが始まるようだった。礼拝堂の中に入ると、観光客はほとんどいなかった。敬虔な信者やシスターだけの真面目なミサ。大聖堂などとは違い、観光地化されていない本気の祈りの場所だった。誰も私語を発していない。しかし礼拝堂の中は、温かみがあり、落ち着く。何が、とは言えないが、何か優しい感じがする。

無事にメダルをゲットした後は、メトロを乗り継ぎ、シャンゼリゼ通りで買い物をした。ルイ・ヴィトンの本店やハイブランドのお店がひしめくこの通りは、スリが多らしい。歩いていると、斜め掛けにしたカバンを後ろにしていた自分が悪いのだが、「ジャッ」とファスナーを開ける音がした。カバンを見るとファスナーが開けられていた。荷物は何も盗られていなかった。ファスナーを開けるとペットボトルの水がカバンの幅パンパンに詰まっていたことと、ファスナーを開けられてすぐ反応したのが幸いだったようだ。油断も隙もないとはこのことだった。

6. Day5

フランス最終日は朝からヴェルサイユ宮殿へ向かう。もう豪華絢爛という単語しか思い浮かばない。細部に至るまで、贅を尽くした装飾の建物でパーティ三昧だった

らしい。郊外に残る民家と、この宮殿で過ごしていた貴族や王族との較差を考えるとコンコルド広場で処刑されても仕方ないかな、とすら感じるほどだった。



パーティをしていたホール

ランチでエスカルゴを初めて食べた。バジル、にんにく、オリーブオイルのソースがかかっていた。エスカルゴ自体に味は感じず、食感は貝のニナのようだった。バゲットとバジルソースの相性は抜群だった。(口絵写真26)

そしてなぜか出国の際の保安検査で2回もゲートに引っかかり「マダムこっちへ」と言われ、人生初のボディチェック。「めっちゃ触るやか。」と思うくらいしっかりチェックされた。もちろん何もでない。こういう人たちのおかげで航空の安全が守られているのだから、喜んで協力する。ある意味で貴重な体験が出来た。

7. まとめ

フランスを旅行中に本当に実感したのは、中世の雰囲気の色濃く残した国だということです。伝統と文化を重んじる国だということは知っていました。近代的なセンスを感じるパリコレが開催される場所であると同時に、伝統的なヨーロッパの中世の雰囲気を残す街並み。とても魅力的な五日間でした。

魅力ある景観

パリ～モン・サン・ミッシェルの旅

調査部 調査補償課 次長
西岡 徹(1990年入社)

1. はじめに

5月14日から6日間の日程となるフランス研修旅行に参加した。主な観光先はパリ市内とパリから500kmほどのモン・サン・ミッシェル。

初めて見たパリの町並みや中世の建物など、歴史を刻んだ景観に魅せられ心に残る旅となった。

2. パリ市内

パリ市は、南北9km 東西12km の面積約105k m²の小さな大都市である。現在の町並みは、高さを揃え同系色で統一され、中世の雰囲気を出した建物が建ち並ぶ。この景観は、19世紀にセーヌ知事のオスマン氏が取り組んだフランス最大の都市整備事業「パリ改造」によるもので、整備にはスクラップ&ビルド方式が取り入れられ、強制的に既存建物などを取り壊し、道路整備・建物高さの制限などにより造られたものである。現在、この景観の維持は、「美しい景観を守る」「定期的な修繕により大規模工事を避ける」「建物の価値を守る」ことを目的に法律により、修繕・維持が義務化され定期的な修繕工事などが実施されている。

街中の建物は1階におしゃれなカフェや店舗が並び、上階を居住用(共同住宅)として利用している。元々は使用人の部屋であったペントハウス(屋根裏)もその存在が雰囲気造りに一役買っている。広告看板なども制約を受け、原則、上階への看板設置はできない。そのため路上に広告塔が設置されている。市民の居住は、一般市民・富裕層を含めて大半が共同住宅に居住、一軒家はほとんどない。また、市内には駐車場がないため、車は路上駐車となる。

セーヌ河岸は、シュリー橋からイェナ橋までの約8kmが世界遺産の対象となっている。パリ市内での観光名所であるエッフェル塔、コルコンド広場、エトワール凱旋門、ルーヴル美術館、ノートルダム寺院など多くはこの範囲に存在する。

パリでは、セーヌ川周辺の世界遺産やモンマルトルの丘など多くの観光スポットを巡ることができた。エトワール凱旋門の屋上からは、凱旋門を起点に放射線状に放たれ一直線上伸びる道路などパリ市内が一望できる。また、セーヌ川クルージングでは、地上とはひと味違う雰囲気でもパリの風情を味わえた。

(1) 芸術鑑賞 ルーヴル美術館

世界最大級の美術館で収蔵品380,000点以上の巨大な美

術館である。元々は、要塞として建設したルーヴル城をもとに増改築を繰り返し現在の建物になっている。美術館は地上3階、地下2階の5層構造で広大な展示スペースを有する。館内すべてを見学するには1日では足りないくらいの広さである。時間が限られているため、多くの展示の中から「モナ・リザ」「ミロのヴィーナス」「サントラのニケ」の3大貴婦人にはしっかりと出会ってきた。

(2) 芸術鑑賞 ムーラン・ルージュ

パリ市内のモンマルトにある歴史あるキャバレー。館内は大勢の観客で席に一度座ると身動きできない状態であった。ディナーの最中は懐かしい歌や演奏が心地よく響き、食事が終わると観客を引き寄せる巧みな大道芸やステージ全体に繰り広げられる壮大なダンスショーが披露された。一度は行ってみたいと思っていた本物のムーラン・ルージュ、いい経験ができた。



パリの町並み



デザイン性の高いペントハウスのある建物が建ち並ぶ

3. パリ～モン・サン・ミッシェル

パリからモン・サン・ミッシェルまでの道中で立ち寄ったのが、シャトルにある世界遺産ノートルダム大聖堂。この大聖堂には、シャトルブルーと名高い青いステンドグラスがある。壁面のステンドグラスの美しさとゴシック建築(注1)の大聖堂の規模には圧倒された。

修道院モン・サン・ミッシェルは、フランス北部ノルマ

ンディー地方にある潮の干満の差が激しいサン・マロ湾にある岩礁の島に建設されている。

この修道院の魅力はなんとと言ってもその幻想的な容姿が醸し出す景色にある。近くからの眺めも素晴らしいが、少し離れた場所からの景色は今までに見たことがない圧巻の景色であった。

この修道院の建設は、司教オベールが夢の中で大天使ミカエルから、この岩山に聖堂を建てるようお告げを受けたが2度のお告げを悪魔の悪戯と信じず、大天使ミカエルが怒り3度目のお告げとして強く命じ、司教オベールは、稲妻が脳天を走る夢を見、翌朝、自分の脳天に穴があいていることに気づき、お告げが本物であると確信し、造ったのが始まりと言われている。

建物は主にゴシック建築であるが、内部は様々な中世の様式が取り入れられている。修道院のほか、戦争中は要塞としての役割や監獄としても使用されていた。内部の改修工事ではアーチ梁部の背を高くすることで強度を高めるなどの改良も行われている。

4. モン・サン・ミッシェル〜パリ

モン・サン・ミッシェルからパリまで移動の途中でモネの暮らした村ジヴルニーへ立ち寄った。ここはパリから車で1時間程度の芸術村である。村では多くのアーティストが活動しており、ギャラリーなどが多く存在する。

モネの家は、日本庭園をモチーフにした睡蓮の池がある庭園でモネ自身が設計を手がけた。邸宅にはモネがコレクションしていた日本の浮世絵が展示されている。

北川村にあるモネの庭は、本物を観ると良く再現されていることがわかる。

5. ヴェルサイユ

パリから南西に約20kmにあるヴェルサイユ市。ここに世界遺産ヴェルサイユ宮殿がある。

宮殿は、王朝ルイ14世〜ルイ16世とマリー・アントワネットの時代、華麗な貴族文化の中心となった宮殿。王族が民衆に屈するフランス革命の舞台にもなった。豪華な建築と庭園は17・18世紀のフランスのバロック式建築(注2)の集大成といわれている。外観の装飾も華やかさはもちろん、内部の天井絵画や装飾品は豪華そのもので当時の王朝・貴族の優雅さを表している。

庭園は非常に広大で水と草木の緑をふんだんに使用した美しい風景を造り上げた。噴水庭園はルイ14世の3つの意図①水のないところに水を引く→自然の力をも変える力を周囲に示す。②貴族を強制移住→貴族を従わせる。③民衆の入場を許可→民衆の心を掴む)がある。この庭園は、フランス式庭園の最高傑作ともいわれている。

6. フランス料理

旅行中は、フランスの料理を味わえることができた。なかでも、パリのビストロでのカモ料理。ここでのディ

ナーは、調査補償課の女性陣が旅行の目的の一つとして計画していたもので、それに便乗させてもらった。前菜はフォアグラをトースターで焼いたパンにのせ頂く、メインのカモ料理などすべての料理がおいしかった。最終日のランチには、エスカルゴ料理も味わえた。

7. おわりに

車窓から見るパリの町並みは、建物や石畳の道路が、雑誌などで紹介されているように中世の雰囲気のある美しい街であった。しかし、実際に歩いてみると路上にたばこの吸い殻やゴミが結構落ちている。ハイウェイの壁面などには大きな落書きも多い。ラッシュ時の車の量もすごく、日本の運転マナーでは車は前へ進めない。車の駐車も間隔が想定を超えた狭さである。

街中では所々で建物の修繕工事が行われていた。建物などの維持管理は、建物が古いだけに現代の建物と比べて制約なども多い。また、建物の風貌を維持しながらの修繕は、機能が向上した現代の設備やデザインなどを建物(ハードな部分)が受け入れられない部分が多く、機能面の向上は難しそうに感じた。

日本で生まれ育った私には、パリで住むことには不便さを感じたが、この町並みは大変気に入っている。この美しい町並みをパリの文化でこれからも汚さず、維持してほしいと願っている。

モン・サン・ミッシェルも訪れるまでは、遠いイメージが強くあまり期待をしていなかったが、修道院の幻想的な景色は、忘れることのないものとなった。



幻想的な容姿のモン・サン・ミッシェル修道院

注1)ゴシック建築 12世紀後半から花開いたフランスを発祥とする建築様式。

注2)バロック式建築 建築そのものだけでなく彫刻や絵画を含め芸術活動によって空間構成し、複雑さ多様性を示すことが特徴。

フランス文化に触れて

調査部 調査補償課
西森 尚人 (2006年入社)

1. はじめに

私の初めての海外旅行は、2008年のハワイ旅行でした。日本人の観光客も多く、言葉の不安も少ないという理由で選んだことを覚えています。当時は、たどたどしい英単語とジェスチャーでなんとかなるもんだと開き直っていました。今回はフランスということで、下調べを十分に・・・と考えていましたが、気がつけば最低限の準備と共に、出発日を迎えることとなりました。

2. 1日目

「移動日」、避けては通れない1日です。国際線は11時間程度の飛行時間でした。「国際線では出来るだけ寝ないで下さい」の添乗員さんの一言が頭にあったこと、慣れない長時間の飛行機ということもあり、ほとんど寝ずにフランスへ到着することになりました。気候は20度前後でほぼ高知の気温と変わりがなく、過ごしやすく感じました。



シャルル・ド・ゴール空港にて

その日の夕食は、機内で摂りましたが、ホテルに着いたのは17時頃でしたので、お土産品を探すのを兼ねて、二度目の夕飯へと出掛けました。外はまだ明るく、後から知ったのですが21時頃まではずっと夕方のような明るさでした。



お土産品を求めて散策

スーパーマーケットでおいしいお菓子が安く買えるという情報があり、フランスでは大手のスーパーであるモノプリ(Monoprix)へ向かいました。確かにネット上で見たものがずらりと並んでいたのですが、迷わず選ぶまでは良かったのですが、レジのシステムが分からずしばらく眺めていました。レジは日本にあるようなセルフレジも並んでいました。私はなんとか通常のレジで購入し、初のユーロ硬貨も取得しました。

軽食をと皆でレストランらしき店に入りましたが、ここでもシステムやメニュー内容が分からず、妥協のビールを一杯のみホテルへ帰りました。ただ、どうしても空腹感があり、同部屋の芝田さんと夜の町を散策し、比較的入りやすいと感じた店でお腹を十分に満たし、ホテルで眠りにつくまではあつという間でした。今思えばふらっと入ったこの店の料理が上位に入るぐらい美味しかったと思います。



ギリシャ風サンドイッチ(ケバブサンド)

3. 2日目

2日目、フランス班の半分ぐらいの人は同感してもらえんと思いますが、ホテルの朝食は美味しかったという印象が強いです。種類も思っていたより豊富で朝から色々楽しめることができました。



はずれ無しの朝食

この日最初に訪れたのがノートルダム大聖堂です。車窓から教会はいくつか目にしていましたが、実際に目の前に立つと圧倒的な存在感に感動しました。特に感じた

ことは「空間の広さ」です。ゴシック建築の特徴でもあります。壁自体の負担を少なく設計されているので、天井が高く、大きなステンドグラスが取り付けられているので、神秘的な空間となっていました。細かい作業が丁寧にされていて、無駄と言えれば無駄なのかもしれませんが、それが大規模建築物となると、とてつもない存在感になると感じました(口絵写真18)。

この日は昼食を食べレヌを訪れる流れでしたが、添乗員さんの提案により予定より早くモン・サン・ミッシェルを訪れることとなりました。後から思ったことですが、この添乗員さんの機転がなければ、壮大な島の全貌が見られなかったもので、本当にありがたいことだったと感じています。(朝焼けのモン・サン・ミッシェルは雲が多かったので・・)

映像では何度か見たことがありましたが、実物を見ると、現地に近づくにつれ、気持ちが高まりました。「西洋の驚異」と称される景観は本当に神秘的です。ずっと見ても飽きないような存在感でした。もう訪れることは出来ないだろうなという思いがあり、何度も振り返って目に焼き付けておきました(口絵写真19)。

今回旅先にフランスを選んだ理由のひとつにフランス料理が食べたいと思ったこともあります。ただこの日の夕食のオムレツは想像以上に味付けがなく驚きました。素材の味という感じではないと思います。周囲は皆塩こしょうを振っていたように思います(口絵写真20)。

4. 3日目

3日目のスタートは、朝焼けのモン・サン・ミッシェルを観光の予定でしたが、残念ながら雲が多く期待通りの姿は見られませんでした。ただ雲隠れのモン・サン・ミッシェルもとても幻想的で、深く印象に残っています。朝焼けはまた訪れることがあれば・・ということで次回の楽しみにしておきます。



雲隠れモン・サン・ミッシェル

次の目的地、ジヴェルニーに向かいました。道中気になっていた看板をやっと撮影することができました。ロータリー交差点です。主要道路が交差する大きな交差点はロータリー式になっています。見ていてとても危なっかしく、クラクションの音がよく聞こえていました。ガ

イドさんの話にもありましたが、気後れしては免許を取らしてもらえないという、こちらの気質には合っているのかもしれませんが。日本でいう「かもしれない運転」はとても通用しないような気がしました。



ロータリー交差点の案内板

「北川村のモネの庭」高知人なら皆が比較したと思います。人それぞれと思いますが高知も北川村もなかなか負けてないと感じました。ただ、春から初夏にかけて、ジヴェルニー村は一年で最も美しい季節を迎えることもあり、鮮やかな景観で歩いてとても気持ちの良い空間でした。人工的な感じがせず、自然の中にそのまま身をおいているように感じました。他にも庭園だけでなく、アンティークショップやおみやげ物屋が数件と、芸術家ゆかりの村だけに、小さなギャラリーもいくつかあり、時間があればゆっくり楽しめる場所でした。

3日目となると、少し疲れも出始めてバスでもふと寝ていたりしていました。この日の晩の目的地であるムーラン・ルージュのある繁華街は、今までとガラッと印象が変わり、入り口でのセキュリティチェックといい、なにか物々しい雰囲気に変に気を張っていたように思います(口絵写真22)。

店内はテーブルがぎっしりと並べられていて本当に座れるのか心配したぐらいでした。飛行機でも窮屈な思いをし、ここでもかと思っていましたが、いざショーが始まると雰囲気飲み込まれ、気にもなくなっていました。ショーの方はさすがプロのエンターテイナーという感じで、お客さんを楽しませることがとても上手く、自然と引き込まれていきます。ダンスだけではなく、マジックショーもとても印象的でした。

5. 4日目

4日目は終日自由行動でした。午前中はオブショナルツアーを利用し、モンマルトルの散策に出掛けました。モンマルトルは少し小高い丘にあるので、そこから見下ろすパリの町並みがとても綺麗でした。散策中に目にする建物やバス、喫茶店などひとつひとつがお洒落で、気付けばシャッターを押していました。その他、ルーヴル美術館や、シャンゼリゼ通りなどに訪れ、残りの時間はお土産を求めてとにかくよく歩きました。特にルーヴ

ル美術館は、建物が広くガイド付きのポータブル機を持って移動しましたが、なかなか目的地に着くことができず苦労しました。移動といえば、タクシーも利用しましたが、とにかくスピードが速く、割り込みの繰り返しで、助手席に座っていた私はずいぶん怖い思いをしました(口絵写真23、24)。

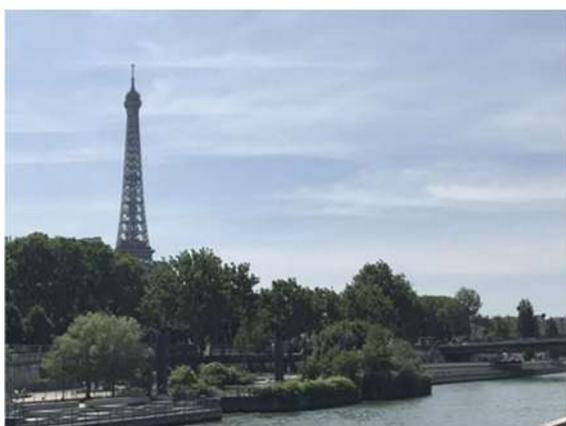
6. 5日目

最終日、まずヴェルサイユ宮殿に訪れました。建物が一部改修中でしたが、仮設シートひとつとってもお洒落で、費用をかける着目点が、本当に面白いなと思いました。建物はバロック建築代表作で、豪華で雄大な佇まいでした。広大な庭園と合わせて美しいという言葉がぴったりの場所でした。

最後のイベントであるセヌ川のクルーズは、地元の学生の団体が一緒に乗船していたので、賑やかな雰囲気の中、景観を楽しむことができました。



ヴェルサイユ宮殿 一部改修中



パリのシンボル

7. おわりに

仕事を離れ異国の情緒に触れることで、心身共にずいぶんとリフレッシュすることができました。滞在期間は短く感じましたが、非日常の世界に身を置き、色々なものを眺めて、感じて、楽しく過ごせた5日間でした。

パリだけじゃない、田舎の魅力を体感

調査部 調査補償課
谷 加奈 (2013年入社)

1. はじめに

私にとっては12年ぶり2回目のフランス。前回は専門学校での研修旅行。ヨーロッパの建築物やデザインを学びに行った。不精者の私は旅の計画などは友人にまかせきりであった。今回も海外に詳しい人がいるので自由日に行くところなどはまかせておこうと気楽に構えていたのだが、彼女が旅をとりやめたことで自由日の計画やお土産は何がいいだろうなどと大慌てでフランスのことを調べ始めたのであった。

2. 5月14日(月)ー日本からパリへー

午前4時、外がうっすら明るくなった頃起床。昨夜は久々の海外旅行だと思うと緊張してなかなか眠れなかった。睡眠時間3時間程で、ぼーとした頭で空港へ到着した。空港の入り口が開くと同時に一気に人がなだれ込み、慌ただしくチェックインを済ませ、始発便で羽田空港へ向かった。国際線ターミナルへは予定より少し早く到着し、免税店で買い物をする余裕もあった。約12時間半かけてシャルル・ド・ゴール空港へ到着し、バスでパリへ向かった。いよいよ旅の始まりである。

午後5時、ホテルへ到着した。12時間半かけて来たのだから当然体はくたくたのはずだが気分は軽く、さっそく街へくり出した。行先は「MONOPRIX」。パリッ子御用達のスーパーマーケットである。



フランスのスーパー モノプリ

調べてあったホテル近くの店へ行ってみるとすでに閉店していたため、携帯の地図アプリを使い、歩くこと30分。なんとか到着することができた。12年前は携帯が使えず地図を見るのに苦労して目的地にたどり着けなかったこともあった。今回携帯が使えて本当によかった。

モノプリでは、モノプリオリジナルのエコバッグ、モンサンのお菓子やマカロンで有名なラデュレの紅茶、フランスでは有名なKUSMI TEA、クノール(フランス限定

味)、エッフェル塔の形の pasta、カマルグの塩などを購入した。事前に調べておいたのが功を奏し、何を買おうかと迷わず買うことが出来た。



モノプリでの購入品

帰りに何か食べようと店を探して歩いていると、おしゃれなオープンカフェが目に入った。パリではこのようなオープンカフェをよく見かけた。会話を楽しみみくつろいでいるだけなのに絵になる。私たちが店に入ってみたもののメニューが読めず、言葉もわからない。食べ物の注文をあきらめ、ドリンクを一杯だけ飲んで、やっとホテルへ戻ってきた。この時、日本時間では朝6時のはずである。朝4時起きだった訳だから徹夜したことになる。パリは夜9時でもまだ明るく、時間がたつのを忘れてしまう。明日の準備を済ませるとベッドへもぐり込んだ。

3. 5月15日(火)ーパリからモン・サン・ミッシェルへー

午前8時半、モン・サン・ミッシェルへ向けて出発だ。バスの中から見る景色は、ほとんどが高原が広がり牛や羊がのんびりしている姿だった。どことなく北海道に似ている。ガイドによるとフランスは農業大国で自給率は約120%だという。朝食のバイキングに出たパンやバター、チーズがおいしかったのもうなずける。

それから広大な牧草地の間いくつかの小さな町を通った。どの町の建物も伝統的な石造りやれんが造りの家が多く、沢山密集して建てられている所などは、日本のドイツ村のようなメルヘンなテーマパークに迷い込んでしまったかのようだった。パリの立派な建物もいいがどこかよそ行きの顔である。地方の一軒家もフランスの庶民的な日常が垣間見られてとても興味深かった。



フランスの田舎町

午後4時、モン・サン・ミッシェルへ到着した。今回の旅で私が一番楽しみにしていた憧れの場所である。映画ハリーポッターの hogwarts 魔法学校やルパン三世のカロストロの城のモデルの一つで、テレビでも世界の絶景として放送されているのを見て、「美しいな。でも実際にこの目で見ることはないだろうな。」とため息をついていた。そんな憧れのモン・サン・ミッシェルをこんな間近で見ることができて本当に嬉しかった(口絵写真19)。

ただ残念なことに余韻に浸る暇はなく、閉館時間が迫っていたため急ぎ足で頂上の修道院を目指した。

午後6時、修道院を出て階段を下りると、行きは賑わっていた街がしんと静まりかえっていた。あれ、と更に下りていくと1軒だけ店が開いていたのでお土産を購入した。添乗員さんによると「いつもは8時位までやっているが今日はあまり人がいなかったのでも早めに閉めたのだろう。」とのこと。どうやらフランス人はその時の気分で動くことも多いらしい。

夕食はモン・サン・ミッシェルを眺めながら食事ができるホテルのレストラン。プルールおばさんのオムレツを食べ、シードル(リンゴ酒)を味わった。

オムレツはメレンゲ状でふわっとふくらんで大きく見える。お味は、、、素材の味が楽しめる一品だ。一緒に添えてあるポテトが絶品だった(口絵写真20)。



修道院へ続くお土産通り

4. 5月16日(水)ーモン・サン・ミッシェルからパリへー

午前5時、朝日に照らされるモン・サン・ミッシェルを一目見ようと早起きした。しかし、あいにくの霧に覆われ、あっという間に見えなくなってしまった。



幻想的な朝霧のモン・サン・ミッシェル

午前8時半、名残惜しいがパリへ出発だ。

途中ジヴェルニーで昼食をとり、モネの庭を見学した。とてもきれいに手入れされており、どこを切り取っても美しい絵になる場所だった。小鳥のさえずりに耳を傾けたり、花の香りを楽しみながら、モネがこの庭で絵を描いている姿やモネの子供達が庭で追いかけてっこをして笑っているところを想像した(口絵写真21)。

夜はパリのキャバレー「ムーラン・ルージュ」。ドレスコードがあり、普段よりおしゃれをしてドキドキしながら中へ入った。かつての文化人も虜にした老舗ということもあり、世界中から訪れた観光客で埋め尽くされていた。おいしいコース料理を頂いた後、ショーを鑑賞した。「宝塚」のような派手な羽根や、宝石みたいにきらきらした装飾を身にまとうて歌い、踊る姿は自信に満ちあふれ、女性の私から見てもうっとりするくらい美しかった(口絵写真22)。

5. 5月17日(木)ー自由行動ー

この日のために色々計画してきた。少し遅めの朝食を済ませ、まずはルーヴル美術館へ向かった。

私がルーヴルで一番好きな美術品は、勝利の女神「サモトラケのニケ像」だ。ナイキの由来にもなっている。彫刻とは思えないほど軽やかで圧倒的存在感がある。



勝利の女神サモトラケのニケ像

ルーヴルの中はとにかく広い。目当ての美術品だけ見てあとはさらっと通ろうと思っていたが、それでも道に迷ってしまった。外に出ると時刻は午後1時半。予定では11時半には出るつもりだったのでランチのお店探しはパスしてルーヴルの地下入口にあるパン屋でサンドイッチを購入した。近くに公園を見つけ、芝生へ座ってピクニック。エッフェル塔を眺めながらのランチは、それはそれで最高である。



公園の芝生からエッフェル塔を望む

午後はメトロで移動。入口を見つけチケットを窓口で購入した。凱旋門を目指す。ところが乗り間違えて反対の方向へ行ってしまったので、次の駅で降りてまたチケットを買う羽目になった。

付近の駅に到着して、真下まで行こうと思ったが凱旋門の周りは円形状の交差点になっており、信号も横断歩道も見当たらない。どうやって渡るのかと他の観光客らしき人たちについて行ってみると、地下へ下りる階段を発見。どうやらここから真下まで行けるらしい。よく見ないとメトロの入り口と間違えそう。地下道を通って凱旋門の真下まで行ってみると、すごく大きい。その迫りに圧倒された(口絵写真27)。

次にエッフェル塔の見える橋まで行き、写真撮影。そこで午後3時を過ぎていたので足早にシャンゼリゼ通りに戻り、色々店を見ながらホテルへ戻った。

夕食は事前に調べておいた鴨料理のお店。今度は日本語のメニューがちゃんとあり、店主らしき男性も気さくなおじさんでとても雰囲気の良いお店だった。鴨のフォアグラ、鴨の生ハムのサラダ、鴨のコンフィと鴨づくし。どれもすごくおいしかった。デザートにクリームブリュレを頂き大満足。楽しい時間を過ごすことが出来た。おいしかったのでお店で売られていた鴨のコンフィの缶詰をお土産に買った。おじさんが「鴨を漬けている油でじゃがいもを料理するとおいしいですよ。」と教えてくれた。これはいいことを教えてもらった。日本に帰ってもう一度フランス料理を味わうのが今からとても楽しみだ。

ホテルへ帰宅する頃には、歩きすぎて足が棒になってしまった。全て計画通りにはいかなかったが、ハブニングも含め楽しかった。

世界遺産と芸術の街に触れて

調査部 調査補償課
窪添 智津子 (1994 年入社)



鴨料理

6. 5月18日(金)ー帰国ー

今日で旅も最終日だ。ホテルをチェックアウトしバスでヴェルサイユ宮殿へ向かった。

ヴェルサイユ宮殿は、有名なマリー・アントワネットとルイ16世も暮らした場所だ。広い庭園、大理石の床や至る所金色でとても豪華だった(口絵写真25)。

昼食にはエスカルゴが出た。専用のフォークでくるっと取り出して食べる。食べ方が似ている貝だと思えば見た目はなんとかクリアできたが、少し土臭さを感じた。味はオリーブ油とガーリックと塩加減がとても良くバケットにのせて食べるとおいしかった(口絵写真26)。

午後からはセーヌ川クルーズを体験した。エッフェル塔からスタートしノートルダム大聖堂を通り過ぎたところでUターンしエッフェル塔へ戻ってくるコースだ。天気にも恵まれ、風が気持ちいい絶好のクルーズ日和である。船から見るパリの眺めはとても美しかった。橋の上にいる人や河岸で日光浴している人たちが手をふってくれた。街中から見るのとはまた違った景色を見られて楽しかった(口絵写真29)。

あっという間に時間は過ぎ、私たちはパリを後にした。また飛行機に乗り12時間半かけてゆっくりと現実に戻っていく。高知空港に着くとゲートで家族が出迎えてくれた。家族の顔を見て旅で疲れていた体がまた元気を取り戻した。

7. おわりに

今回旅を通して感じたのは、フランスはエコな国だ。スーパーではレジ袋がなく、皆自分の買い物袋をさげていた。古い建物を修理しながら住み、自転車専用道路が整備され、信号がない円形交差点を沢山見かけた。

それから、フランス人はおおらかだ。時間もあまり気にしないように感じたし、縦列駐車から車を出すときは少しずつ前の車にぶつけながら出すと聞いたときは驚いた。

日本とは文化や性格が全然違う人たちと片言の英語や翻訳アプリで会話し、意思が通じ合い、相手が笑顔になると私も嬉しかった。

全てが新鮮で今回の旅行で仕事や日常のストレスをリセットすることができた。「またがんばろう」と思える良いリフレッシュの機会になった。

1. はじめに

創立55周年ヨーロッパ旅行は、イタリア、フランス、ドイツの3カ国です。私は迷わずフランスを選択しました。

写真や映像の中の世界だと思っていたモン・サン・ミッシェル。一生に一度は訪ねてみたいと思っていた場所でした。初めてのヨーロッパ旅行、言葉と治安の不安はありましたが、大きな鞆と共に出発しました。

2. シャルトル(ノートルダム大聖堂)

シャルトルはパリから南西に約80kmのところにある町で、ユネスコの世界遺産に登録されたシャルトル・ノートルダム大聖堂があります。この大聖堂を正面から見ると、2つの塔が特徴で右側がゴシック建築の新塔、左側がロマネスク建築の旧塔となっています。近くから見上げると違和感はないですが遠くから眺めてみると、少々、アンバランスな建物に見えました(口絵写真17)。

大聖堂の中に入ると天井の高さに驚きました。外から見ても壮観ですが、中に入ってみると美しいステンドグラスに圧倒されます。「聖母マリア」の物語を描いたステンドグラスが数多くあり、鮮やかなブルーの光が印象的です。建物が大きいあまり大きく感じられませんが一枚一枚が巨大な物でした。

ステンドグラスは聖書にでてくる教えを、字が読めない人の為に絵を使って分かりやすく伝えるために作られたそうです(口絵写真18)。

3. モン・サン・ミッシェル

パリから約370km、田園風景の中長い間バスに揺られて念願のモン・サン・ミッシェルに到着です。今回の旅行で一番楽しみにしていた場所です(口絵写真19)。

フランス西海岸、サン・マロ湾上に浮かぶ岩山です。本土からは約2km離れています。今から約1300年前、大天使ミカエルが、司教に「岩山に聖堂を建てなさい」と告げたことから修道院の建設が始まったとされています。周りが海に囲まれた島となっており、周辺は潮の干満の差が激しいことで知られています。

私たちが着いた頃は潮が引き干潟を歩くツアーが行われていました。島内に入るための入口「王の門」をくぐり頂上の修道院まで急な階段を一気に登ります。石畳を歩き上へと昇る途中海の方を見ると潮がうなり声を上げるように押し寄せるのがわかりました。中世の頃の巡礼の旅は干潟を歩いて渡る手段しかなく、交通の発達した現代と違い一気に押し寄せる大波に飲まれて多くの巡礼者が命を落としたそうです。「モン・サン・ミッシェル」

ルに行くなら、遺書を置いて行け」という言い伝えがあり、命がけの旅だったようです。

修道院はいくつもの礼拝堂や部屋が入り組んでいて、まるで迷路のようです。内部は地味でひっそりとたたずんでいます。修道院から牢獄や要塞になった歴史を物語る建物。大天使ミカエルがそとと今でも見守っているように感じます。

モン・サン・ミッシェルには20名の方が住んでいます。その内の12名が修道院関係の方、残りの8名が一般人です。昼間は観光客でごった返していましたが、島内を見学し降りてきた18時頃には、賑やかだった参道には、観光客はほとんど居なくなりシャッターを閉めた店ばかりでした。ガイドさんによるとその日の気分で閉めるそうです。滞在時間が短く買い物ができず残念でした。

宿泊したホテルの部屋から島を眺めることもできますが対岸まで行きライトアップされたモン・サン・ミッシェル、日の出とともに朝霧がかかったモン・サン・ミッシェル、どちらも幻想的で素晴らしかったです。

モン・サン・ミッシェルで名物のオムレツは、想像した以上にふわふわでしたが、味に関しては日本のオムレツの方が美味しいと思います(口絵写真20)。

潮の満ち引きを利用した聖地を持つ共通点があるという事で、広島県の宮島と2009年に2つの世界遺産として友好都市の締結を行っています。

4. ジヴェルニー

印象派を代表するクロード・モネが43歳からの半生を過ごし、多くの名作を生み出した場所です。住んでいた家とアトリエが記念館になっています。

名画、『睡蓮』とそっくりな風景を実際に見ることができました(口絵写真21)。

親日家であるモネの家には浮世絵のコレクションが所狭しと飾られ家具やインテリアは当時のままに修復されています。

モネ自身がキャンバスに絵を描くかのように丁寧に設計した庭園には今も花が咲き乱れ、「まるでパレットのような庭」「生きた美術館」とも言われています。約100年前と同じ場所に同じ植物がありまるでタイムスリップしたかのようです。

睡蓮の季節には早すぎましたが、春の花がいっぱい咲き誇っていて、とても綺麗でした。

北川村にある「モネの庭」にも行ったことがあります。「花の庭」「水の庭」本当によく再現されていると思いました。睡蓮の花が咲くころに行ってみたいと思います。

5. ルーヴル美術館

宿泊先からパリの町並み眺めながら歩いて20分程でルーヴル美術館に到着。

チケットを買うのに並ばないといけないと思っていた

のですが、すんなりと購入することができました。まず向かったのは「モナ・リザ」です。混雑することが多いので最初に行くことを決めていました。

ルーヴル美術館でもっとも有名な「モナ・リザ」星の数ほどある美術品の中で唯一防弾ガラスに覆われ両サイドには警備員の姿もあります。普段は多くの観光客で溢れているそうですが、朝早く訪れた甲斐もあってゆっくり見ることができました。左側は微笑んで、右側はどこか複雑な表情をしているようにも見えます。



防弾ガラスに覆われている「モナ・リザ」

6. 凱旋門

ルーヴル美術館からメトロで凱旋門まで向かいます。チケットを購入の際、上手く買うことができるかドキドキしながら販売機にコインを投入。メトロに乗車、方向を間違えるハプニングもありましたが無事目的地に到着することができました。改札を出て地上に出ると、すぐ目の前に凱旋門が見えます。想像以上に巨大な建造物です。5万トンの石材を使用し、ローマの「コロッセオ」と同じ材料だそうです。ただロータリーの内側にある凱旋門への行き方がわかりません。周囲を見ても、横断歩道が無いので、地下道から行くしかなく、観光客と思われる人の流れを見ながら、ついて行き、なんとか入口をみつけて行くことが出来ました。地下から屋上へ上れますがチケット売り場には長蛇の列ができていたのでやむを得なく断念しました。

凱旋門の交差点はロータリーになっていて12本の道路が放射線状に交差点に集まっています。交通量が多く車の流れは途切れることはありません。このロータリーに入ったり、抜けて行くのには、相当慣れていないと難しそうでした(口絵写真27)。

7. ヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユ宮殿は、元々はルイ13世の狩猟の館として建てられました。それを息子のルイ14世が、宮殿に作り替えたものが、現存するヴェルサイユ宮殿です。

黄金の門が素晴らしかったです。絢爛豪華な宮殿でしたが、けばけばしい感じは無く調和の美しさを感じました。全長70m超えの鏡の回廊は多数のシャンデリアが飾られ圧巻でした。この回廊で第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約が調印されたそうです。

ルイ16世とマリー・アントワネットの婚礼が行われた「礼拝堂」「戴冠の間」「王妃の寝室」「王の寝室」な

ど、歴史の教科書やテレビ番組などでよく取り上げられる部屋を多数見ることができました。

パリから20 kmと近く人気の観光地で、宮殿館内はルーヴル美術館以上の混雑でした。

この宮殿を舞台にした「ベルサイユのばら」を子供の頃、愛読していた私が実際にこの場所にいると思うと不思議な感覚になりました。

8. セーヌ川クルーズ

有名なセーヌ川のクルーズに出発です。乗船場所はエッフェル塔のすぐ側です。私たちは遊覧船の屋上に乗りました。景色が良く見えて気持ちよかったです。川沿いにはたくさんの人がいて手を振ると振り返してくれます。

オルセー博物館、ノートルダム大聖堂、ルーヴル美術館など、パリを代表する建造物をながめることができました(口絵写真29)。

9. おわりに

フランスには世界遺産が43カ所あります。そのうち4カ所も巡る盛りだくさんの旅でした。

“花の都”と称されるフランス・パリの街。多種多様な建築が立ち並び、白とグレーで統一されたパリの景観は、街中が美術館の様に洗練された美しさがありました。またパリは中心部から外側にかけて渦巻き状に1区から20区へと区分けされていてその形は、フランスの有名な食材のエスカルゴに似ているのは興味深かったです。



パリの行政区

フランスの歴史と文化、芸術に触れる貴重な時間を過ごすことができました。今回の旅行は私たちにとって素敵な思い出になることと思います。

パリと世界遺産の旅

幡多支店

小野 裕正 (1986年入社)

1. はじめに

平成30年は当社にとって55周年となる節目の年である。その記念で5月14日から19日までの6日間、社員研修旅行第2班でフランス世界遺産を巡った。

海外旅行は何度か経験しているがヨーロッパは初で、期待と興奮があった。日本との時差は-7時間。パリ市内からノルマンディー地方へ移動時間も長く、少し不安もあった。そんな気持ちで高知龍馬空港へ到着。

出発前に右城社長の激励の言葉で、元気よく旅立った。

2. パリ市内

パリ市内は北海道より、北に位置する。

到着した一日目の夕方は曇り空。薄着のせいか肌寒い。四日目、五日目は天気が良くなった。街中でダウンを着ている人、半袖の人をチラホラ見かけた。

日本に衣替えの文化が定着しているが、フランスにはない。自由な風潮である。

日本でよくあるコンビニがパリには無く市民は買い物で、スーパーマーケットを利用している。コンビニなれている日本人には不便な気がした。

社員数人で、スーパーマーケット・モノプリに入った。テロ対策で入店の際には、手荷物検査があった。夕方であったため、買い物客が多かった。食品、お酒、雑貨、生活用品など日本のスーパー同様に、豊富に陳列されていた。

日本食コーナーを発見した。よく見てみると焼き鳥(Yakitori)と書かれて売られていたのは、どう見ても餃子である。フランスには、日本の食文化が間違っって伝わっている。



日本食コーナーのYakitori

パリの喫煙者の多さにびっくりした。

屋内はほぼ禁煙だが、路上では市民が平気で歩き煙草をする。煙草のポイ捨ては禁止されているが、吸い殻がよく路上に落ちている。私も喫煙するが、日本から携帯灰皿を持参しており、ポイ捨てはしていない。

車やバイクの多さにも驚いた。

駐車場が少ないため、路上駐車が多い。縦列駐車である。ギアがミッション形式の車が多く、サイドブレーキもかけずに駐車する。

駐車出来る余裕があれば、平気でバンパーに当てながら駐車する。実際ギリギリに止まった車両を、よく見かけた。



縦列駐車の間隔

旅行の楽しみの一つは食事だか、想像以上に口に合う料理が多い。

一日目、三日目で2泊したミレニウムホテルパリオペラの朝食では、特にクロワッサンが美味しかった。他の料理も日本人に合う味付けで、少し遅い時間に行くと、残っていないメニューもあった。

四日目夕食は西村夫妻のお誘いで、タクシーでわざわざ人気のレストランへ。そこで牡蠣を食べた。珍しいこともないが、フランスには牡蠣の世界的名産地があるそうで、これも美味しかった。

さらに、五日目昼食で、初めてエスカルゴを食した(口絵写真26)。ガーリックな感じで、意外とビールに合う味付けで、美味であった。

三日目の夜はドレスコードがある120年の歴史のキャバレー、ムーラン・ルージュへ(口絵写真22)。

戦争下でも営業を続けたことで有名だが、唯一ダンサーが太ったと言ってそのダンサーを辞めさせたオーナーに対して、他のダンサー達が立腹、ストを起し休業に追い込まれたことがあるらしい。

前座の生バンドの歌と演奏の間にディナーを済まし、気分が良くなった頃から大道芸の様なパフォーマンスも織り交ぜ、ダンサーがフレンチカンカンショーで満員の客席を魅了した。アジア系の客でドレスコードを守らず、ダウンジャケットやジーンズで入店してくる客もいた。

金にものを言わせてなのか、同じアジア人として恥ずかしいと感じた。

自由行動の四日目は、モンマルトルの丘(口絵写真24)。

パリに併合されるまではモンマルトル村。

市内で一番高い丘。前夜楽しんだムーラン・ルージュもここにある。石畳の道がそのまま残っており、どこか日本の宿場町にも似ている。昔から画家が多く集まる場所。

日本で言えば有名な漫画家が若い頃集まって漫画を書いていたトキワ荘的などころ。今も多くの芸術家が集まり、サクレ・クール寺院を夢中でスケッチする少女や、路上で絵を描き売る画家がいた。



路上で絵を描き売る画家

3. 世界遺産

世界遺産巡りは二日目から。

まず、パリの南西へおよそ100kmのところにあるシャルトルのノートルダム大聖堂を訪れた(口絵写真17)。

火事により破壊され修復したため左右の塔の高さ、建築様式や年代が違う。シャルトルブルーと名高い青いステンドグラス(口絵写真18)。戦時中も無事で、よく現存しているものだ。遠足で訪れた子供達も多かった。

長いバス移動で、フランス北西部ノルマンディー地方のモン・サン・ミッシェルへ到着(口絵写真19)。

島を覆うように修道院が建てられていて、テレビなどで見た光景が目前にある。世界中から年間およそ350万人が訪れる、フランスでもっとも有名な世界遺産の一つである。宿泊するホテル近くからシャルトルバスで島に入ると、修道院までの道の両側に土産物売り場やホテルがあった。まるで香川県の金比羅さんの参道のように、親近感があった。翌日の朝焼けを期待していたが、曇っていて見えなかったのが残念だった。

世界遺産 in フランスの旅

幡多支店 調査測量課
畑中 徳雄 (1983 年入社)



土産物売り場

パリ市内ではセーヌ川とその周辺の建物を含むエリアが、世界遺産として登録されている。特に印象に残ったのが、四日目に行った夜のルーヴル美術館と五日目に登った凱旋門展望台からの景色。ルーヴル美術館は夜なので入館は出来なかった。中庭にあるガラスで出来たモニュメントのライトアップは、幻想的な雰囲気だった。

凱旋門(口絵写真 27)は二日目にバスから見ていたが、五日目に展望台に登るとは思わなかった。展望台は地上約 50m の高さで約 200 段のらせん階段を時間の都合で、短時間で上り下りしたので結構疲れた。パリの街並みが 360 度一望でき新凱旋門も見られて達成感があった。

五日目午前中、パリ南西にある世界遺産ヴェルサイユ宮殿を見学(口絵写真 25)。

王妃の部屋が何年間も改装工事中で、見学することは出来なかった。その他の部屋や庭園を見て廻ったが、贅沢極まりない宮殿だ。

昼食後パリの世界遺産を川から一周するパリセーヌ河岸遊覧クルーズに乗船。

この日までバスや徒歩で巡ったパリ市内の世界遺産をセーヌ川の船上から見学。建物だけでなく歴史的公共施設、多くの橋の下を航行するたび、日本の橋梁とは違った構造が多いと感じた。世界遺産を目に焼き付けて帰ると、熱心に見入っている社員の姿が印象的だった。

4. おわりに

フランスは第二次世界大戦当時ドイツ軍の侵攻にも破壊されなかった街。特にパリは、ヒトラーによる「パリを燃やせ、パリは燃えているか」の命令にも部下の将軍が背き、爆破しなかったほど美しく、歴史的・文化的に価値のある街であった。

移民が多く、最近ではテロが多発しているが、この多くの世界遺産を今後も戦争やテロの犠牲にせず、後世へ引き継いで欲しい。

移動が大変だったが、気軽に行けない国であり、良い思い出となった。

1. はじめに

平成 30 年 5 月 14 日から 4 泊 6 日で社員旅行に行った。行き先はフランス。初日はパリ着後、専用車にてホテルへ移動。2 日目はパリ観光終了後モン・サン・ミッシェル泊。3 日目は朝焼けのモン・サン・ミッシェルを鑑賞し、パリ市内へ帰りながらの観光。4 日目は自由行動でオプションツアーに参加する予定。今回が初めてのフランスである。美しい街並み、世界遺産の鑑賞やビール、ワインを飲むのが楽しみである。

2. 初日

羽田経由でパリ空港に到着したのは、午後 4 時過ぎでパリは少し肌寒い気候であった。ホテルに着いたのが 6 時頃で日本との時差は 7 時間である。少し休憩をとり、ホテル近くのお店や町並みの見学に出かけた。午後 9 時頃なのに外は明るい。



パリの街並み

3. 2 日目

2 日目は、13 世紀に造られたヨーロッパを代表する宗教建築のひとつシャルト・ノートルダム・大聖堂(世界遺産)へ行き美しい門、シャトルブルーと呼ばれるステンドグラスを鑑賞した。とても綺麗であった。

見学後、モン・サン・ミッシェルへ。パリからの距離はおおよそ 330 km。移動だけで 5 時間の長旅である。ブルターニュ地方を移動中のバスから見る景色は、平地が広大で麦畑や牧場が多く、まるで北海道を観光している感覚であった。



ブルターニュ地方

午後5時頃にモン・サン・ミッシェルへ到着。時間がなく、ホテルに荷物を置き急いでシャトルバスでモン・サン・ミッシェル観光へ。添乗員さんと一緒に山頂まで登り、8世紀に造られた3階建ての修道院を見学。ゴシック様式の建築の奇跡と呼ばれている修道院の内院や食堂を鑑賞した。

急いで参道に戻り、お土産屋に向かったが午後6時閉店しており残念。外に出て海辺より美しい城の景色を撮影しながら、ホテルへ戻った。ホテルで少し休み夕食へ楽しみにしていた料理、ビール、ワインをおいしく頂いた。とくに名物のオムレツは想像以上であった。



ホテルでの夕食

4. 3日目

早起きして朝焼けの鑑賞にでたが、曇り空のため朝日は出ずに終わった。ホテルを8時30分出発し、モネの暮らした村へ観光に行く。移動時間は4時間の予定。到着後、すぐ昼食をとり庭園に向かった。園内に入ってすぐに見えたのが竹林であった。日本風にデザインされた橋もあり、日本の風合いも感じられて、とても個性的で印象に残った。モネとその家族が暮らした家は光がたくさん入るような構造となっていた。2階から見る庭園の景色はとても綺麗であった。

モネの邸宅と庭園を鑑賞後、一旦ホテルへ戻った。夜は、楽しみであったムーラン・ルージュ(120年の歴史を

持つキャバレー)鑑賞。ドレスコードに着替え出発した。19時頃に到着入場口で順番待ち。中に入り6人掛けの席に座り食事を取った。歌やダンス、大道芸を組み合わせたショーが始まり全員が一緒に楽しんだ。日本では、こんなにスケールの大きいショーは見れない。本当に感激した。



ムーラン・ルージュ店内

5. 4日目(自由行動)

パリ市内観光に参加した。8時30分に出発しモンマルトンの丘へ到着。急な階段をさけケーブルカーで登った。丘の上からパリの街が見渡せた。街並みの景観を保つために建物の高さを規制(38m)していることがよくわかった。

綺麗に高さをそろえた建物がぎっしりと街を埋め、平野のように果てしなく続く絶景が目の前に広がっていた。

モンマルトンの丘を楽しんだら、次はサクレ・クール寺院を見学。天井が高く、正面には荘厳なモザイク画が描かれていた。

次に、モンマルトンの丘周辺のパリの下町としての風情が残る町並みを散策した。

パリ市内観光が終わり、次は家族へのお土産選び。せっかくパリに来たのでシャンゼリゼ通り沿いにあるルイ・ヴィトン本店に行った。入店時にセキュリティチェックがあった。店内はとても綺麗であった。言葉に不安があったが日本人の店員が対応してくれたので安心して買物ができる。



ルイ・ヴィトン本店

その後、シャンゼリゼ通りを歩いて町並みを楽しんだ。時間がなくなり、タクシーでルーヴル美術館へ。館内に入ると人で混雑していた。はじめに、ミロのヴィーナスを見学。次に一番見たかったモナ・リザの肖像画を鑑賞した。絵はとても小さく感じた。やはり人気があった人でいっぱいであった。2時間ほど館内を見学して外へ出て建物を鑑賞してホテルへ戻った。



ルーヴル美術館

6. 最終日

最終日は、ヴェルサイユ宮殿観光へ。正門に9時に到着した。沢山の人が並んでいたが中国人を多く見受けられた。30分ほど待って入館できた。宮殿内は巨大な窓と鏡、きらびやかなシャンデリアでとても豪華だった。巨大な建物の景観や噴水庭園の光景はとても綺麗であった(口絵写真25)。

昼食は、パリ市内へ戻り名物のエスカルゴ料理を頂いた。香味野菜入りのバター味で予想以上においしかった。そして旅最後のパリセーヌ海岸観光へ。乗船しパリの中心を流れるセーヌ川のクルージング、穏やかな流れに揺られて、風を切りながら進みとっても優雅である。船上から見るエッフェル塔は一味違った光景でとても綺麗であった。

7. 終わりに

4泊6日の旅行であったが、あっという間に過ぎてしまった感じがする。世界遺産の観光やビール・ワイン・食べ物もおいしく仕事を忘れ、楽しい時間を過ごすことができた。

憧れのフランス

幡多支店 設計課
吉門 祐弥 (2004年入社)

1. はじめに

4泊6日の日程で第一コンサルタンツ創立55周年記念の社員旅行に参加した。行き先はフランス。私にとって初の海外旅行である。死ぬまでに行きたい国のベスト3に入る憧れの国だった。

2. 1日目

1日目となる5月14日(月)は午前6時15分に高知空港へ集合であった。幡多支店組は南国市で前泊していたので、朝も慌てることなく、余裕を持って集合時間前に到着できた。

ちなみに、この日の私の格好は完全なサマースタイル(長袖シャツ、半ズボン、サンダル)であったため、旅行する国を間違っていると大勢から指摘を受けたが、持ち前のポジティブ思考で「全然、大丈夫です。」と意気揚々としていたことが今では恥ずかしい。

集合時間の定時となり、出発に駆けつけた右城社長に見送っていただき、まず、高知から羽田に向けて旅がスタートした。

羽田までは約1時間のフライトで、ストレスもなかった。出国等の手続きを済ませ、午前中にもかかわらず、小野支店長と共にホットドック+生ビールという最高の組み合わせを堪能した。

この旅行で最も不安だったことは、羽田からフランス間の約12時間も狭い機内に閉じ込められることだったが、幸いなことに、私の席は前に座席がない最前列部であった。足を伸ばすことやトイレに立つ時にも他人に気を使わずに済んだ。機内では映画を楽しもうと思っていたが、機内食を食べた後、爆睡し、気づくと夕食時間であった。この機内食を起き抜けにもかかわらず完食した。また、映画を鑑賞していると睡魔に襲われ、気がつくと着陸であった。結局、12時間中8時間以上は寝ていた。

フランス到着後、入国手続き等を済ませ、空港の外へ出るとポジティブでは乗り越えられないほどの寒さだった。現地時刻で17時ぐらいだったが雨も降っており、日本の初冬ぐらいの気温であった。この時、長ズボンを持ってきておいて良かったと心の底から思った。

ホテルまでバス移動し、到着後に長ズボンに履き替え、上着には防寒着を羽織り、幡多支店組と本社の数名でホテル近辺を散策した。

近くのスーパーマーケットでは、日本と全く違う食品のオンパレードで見ているだけで十分に楽しめた。海外初の買い物は絞り立てオレンジジュースであったが、2.9ユーロ(約400円)と物価の高さを感じた。

ホテルに帰っている途中で小腹が空いたため、レストランに入った。日本とは違いメニューには写真がない。メニューのフランス語も読めず、店員との会話もできないため、ビールだけを注文するというお粗末な食事となった。今思えば、何品かメニューを指で指す冒険をすべきだったと後悔している。

3. 2日目

2日目はパリから約400kmの道のりをバス移動するというハードなものであった。後ろの座席を見るとほぼ全員が眠っていた。私は2度と見られないかもしれない景色を車窓からひたすら眺めた。

1つ目の目的地、シャルトルにある世界遺産のノートルダム大聖堂。なぜ何世紀も昔にこれほど緻密で繊細な建築物を作れたのか不思議でならなかった。シャルトルブルーと名高い青いステンドグラスは噂通りの綺麗な色をしていた。

2つ目の目的地も世界遺産であるモン・サン・ミッシェル。私がこれ迄に見た建物とは違う異次元なものであり、どう説明したらいいのかも分からないほど圧倒的であった。

4. 3日目

3日目の朝は、モン・サン・ミッシェルの朝焼けを拝もうと早く起きたのだが、残念ながら曇っていた。部屋のテラスからモン・サン・ミッシェル付近の風景を堪能し、至福の時を過ごした。幻想的な景色のせいか、部屋に備えてあるインスタントコーヒーですら美味しく感じた。

この日はパリに戻るため、2日目と同様の長距離のバス移動であった。約4時間後にモネの庭に到着し、散策した。私は花に興味になかったため、特に思い出はない。

モネの庭の後は、パリのノートルダム寺院を訪れた。周辺の広場にはすごい数の観光客がいたが、寺院中に入るとまったく観光客はいなくて驚いた。2日目に行ったノートルダム大聖堂とほぼ同じ作りであった。

一旦、ホテルに戻り、ドレスコードに着替え、この旅行で1番楽しみにしていたムーラン・ルージュへ向かった。世界屈指のナイトショーであり、キャバレーという言葉に反応してしまうのは男の性である。また、フランス人のお洒落なドレスコードを見てみたかった。

会場に到着すると、会場前に停車した車からレッドカーペットを彷彿させる衣装を纏った美女が出てきた時は驚愕した。会場に入ると幻想的な雰囲気にテンションは上がり、興奮冷めやらぬ感じで食事したため、味は良く覚えていない。

ショーが始まると美男美女の鍛え抜かれた体と見たことのないミュージカルの世界に圧倒された。時折、お笑いパフォーマーや筋肉自慢のようなショーもあり、見る人を飽きさせないように、細かい工夫が色々と散りばめられていた。

これこそが「エンターテイナー」という内容であり、見応えのあるショーであった。

5. 4日目

4日目は自由行動であったので事前にツアーオプションを予約していた。行き先はモンマルトルの丘。芸術家たちが愛してやまないパリの下町である。丘からはパリ市街を一望でき、爽快であった。また、バス移動でエッフェル塔や凱旋門を回り、有意義な時間を過ごした。昼食を終え、ツアーは終わったため、昼からは小野支店長と買い物に高級デパートを訪れたが、フランス語および英語が喋れない2人では、1つの商品を探して買うのに1時間以上を費やした。それでストレスを感じてしまい、残りはウインドーショッピングのみとなってしまった。

夕食は西村夫婦に同行させてもらい8人で行った。奥さんのチョイスしたお店に行ったのだが、あいにく混んでおり、4人しか入れなかった。濱田部長達は違う店に行くと言ってくれたので、西村夫婦と私と小野支店長で入った。申し訳ない気持ちだったがせっかくなので楽しむことにした。ちなみに、この食事がフランス旅行中で最も美味しく楽しいものであり、人生初の生牡蠣も食べることができた。一緒にお店まで行った残り4人に対し、改めて申し訳なく思った。

ホテルまでは、歩いて30~40分の距離であったが運動も兼ねて、夜のパリ市街を鑑賞しながら帰れたこともすごく良かった。

6. 5日目

5日目は約1時間のバス移動でヴェルサイユ宮殿を訪れた。入場受付はこの旅で一番の長蛇の列であった。待ち時間を考えると「違うところでもいいんじゃないか？」と思ったが、団体予約は早く入れるとガイドさんが教えてくれ、ホッとした。

今回訪れた観光地、デパートや高級店では入り口でボディチェックが実施されていた。最近発生したテロを警戒しているものかは分からないが、日本の平和の良さをつくづく感じた。

ヴェルサイユ宮殿の中では、多くの観光客がいたため、部屋や絵をじっくりとは鑑賞できなかったが、部屋、廊下のあらゆる所に使用されている約15種類の大理石にはスケールの違いを見せつけられた。1番驚いたのは広大な建物の中に当時はトイレが1つもなかったということだ。

この旅行中に見たフランスの建築物等のすべてにおいて、どの部分を見ても芸術的であり、妥協や安っぽさが一切感じられなかった。

その後、セヌ川クルーズ観光を行い、すべての観光を終えた。

私はお土産を全く買っていなかったため、空港で残っていたユーロをお土産代にすべて使いきり、長かったように短かったフランスを後にした。

7. 6 日目

6 日目は機内で目覚めると羽田へ着陸直前であった。およそ約 10 時間は寝ていたことになる。フランスの出発時間が若干遅れたため、国内線への乗り換え時間が少ないうえに、チケット発行も私のみ時間がかかり、搭乗ゲートまでかなり走らされた。高知から自宅へ帰る途中に日本食を食べたが、やはり日本食に敵う食べ物はないことを確信した。



フランス旅行で 1 番美味しかった食事



フランス国旗カラーにライトアップされた建物

8. 印象に残ったこと

今回の旅行を通して私の印象に残ったことは、どのアングルから見ても美しく絵になるパリの「街並み」、日本では考えられない「道路事情」、フランスの「喫煙事情」、海外での「言葉の壁」であった。

1 つ目は「街並み」である。パリの中心部付近には新しい建物は 1 つもなかった。パリは「世界一美しい街」と言われている。古い建築物だけでも美しいが、やはり「人」が素晴らしい。古き物を大切にし、なおかつ、背景(街並み)を損なわぬようにフランス人は外見もお洒落に磨きをかけている。寒くてもカフェではテラス席で談笑しながらお茶をしている姿を見て、有意義な時間を過ごしているなど感じさせ、格好良く羨ましかった。

今回、カフェのテラス席にゆっくり座ることができなかったのも、次にフランスへ行く機会があれば、ゆっくりとテラス席で有意義な時間を味わい、フランスの街並みに溶け込んでみたいものだ。

2 つ目はフランスの「道路事情」である。まず、交差点形状であるが日本と違い、交通量の多い交差点や、5 叉路以上の交差点ではラウンドアバウト形状となっている。混雑している時以外は信号がないため、一時停止をする必要がなく、車両がスムーズに通行できる利点がある。しかし、このラウンドアバウト形状の交差点で問題が発生していないのは、フランスのお国柄もあるのかもしれない。日本人はクラクションを鳴らすことが少ない国だと思うが、フランス人は運転が荒く、かなり強引であり、全体的に運転が雑である。日本人とは真逆である。日本人のように譲り合ったり、スピードにためらってしまうと、うまく機能しそうでないなと感じた。

帰国してラウンドアバウト形状の交差点について調べた。事故が多い交差点形状を十字形状からラウンドアバウト形状にしたところ、混雑率低下と事故率低下に繋がったとの記述には目を疑った。

日本の交差点もラウンドアバウト形状にシフトしていく日も近いかもしれない。

また、車両の駐車方法は、ヨーロッパでは縦列駐車が基本らしい。日本でも珍しくはないが、ヨーロッパの縦列駐車は車両の間隔が非常に狭い。出る時は前後の車を押ししてスペースを作り、出るようだ。日本ではそれは軽い事故扱いになる。文化の違いとは恐ろしいものと感じた。ちなみに高級車(フェラーリ等)は傷がつかないようにしっかりとした駐車場に入れるそうだ。

3 つ目はフランスの「喫煙事情」である。旅行前、喫煙者の私は、観光地であるフランスでは喫煙箇所が厳しくされていると予想していた。しかし、昔の日本よりもひどい状況に驚いた。路上喫煙およびポイ捨ては当たり前で、女性の喫煙率がかなり多かったことからカルチャーショックを受けた。吸い殻の処理は清掃業者がするそうで、逆にゴミや吸い殻を捨てないと清掃業者が職を失うということを知り、JTB の添乗員さんから聞いて驚いた。海外では日本で当たり前のことが、そうではないこともあるのだと痛感した。



カフェのテラス席



ラウンドアバウト形状の交差点



驚愕の縦列駐車間隔



歩きながら路上喫煙する女性

4つ目は「言葉の壁」である。事前に携帯へ通訳アプリを取り込んでおり、多少は日本語も通用するだろうから問題無いだろうとあまく考えていた。しかし、日本語がまったく通じず、通訳アプリも上手に使えず、英語も簡単な単語しか分からなかった。その隣で買い物を楽しんでいた中国人達は英語がペラペラで店員さんとも談笑しながら、ショッピングを堪能しており、自分の語学力不足を情け無く思った。

9. さいごに

4泊6日の旅行であったが、人生初の海外旅行という貴重な体験ができて幸せに思う。旅行前に宿泊先の近くでテロが起きており、不安もかなりあったが、全員無事に帰国できて本当に良かった。

創立60周年記念の社員旅行の行き先は、憧れの「ハワイ」を願いつつ、これからも仕事に励んでいきたい。

2018年5月21日(月)～26日(土)

ドイツ

伝統・文化を大切にす国ドイツ

代表取締役 社長
右城 猛 (1986年入社)

1. はじめに

私と妻にとってミュンヘン、シュヴァンガウは2006年以来2度目であるが、ベルリンとポツダムは初めてである。

ポツダムは、アメリカ、イギリス、ソ連の三国首脳が日本とドイツの戦後処理を話し合った「ポツダム会談」の場所である。

ベルリンは、1961年から28年間にわたってコンクリートの壁によって東西ドイツが分断されていた場所である。

このような歴史的場所を一目見たい、敗戦国でありながら日本と同じように経済成長を遂げてきたドイツが、近年はどのような状態にあるのかを確認したいという思いでドイツに行くことにした。

私がドイツに決めたのは、スケジュールの都合から選択の余地はなかったということもあるが、イタリアやフランスに比べてスケジュールにゆとりがあり、病後の妻と同伴できることが大きな理由であった。

2. 機内有料Wi-Fi

ルフトハンザ航空 LH717 便で羽田からフランクフルトへ向かう間、Wi-Fiでインターネットを楽しんだ。

長時間のフライトは辛いものであるが、メールをしたりWebサイトを閲覧したりしていると、フランクフルトまでの11時間40分があつという間に過ぎた。

Wi-Fiは有料で、フランクフルト到着まで使用できるフライトプランが17€(約2200円)であった。



ルフトハンザ航空 LH717 便

3. 自動車専用道路アヴス

ベルリンからポツダムへ向かう際に、1913～21年に建設されたヨーロッパ最古の自動車専用道路アヴスを通行した。アヴスは当初、ドイツ自動車産業の競争力向上を目的に自動車レース用のサーキットとして造られたが、その一部を有料道路として開放したところベルリン・ポツダム間の移動時間が著しく短縮されたことから、アウトバーン建設の切っ掛けになったとされている。

道路脇には今も観戦席が残っており、当時の面影を偲ぶことができた。



ヨーロッパ最古の自動車専用道路アヴス

4. ツェツィーリエンホーフ宮殿

世界文化遺産にもなっているツェツィーリエンホーフ宮殿は、アメリカ、イギリス、ソビエトの3カ国の首脳が集まって第二次世界大戦の戦後処理を話し合った「ポツダム会談」の場所である。会談が行われた部屋には、円卓と椅子が置かれ三カ国の国旗が立てられていた。ここでトルーマン米大統領、チャーチル英首相、スターリンソ連首相が激論を交わし、戦後のドイツや日本の運命を決めたことを想像すると空恐ろしく感じた。



ポツダム会談が行われた円卓



会議室の壁に貼られていたポツダム会議の様子を示す写真



ベルリンのレストランで私たちの誕生日祝い



チャーチル、トルーマン、スターリンが椅子に座って会談をした場所。私が手に持っているのがその時の写真。

5. パースデーケーキ

夕食は、ベルリン中心部にあるレストラン「マキシミアンズ Maximilians」でバイエルン料理であった。ベルリンに来て南ドイツ・バイエルン州の料理を食べることに違和感があったが、東京で高知の皿鉢料理を食べるようなものと自分勝手に納得した。

食後、全員にシャンパンが配られ、小さなパースデーケーキが1個出てきた。すっかり忘れていたが今日は5月22日。私と井上敬士君の誕生日である。そのお祝いにJTBが用意してくれたものであった。すでに満腹であったが、一口食べるとメチャクチャ美味しかった。これまで口にしたことがない甘みを抑えた上品な味であった。

ツアーコンダクターの安達さんが、パリの有名なケーキ店に注文し、それを私たちのためにベルリンまでわざわざ届けてもらったようである。JTBのサービスに感動させられた。

5月24日は中平隆文君の誕生日。ミュンヘン新市庁舎の地下レストラン「ラーツケラー-Ratskeller」で食事をしたときに四角い形をしたパースデーケーキが出てきた。ここでは全員に行き渡るだけのビッグサイズが用意されていた。パリの有名店と比べるとは酷であるが、まずかった。これがドイツの味なのだと納得した。

6. ベルリンの壁

終戦後、東ドイツはソ連が占領したが、東ドイツの中にあった首都ベルリンはさらに東西に分割された。

当初、東西ベルリンの行き来は自由だったので、自由で良い暮らしを求めてたくさんの東ベルリン市民が西ベルリンへ脱出した。これを止めるため東ドイツは西ベルリンの周りを有刺鉄線付きのコンクリート壁で囲った。これがベルリンの壁である。

1990年に東西ドイツが統一され、ベルリンの壁は撤去されたが、シュプレー川隣のミュンヘン通りに約1.3kmの壁がイーストサイド・ギャラリーとして残されている。ここはオープンギャラリーとして開放され、21カ国118名のアーティストが壁面にアート作品を描いている。

終戦から73年経った今でも、朝鮮半島は北朝鮮と韓国に分断されている。

日本も一歩間違えたら4つの国に分断されていた。北海道と東北地方をソ連、本州中央、関東、信越、東海、北陸、近畿をアメリカ、中国と九州をイギリス、四国を中華民国がそれぞれ統治し、東京は四カ国共同占領という日本分割統治計画が存在していたのである。もしも分断されていれば東京にもベルリンの壁ができ、日本の発展は大きく遅れ今日のような豊かな国にはなっていなかったに違いない。それだけに敗戦国ドイツの東西分断の象徴である「ベルリンの壁」を一度この目で見たいと思っていた。



ベルリンの壁イーストサイド・ギャラリー



ベルリンの壁があった位置には石が埋め込まれている

7. クラインガルテン

ミュンヘンへ移動するためベルリン・テーゲル空港に向かう途中、庭付きの小さな家をたくさん見かけた。クラインガルテンである。「小さな庭」の意味であるが、現地ガイドは「一坪農園」と説明していた。

ドイツでは利用者が50万人を超えている。利用者一人当たりの平均面積は100坪。貸借期間は30年。ラウベと呼ばれる小さな小屋が併設されていて、ここに住みながら野菜や果樹が育てられる。老後の生き甲斐や余暇の楽しみだけでなく、都市部での緑地保全や子供たちの自然教育の場としても大きな役割を果たしているようである。

高知にもドイツのクラインガルテンを真似た滞在型市民農園がある。「クラインガルテン四万十」と、第一コンサルタントが設計・監理を担当した「クラインガルテンもとやま」である。

近年、県外から高知県に移住する人が増えているが、市街地からあまり遠くない場所にクラインガルテンを整備すれば、県外からの移住をさらに促進できるだろう



ベルリンのクライカガルデン

8. 水平ジブクレーン

ベルリンの国会議事堂の展望台に上がったとき、旧東ベルリンのあちらこちらでビルの建設工事に水平ジブクレーンが使われているのを見た。ノイシュヴァンシュタイン城が建っている山の麓でも水平ジブクレーンが設置されていた。

日本ではビルの建築工事にタワークレーンが使用されるが、水平ジブクレーンは見かけない。

日本に帰ってから、高知工科大学の國島正彦教授が土木工事の作業効率のために水平ジブクレーンを用いる研究をしていることを知った。

全くの偶然であるが、この9月に第一コンサルタントが国土技術総合研究所から「建設現場における労働生産性データ取得及び施工効率化要件整理業務」を受注した。橋梁工事を対象に、従来工法による施工と水平ジブクレーンを使用した施工の両方でデータを取得分析し、労働生産性や施工の効率化を比較検討する業務である。

今回のドイツ旅行で何度も見ていたので、水平ジブクレーンに親しみを覚えるようになった。



ノイシュヴァンシュタイン城の麓の水平ジブクレーン

9. ミュンヘン新市庁舎とその周辺

ミュンヘン新市庁舎は、1867～1909年に建てられたネオ・ゴシック様式の建物で、ドイツ最大の仕掛け時計がある庁舎として有名である。

庁舎には高さ85mの塔があって、エレベーターで展望台へ上がるとミュンヘンの街を一望できる。

ミュンヘンは第二次世界大戦で焦土と化したのが、戦前の伝統的な建築物を復元している。日本をはじめとする東南アジアの国々では、高層ビルをどんどん建設しているのとは対照的である。現地ガイドよりドイツ人は伝統・文化を大事にしているという説明があった。

市庁舎があるマリエン広場から南に少し行った所に、野菜や果物、花、チーズ、ワイン、鮮魚などを売る店がたくさん並ぶヴィクトアリアンマーケットがある。マーケットの中には、ビアガーデンもあり、多くの市民が大ジョッキでビールを飲んでいた。

市場の中央には、マイバウムが立てられていた。マイバウムとは「五月の樹」の意味。ドイツでは春の訪れを祝い、5月になると町や村の広場に飾り付けをした一本の高い柱を立てる風習がある。ここにはマイバウムが一年中立てられている。

広場や街の様子もマイバウムも12年前に来たときのままである。何も変わっていない。中国や東南アジアの国々が猛スピードで変化しているのと対照的である。



新市庁舎から眺めたミュンヘン市街



ヴィクトアアリーエンマーケット



ヴィクトアアリーエンマーケットのマイバウム

10. アリアンツ・アリーナ

アリアンツ・アリーナは2005年に370億円かけて建設された収容人員75,000人のサッカー専用のスタジアムである。

このスタジアムの側面と屋根部分に使われているのは、旭硝子が作った高機能フッ素樹脂フィルム「アフレックス」である。フィルムを重ねて、中にエアを送り込むことで菱形の座布団のような状態にしたものが2,800個使用されている。菱形をしたフィルムの寸法は、目測であるが5m×15mと大きい。

私たちが見学したときのスタジアムは白色をしていたが、バイエルン・ミュンヘンの試合日は赤、TSV1860ミュンヘンの試合日は青、サッカードイツ代表の試合日は白に色を変える。技術先進国ドイツで、日本の技術が生かされていることを知り、嬉しく誇らしく感じた。



旭硝子の「アフレック」で作られたアリアンツ・アリーナ

11. あとがき

ドイツにはヨーロッパの他の国と同じように古い建物が残されている。古い文化や歴史を大切にする風土がある。

国や民族への帰属意識を高める上では重要であるが、日常生活には不便である。高層ビルのマンションや立体駐車場を作ることができないので、マイカーは路上駐車が当たり前である。隙間がないほどの間隔で縦列駐車をしなければならない。

技研製作所の北村精男社長が、「ヨーロッパに技研の地下駐車場「エコパーク」を作れば路上駐車を一掃できる。ヨーロッパには5兆円の市場がある」と話されていたが、その可能性は十分ある。

親睦会役員とJTB添乗員による事前の準備や現地での気配り、そして社員の協力のお陰で誰一人被害に遭遇することなく、体調を崩すこともなく無事に帰ってこられた。

社員にとって生涯の思い出に残る楽しい旅になったことと思う。

戦争と冷戦の世紀を象徴するベルリンの壁と

ポツダム会談の会場

取締役 相談役
矢田部 龍一 (2017年入社)

1. 20世紀を象徴する国・ドイツ

今回、第一コンサルタンツ創立55周年を記念しての社員ヨーロッパ旅行に参加した。第一陣の旅行先はイタリア、第二陣はフランス、第三陣はドイツである。

イタリアは、2000年以上も前に、数百年に渡ってヨーロッパを支配したローマ文明発祥の地である。ローマは広大なヨーロッパを支配するにあたって、29万kmにも及ぶ道路整備や水道橋に代表される社会インフラ整備を推し進めた。古代ローマの物質文明は、古代ギリシャ文明とユダヤ・キリスト教文明という精神文明と並んで、今日の世界をリードしているヨーロッパ文明の源流をなしている。

私は第3陣のドイツ旅行に参加した。ドイツはイタリアと並んで関心がある国である。それは以下の理由による。20世紀を政治面から概観すると前半は2度の世界大戦に代表される戦争の時代、後半は米ソ冷戦に象徴されると共産主義が猛威を振った時代である。ドイツには、東西冷戦終結の象徴であるベルリンの壁の遺構や日本の無条件降伏を含むポツダム宣言が討議されたポツダム会談の開催地があるなど20世紀を代表する国と言える。また、ドイツは中世カトリック社会から近世への転機となったルター宗教革命の舞台でもある。それと共にドイツの自動車産業の発展を下支えしたアウトバーンが整備されている。これらを垣間見ることが出来れば、この上ない収穫である。

2. ドイツの首都ベルリン

旅の初日、午後2時に羽田からフランクフルトに飛んだ。機内11時間の長旅である。日本と7時間の時差のお陰で、フランクフルトの到着は夕方であった。それから、国内線に乗り換えてベルリンに飛んだ。大都市であるにも関わらず空港は意外に小さい。到着は夜の9時半であった。緯度が高いので日暮れは遅いが、さすがに暗くなっている。旅の本番は翌日からである。次の日は朝早くから予定が組まれているので早々に眠りについた。といっても数時間も眠ったであろうか。身体は長旅で疲れているのに目が覚めた。時差ボケである。起きても何もすることがないので、ウトウトしていると外が明るくなり始めた。

窓の外には抜けるような大陸の青空が広がっている。空気が乾燥しているので朝の冷気が気持ちいい。窓から見えるベルリンの街に戦争の傷跡は認められない。NATOのリーダー国であるドイツを代表する国の中心だけのことある。活気に満ち溢れた街である。それにしてもベルリンは緑に溢れている。街路樹として植えられている菩提樹とマロニエの若葉が、真っ青な空に映えている。青々と繁つ



写真 1-1 真っ青な空に映える戦勝記念塔
(1872年に完成した。デンマーク戦争・普墺戦争・普仏戦争の戦勝を記念した塔)

た街路樹が実に落ち着いた平和に満ち溢れた街の風情を醸し出している。

3. 第二次世界大戦とソビエト連邦

今は平和に満ち溢れたベルリンであるが、20世紀は戦争に明け暮れたこともあり、ベルリンも戦火に焼き尽くされた。2度の世界大戦では、植民地化政策に乗り遅れた民族主義国家が、自由主義的な国体を持つ国からなる連合国と戦火を交えた。その結果、これまでの戦争では見られないほどの多くの命が失われた。特に、第二次世界大戦では自由主義国家であるアメリカ、イギリス、それとフランスが民族主義を掲げる全体主義国家であるドイツ、イタリア、日本と戦った。結果は自由主義国家が民族主義国家に勝利し、世界は民主主義体制に大きく舵を切った。

その一方で、第二次世界大戦は、共産主義国家であるソビエト連邦の躍進も招いた。ソビエト連邦は戦争で疲弊した東欧諸国に共産党の傀儡政権を立て共産国とした。また、中国や北朝鮮にも共産党政権が樹立された。第二次世界大戦では汎ゲルマン主義を掲げるナチスドイツや大東亜共栄圏構想を掲げる日本の軍政政権などの民族主義国家を敗戦に追い込み、民族主義を抑え込むことには成功したが、一方で世界赤化革命を目指す共産主義の台頭を許すことになった。

4. 共産主義の脅威

共産主義の第一号の国はソビエトである。帝政ロシアで1917年に共産主義革命が起こり、瞬間に東欧に飛び火し、広大なソビエト連邦を建国した。ソビエト連邦の領土拡大指向は止まることを知らず第二次世界対戦の終結に際して、領土を東ドイツにまで拡大した。共産主義国家である東ドイツから西ドイツへの脱出者が後を絶たないことから、1961年に東ドイツ政府は一方的にベルリンの壁を構築し、東ドイツからの脱出を防ぐとともに、脱出を試みる者を容赦なく撃ち殺した。ベルリンの壁は、朝鮮半島の38度線と並んで東西冷戦の象徴であった。

共産主義国家はマルクス・レーニン主義を国家建設の理念とする有史以来、初の国家の形態である。共産主義は、唯物論、唯物弁証法、マルクス経済学、そして唯物史観を思想の根幹とし、階級闘争・暴力革命を歴史の必然として容認する。存在が意識を決定するという唯物論には、人間が生まれながらに持つ生命の尊厳性といった概念はゼロである。そのため、共産主義国家では多くの国民が無慈悲に粛清された。スターリンや毛沢東による反革命分子の犠牲者はそれぞれ2千万人を超えるとも言われている。またカンボジアのポルポトを政権下では、殺戮された死体がメコン川に列をなして流れたとも言われている。

アメリカは第二次世界大戦後の戦後処理で、共産主義への対応を誤った。ソビエトの出方を読み誤った事により東欧を支配下に収められ、中国および北朝鮮の共産化を許した。北朝鮮の共産主義を排除する事に失敗したことが今日の北朝鮮の核の脅威となっている。また北朝鮮の共産主義国家樹立を許したことがベトナム戦争を引き起こし、ベトナム戦争での米国の敗戦が発展途上国で雨後のタケノコのように共産主義国家が誕生する遠因となった。

共産主義は徹底した全体主義国家である。共産党の主張が絶対であり、個人の自由や人権は一切認められていない。これは北朝鮮の金正恩体制を見ても明らかである。北朝鮮では体制に反対すれば、即座に収容所送り、もしくは死刑が待っている。

5. 東西冷戦の象徴としてのベルリンの壁と壁の崩壊

ドイツが東西に分裂後、東ドイツでは共産主義政権による徹底的な弾圧政策と経済の停滞が起こった。ベルリンの壁を境にして、西側には自由と繁栄が、一方、東側には弾圧と貧困が待っていた。

冷戦に終止符を打ったのはソビエト連邦のゴルバチョフである。1917年の共産主義革命から70年の年月を経てのことである。ソビエト連邦が世界赤化政策を推し進めたこともあり、世界の半分近い国が共産主義革命の犠牲になった。中国や北朝鮮などの極東アジア、東南アジア、中南米、アフリカ、そして東欧と実に多くの血が流された。



写真 5-1 シュプレー川沿いに残されたベルリンの壁にはアーティストたちにより多くの壁画が描かれている。ブレジネフとホーネッカーがキスしている絵が特に有名である

ゴルバチョフがソビエト連邦を解体し、共産主義独裁政権を放棄するのは、経済の停滞に端を発している。北朝鮮の金正恩が、曲がりなりにも対話路線に出たのは、経済制裁の効果である。アメリカを始めとして経済制裁を緩めることがあってはならない。

1989年11月9日、大挙して押し掛けた東ベルリン市民を前にして国境検問所が開かれ、数万人が西ベルリンになだれ込んだ。ベルリンの壁の崩壊である。この様子は、テレビで連日の如く放映された。自由と解放の象徴であった。多くの人々を苦しめたベルリンの壁は、今は一部だけが遺構として残されている。ベルリンの壁を前にして、共産主義政権下で苦しめられた多くの人々のことを思い、祈りを捧げた。

6. ポツダム宣言の会場

ベルリンの郊外にあるポツダムのツェツィーリエンホーフ宮殿を訪ねた。1945年7月17日、米英ソの首脳が会談した会場である。歴史的な会談が開催された場所であるので、もっと大きな宮殿かと想像していたが、案外と小さい。歴史教科書に掲載されている宮殿の庭園で写された3首脳が並んで椅子に座っているところもじっくりと見学した。ポツダム会談の時には、まだ広島と長崎に原爆は投下されていない。ポツダムで戦後処理のことを話し合っている時に、トルーマン大統領の頭の中には原爆投下の計画がすでにあっただけで、広島、長崎の人は何も知らない。戦争は実に悲惨である。

ナチスドイツが降伏後の占領政策を話し合うためにベルリンに隣接するポツダムのツェツィーリエンホーフ宮殿で、アメリカのトルーマン、イギリスのチャーチル、それとソビエトのスターリンの3巨頭会談が行われた。今回、会場を訪ねて見ると73年前の姿がそのまま残されている。

ポツダム宣言では、日本の無条件降伏が勧告された。しかし、日本が敗戦を受け入れたのは、8月15日のことである。この間、ソビエトは8月7日未明に参戦し、樺太を占領すると共に中国に展開していた日本軍50万人をシベリアに抑留した。ソビエトのスターリンは領土拡大に躍起と



写真 6-1 ポツダム市のツェツィーリエンホーフ宮殿の壁にかかるトルーマン・チャーチル・スターリンの会談光景の写真

なっていた。終戦が延びていれば、北海道や韓半島は間違いなく占領されていた。スターリンは、ポツダム会談に先立つヤルタ会談で北方領土の併合を約束させている。

当然のことであるが、戦争では勝者が全てを決定する。ソビエト連邦の一方向的な参戦により、日本側では多くの犠牲者が出た。また、樺太も北方領土も一方的に支配された。せめて、北海道が分割統治されなかったことが救いである。日本人は、戦後日本の分割統治に反対してくれた中華民国の蒋介石総統に感謝しなければならないことを再確認したツェツィーリエンホーフ宮殿の訪問であった。

7. ミュンヘンの町並み復興

旅の3日目にベルリン空港を飛び立って、午後5時過ぎにはドイツ第3位の人口を擁するミュンヘンに到着した。私にとって、ミュンヘンと言えば、ビール、そしてオリンピック開催時のテロ発生くらいの知識しかない。

ミュンヘンは第2次世界大戦の際に連合軍の空爆により徹底的に破壊されている。そのため、美しさと縁もゆかりもない街かなと勝手に想像していたが、何とも表現できないほど美しい街である。

ミュンヘンはヒトラー率いるナチスが本拠地を置いた街である。そのため、第2次世界大戦中は、連合国により71回もの空爆を受け、中世の美しい街並みは完全に破壊された。戦後の復興は、住民たちの意を汲んで、戦前のままに復興されている。建物の高さ制限がかけられ、色調も統一されている。戦後、世界各地において、経済優先の街並みが建設された。それらの街は、伝統的な美しさも、近代的な美しさも乏しい。ミュンヘンは150万人を超える大都市である。BMWのような世界的企業も立地している。この街が、戦前の街の美しさを完全に残して再建されたことに驚きを禁じ得ない。日本各地のまちづくりもミュンヘンに学べば、日本的な美しい街並みを取り戻せる。いつ取り組みを始めても遅すぎることはない。



写真7-1 戦火に焼き尽くされたが、今は見事に復興されたミュンヘン市の美しい街並み
赤レンガや屋根瓦が中世の佇まいを醸し出す

8. アウトバーンと自動車産業

ドイツは自動車生産大国である。メルセデス・ベンツ、フォルクスワーゲン、BMW、アウディ、ポルシェ、Smartなど、世界を代表する自動車メーカーがある。これを支えているのが、全土に張り巡らされたアウトバーンである。

今回の旅行でアウトバーンを走った。速度制限はところどころにあるが、多くは速度制限なしである。日本だと即座に速度違反を取り締まられるが、ドイツではその心配があまりない。日本もいつの日か、自分たちで制限速度を守る国民になりたいものである。

アウトバーンの建設を本格的に推し進めたのはヒトラーである。第2次世界大戦の開戦までに実に3860kmが完成されている。それに比べて日本の高速道路の開通は、1963年7月の名神高速の栗東IC－尼崎IC間(71.7km)まで待たなければならない。ヒトラーは数々の悪政を行ったが、今日のドイツのアウトバーンの建設とそれに伴う自動車産業の隆盛は、ヒトラーあつての賜物である。

古代ローマは、「すべての道はローマに通ず」と言われるほどの道路整備で広大な帝国の繁栄を誇った。ドイツのアウトバーンを走って、日本も今まで以上に真剣に国土整備に向かう必要があるように感じた。

特に、四国のインフラ整備は遅れている。南海トラフ巨大地震の発生が現実味を帯びる中、救援路・復旧路としての生命線である8の字高速自動車道ネットワークの完成も、まだ時間を要するようである。また、8の字ネットワークの完成と並んで四国が将来的に発展していくためには、四国新幹線の整備、そして、第二国土軸としての豊予海峡ルートの整備なども、ぜひ取り組みたい事業である。

今回のドイツ旅行は、私に多くの感動を与えてくれた。戦争は許せるものではないが、さすがに2度の世界大戦を戦うだけの気概を持った国だけのことはある。特に、歴史を感じさせる街並みと社会資本整備への取り組みは素晴らしい。

ドイツ街並み紀行

設計部 部長

松本 洋一 (1994 年入社)

1. はじめに

今回の社員研修旅行は、会社創立 55 周年を記念してヨーロッパを訪れた。私は、第 3 班としてドイツを訪問した。EU 圏を訪れたのは、新婚旅行で北欧を旅して以来である。今年度から都市計画の勉強をして仕事の幅を広げたいと考えていたこともあり、特にドイツの街並みに対して興味を持って見学することができた。

駆け足で見聞した街並みは、整然と美しく整備されていると感じた。以下に印象に残った街並みについて綴る。

2. ベルリン市街の歴史的遺構

ベルリンは、ドイツ連邦共和国の首都であり市域人口は 350 万人の大都市である。旅の最初にドイツ連邦議会議事堂を訪れた。見学者に解放された屋上ドーム(口絵写真 30)からはベルリン市街が一望できる。ガラス張りのドーム眼下には議場を覗くことができ、オープンな議会政治をアピールしている。屋上にはドイツ国旗が青空に映えてはためいていた。ガイドさんによれば国旗の黒色は勤勉、赤色は情熱、金色は名誉を表している。国の顔とも言える連邦議会議事堂を見学してドイツが世界有数の経済大国に発展した精神の一端を垣間見ることができた。

ベルリン市街には、ドイツ帝国時代、第二次世界大戦、東西冷戦時代の遺構が数多く保存され現代の統一ドイツを代表する街並みを形成している。

ブランデンブルク門(口絵写真 31)は、かつての城郭都市であった面影を残し現在はベルリンのシンボルとなっている。東西冷戦後に大規模な修復を受けており、戦禍を物語る弾痕が至る所に見られた。

ベルリンの壁がアートギャラリーとして解放されたイーストサイド・ギャラリー(口絵写真 36)は、多くの観光客で溢れていた。かつての東西分断の象徴は、国内外のアーティストが様々なスタイルで自由や平和について発信する場となっている。

ベルリンでは、平和について考えさせられる歴史的遺構が観光資源や市民の憩いの場として活用されていることが印象深かった。



写真 1 通勤時間の自転車通行レーン

市内の街路では、多くの路線で駐車が可能となっている。びっしりと路上駐車が並ぶ景観は、ヨーロッパの特徴的な街中景観である。路上駐車に対する考え方は根本的に日本と異なっている。

自転車交通も日本との違いを感じた。日本に比べて自転車通行レーン(写真 1)の整備が行き届いている。通勤時は自転車交通量が非常に多く、マナー良く颯爽と市街を通り抜けていく。

3. ポツダムの旧市街と宮殿群

ポツダムはベルリンから約 30 分程度に位置し、湖と森の緑に囲まれた美しい街である。

昼食をとった旧市街中心部のブランデンブルガー通り(写真 2)は、車両の侵入が規制されてショッピングモールとなっている。オープンカフェやフラワーショップ等が軒を連ね、美しい建物と調和した開放感のある街並み景観を形成している。

「ポツダムとベルリンの宮殿群とその公園群」は、ユネスコの世界遺産(文化遺産)に指定されている。今回は、その中でも代表的な遺産であるサンスーシ公園と宮殿(口絵写真 33)、ツェツィーリエンホーフ宮殿(口絵写真 34)を訪れた。



写真 2 車両の進入が規制されたポツダム旧市街の街並み

サンスーシ公園は約 300 ヘクタールの広大な敷地に芝生や森が広がっている。サンスーシ宮殿の前庭は階段状のブドウ園になっている。花壇、生け垣、芝生の景観を維持するために 60 人程の庭師が働いているそうである。

フリードリヒ 2 世が暮らしていた頃の宮殿は、トイレや風呂が設置されていなかったそうで劣悪な衛生状態であったことは容易に想像できる。ロココ調の美しい建物とのギャップには驚かされる。美しさへの追求を何よりも優先する文化が根底にあると感じる。

4. ミュンヘン旧市街

ミュンヘン新市庁舎からは市街が一望できる(写真 3)。ミュンヘンの街は、旧市街と新市街が対照的な街並みを形成している。旧市街は、はしご車が届く高さ 22m 以下に建物高さが制限され、中世から近世の美しい街並みが復興され維持されている。

旧市街中心部の観光は、マキシミリアン通り(写真 4)を経由する。この通りは国立劇場や高級専門店が軒を連ね、

ミュンヘン旧市街の都市景観を代表する通りとなっている。旧市街の真ん中には、市内最大の野外市場ヴィクトアリエンマルクト(写真5)があり、ビアガーデンには明るい時間から多くの人が集っている。さしずめ、高知では日曜市からひろめ市場に至るエリアといったところか。ただ、その規模と開放的な雰囲気には圧倒される。今回は残念ながらこのようなオープンスペースでの食事はとれなかった。機会があればゆったりと時間をとって過ごしたい。

ヨーロッパでは、ディーゼルエンジンの排ガス不正が明るみになって以降、電気自動車の普及が加速しているとの報道を耳にしていた。実際に街路に設置された充電施設(写真6)を利用する場面を見かけたが、ベルリン、ミュンヘンともに思っていたよりも施設数が少ない印象を受けた。



写真3 新市庁舎から望むミュンヘンの街並み



写真4 旧市街の中心部マキシミアン通り



写真5 緑に囲まれた開放的なビアガーデン



写真6 街路に設置された充電施設

5. ミュンヘン新市街の建築デザイン

旧市街を抜けると街並みは一変し近代的なデザインの建築物に目を惹かれる。

BMW 本社(写真7)は、シリンダーを模したユニークな形状をしている。本社に隣接するショールーム、それらを結ぶ歩道橋(写真8)に至るまで、BMWらしい硬質で美しいデザインで統一されている。

ドイツの工業製品には、デザインの一貫性を感じる。例えばドイツを代表する自動車メーカーであるBMW、メルセデス・ベンツ、フォルクスワーゲン、ポルシェは、時代が変わっても一目でそれとわかるデザインへのこだわりを感じ取ることができる。質実剛健、機能的、美しさといった要素をうまく融合し、各メーカーのアイデンティティが確立されている。

FC バイエرن・ミュンヘンの本拠地であるアリアンツ・アリーナ(口絵写真44)は、スポーツ全般に興味がある私にとっても一度は訪れてみたいと思っていた場所である。外観は繭のようなユニークな形状のサッカー専用スタジアムで、ミュンヘンの新たなランドマークとなっている。外壁の半透明のパネルは日本の旭硝子製である。

ガイドによるスタジアムツアーも充実している。ツアーでは選手が実際に使用するロッカールームから対戦チームが並んでピッチに入る通路を案内される。チャンピオンズリーグのテーマに合わせてピッチに出れば美しい芝生と7万人収容のスタンドが迫り臨場感が素晴らしい。



写真7 シリンダーを模した BMW 本社ビル



写真8 近代的なデザインが目を惹く BMW ショールーム

6. ロマンティック街道

ロマンティック街道は、ドイツで最も人気がある観光街道である。心配された天気にも恵まれて期待通りの美しい風景を楽しむことができた。車窓に広がるのどかな田園風景やアルプスの山並みは美しく心が癒やされる。

今回訪れたのは、街道の南端部に位置するヴィース教会とノイシュヴァンシュタイン城である。

ヴィース教会(口絵写真40)は、世界遺産にも指定されて

おり内装のロココ装飾の美しさが圧倒的であった。多くの観光客が訪れる施設であるが、周辺は牧場に囲まれて質素な佇まいである(写真9)。園路(写真10)や駐車場、案内看板等も周辺に溶け込むよう配慮されており違和感なく整備されている。

ノイシュヴァンシュタイン城(口絵写真41)は、街道の南端に位置する人気の観光地である。溪谷に架かるマリエン橋からの景観は、素晴らしいの一言に尽きる。この城は、要塞や宮殿としての機能を備えて建設されたものではない。これほど大規模な建築物が、ルートヴィヒ2世の中世への憧れを具現化した趣味の産物であったことに驚かされた。城郭としての実用性に乏しいが、結果的に観光施設として非常に価値あるものとなっている。



写真9 農村風景に溶け込んだヴィース教会



写真10 周辺景観に調和した園路

7. 番外編：ドイツの食

旅先では、食文化を理解することが重要である。風土的に食材に恵まれていなかったため、保存食が発達し塩分や酸味がきつい。供される食材も単調でジャガイモや肉類が主体である。季節感も乏しく旬の食材として出たものはホワイトアスパラガスのみであった。市場で見た魚類は、川魚や燻製が主体であった。

食事のボリュームは、日本で外食する場合の2~3倍はあるか。とにかく量に圧倒される。ドイツ人の屈強な体躯を見ればその量も納得はできるのだが。

ドイツの食文化は、繊細な日本食文化と対極にあり、特に年配の日本人旅行者には馴染みにくいものであろう。しかし私自身は、ドイツでの食事を美味しく楽しむことができた。白ソーセージ(写真11)、ピクルス、皮目を香ばしく焼いた豚肉(写真12)などと本場のビール(口絵写真39)との相性はぴったりである。好き嫌いだけでなく、風土や文化の違いに思いを馳せることができれば、その土地の食をもっと楽しむことができるのではないだろうか。



写真11 ミュンヘン名物の白ソーセージ



写真12 メインの豚肉とジャガイモ

8. おわりに

実際に見聞したドイツの街並みは、各々の都市が特徴ある歴史や文化を保全しつつ機能的で快適な生活ができる空間整備が両立されていると感じた。

ドイツの街並みを見て、日本との違いとしてあらためて感じることは、街並みを構成する要素の中で美しさを優先する強い意思である。この意思が文化として社会に根付いていなければ、このような統一感のある街並みは形成できないであろう。

身近な日本の街並みを見れば、経済性、快適性、利便性、速さ、高さといった要素が優先され、美しさや統一感に欠ける残念な景観が目立つように思う。

現時点で私には「美しい街並み」について、都市計画の観点から整理して説明することは難しい。今回の旅をきっかけとしてあらためて都市計画について勉強する意欲を持たせたことは有意義であった。

6日間のドイツ旅行は、あっという間に帰途を迎えた。見所が多すぎて、どうしても駆け足の観光になってしまうのは仕方がない。

次にヨーロッパを訪れる機会があれば、じっくりと腰を据えて滞在したい。開放的な屋外の市場、ビアガーデン、オープンカフェでもゆったりした時間を過ごしたい。

このような機会を再び持つよう、日々精進していきたい。

ドイツ観光地の感想

総務部 総務課

山本 裕子 (2013 年入社)

1. はじめに

55 周年記念でヨーロッパ旅行に行くことになりました。行き先はイタリア、フランス、ドイツの 3 カ国の中から自分の行きたい国を選んで良いとのことでした。私は、3 カ国の中ではドイツだけ行ったことがなく、ドイツを選びました。

総務課員との日程調整の結果、私の希望のドイツとなり、5 月 21 日から 26 日まで行ってきました。

2. 第 1 日目(高知からベルリンへ)

高知龍馬空港を 10 時 15 分に出発し、羽田空港へ向かいました。羽田空港では松山と徳島から参加の社員と合流し、約 11 時間かけてフランクフルト経由の最終目的地ベルリンのテーゲル空港に向かいました。

第 1 日目は首都ベルリンまでの空路移動で終わりました。

3. 第 2 日目(ベルリンとポツダム)

首都ベルリンとポツダムの観光地を巡りました。

(1) ドイツ連邦議会議事堂(渦巻ドーム)

入り口でパスポートを係員に見せてから入場をしました。外観は一見、議事堂とは思えないぐらい立派な建造物でした。しかも屋上にはガラスのドームが建っていました。ガラスのドームはドイツの開かれた政治をアピールしているそうです。

ガイドから「高所恐怖症の方は上に行かない方がいいですよ」と言われましたが、私はまさしくそうなのですが、そこは思い切って行ってみました。といっても屋内です、壁がガラス張りです安全でしたし、回路も一方通行のため全く問題なく上れました。

快晴のため外の景色を綺麗に 360 度見渡すことができました(口絵写真 30)。

(2) ブランデンブルク門

東西ドイツ分裂と再統合の象徴となっているブランデンブルク門の上には、勝利の女神ヴィクトリアが率いる 4 頭立ての馬車が立っていました。徒歩移動だったため、門を裏から見ることができ、女神を拝むことができました(口絵写真 31)。

(3) サンスーシ公園

ポツダムにある世界遺産サンスーシ公園には、緑豊かな庭園が広がっていました。限られた時間ではありましたが、噴水のある所まで行き、石像等の写真を撮り、一息つく暇もなく帰り道は階段を一気に登りました。

(4) サンスーシ宮殿

世界遺産サンスーシ宮殿は入場時刻が決められており、早歩きで入り口まで移動をしました。ガイドは、各部屋を順番に詳しく丁寧に説明をしてくれました。

第一印象は、煌びやかな装飾品が目につきました。壁はもちろんのことですが、天井にまで金色で絵画のように飾られていました。



サンスーシ宮殿内の装飾

(5) ツェツィーリエンホーフ宮殿

世界遺産ツェツィーリエンホーフ宮殿では、入場時刻まで少し時間があり庭で一休みをしたりアイスを食べたりと、各自のんびりとしていました。

この宮殿は歴史的なポツダム会談で有名で、実際に使用された部屋や執務室がそのまま保存されていました。家具や絨毯は赤一色でまとめられ、緊張感がありました。

会談で座る位置は意図的な配置があったそうで、恐怖を感じました(口絵写真 34)。

4. 第 3 日目(ベルリンからミュンヘンへ)

(1) チェックポイント・チャーリー

東西の歴史を記したボードがたくさん並んでいました。その中には、ジョン・F・ケネディのボードもありました。暗殺数ヶ月前の写真との説明でした(口絵写真 35)。

(2) ベルリンの壁

いよいよ待ちに待ったベルリンの壁ドキュメントセンターへ移動しました。車窓からイーストサイド・ギャラリーの壁画を撮るのに必死になり、動画にすれば良かったと後悔をしています。ベルリンの壁を利用した壁画の絵は、118 人によって自由と平和へのメッセージが描かれているそうです。

到着すると、観光客でいっぱいでした。現地に来て感じたことは、一夜にして壁ができ、突如東西が分断される。戦争とは本当に罪深きものだと思います。

ガイドより、絶対に撮っておいた方がよいという壁画に行ってみると、順番待ちの行列がありました。ソ連のブレジネフ書記長と東ドイツのホーネッカー書記長のキスを描いたものでした。実際にキスをしているのではないです、と説明がありました。後でその写真を確認してみると、角度が悪かったせいで綺麗に写っていませんでした(口絵写真 36)。

5. 第4日目(ロマンティック街道沿い)

ミュンヘンからロマンティック街道沿いにある草原にたたずむ聖地、世界遺産ヴィース教会に行きました。道のりはアルプスのハイジを思わせるのどかな風景が続き、時々牛を放牧している場所もありました。

(1) ヴィース教会

ヴィース教会に到着すると、外観を一目見た瞬間、この教会が本当に世界遺産なのかと思うほど質素でした。しかし中に入って、驚いたことに神秘的な世界が広がっていました。教会自体はそれほど広くないのですが、目の前の祭壇がひと際目立っていました。

祭壇のどこにキリスト像があるのかと思うほど豪華な作りでした。ガイドから教会の説明を受けました。そのなかで一番心に残ったのは、ペリカンについてでした。雛たちに何も餌を見つけれないときには自ら胸を裂き心臓の血を与えたというのです。母性愛の強さを感じる話でした。

ヴィース教会の内部の写真撮影は基本禁止です。ガイドから「見てなかったことにしますからどうぞ」の一言で、皆いっせいに撮りはじめました(口絵写真40)。

(2) ノイシュヴァンシュタイン城

東京ディズニーランドのシンデレラ城のモデルとして有名なお城です。お城へのアクセス方法は徒歩、バス、馬車の3種類があります。私達はバス移動10分程でしたが、急カーブのため吊り革を持つ手が前の人の背中に挟まっていた。撮影スポットであるマリエン橋に行き、お城をバックに写真を撮るのですが、前述とおり高所恐怖症の私は足がすくんでしまいました。

その後、お城の中を見学したのですが、移動手段の階段がラセン階段のため目が回り、少し気分が悪くなりました(口絵写真41)。

6. 第5日目(ミュンヘン観光と帰路)

(1) アリアンツ・アリーナ

FCバイエルン・ミュンヘン選手の控え室やロッカールームを実際に案内してもらいました。しかも嬉しいことに選手入場曲を流しながら2チームに分かれて入場行進までさせてもらいました。そうそう出来る事ではない貴重な経験をさせてもらいました。



アリアンツ・アリーナ前で撮影

(2) レジデンツ

空港へ行く時刻が迫っていたため、駆け足で宮殿内を案内してくれました。通常2時間かけて見て回るところを、関係者以外立ち入り禁止の場所を通りながらの見学となり、短時間での見学は少々残念でした。ガイドの説明をイヤホンで聞く余裕もなく写真を撮っていました(口絵写真45)。

7. ドイツの食事

ドイツでの食事で印象に残っているのは、主食であるジャガイモの量が尋常じゃないことと、食卓にプレッツェルが常に添えられていることでした。初日は全体の量が分からず残さないように全て食べていましたが、2日目以降からは、全体を考えて食べるようにしました。

一般的に味付けは濃く塩気もあり、ビールが進む理由がよくわかりました。

普段からビールをゆっくり飲む私には、1リットルのジョッキに入ったビールを配られた時は目が点になりました。色々な種類のビールを飲み比べたいと思っていたため、少し残念な気持ちになりました。

ミュンヘン名物の白ソーセージ(ヴァイスヴルスト)は、肉厚で濃厚な味でしたが、皮が固いため雑誌に載っていた食べ方を参考に実践してみました。

海外に行くと毎回思うことですが、やはり日本の食事が一番美味しいと感じます。



ど迫力の白ソーセージと1Lビール

8. あとがき

今回のドイツ旅行準備は、出発の2日前まで悩みました。特に気温が分からず服装を選ぶのに困りました。JTBの方の「寒いです」というのを信じて準備をした結果、現地の日中気温は真夏に近く暑かったです。

ドイツは個人旅行では、まず選ばない国の一つだと思いましたが、この機会に渡独でき本当に良かったです。ベルリンの壁では色々なことを考えさせられた5日間でした。

ドイツの歴史と文化を研修する旅

営業部 営業課

小松 俊則 (1993 年入社)

1. はじめに

平成 30 年度は、創立 55 周年である。記念行事として社員旅行先は、ヨーロッパである。

イタリア、フランス、ドイツの魅力ある 3 カ国から、私はドイツ旅行への参加となった。初めての海外長期旅行である。

準備や出発までの仕事の処理が大変であったが、憧れでもあったドイツへの旅行である、必死になって頑張り、出発当日を迎えた。

2. 出発～ドイツ入国～ベルリンへ

日本脱出は羽田空港から。思ったよりタイトなスケジュールでフランクフルト行きの飛行機に搭乗した。座席の前に液晶モニターがあり、映画で時間をつぶせる。

なにせ 11 時間を超えるフライトである。そのあいだの過ごし方が一番の悩みどころであった。寝て過ごせば、到着したあとの時差ボケで旅行中の行程に影響がでるからである。

結局、少し睡眠はとったが、微妙な味の機内食と、意外に種類があった映画を見て、11 時間を越える窮屈な空間を乗り切ることができた。

フランクフルト空港へ無事到着。長旅の疲れによる眠気を我慢しつつ、入国審査もパスして無事ドイツ入国となった。その後は再び飛行機でベルリンへ行きホテルに入った。相部屋の同僚によるとベッドに入って 2 秒後には寝たようである。やはり疲れていたのだろう。

翌朝は、午前 5 時に目が覚めた。せっかくなので同僚と外へ出てホテルの周りを散策した。

思ったより寒くなく過ごしやすい気温、開放的な町並みと笑顔で歩く人に意外さを感じた。

ベルリンに持っていた暗い雰囲気の内観とは大きく違っていた。



写真 1 ベルリンの朝

3. ベルリン・ポツダム観光

いよいよ観光初日、ドイツ連邦議会議事堂、ブランデンブルク門を見学する。

私のドイツ旅行の目玉としていた、ブランデンブルク門は、意外にも世界遺産ではないが、1791 年に竣工した史跡であり、ベルリンのシンボルとされている。

当時のベルリンを出入りする物資に関税を課すための関税門であり、ベルリンからかつて存在した都市ブランデンブルクに通ずる街道に設置したことからこの名がつけられたそうだ。

実際に見ると想像していたよりはるかに大きく、存在感と造形美はこの旅行で最初の感動であった。



写真 2 ブランデンブルク門

その後ポツダムに移動。グリーニッケ橋、サンサーシ宮殿とツェツィーリエンホーフ宮殿を訪れた。その中でも初めて聞くサンサーシ宮殿は世界遺産のようである。旅行前の予習ができておらず少し反省した。

サンサーシ宮殿は、1747 年当時ベルリンを首都としたプロイセン王国の国王フリードリヒ 2 世が、夏の別荘として滞在するために建てたロココ建築の宮殿である。私が思い描いていた外国の宮殿そのものであった。

サンサーシ宮殿についても予習をしていなかったことで、逆に素直にみることができた。建物の美しさと外部装飾の緻密さ、高低差を利用し、左右バランスよく考えられた庭園には目を奪われた。

高い建築技術と贅沢としか思えない装飾技術を尽くして建てられている。写真を撮るのを忘れそうになるほど見入ってしまった。



写真 3 サンサーシ宮殿内の一部

満足したサンスーシ宮殿を後にして、この日の午後は、歴史上で重要なポツダム会談が行われた場所へ向かう。

郊外の自然が多い場所に到着した。林間の道を徒歩で通り抜けると古いホテルのような建物が見えてきた。ツェツィーリエンホーフ宮殿である(口絵写真34)。

建てられたのが1917年である。建築様式がサンスーシ宮殿とは全く違っていた。こちらも世界遺産の一部分(「ポツダムとベルリンの宮殿群と公園群」)とのこと。当時の皇太子のために建築された。

建てられてから28年後の1945年にアメリカ合衆国、イギリス、ソビエトの3カ国首脳により、第二次世界大戦の日本を含めた戦後処理を決定するための会談がここで行われた。会議が行われた部屋は意外に狭く、3カ国首脳による駆け引きがこの場所であったようである。

4. ベルリン2日目～ミュンヘンへ

ベルリン2日目は、ポツダム広場のSONYセンターからスタート。ここは著名な建築家の設計による住宅を含む複合商業施設である。ベルリンの壁崩壊後に再開発の目玉として建設されたようである。

次に行った東西ドイツの旧国境検問所であるチェックポイント・チャーリーは観光客でいっぱいだった。検問所の雰囲気は残っており、当時の軍服を着た人がそれらしく立って観光客と記念撮影に応じていた。当時では考えられないことであろう。写真4の手前が旧東ドイツ、奥が旧西ドイツである。建築物の違いから当時の政治的、経済的な違いがよく分かる。



写真4 チェックポイント・チャーリー

慌ただしくバスに乗り市内を移動する。ところどころにベルリンの壁が残っている。

イーストサイド・ギャラリーはデザインアートとなっているベルリンの壁である。見たことのあるアート作品が壁ごとに描かれていた。昔、おじさん二人がキスしているアートが描かれたTシャツを見たことがあったが、ここに描かれていたものであるとは知らなかった(口絵写真36)。

アートを堪能したのちにまた慌ただしくバスに乗り、ベルリン大聖堂とペルガモン博物館へ。ベルリン大聖堂はペルガモンに展示されている遺跡より印象深く、圧巻の建築物だった(口絵写真38)。

ベルリン観光はこれでおしまい。明日からの観光のため空路ミュンヘンへ。

次の日は私が一番見たいノイシュヴァンシュタイン城の観光なので早めの就寝につく。

5. ミュンヘン周辺の史跡観光とミュンヘン市内

いに4日目。世界遺産であるヴィース教会とノイシュヴァンシュタイン城の見学である。

ヴィース教会は世界遺産のテレビ番組で視聴したことがあり旅の楽しみの一つであった。

山岳地帯にある盆地地形の丘の上に派手さのない教会が出現した。テレビで見て想像していたより大きい。世界遺産にふさわしい芸術的な内装がこの教会の特徴だ。

教会内を直に見られたことに感動した。この空間にある装飾全てが人の手によって作られたかと思い、しばし呆然とした(口絵写真40)。

次のノイシュヴァンシュタイン城に行くためバスに乗る。もう少し見たい気持ちもあったが、次が本番でもある。

私は、ロマンチストではないが、幼少より幾度となく教科書やガイド誌などでこの城を見ていた。日本人の多くは西洋の城と言えばこの城を連想するのではないだろうか。

畑が広がる田舎道をバスで走っていくと岩山の上に見事な白い城が見えてきた。

到着してガイドさんお勧めの場所マリエン橋へ徒歩で移動する。ビューポイントとしてわざわざ橋を架けたそうだ。その気持ちが良く分かる(口絵写真41)。

内部見学は時間厳守、内部の写真撮影は禁止であった。残念であった。

この城は、132年前の1886年に作られたものであり、歴史的には新しい。石垣にモルタルが詰められており、建築構造は鉄骨である。建設したのは、バイエルン王ルートヴィヒ2世である。中世への憧れを強く抱いており、わざわざミュンヘンから遠く離れたこの場所にロマンティックな城を作ったようである。今の時代では到底考えられない王のわがままで建てた城である。

その後は、ミュンヘン市内に戻りBMW博物館とショールーム、新市庁舎を見学した。

6. ミュンヘン市内観光～帰国へ

最終日は、ブンデスリーガ・バイエルン・ミュンヘンのアリアンツ・アリーナ見学とヴェルテルスバッハ王家の宮殿を見学した。

また、11時間越えの窮屈な空の旅を乗り切り無事帰国した。

7. おわりに

若い新入社員を含めたドイツ班にとっては良い経験になったと思う。

ドイツという国と、その歴史に興味があった海外研修に参加できたことは非常に良かった。

初めてのドイツ旅行

営業部 営業課 係長
山本 剛也 (2010年入社)

1. はじめに

創立 55 周年の今年は、4 泊 6 日のヨーロッパ社員旅行となりました。私は、5 月 21 日から 26 日の第 3 班のドイツへ行ってきました。

初日は、高知から羽田を経由して、フランクフルトへ移動し、フランクフルトからベルリンへ移動しました。長時間の飛行機での移動は初めての体験ですごく体が疲れました。特に、羽田からフランクフルト間は、11 時間 40 分の長時間のフライトでしたのでエコノミー症候群にならないように気を付けながら映画鑑賞等で機内を過ごしました。ホテルに到着したのは、現地時間で 21 日の 22 時でした。

明日から本格的にスタートするドイツ観光のために早めにベッドに入りしましたが、時差の影響なのか寝付けず朝がやってきました。

2. ベルリン、ポツダム

2 日目は、ドイツ連邦議会議事堂(口絵写真 30)やサンスーシ宮殿(口絵写真 33)とツェツィーリエンホーフ宮殿(口絵写真 34)に行きました。

ドイツ連邦議会議事堂は、近代ドイツの栄光も挫折も見届けた生き証人のようだと感じました。威風堂々としたこの建物がこれからもドイツの歴史を永遠と見守り続けてほしいと思いました。私はまだ日本の国会議事堂を訪れたことがありません。日本国民として一度は自国の国会議事堂を訪れたいと思いました。

昼食は、本場ドイツのソーセージとビールでした。ソーセージはかなりのビッグサイズでした。日本のソーセージやビールもおいしいですが、やはり本場で食べるソーセージとビールはさらに美味しく感じました。

ドイツの料理は 4 日間すべて美味しく頂きましたが、ボリュームに毎回苦戦もしました。料理で一番美味しく印象に残っているのはこの写真の料理でした。



一番印象に残った本場ドイツのソーセージ

昼食後、次に向かったのは、ブランデンブルク州の州都

ポツダムです。ポツダムでは、サンスーシ宮殿とポツダム会談の舞台にもなったツェツィーリエンホーフ宮殿に行きました。サンスーシ宮殿とツェツィーリエンホーフ宮殿は 1990 年に、ポツダムとベルリンの宮殿群と公園群の 1 つとしてユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されています。サンスーシ宮殿は、プロイセン王国時代の 1745 年から 1747 年にかけて、フリードリヒ 2 世の命によってわずか 2 年で建てられました。この宮殿は、ベルリンの王宮を離れて暮らすための、政治的機能から切り離されたフリードリヒ 2 世の夏の離宮として建てられましたが、結果的には離宮ではなく、フリードリヒ 2 世の居城として機能しました。この宮殿の建築に関しては、フリードリヒ 2 世自ら設計の一部を行ったそうです。次にツェツィーリエンホーフ宮殿は、1917 年に当時皇太子であったヴィルヘルム・フォン・プロイセンのために建設されました。日本ではポツダム会談が開かれた場所として有名です。1945 年 7 月 17 日から 8 月 2 日に行われたポツダム会談は、アメリカ合衆国、イギリス、ソビエト連邦の 3 カ国の首脳が集まって行われました。7 月 26 日には日本政府に対して日本軍の無条件降伏などを求めるポツダム宣言が表明されました。ポツダム会談が行われた部屋や 3 カ国の首脳が三人で写真撮影をした庭園等を見学し、約 70 年前にこの小さな部屋で日本の運命が決められた場所だと思うと、日本人として感慨深い思いになりました。先の戦争では、ドイツも日本も世界中に大変大きな苦痛や損害をあたえました。しかし、戦後は両国とも戦争に反省と謝罪をし、十分に贖罪をしていると私は個人的に思います。世界をリードする先進国である両国が近い将来に、国連の常任理事国入りし、世界の平和のためにもっともっと今まで以上に積極的に国連平和維持活動ができるようになればとせつに感じました。



ポツダム会談が行われた部屋

3 日目は、ベルリンの壁(口絵写真 36)及びチェックポイント・チャーリー(口絵写真 35)とペルガモン博物館(口絵写真 38)等に行きました。ベルリンの壁やチェックポイント・チャーリーは、戦争によるドイツ分断の悲劇の歴史跡であり、ほんの 28 年前までは二つの国に分断されていた現実を改めて感じました。ベルリンの壁が崩壊した 1989 年当時私は 9 歳でした。ベルリンの壁を市民が壊しているニュース映像は今でもはっきりと記憶にあります。なんで壁を壊しているのだろうか、なんで町の中に壁があるの

だろうと思っていました。しかし、この出来事はすごく重大な出来事なのだろうとも感じていました。29年後にニュースで見たベルリンの壁に来ることができ前日のツェツィーリエンホーフ宮殿に続いて、歴史を肌で感じ感慨深い思いになりました。第二次世界大戦後ドイツのように2つの国に分かれた韓国と北朝鮮も今急速に距離が縮まり、朝鮮戦争の終戦と統一に向けて話が進んでいますので、ドイツのようにいつの日か統一される時が来ればと思います。



当時のままのリアルなベルリンの壁

ペルガモン博物館は、ベルリンにある博物館の1つで、博物館島にあります。館名の由来にもなっている「ペルガモンの大祭壇」を始めとするギリシャ、ローマ、中近東のヘレニズム美術品、イスラム美術品などを展示しています。建築工事は1910年から始まり、第一次世界大戦を経て、1930年によく完成しました。東西ベルリンの統一に伴い、現在リニューアル工事中でゼウス大祭壇は見学することができませんでしたが、イシュタル門やミレトゥスの市場門等歴史的価値のある古代建造物を見学でき、最初から最後まで圧倒されかつ感動しました。

3. シュタインガーデン、シュヴァンガウ

4日目からミュンヘンに移動し、シュタインガーデン地方、シュヴァンガウ地方の観光です。ミュンヘンからバスに乗って約2時間で到着しました。最初に訪れたのがシュタインガーデン地方にあるヴィース教会(口絵写真40)です。ヴィース教会は1738年、ある農家の夫人がシュタインガーデン修道院の修道士が彫った「鞭打たれるキリスト」の木像をもらい受けたところ、このキリストの像が涙を流しました。この噂は「ヴィースの涙の奇跡」として広まり巡礼者が集まるようになり、1740年には牧草地の小さな礼拝堂に移したが、巡礼者は増える一方であり、一般からの浄財を募るなどして、1746年から建造をはじめ、1757年完成しました。ロココ様式の内部装飾はまさに「天から降ってきた宝石」そのものでした。和の美とはまたちがう絢爛豪華な装飾に目を奪われ最後まで圧倒されました。

次にシュヴァンガウ地方にあるノンシュバンシュタイン城(口絵写真41)を訪れました。この城は、バイエルン王ルートヴィヒ2世によって19世紀に建築されました。軍事拠点としての要塞としてではなく、また政治や外交の拠点としての宮殿としたものでもなく、ルートヴィヒ2世のロマンティック趣味のためだけに建設されたものだと聞

いて驚愕しました。

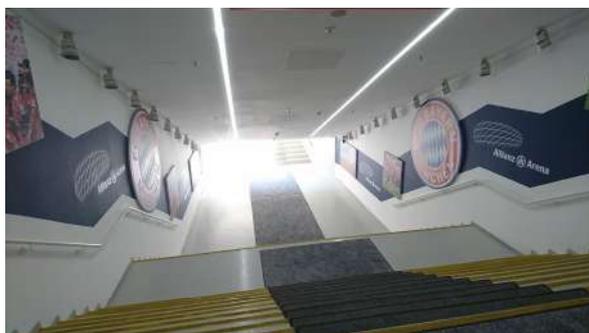
4. ミュンヘン

ノンシュバンシュタイン城の後は、ミュンヘン市内に戻り、BMW ヴェルトとBMW 博物館(口絵写真42)やミュンヘン新庁舎(口絵写真43)を訪れました。BMW 博物館では、子供達のお土産にミニカーを購入しました。いろいろなBMW の車を見ていると購入したい気分になりましたが、金額を見て一瞬で現実に引き戻されました。購入はできませんが、十分に楽しませてもらえました。



BMW ヴェルト

第5日目は、ドイツの強豪サッカークラブのバイエルン・ミュンヘンの本拠地アリアンツ・アリーナ(口絵写真44)を訪れました。2006年ワールドカップの開幕試合が行われたアリアンツ・アリーナは迫力のあるスタジアムでした。現在は改修中で来シーズンまでにリニューアルされるそうです。次回はバイエルン・ミュンヘンの試合が行われる時に訪れたいと思いました。



選手がスタジアムに向かう階段

5. おわりに

第一コンサルタントに入社して8年になりますが、台湾、グアム、ドイツと3度も海外旅行にいかして頂きました。私にとっては初めてのヨーロッパ旅行なので、出発前は楽しみと同じくらいに不安な気持ちでしたが、ドイツに到着してからは不安だった気持ちはなくなり楽しい時間を過ごすことが出来ました。これから60周年に向けて日々精進し、頑張っていこうと改めて決意をした社員旅行でありました。

美味しいお肉とビールの国への旅

営業部 営業課

佐藤 香奈子 (2013 年入社)

1. はじめに

第一コンサルタンツ創立 55 周年の今年、社員旅行の行き先はなんとヨーロッパでした。イタリア、フランス、ドイツの3カ国の中で、私はドイツ旅行に参加しました。

ドイツといえばビールではないでしょうか。ビール好きの私にとって一度は行ってみたい国でした。また、歴史的にも興味のある国でしたので、行くのをとても楽しみにしていました。

2. ドイツへ(1日目)

高知空港を出発し、最終到着地ベルリンまでの総飛行時間は約 14 時間ほどです。羽田・フランクフルト間は約 11 時間 40 分。こんなにも長時間飛行機に乗るのは初めてでした。日本との時差は-7 時間、ベルリンのテーゲル空港到着したのは夜の 10 時過ぎでした。

3. ベルリン・ポツダム(2日目)

朝一番、旅の始まりに訪れたのはドイツ連邦議会議事堂です。建物の大きさ、彫刻は圧巻でした。議事堂上部には大きなガラスドームがあります。自然光を下部の議場まで届ける役目をしているそうです。ドームの中からは議場を覗くことが出来ました。ベルリン市内を一望でき、天気もとても良かったので戦勝記念塔まで綺麗に眺めることが出来ました(口絵写真 30)。

議事堂を後にし、隣の公園内を通り抜け向かったのはブランデンブルク門です。門の裏側にはベルリンの壁があったことを示すレンガが埋め込まれたラインがありました。ブランデンブルク門もとても大きく、日本との違いをとて感じました。



レンガのライン手前が西側、奥が東側

その後、オリンピックスタジアムなどを見て回り昼食のレストランへ向かいました。ドイツと言えば、ビールとソーセージ、そしてキャベツを発酵させたザワークラウトです。まさにそれが昼食でした。昼間からのビールとソーセ

ージは最高の組み合わせでした。ザワークラウトは発酵食品なので少くせがありました。機内食も含め何度か食べた中で、このレストランのものが一番食べやすかったです。



昼食のソーセージ

午後は世界遺産であるサンサーシ宮殿とツェツィーリエンホーフ宮殿へ。初めて「宮殿」と言われる場所を訪れました。広い庭園や細かな装飾品に感動しました。ツェツィーリエンホーフ宮殿は日本ではポツダム会談が開かれた場所として有名です。会議が行われた部屋のどの位置に誰が座っていたなど、ガイドの方に説明していただきながら見学しました(口絵写真 33、34)。

4. ベルリンの壁(3日目)

ベルリン2日目は、まずソニーのヨーロッパ拠点として作られ、ベルリン国際映画祭の会場の一つであるソニーセンターを訪れました。

そして、ベルリンの壁が存在していた時に国境検問所だったチェックポイント・チャーリーへ。ファーストフード店などが立ち並ぶ通りの真ん中にあります(口絵写真 35)。

チェックポイント・チャーリーを後にし、向かったのはベルリンの壁です。一番有名な壁画の前は観光客でいっぱいでした(口絵写真 36)。

その後はギリシャ、ローマ、イスラムなどの美術品が数多く展示されているペルガモン博物館へ。広い館内は迷子になりそうでした。

そして昼食の後、市内をバスの中から眺め、ミュンヘンへ移動するために空港へ向かいました。ベルリンは晴れてとてもいい天気でしたが、ミュンヘンは雨が降りそうな曇り空でした。

夕食は醸造所直営のビアホールで、食事と共に楽器演奏などのショーを楽しみました。1 リットルのビールジョッキを両手にいくつも運ぶウェイターの姿には驚かされました(口絵写真 39)。

レストランを出ると雨が降った後でした。雨に濡れたレンガの街並みがとても綺麗でした。

5. ノイシュヴァンシュタイン城(4日目)

この日はミュンヘンの中心部を離れ、まずは世界遺産の

ヴィース教会を訪れました。教会内に入った瞬間、思わず声が出てしまう程、天井画と装飾が素晴らしく、感動しました。主祭壇の赤い柱はキリストの血を、脇の青い柱は神の恩寵を表しているそうです(口絵写真40)。

そしてディズニーランドのシンデレラ城のモデルとも言われているノイシュヴァンシュタイン城へ。途中まではバスで行き、お城までは徒歩で向かいます。お城の周りにはたくさんの観光客で賑わっていました(口絵写真41)。

ミュンヘンに戻り、観光の中心地マリエン広場で少し買い物をしました。広場にある新市庁舎は圧巻でした。市庁舎の塔には仕掛け時計があり、32体の人形はなんと人間の等身大だそうです(口絵写真43)。

そして夕食です。メインのお肉の塊には驚きました。ツアアのコース料理だからだとは思いますが、初日から料理の量が凄かったです。味も少し濃くてビールによく合いました。



ビールによく合うメインのお肉

6. アリアンツ・アリーナ(5日目)

最終日はバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアム、アリアンツ・アリーナです。

この日も天気良く、スタンドからの眺めは最高でした。プレスルームや選手が使うロッカールームを見て回り、なんと選手入場のアンセムを流しながら2列に分かれて入場の疑似体験までありました。ピッチのすぐそばまで行けてとても楽しかったです(口絵写真44)。

最後はヴェルテルスバッハ王家の宮殿レジデントを駆け足で見学した後、空港へ向かいました。空港で最後にお土産を見て回り、楽しかった旅を振り返りながら羽田行きの飛行機へ乗り込みました。

7. おわりに

気になっていた天気も、夜に雨が降った程度で気温も日本とほぼ変わらず快適に過ごせました。

スケジュールは詰まっていましたが、たくさんものを見て感じる事ができました。また、美味しいお肉とビールを存分に楽しむことができ、とても充実した旅でした。

また必ずドイツへ行きたいですし、他のヨーロッパの国へも旅行してみたいです。

ドイツの建造物

設計部 河川砂防課 課長
片岡 寛志 (1991年入社)

1. はじめに

第一コンサルタンツは創立55周年を記念してヨーロッパへの研修旅行を実施した。私はドイツを目的地とした第3班に参加した。

見学した建造物に関して日本との違いや現地で感じたことを述べる。

2. ドイツ連邦議会議事堂



ドイツ連邦議会議事堂のガラスドーム

ベルリンのミッテ区にあるドイツ連邦議会の議事堂がある建物で1894年に建設された。帝政ドイツおよびヴァイマル共和国の国会議事堂として使われていた。

ヒトラーが首相となった直後の1933年2月に放火により炎上、その後は修復されないまま第二次世界大戦での空襲と市街戦で破壊された。国会議事堂の屋根にソ連兵がソ連国旗を掲げる写真が有名である。

東西ドイツ再統合によりベルリンへの首都機能移設の一環として国会議事堂の大規模な修復が行われ1999年に完成した。

私たちは議事堂の屋上にあるガラス張りのドームを見学した。このドームは直下にある議場へ太陽光線を導く機能を有している(口絵写真30)。外観上は放火と戦災で失われる前の国会議事堂のドームを模しているようだ。

建物の修復に際して外壁以外は全て取り壊されたとのことである。内部は大型のエレベーターやガラスで仕切られたオフィスなどがあり、外観からは予想できないほど近代的な様相となっていた。

国の制度が変わった後、建物を再整備して建設当初の目的のまま利用するのは、例えば高知城を高知県庁として使用するようなものである。宮殿や城など当時の状態をそのまま保存する方法と、外観に当時の面影を残しつつ積極的に利用する方法が混在しているのは合理的だと感じた。

日本の歴史的建造物保護の考え方の違いを強く感じた。

3. 宮殿・城

ベルリン滞在中には世界遺産「ポツダムとベルリンの宮殿群と公園群」の一部であるツェツィーリエンホーフ宮殿とサンスーシ宮殿を見学した。ミュンヘン滞在中には「ロマンティック街道」の終点であるノイシュヴァンシュタイン城とバイエルン王族ヴェルテルスバッハ家の宮殿レジデントを見学した。

(1) ツェツィーリエンホーフ宮殿

ブランデンブルク州の州都ポツダムにあるツェツィーリエンホーフ宮殿はプロイセンの皇太子の居城として1917年に建設された。

外観、内部とも豪華絢爛というほどの装飾は施されておらず、実用性の高い印象を受けた。重厚な造りの扉や階段の手すり、4本並んだ煙突の装飾を違ったものにするなど時間と手間をかけていることが伺えた。

宮殿の内部、外観ともポツダム会談開始当時のまま保存されているほか宮殿の背景や第2次世界大戦の経緯と戦後のドイツの歴史などを解説したパネルが展示されていた。

中庭の花壇には花が赤い星状に植えられていた。ソ連占領時に整備されたものかは分からなかった(口絵写真34)。

宮殿の一部は補修工事が実施されていた。工期を数ヶ月過ぎてても未完成である。ドイツ人といえば職人気質で神経質という先入観があったので工期にルーズというのは意外であった。

我々以外にガイドに引率された学生の集団が見学に訪れていた。学校は長期休暇に入っているという話だが、熱心に見学しているのに少し驚いた。

(2) サンスーシ宮殿

サンスーシ宮殿はポツダム市街の西にあるサンスーシ公園内に位置している。

プロイセン国王フリードリヒ2世が夏の間に暮らすための離宮として建設した。建設時期はオーストリアとの戦争中であった。

実際には離宮ではなく、通常の居城として機能した。東西の全長が100m、部屋数12というのは宮殿としては小規模なものであるという。外観は薄黄色の外壁と中央の薄緑色のドームが青空に映えて美しかった。



サンスーシ宮殿と晴天

連続している各部屋はロココ調の豪華な装飾が施されている。部屋ごとに植物や鳥など主題が異なる装飾になっていた。調度品や床の仕上げもバラエティに富んでおり、離宮としてまさに憂いのない造りだと感じた。

調度品などに手を触れることはできないが、その造作を間近で見ることができるのは非常に素晴らしいことだと思う。



鳥と植物をモチーフにした装飾(サンスーシ宮殿)

近接しているツェツィーリエンホーフ宮殿とセットで写真撮影の許可権を販売するというアイデアは日本でも受け入れられるのではないだろうか。

(3) ノイシュヴァンシュタイン城

ノイシュヴァンシュタイン城はバイエルン王ルードヴィヒ2世によって1869年に建設された城である。ルードヴィヒ2世は中世騎士道に強い憧れを持った人物であった。その憧れを具現化するためにノイシュヴァンシュタイン城を建設したとのことである。

高い尖塔と白い外壁が特徴的であった。山道を通って城に近づくにつれ窓や壁に施された装飾の見え方が変化した。長い坂道もあつという間を感じた。

城の上流には城の眺望のために作られたマリエン橋があった。床板は足場板のような簡素な造りだった。大勢の観光客がひしめき合っており少し恐怖を感じた。橋中央付近からの眺望は素晴らしく、背後に広がる牧草地帯と合わせてまさに「絵になる」状態だった(口絵写真41)。

尖塔はスマートで石造りにしては華奢だと感じた。日本に戻ってから調べると城の構造は石造りではなく、鉄骨組のコンクリート構造であった。

城はルードヴィヒ2世の居城として使われたが、ミュンヘンから離れた位置にあり実用性に乏しかった。ルードヴィヒ2世の死後すぐに一般公開され、観光資源として活用されているとのことである。

内部は長い階段やホールのほか、人工洞窟や台所など変化に富んだ構造が楽しめた。写真撮影禁止となっているの

が残念であった。

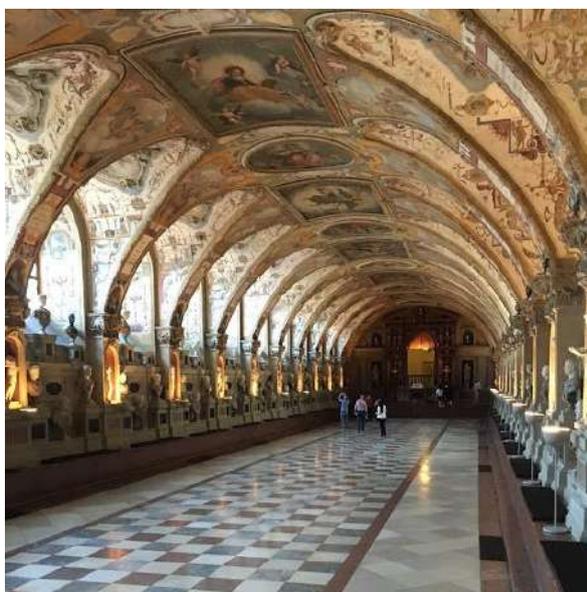
この城がディズニーランドの城のモデルになっているという話は聞いたことがあったが、ノイシュヴァンシュタイン城自体がいわばテーマパーク的な側面を持っていたことは新鮮な驚きであった。

(4) レジテンツ

レジテンツはミュンヘンの旧市街地にある。1385年から建設が開始された。増改築が繰り返されて徐々に構造が変化した。見学時間が短いこともあり、まるで迷路の中を進んでいる気分であった。

内部は一部が博物館として公開されている。歴代の王の肖像や家系図などが展示されていた。壁画や天井画の一部にはもとの図柄がわからないほど劣化しているものもあった。装飾は増改築時に追加されたらしく、これまでの宮殿と違って統一感が取れていない印象であった。

建物内には奥行 70m に及ぶ大ホールがある。左右から延びるアーチ状の柱と屋根で支えられた構造であった。



レジテンツの大ホール

4. 教会

ベルリン滞在中はカイザー・ヴィルヘルム記念教会、ベルリン大聖堂(口絵写真37)を見学した。ミュンヘン滞在中はヴィース教会を訪問した。またミュンヘン市庁舎周辺の教会をいくつか見学した。

(1) ヴィース教会

ヴィース教会は涙を流すキリストの木像を安置するために建造された。

外観は質素な教会である。その内部はロココ様式の装飾が施されている。礼拝堂の天井は一面に天国の門の絵が描かれている。この天井画は世界的に有名で「天から降ってきた宝石」と呼ばれている(口絵写真40)。

礼拝堂入り口の2階部分には演奏会にも使用されるパイプオルガンが設置されている。

私は教会を訪れたことはほとんど無く、ましてや天井画を実際に見るのは初めてであった。壁面の装飾と礼拝堂の高い天井に描かれた宗教画は神の威光を示す効果を十分に発揮していると感じた。



質素な外観のヴィース教会

5. その他の建造物

その他にベルリン市街地周辺では博物館の島にあるペルガモン博物館、ミュンヘン新市庁舎周辺のフェルトヘルンハレ、バイエルン国立歌劇場などを見学した。

これら歴史的建造物とは対照的に近代的なベルリンポツダム広場のSONYセンター、アリアンツ・アリーナ、フランクフルト空港、ベルリン・テーゲル空港、ミュンヘン空港およびBMW本社、ミュージアム、ショールームを訪問した。

(1) ペルガモン博物館

ペルガモン博物館は世界遺産に認定されている「博物館の島」に位置している。

ペルガモン博物館では「ミレトウスの市場門」「イシュタル門(口絵写真38)」などの遺跡をそのまま館内で展示していた。雨ざらしとなる現地保存よりも気候の変化や紫外線から確実に保護できるので貴重な歴史的遺産の保存方法として理にかなっている。

展示物は発掘段階ですでに失われていた部分を補修して往年の姿を再現していた。

普段あまり目にする事のないイスラム文化に関連した遺物も多く收藏されていた。

限られた時間で館内すべてを周ることはとてもできなかった。音声ガイドは日本語にも対応していたが、すべての收藏品については解説していなかった。歴史の流れや文化交流の概要を理解できる程度の内容だった。

(2) ミュンヘン新市庁舎と周辺の建物

ミュンヘン新市庁舎(口絵写真43)は1867年に着工し

1909年に完成している。現在も市役所として使用されている。正面の尖塔にはドイツ最大のからくり時計がある。11時、12時、17時に動くが、時間が合わず見学できなかった。尖塔には展望台があり市街を眺めることができる。

ミュンヘン市庁舎のあるマリエン広場周辺には旧市庁舎やフェルトヘルンハレ(将軍廟)、バイエルン国立劇場、聖母教会、セントペーターズ教会などがある。それぞれ特徴的な造りだった。それぞれ尖塔が高さを競うように林立しているのは見応えのある風景だった。ガイドブックに掲載されていないような建物であっても重厚な石造りで歴史を感じた。

マリエン広場周辺の道路は歩行者専用になっている。訪れたのは夕方だったが、非常に多くの人出があった。マリエン広場周辺を歩行者専用であるためか、その外側にある道路は両側車線の路肩に隙間なく駐車されていた。観光客を呼び込むのに自動車を制限するのは有効だが、却って景観を悪くしているように感じた。



マリエン広場の賑わいと旧市庁舎



マリエン広場近くの劇場教会

(3) アリアンツ・アリーナ

アリアンツ・アリーナは2005年に完成したサッカー専用スタジアムである。ミュンヘン郊外にあり、ブンデスリーガに所属するバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムとして使用されている。

蘭のような外観を持つ非常にシンボリックな建造物である。高速道路からもすぐに見つけることができた。

近くで見るとその大きさに圧倒された。座席数は70,000席で75,000人を収容できるとのことである。東京ドームで55,000人、鹿島サッカースタジアムで40,000人収容できることを考えると、十分に大きなスタジアムだと思うが、これでもバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムとしては小さいらしい。

今回の訪問では試合時に選手が使用するロッカールームやインタビュースペースに入ることができた。また、フィールドを観客席と入場門の2箇所から見る機会に恵まれた(口絵写真44)。観客席はチケットを購入すれば座れるが、入場門やロッカールームなどは一般には入ることのできない場所なので少し緊張を覚えた。

観客席の裏側には広いスペースがあり、軽食を売る売店が並んでいた。試合のある時の喧騒が想像できるようだった。

スタジアムとしては小規模であっても広い階段が複数に設置されていた。案内看板もわかりやすく設置されていた。随所に80,000人近い観客やスタッフを効率的移動させるための工夫を感じることができた。



アリアンツ・アリーナの選手ロッカールーム

6. おわりに

今回の旅行は主にドイツのビールを目的と考えていた。訪れてみると日本のものとは規模も構造も全く異なる建造物の迫りに圧倒された。

世界大戦以前のドイツの歴史に興味を持ったことは殆どなかったが、今回の旅行で得た建造物に関する知識を補強するためにドイツだけでなくヨーロッパ全体の歴史・文化について少し調べてみたいと思っている。

ドイツの文化に触れて

設計部 河川砂防課 係長
富永 敏絵 (1993 年入社)

1. はじめに

創立 55 周年の社員旅行がヨーロッパに決定したと聞いた時は、実際にアンケート等の準備が始まるまでは信じられなかった。

イタリア・フランス・ドイツの中でドイツを選んだのは、ビールを本場で飲んでみたかったことと、日本人に気質が似ていると言われるドイツの人達と実際に接してみたいと思ったからである。

2. 出発

いよいよ研修旅行出発になってもドイツに行くという実感はあまりなく、忘れ物だけしないように気を付けて家を出た。羽田で乗り継ぎ、不安だった国際線も体調を崩すことなく乗り切りフランクフルト空港に到着した。フランクフルト空港から次にベルリンに向かう国内線に乗り継ぐのだが、入国審査のゲートが非常に混雑しており、1 時間半という短時間での乗り継ぎ時間に間に合わないのではないかと初日から焦ってしまった。何とか飛行機に乗り遅れることもなく、定刻どおりベルリン・テーゲル空港に到着。首都の空港にしては規模の小さいのに驚いた。

3. ベルリン・ポツダム観光

2 日目からはベルリン市内の観光地を訪れた。

バスの車窓から見えるベルリンの街は、都会で近代的な建物も多く、その中に混在する古い建物は存在感があった。

最初に訪れたのはドイツ連邦議会議事堂である。入場するのに空港並みのセキュリティチェックを受けたことに驚いたが、聞けば日本の国会議事堂に入場する時も同様のチェックがあるという。

議事堂の中央にはガラス張りのドームがあり、議場の中はいつも天然光が差し込むように設計されているという。また、ガラス張りは、政治の透明性を象徴しているとも聞いた。多くの観光客が見学しており、日本よりも開かれていると思った。

議事堂のすぐ近くには有名なブランデンブルグ門があり、想像していたよりも大きな門に圧倒された。ベルリンがナポレオンに征服された時期はパレードが行われた場所だと聞き、同じ場所に自分がいることが信じられなかった。

午後からは、サンスーシ宮殿とツェツィーリエンホーフ宮殿を順番に見学した。私は宮殿と名の付く建物の内部を見学するのは初めてで、最初に見学したサンスーシ宮殿ではロココ様式の内装や調度品に興味を引かれた。宮殿前には広い庭園が広がり、当時の優雅な生活が想像できた。だが、当時の暮らしぶりの説明では、トイレやお風呂もなく、

客人との会話も争いの起こらないよう音楽など当たり障りのない話題に限られるとのことで、もし私が生活するならば退屈だし不便で長続きしないと思った。

ツェツィーリエンホーフ宮殿は、サンスーシ宮殿とはまた趣が違い、森の中にある閑静な住居といった感じであった。もちろん建築物は立派であるが、ここは、第二次世界大戦後、ポツダム会談が開かれた場所であり、戦後の日本についても議題にこそ揚がらなかったようだが、北海道まで占領地とする案もあったようだと説明を受けた。会談次第では、今の日本も全く違ったものになっていたかもしれない。

数々の宮殿や博物館を見学したが、私にとってベルリンで印象に残ったのは、東西ベルリンの時代とナチスの時代の話が多く聞いたことである。市内には関係する記念碑や公園が多々あり、そしてベルリンの壁が設置されていた場所には今も石とプレートが埋め込まれている。また、銃弾の後も建築物には残されており、とても平和で落ち着いた国に見えるが、それは様々な過去を乗り越えたうえにあることを考えさせられる。ドイツの人達にとっては隠したい事実かもしれないが、しっかり受け止めて後世にも伝えていこうとしている姿勢が感じられた。



写真 3-1 議事堂のガラスドーム



写真 3-2 議事堂屋上からの景色
(中央白い屋根の建物はメルケル首相官邸)



写真 3-3 ベルリンの壁の跡



写真 3-4 ベルリンの壁

(この場所は観光地ではないため当時の雰囲気が残っている)



写真 4-1 ミュンヘン市内の様子



写真 4-2 ヴィース教会周辺の様子

4. バイエルン自由州観光

ベルリンからミュンヘンまでは空路1時間ほどで到着した。ミュンヘンはベルリンとは全く違い、中心部は古く美しい町並み続き、少し郊外に行くと田園地帯が広がるとても情緒のある町であった。

ミュンヘン市中心部は観光バスの乗降場所がオペラ座横と決められており、食事や観光のため何度もオペラ座前を通ることができた。最終日には、練習中なのか館内から音楽が聞こえ、得をした気分になった。

4日目は、ヴィース教会とノイシュヴァンシュタイン城を訪れた。旅行前に一番楽しみにしていた日である。

ヴィース教会は、周辺にのどかな放牧地が広がり、とても静かな場所にあった。午前中の早い時間の見学だったせいか、他に観光客も巡礼者もなく、ゆっくりと教会内を見ることができた。外観は素朴な建物であるが、内装はロココ調の荘厳な装飾が施されており、数多くの彫像とフレスコ画で構成されていた。教会では、有料だが蝋燭に火を灯すこともでき、私はキリスト教信者ではないが、蝋燭を立てお祈りしてきた。こういう場所で静かにゆっくりと過ごせば人生観が変わるかもしれない。

ノイシュヴァンシュタイン城はまず、最もお城が綺麗に見られるというマリエン橋からの景色を堪能し、歩いてお城まで散策、城中を見学した。

説明を聞くまでは、普通に王様が暮らした伝統的なお城なのかと思っていたが、実際は、石造りではなく鉄骨のコンクリート製で、城主のルートヴィヒ2世の趣味のためだけに造られたと分かり、随分がっかりした。城が完全に完成する前にルートヴィヒ2世は不審死を遂げ、居住することがほとんどなかったため、歴史的価値がそれほどあるとは思えないが、ドイツ内で人気が高い観光地なのだという。確かに綺麗なお城で、外観も内装も立派なもので、見る価値はある。有名なお城を間近で見ることができ、嬉しく思った。

最終日には、サッカーチームのバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムであるアリアンツ・アリーナを訪れた。私はサッカーのことは詳しくなく、この場所に特に思い入れもなかったが、ゲートの中に入り、説明を聞きながら進んで行くにしたがって興味が沸き始めた。ロッカールームや記者発表ルームなど、テレビで見たことがあったし、選手が入場するように皆で列になってピッチ手前まで歩いたことは本当に良い思い出となった。

ファンではないが、ついショップで買い物をしてしまった。

5. ドイツでの食事

出発前は、ドイツはソーセージとザワークラフトしかないで、料理には期待しないでほしいと聞いていた。

好きなビールが飲めれば、食べるものは何でもいいと思いき、特に期待もしていなかったが、実際に現地の料理はとても美味しかった。

料理が単調にならないよう旅行会社の方で予定を組んでもらったということで、バラエティに富んだ料理であったと思う。ソーセージは昼夜毎食出たが味が違ったし、魚や旬の白アスパラ、豚肉の豪快な料理を食べ、充分満喫することができた。

ただ、量の多さに驚いた。前菜で軽く1食分あるのに、更にスープ、メイン、デザートと続く。美味しいのに食べきれない状態がほぼ毎食で、お店の人に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。語学力がないため、それを伝えることはできなかった。

魚料理は1匹丸ごと出てきたので、ナイフとフォークで食べるのが難しく、この時だけはお箸を使いたかった。

ドイツではビールは、日本のようにメーカーが一括して同じ味のビールを造るのではなく、その土地の地ビールが主である。旅行中は2種類のビールを飲んだが、小麦が原料のヴァイツェンビールが気に入った。

日本のビールに味が近いピルスナーももちろん美味しかったが。食事の時には、1杯が最低500mlのグラスで注文となり、大きさに圧倒された。2日目の夜の食事は地元ビアホールだったのだが、1Lのジョッキが基本で、両手でなければ持てない重さであった。料理の量もあり、さすがに1杯飲むのがやっとだった。

料理ではないが、水については、スーパーなどで炭酸入りではない水を購入するのに苦労した。英語表記もあることはあるのだが理解できず、何種類か購入した結果、開けた瞬間プシュッと音がした時は落胆した。



写真 5-1 豚足料理(大きさに圧倒された)

5. 帰国

最終日は飛行機の出発の時間もあり、慌ただしい観光となったが、それでも当初の予定を全て終えることができた。

帰りの飛行機内では、疲れているはずなのに珍しく眠れず、映画を3本見てしまった。無事に高知に到着した時には、安心したのと同時に少し寂しい気分になった。こんなに長い旅行をしたことがなかったせいかもしれない。

6. おわりに

訪問する場所の予備知識を持たないまま旅行に出発してしまい、その分、感動が薄くなってしまったであろうと思うと、今更であるが少し悔いが残る。

今回の旅行は長時間移動のため体調に少し不安があったが、ほんの一部ではあってもドイツの歴史と文化に触れることができ、思い切って行って本当に良かったと思った。

はじめにも書いたが、ドイツの人達は日本人に似ているとよく聞くが、実際にはもっと大らかで、時間の流れがゆっくりしていると感じた。生活にゆとりがあるように見え、自分とは時間の感覚が違うのだろうと思った。

私はあまり、旅行に行ってもそこに住みたいとは思わないが、ドイツは住んでもいいと思った。

温故知新

～ドイツの歴史を知る旅行～

設計部 防災まちづくり課 係長
堀田 朋男 (2016年入社)

1. はじめに

今年の社員旅行は、5月21日から4泊6日の旅程で、ドイツ連邦共和国を訪問した。ヨーロッパ旅行は、11年前の新婚旅行でフランスへ行って以来、2度目のことである。素晴らしい会社に入社できたことを誇りに思う。

ドイツ連邦共和国は、16の州から成る連邦国家であり、それぞれの州が主権を持っている。今回はそのうち3つの州の主要都市ベルリン市、ブランデンブルク州ポツダム、バイエルン自由州ミュンヘンを訪問した。今回の旅行では、自分の感性を磨くことを目標に、俯瞰的な視点で歴史をみつめたい。

2. ベルリン市観光

ベルリンは人口350万人のドイツ連邦共和国の首都である。冷戦時代にはベルリンの壁によって東西が分断されていた歴史がある。

(1) ドイツ連邦議会議事堂

ヒトラー政権時代に全焼し、東西ドイツが統一したのちに再建された。頂上にはガラス張りのドームが設置され、文化的で、市民に開放された今日のドイツ政治を象徴した建物である。自信をもって開示するには内面を磨かなければならないのは全てに共通する。



ドイツ連邦議会議事堂外観

(2) ブランデンブルク門

ナポレオンがパレードしたことで有名であり、戦勝と凱旋のシンボルである。第2次世界大戦時には戦場ともなっており、門のそこかしこには銃弾の跡を埋めた箇所が見受けられた。一見平和に映る風景も、過去には凄惨な戦場であったことを忘れてはならない(口絵写真31)。

(3) ベルリンの壁

シュプレー川沿いの約 1.3km にベルリンの壁イーストサイド・ギャラリーが残されている。これは、「ベルリンの壁建設」にインスピレーションを得た 24 の国の芸術家 118 人による壁画が描かれた部分であり、観光客の多くは「ホーネッカーとブレジネフの熱いキス」の前で記念写真を撮る。一見残すことが辛い遺物であっても、多くの芸術家により教訓と未来への橋渡しができていいるよい事例だと感じた(口絵写真 36)。

(4) ペルガモン博物館

ペルガモン博物館は、ギリシャ、ローマ、中近東のヘレニズム美術品、イスラム美術品などを展示している。巨大なバビロニアのイシュタル門やミレトゥスの市場門のような建造物をはじめとして希少価値の高い收藏品を見ることができる。屋外にいるような錯覚を受けるペルガモン博物館を見学でき、貴重な経験であった。



ミレトゥスの市場門

3. ポツダム観光

ポツダムはブランデンブルク州の州都で、第二次世界大戦におけるポツダム会談が行われた地である。

(1) サンスーシ宮殿

サンスーシ宮殿は、プロセイン王国時代のフリードリヒ 2 世により建設されたロココ様式の宮殿であり、ユネスコ世界遺産にも登録されている。何より驚かされたのは、JTB のガイドの知識が広く、全ての展示物に精通していたことである(口絵写真 33)。

(2) ツェツィーリエンホーフ宮殿

ツェツィーリエンホーフ宮殿は、サンスーシ宮殿と併せてユネスコ世界遺産に指定されている。館内にはポツダム会談当時の写真や映像が展示され、米、露、英首脳が会談した会議室も残されている。会議の流れによっては、北海道もロシア領になっていたかと思うと、非常に恐ろしい。



ポツダム会談会議場

4. バイエルン自由州観光

バイエルン自由州はドイツ連邦共和国の南部に位置し、州都はミュンヘンである。夏は避暑、冬はスキーと多くの観光客が訪れる。BMW とアウディの本社が所在する。12 世紀以降ドイツ革命が起きるまではヴィッテルスバッハ家が統治していた。

(1) ヴィース教会

ヴィース教会は純粋なロココ様式の貴重な教会で、「鞭打たれるキリスト」の木像が涙を流したことで有名となる。ユネスコ世界遺産に登録されている。建物内に入った際に思わず声をあげてしまうほど見事な内装で、心を打たれた(口絵写真 40)。

(2) ノイシュヴァンシュタイン城

バイエルン王ルードヴィヒ 2 世により建造された城である。多くの部分が未完成で、かつ城主のルードヴィヒ 2 世もわずかに 172 日間しか居住していない。ディズニースタイルのシンデレラ城のモデルとなっていることでも有名である。城内へは限られた人しか立ち入りが許可されず、遺言では彼の死後に城を取り壊すよう指示があったとのことである。お金をかけて豪華な調度品をそろえるよりも、工夫を凝らした、自分らしい生活をしたと感じた(口絵写真 41)。

(3) マリエン広場

マリエン広場は、中世には市場や決闘が行われ、現在では年間何百万もの観光客でにぎわっている広場である。そこには、ゴシック建築の新市庁舎があり、屋上からミュンヘン市内を一望できる。人々が過去の積み重ねを大切にしているのであろう。東京のビル群と違い、歴史の重みを感じる風景に感動した。



見渡す限り素晴らしい眺望

(4) アリアンツ・アリーナ

ドイツといえばブンデスリーガをまず思い浮かべる。過去には奥寺が活躍し、現在は香川真司や長谷部誠など多くの日本人がドイツでプレーしている。数あるチームの中でもバイエルンFCは名門中の名門で、その本拠地、アリアンツ・アリーナを見学することができた。私は浦和レッズのサポーターであるが、それでも非常に興奮するツアーであった。



7万5千人収容のアリアンツ・アリーナ

5. ドイツ土産

ドイツ土産として、スーパーや空港で、日本でもなじみの深いHariboのグミやLindtのチョコレートに加え、観光地で販売している記念マグネットを購入した。Hariboのグミは、日本で売られているより遙かに種類が多く、食感も様々であった。外国の珍しいお菓子に、息子やその友人たちは非常に喜んでくれた。日本以外の文化に幼いころから接することは非常に大切であり、近いうちに息子たちを海外に連れていきたい。



中央がドイツの有名なHariboのグミ

6. ドイツの食事

ドイツでは、主食がジャガイモで、それにソーセージや魚、肉などが添えられている。そして、毎食ビールをかなりの量飲むこととなる。一番印象に残っているのは、ミュンヘンの大衆酒場、ホフブロイハウスである。500人以上は収容できる広いフロアでビールジョッキは1リットル、映画で見るとような風景で食事ができた。日本に比べてアルコール度数が低く抑えられているようで、量を飲んでもそれほど酔わなかった。



ホフブロイハウス(これでもフロア半分！)

7. ドイツの薬局

ドイツの薬局には、薬剤師のいる「薬局(Apotheke : アポテーケ)」と、薬剤師がいなくても販売できる医薬品を扱う「薬店(Drogerie : ドロゲリー)」がある。ドイツには、アスピリンで世界的に有名な企業、1863年創業のバイエル薬品がある。本場でぜひ購入したいと薬局を訪問したものの、薬剤師の背面に商品が並ぶ状況で、ドイツ語で症状や購入理由を求められ(たと思う)たため、敷居が高く購入を断念した。



ミュンヘン市内の薬局

8. あとがき

ドイツ観光で最も印象深いのは、どの地域も過去の歴史を大切にして、現在、未来を積み上げていっている様子が見受けられたことである。果たして日本はどうであろうか。過去をないがしろにしてはいないだろうか。それぞれの地域の歴史を語れるだろうか。今一度自身を振り返り、未来へつないでいくことを考えなければならない。

私は現在、廣井勇を顕彰する会の事務局として、建設業界の発展に寄与するべく活動している。この活動も、過去を知り、未来へ紡いでいく作業である。すべては過去から未来へつながっていく。そのことを気付かされた旅行であった。

ビールの国ドイツへ

設計部 防災まちづくり課
公文 海斗 (2016年入社)

1. はじめに

今年の社員旅行は55周年記念であり、3班体制(1班イタリア2班フランス3班ドイツ)のヨーロッパへの旅となった。

私は小学校低学年からサッカーをしており、サッカー競技、サッカー観戦は大好きである。そんな最高の場所で充実した時間を過ごせると思いながら、高知空港へと向かった。

ドイツ旅行の工程の中でアリアンツ・アリーナ(バイエルン・ミュンヘンのホームスタジアム)(口絵写真44)の見学を一番の楽しみにしていた。

2. ベルリン観光

ベルリン観光では3箇所の観光地について記述する。

1箇所目はブランデンブルク門(口絵写真31)。ベルリンのシンボルとされている門で、高さは26m、幅65.5m、奥行き11mと砂岩でできた古典主義様式の門である。シンボルとされている門を目の前に、豪華さ・迫りに圧倒された。

2箇所目はペルガモン博物館(口絵写真38)。ギリシャ、ローマ、中近東のヘレニズム美術品、イスラム美術品などが展示されてあった。あまり興味が湧かないのが本音であったが、美術や芸術の素晴らしさが少しは感じとれたと思う。1つ挙げるとなると有名なイシュタル門。青く浅浮き彫りされた建物、そしてスケールの大きさに感動した。

3箇所目はベルリン・オリンピック・スタジアム。私が9歳の時に2006年のワールドカップドイツ大会が開催され、テレビ観戦していたことを今でも鮮明に覚えている。

しかし、会場がベルリンスタジアムとは当時は知らなかった。こうして実際に現地に行けたことに興奮した。欲を言えば選手としてこのベルリンスタジアムのピッチに立てれば最高だったと心の中で呟いた。



オリンピックスタジアム

3. ミュンヘン観光

ミュンヘン観光では2箇所の観光地について記述する。

1箇所目はBMW博物館(口絵写真42)。私の家族、知り合いを含めBMWの車を運転している人はあまりいない。博物館に入ると何台もの車、バイクなどが展示されていたが、どれを見てもかっこよく、高級感が滲み出ていた。座席に座ってみて、いつか乗ってみたいとつくづく思った。しかし、値段を見ると簡単に手に入る物ではない。諦めた。

2箇所目はバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムアリアンツ・アリーナ(口絵写真44)。旅行の中で一番楽しみにしていた場所である。サッカーをしている人はみんなが行きたい場所であるのは間違いない。観客席からピッチを見渡しても高知県のピッチとはレベルが違う。

また、ロッカールームの中などを見学して、設備完備の充実さに驚きを隠せなかった。サッカーの試合開始とともに音楽に合わせて選手が入場してくる。私たち社員も同じようにピッチの中までとはいかなかったがギリギリまで音楽付きでの入場体験をさせていただいた。ベルリンスタジアムと同様に観光ではなく、選手としてピッチに立ちたかったとつくづく感じた。

4. ドイツで感じたこと

ドイツ旅行では、バス移動中に工事現場をよく見かけ、そこで日本とドイツの安全管理の違いを目にすることができた。日本では作業員はヘルメットを必ず着用する。しかしドイツの現場では作業員が全くヘルメットを着用していなかった。さらに、交通誘導員が1人もいなかった。安全面は大丈夫かと疑問を抱いた。日本に比べ安全に対する関心が低く、経費を節約のために誘導員も付けていないとのことだ。

また、子供が工事現場に入って怪我をしても親の責任だという考え方が当たり前だそうだ。



ヘルメットを被っていない作業員

5. 日本とドイツの違い

いろいろな場所で日本とドイツの違いを発見した。日本のボックスカルバートや壁には落書きや文字は書かれていない。もちろんそれが普通である。

ドイツではベルリンの壁など様々な場所で落書きを目にした(口絵写真36)。しかし、ドイツ人は落書きではなく芸

術と知っているようだ。考え方の違いに驚いた。

日本と違って不便だと思ったことがいくつかあった。トイレが有料であることや、自動販売機がない、ホテルの部屋にクーラーがない。ホテルの近くのスーパーなど、周りの店は夜の6時くらいには閉まる。日本のように24時間営業のコンビニエンスストアはなく、買い物をしても袋は無料では貰えない。普段当たり前のように使っているものがないことが本当に不便に感じた。

ドイツと日本とに様々な違いがあることを知り、日本がどれだけ生活しやすいか、あらためて認識することができた。

6. その他

ドイツへ行く前は、ドイツの食事はソーセージ、ビールが主になると考えていた。予想どおりのセットが出でてきた他、豚をメインにした料理など、ボリュームのある食事ばかりだった。味は美味しいとまではいかず、普通。

しかし、毎日ビールが飲めてとても幸せだった。ただし、毎日飲んでいたためか、最終日は見るのも嫌になっていた。



予想どおりのソーセージ料理

旅行中に誕生日を迎えた社長、井上さんにサプライズでケーキを用意されており、みんなでお祝いをした。いい思い出になったのではないかなと思う。本当に嬉しそうだった。

7. 終わりに

今回の旅行は、日本とドイツでの違いをたくさん発見することができ、とても勉強になった。

想像以上に楽しく、充実した日々だった。私含め社員みんなのモチベーションが高まったと思う。機会があればもう一度プライベートでヨーロッパへ旅行したい。

また、ドイツだけでなく他の国へも行き、いろんなことを肌で感じてみたい。イタリア班、フランス班の方々の感想をたくさん話を聞いてみたい。

ドイツの土木構造と建築と文化にふれて

設計部 橋梁構造課 課長補佐
兵頭 学 (2009年入社)

1. はじめに

海外研修旅行としてドイツを訪れた。これまでの研修旅行でも何度か海外に行かせて頂くことはあったが、今回は初めてのヨーロッパへの旅であり、今まで以上に期待に胸膨らむ旅であった。

本稿では、いくつかの事柄について、ドイツ国内(ベルリン、ポツダム、ミュンヘン)を旅して気づいたことや感じたことについて記したいと思う。

2. ドイツの構造物

構造物設計を専門としている者としては、一番気になるのはドイツの構造物がどのような造りになっているかということである。

残念ながら、色々と代表的な橋や構造物を巡るということはできなかったが、観光で訪れた場所やバスの車窓から見る事ができた構造物についてその特徴を述べる。

(1) 橋梁

ドイツは、橋梁工学においては先進的な国の一つであり、連続合成桁やトラス構造などはドイツから輸入された技術だそうである。その他にもゲルバー(Gerber)やラーメン(Rahmen)などの構造用語はドイツ語であるなど構造分野では日本にとって身近な国であると言える。

日本の橋梁との大きな違いは何といっても橋脚の柱の細さである。アウトバーンに架かる橋梁の橋脚でさえ驚くほどスレンダーで華奢である。(写真1)

ドイツは地震がほとんどない国で、ガイドさんの話では、ドイツ人は地下空洞の陥没による揺れを感じることはあっても、地震の揺れを知っている人はほとんどいない程だそうである。

橋脚の設計において地震荷重を全く考慮していないということはないものと思われるが、設計荷重が明らかに小さいことが想像できる。

こうした荷重条件の違いは、形だけでなく根本的な設計理念の違いにもつながっているのではないかなと思われる。

(2) 建築

地震の影響が少ないことの特徴は建築物にも現れている。今回訪れた場所のひとつにBMWの博物館があり、この建物がとても特徴的で興味深かった。

構造は、大きな箱の中に張り巡らされた薄い通路に、蟻の巣のように小さな展示部屋が枝分かれしながら連なる構造になっている。邪魔な柱が少なく、通路は空中を浮遊しているような感覚になる。その自由なレイアウトがとても面白い。(写真2)

日本でこのような構造を実現しようと思うと、耐震性を考慮した柱をなくす努力に相当の苦勞を要するものと思われる。

隣接するミュンヘンのオリンピックスタジアムを設計したドイツの構造家フライ・オッターが得意とする膜構造に代表されるように、非常に軽やかな空間の創造は、地震が極めて少ない国ならではのものではないかと感じられた。



写真1 アウトバーンを跨ぐ橋の橋脚

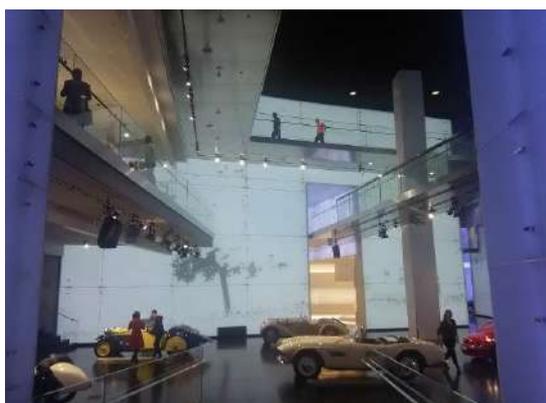


写真2 BMW博物館の内部空間

(3) 維持管理

旅行3日目のポツダムでは、過去に東西ドイツの国境となっていたグリーニッケ(Glienicker)橋を訪れた。この橋は世界大戦時後の1947年に現在の鋼橋に架け替えられた橋で、いくつかの維持管理上の工夫を見ることができた。

鋼3径間連続トラス橋で、トラス斜材の埋込み部は歩道の床版コンクリートに埋込まれている。日本では、斜材がコンクリートに直接埋込まれていたために腐食が進行しても発見できず、致命的な損傷にまで進展して問題になっていた時期があった。

そのため、ここで見られたように直接埋込むのではなく、斜材を通す空間を作るように改められているが、ドイツではすでに建設当初から実践されていたようで当時のままの姿で健全性を保っているようである。(写真3) 設計者のちょっとした配慮で維持管理上の問題の多くは改善することができる一つの証左である。

次に、トラスの各部材は塗り替えが実施されていたが、

全面が同時期に塗り替えられているわけではなく、塗装時期が明らかに異なる場所もあった。また、部分的にタッチアップ塗装を行っている箇所もいくつか見られた。現在、日本においても部分塗装が行われる事例が多くなってきている。本来、鋼橋の塗膜寿命を延ばすためには、局所的に進行してしまう腐食に対して部分塗装を繰り返し行うことが、最も経済的な方法ではないかと思っている。

また、BMW博物館の建物間をつなぐ橋では、伸縮装置の排水について日本とは異なる特徴を見つけるとことができた。PC橋は桁端部の空間が狭く非排水型の伸縮装置を採用するだけで、止水ゴムが劣化するなどして止水機能が失われた後に、二次止水処理をすることが難しい。しかしここでは狭い空間の中でも排水樋を設けて、支承部に極力漏水の影響しないように工夫がなされていた。(写真4)

ドイツに限らず海外には鋼橋やPC橋など、日本よりも先行して建設された構造物が多く存在する。そのため劣化性状や補修技術についても学ぶべき事は多い。すでにドイツから輸入された橋梁点検車なども国内には存在するが、今後も海外の維持管理技術を学んで、利用可能な技術については積極的に取り入れていくことが必要であると思われる。



写真3 トラス斜材埋込み部の様子



写真4 伸縮装置の排水処理

3. ドイツの食事

次に話は大きく変わり、旅行中で特に印象に残ったドイツの食事について書きたいと思う。今回体験したドイツの食事を一言で表すならビールとポテトと肉である。

朝はホテルのバイキングで、昼と夜の食事は常にビール

とポテトと肉がメインの食事だった。塩味が強くビールに合わせた味付けという印象で、味付けは全体的に大味だ。それでも本場ビールとの相性は良かった。

ドイツの人は、瓶ビールや缶ビールを飲むことはほとんどないそうで、基本的には生ビールを飲むそうだ。同じ生ビール派としては、とてもありがたく終始美味しく頂いた。

ただ、味の問題というよりも一食の食事の量が異様に多いのが難点であった。特にディナーでは、そのボリュームの多さにほとんど食べきれないまま残すこともしばしばであった。出されたご飯は残さず食べることを奨められてきた標準的な日本人の感覚としては、精神衛生上よろしくない食事ではあったが、無理なものは無理なので致し方ない。その点を除けば美味しくビールを頂ける毎日で、ドイツ料理を堪能できたのではないかと思う。ただ羽田空港に戻ったら、どうしても蕎麦が食べたくて仕方がなかった。

高知にもドイツ料理を出しているお店があるようなので、本場の味付けと量の違いを確かめに一度行ってみたいと思う。



写真5 ドイツビール(左からピルス、白、黒)



写真6 ある日の夕食(その1)



写真7 ある日の夕食(その2)

4. ドイツの文化

ベルリン、ポツダム、ミュンヘンと訪れてドイツの様々な文化に触れる機会があった。私が一番印象に残っているのはノイシュヴァンシュタイン城である(口絵写真41)。

この城は、ディズニーのシンデレラ城のモデルになったことで知られるが、実は古くから存在するものではなく、19世紀後半に鉄骨やコンクリートで作られた比較的新しい城である。バイエルン王国の第4代国王であるルートヴィヒ2世が建設した。

外観は一見、中世ヨーロッパの城を思わせる雰囲気、確かにおとぎ話に出てきそうな城という印象である。ただ、実際に近づいてみるとコンクリートで石積み風に化粧を施した様子が見てとれて、少しチープさを感じさせる。

この城で特筆すべきはその中身である。残念ながら写真を撮ることは禁止されていたが、その美しさには圧倒されるものがあった。

城の中にはいくつもの部屋があるが、それぞれの部屋は統一された様式で作られているわけではなく、個々にテーマが与えられ、テーマに沿った装飾や家具が配置されている。どの部屋も細部にまでこだわり抜いて作られたのがよくわかるものばかりである。

ルートヴィヒ2世は子供の頃に神話や騎士伝説などの物語をよく読んでいたそうだ。これらの部屋はそうした本の中に出てくる思い出の風景だったのかもしれない。ある部屋の天井の宗教画はミュシャを思わせるような、どこか現代的で、繊細でありながら力強いタッチで描かれており、とても美しかった。

彼は、この城の建設のように享樂的な浪費を繰り返したことで“狂王”の異名を持つことになったそうである。その時代に生きた国民にとっては間違いなく悪王であったであろうが、彼が残したこの城は誰もが子供の頃に持つ夢の結晶として、現在全く違った価値を持つようになっていると思う。

石積みを模して造られた張りぼての城の中には、彼の多大な浪費によって作らせた美しいもので溢れている。彼はこの城に実際に住み、食事を一人ですしていたそうである。彼はその孤独の中にも夢を実現した充実感も感じていたのではないかと思う。

ディズニーがこの城をモデルにしたのは、その外観に憧れただけではなく、彼の夢と孤独に憧れたのかもしれないと思った。

次に印象に残ったのがミュンヘンの新市庁舎の建物である。この市庁舎はゴシック様式の外観が今も保たれている。また、マリエン広場と呼ばれる商店が立ち並ぶ区域に面していて、住民の生活の一部に溶け込んでいる。現役の市庁舎がこのような歴史的な外観を保ったまま使われていることに感銘を受ける(口絵写真43)。

私はヨーロッパの数ある建築様式の中でも、最も好きなのはゴシック様式である。ゴシック様式の持つ荘厳さと、どこか荒廃的な印象がとても魅力的に感じる。今回、実際にゴシック様式の建物を見ることができ、そのインパクト

の強さを感じることができてうれしかった。

今回の研修旅行のフランス組の旅程には入っていなかったが、フランスのボーヴェという小さな町には、「未完のボーヴェ」と呼ばれるゴシック様式の巨大なカテドラルがある。このカテドラルは、あまりにも巨大な計画であったために、設計図どおりに作ることができずに建設途中で崩壊してしまい、未完のままに現在の形となっている。

学生時代にこのカテドラルの写真を見て、深く感動したことを覚えている。ゴシック様式のフライング・バットレスに代表されるような構造的な美しさの限界を追求しようとした挑戦的で野心に満ちた作品である。いつか行ってみたいという思いを持っていたが、今回の旅行でその思いが強くなった。次にヨーロッパを訪れる時には、妻と一緒にプライベートで是非フランスなど他の国も旅してみたいと思う。



写真8 ノイシュヴァンシュタイン城



写真9 ゴシック様式のミュンヘン市庁舎

5. 終わりに

初めてのヨーロッパ旅行はとても充実した日々であった。初めて見ることや経験することも多く、知らない場所で知らない文化に出会うことは、仕事に忙殺されがちな日常に良い刺激となってくれたと思う。

アイデアというもの、その人が日常の中で見聞きしたものへの感動の経験から生まれるものではないかと思っている。どれだけ多くのものに触れ感動してきたかは、その人のかたちを造るものだ。

こうした機会を得られた感動を大切に、今後も仕事に励んで行こうと思う。

文化の違いを肌で感じて

設計部 橋梁構造課
矢野川 稔 (2017年入社)

1. はじめに

平成30年度の社員旅行は会社創立55周年ということもあり、ヨーロッパ旅行が計画された。行き先はイタリア、ドイツ、フランスと三ヶ国ある中、私はドイツを選んだ。ドイツといえばビールという印象が強い。20歳になったこともあり、たくさんの種類のビールを楽しみたいと意気込んでいた。

私にとって、初の海外旅行である。パスポートを取得し準備を進めていた。心配性な性格なため、出発時にはスーツケースいっぱい詰めた荷物片手に龍馬空港へと向かった。

2. 街並み

初の海外に足を踏み入れ、ベルリンの街並みに驚くとともに憧れを抱いた。たくさん走るベンツ、アウディ、BMWを見ていると、外車への好きの私はとても興奮した。中にはトヨタや日産、マツダなど日本の車も数多く走っており、日本の車も負けていないと感じた。

ドイツは地震が少ない国である。そのせいか建物や構造物の部材は日本に比べると細くできていると感じた。部材が細いということは費用や経済性に大きくかかわってくると思う。ドイツで暮らしている人たちは地震を経験したことがないという。地震が少ないと昔の街並みも維持しやすく、世界遺産も数多く残っている理由の一つである。



ミュンヘンの街並み

3. ドイツ料理

ドイツと言えばビール、ソーセージなどが代表的な食べ物として挙げられる。私はビールがとても好きで、食事を楽しみにしていた。日本のビールといえばキンキンに冷やして出されるのが基本である。しかし、ドイツでは常温に近いビールが出てくることに驚いた。調べてみると、本場ヨーロッパでは冷やさないビールを飲む風習の国が多く、天候や気温も関係してくるそうだ。

滞在期間中いくつか種類のビールを楽しんだ。日本のビールに近いといわれるピルスナーはとても飲みやすく

たくさん飲んでしまっていた。そのほかにも、ヘレスや黒ビール、赤ワインなど本場のお酒をたくさん飲んだ。ドイツ料理の印象としては、とにかく量が多いことである。小食な私にとってはおいしさとともに苦しくもあった。ドイツには、日本のように「いただきます」という言葉がない。食材に感謝の意を表すという考え方がなく、日本との文化の違いを感じることができた。

ドイツ料理は量が多いだけでなく、味付けの濃さも特徴的である。全体的に塩味が濃いようにも感じた。ドイツの平均寿命を調べてみると、日本と比べて3年ほど短いことが分かった。食生活の影響が少なからずあるのではないかと思う。



塩味の濃いシュヴァイネハクセ

4. ベルリン観光

ドイツ滞在初日はドイツの首都ベルリンの観光をした。ベルリンといえばベルリンの壁が有名である。東ドイツ、西ドイツに分断されていた。現在でもベルリンの壁の一部が残されていて、1.2 kmの壁一面に絵画が描かれている。その絵画にはユダヤ人迫害へのメッセージなどの思いが込められている。その中で男同士のキスの落書きは旧ソ連と旧東ドイツの同盟関係を皮肉に描いた落書きである。その絵画はとても有名で、たくさんの観光客が足を止め写真を撮っていた。外国では実際に男同士でキスをする風習があるようで、実際この二人も挨拶としてキスを交わしていたそうだ(口絵写真36)。

第二次世界大戦後の冷戦時代にドイツ、ベルリンが分断されていた時代に置かれていた国境検問所を訪れた。西側の人々はチェックポイント・チャーリーと呼んでいたそうで、国境ではないという意識の表れである(口絵写真35)。

5. ミュンヘン観光

滞在2日目ベルリンを離れ、ミュンヘンを訪れた。世界遺産ヴィース教会へ向かった。ミュンヘンはベルリンと比べ、少し肌寒く感じた。国内でこんなに気温の差があるとは思ってもしなかった。ヴィース教会周辺は首都ベルリンと比べると落ち着いた雰囲気である。行きのバスは景色を楽しむことができ、有意義な時間を過ごすことができた。ヴィース教会の外観は至って普通で、周りの風景に溶け込んでいた。しかし、内装は世界遺産だけあって、立ち止まって見とれるほどだった(口絵写真40)。

続いて今回の旅行で一番期待の大きかったノイシュヴァンシュタイン城観光である。シンデレラ城のモデルとなった建物で、一度は目にしたいと思っていた場所である。ノイシュヴァンシュタイン城は内装より、外観を楽しみたいと考えていた。シャトルバスを降りると少し雨雲があったものの、ノイシュヴァンシュタイン城をはっきり見ることができ満足した。事前に調べると、マリエン橋から見るお城は最も美しいと書いていた。記載通り美しいお城を見ることができとても感動した(口絵写真41)。

滞在2日目にして、移動や観光が多い中、城内の売店でのお土産を買うことができた。円とユーロの感覚の違いで高いお土産も後先考えず買い物をした。

昼食をとり、一段落した後にBMW博物館を訪れた(口絵写真42)。

BMWは元々飛行機のエンジンメーカーである。エンジンの模型も数多く展示されていた。時代とともに変わる車のボディや外観に技術の進歩や歴史を感じることができた。スタッフが車について不慣れな日本語で説明してくれた。金額や人気な色、オプション説明など親切な対応にドイツの方に対するイメージが変わった。

BMW博物館を後にし、新市庁舎を訪れた。買い物がしなかったため新市庁舎の上へは登らず買い物をした。マリエン広場でひととき目立つ建物が新市庁舎である。ネオ・ゴシック様式の美しい外観が特徴的である(口絵写真43)。

ドイツ最終日、バイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムであるアリアンツ・アリーナを訪れた。バイエルン・ミュンヘンはクラブチームの中では上位を争うチームである。赤を基調としたユニフォームで、ロップンやミュラー、リバリなど各国を代表する選手が多くいる世界屈指のクラブチームである。ドイツ代表といえば2018年6月時点のFIFAランクは1位で、バイエルン・ミュンヘンはドイツ代表の選手も数多く所属している。サッカーを続けてきた者からするとクラブチーム上位のホームスタジアムに入り、控え室やグラウンドを生で見ることができるのはとても貴重な体験だった。ガイドがとても気さくな方で、聞いていて飽きない観光となった。機会があればこのアリアンツ・アリーナで試合観戦をしてみたいと思った(口絵写真44)。

6. 終わりに

日本では高度経済成長期に次々に新しいものを作ったため、現在維持管理問題に直面している。

6日間のドイツ研修旅行を通して、ドイツでは、歴史ある建造物や街並みを維持したインフラ整備が行われていることを感じた。その背景には昔から維持管理の概念があったことを物語っている。

ドイツと日本の考え方の違いを現地で感じる事ができ、インフラを守る建設コンサルタントとして今後の業務に対する良い刺激となった。

暴食時々観光

設計部 橋梁調査課
片山 直道 (2015年入社)

1. はじめに

55周年には全員でヨーロッパにいくと聞き、入社した年から毎年楽しみに待っていた。ついに待ちに待った平成30年を迎えた。私はソーセージがおいしいという安易な考えだけでドイツを希望し、人生初のヨーロッパへ旅立った。

2. 空路ベルリンへ

「ヨーロッパ旅行」その憧れのワードにわくわくしていたがいきなり壁にぶつかった。羽田を発ち11時間のフライト。事前にイタリア組からしんどかったと聞いてはいたが、ここまでしんどいとは思わなかった。座席は狭く、時差ボケ防止のため寝ることも許されない。憧れのヨーロッパのためには地道な努力が必要であると痛感した。

唯一の救いは機内食が意外とおいしかったことである。とんかつに寿司にパン。今思い返すと、ドイツ1週間の旅で味わって食事をしたのはこれが最初で最後であった。

そんなこんな過ごしているうちに時間は過ぎ、憧れのヨーロッパドイツへと到着した。

3. ベルリン(1日目)

ベルリン初日。我々は国会議事堂へと向かった。国会議事堂入り口では厳重なセキュリティチェックを受け、扉は片方が閉まるまではもう片方は開かないといった厳重警備の中屋上へと向かった(口絵写真30)。

国会議事堂の屋上からはベルリンの街が一望できた。ドイツの首都であるがまだまだ復興途中のように見えた。様々な場所で工事が行われていた。しかし、ガイドさん曰く、ベルリンの壁がなくなって以降工事は進み、現在では東西の違いがなくなりつつあり工事もかなり減ったとのこと。当時のことは高校の授業で聞いた程度しか知らない私には遠い昔話のように聞こえた。

国会議事堂を後にした我々はドイツベルリンのシンボルとされているブランデンブルク門、サンスーシ宮殿、ポツダム会談の舞台で有名なツェツィーリエンホーフ宮殿を訪れた。各々の場所で圧巻の見応えがあった。しかしながら、勉強不足であったためそれぞれの場所での時代背景などを理解して観光することができなかったことが後悔である(口絵写真31、33)。

4. ベルリン(2日目)

二日目の観光は、ベルリンの壁、チェックポイント・チャーリー、ソニーセンター、ペルガモン博物館など目白押しであった。その中でも私が特に印象に残ったベルリンの壁について少し紹介する。

チェックポイント・チャーリーに向かう途中、残ってい

る壁の一部をバスから見る事ができた。その壁はしっかりと鉄筋が入っており、思いのほか高く感じた。話によると総延長155kmもの壁が建造されていたようだ。分裂当初は有刺鉄線による壁のみであったが、1年ほどかけてコンクリートによる壁を完成させた。当時の西ドイツの裕福さを隠すように建設されたこの壁を後にケネディ大統領が、「共産主義の失敗を隠す壁である。この壁こそがアメリカの勝利の証拠である」と演説をしている。

次にチェックポイント・チャーリーに到着した。ここでは当時の面影はほとんどがなく、平和な街並みが広がっていた(口絵写真35)。

その後、取り残された壁の中でおそらく一番有名で「独裁者のキス」といわれる、旧東ドイツ書記長と旧ソ連書記長が描かれた壁へと向かった。イーストサイド・ギャラリーは、ベルリンの壁建造にインスピレーションを受けた24ヶ国118人の芸術家により描かれた部分である。現在では当時の米ソ冷戦の象徴的遺跡として文化財として保存されている(口絵写真36)。

5. ミュンヘン(1日目)

ミュンヘンでの初日私たちはヴィース教会を経由しノイシュヴァンシュタイン城へと向かった。ヴィース教会では修道士が彫り涙を流したとされる「鞭打たれるキリスト」を見学した。ユネスコ世界遺産にも登録されているこの教会は実に美しく、設計者でもあるドミニクス・ツィンマーマンが死ぬまで離れなかった気持ちもわかる気がした。

ノイシュヴァンシュタイン城へ到着した我々は予約の時間が来るまで近くの土産物屋で買い物をした。ドイツに来て観光客用の土産物屋の数の少なさにびっくりしたが、ここには日本人が運営する店があり安心して買い物をすることができた。

まず、お城が一望できる吊り橋(マリエン橋)へと向かった。マリエン橋から見たお城は、それは大変美しく「感激」の一言に尽きる景色であった(口絵写真41)。

その後、お城の中に入り見学をした。お城の中は、画家が指揮を執って作ったためか、外観のイメージ通り芸術的な内装となっていた。

お城を後にし、BMW博物館へ行った(口絵写真42)。ここにはBMWの歴史から最新車を展示するショールームまであり男性陣にはロマンの塊であった。BMWやベンツはドイツを代表するクルマである。私はドイツではBMWは安価に購入できると思っていた。しかし日本とほとんど価格差はなかった。税率が違う分ほんの少し安く購入できるが、それほど安価なものではなかった。

BMWを後に、ドイツ最後の夜を迎えるためミュンヘン新市庁舎へと向かった。市庁舎とは思えない歴史ある建物であり、町の歴史を感じた。

夕食までの小一時間各々が思いのまま過ごすこととなった。私はここでドイツ土産を購入しながらドイツのストリートライブを堪能した。

6. ミュンヘン(2日目)

ドイツ最終日となるこの日、男性陣が一番楽しみにしていたアリアンツ・アリーナの見学へと向かった。

アリアンツ・アリーナは、ドイツにあるバイエルン・ミュンヘンの所有するサッカー場で、2006年W杯ドイツ大会の会場となった所である。このアリーナは、外装に旭硝子製のETFEを使用しており、試合のたびにスタジアム全体が赤色へと変貌する。スタジアムはバイエルン・ミュンヘンが総工費は約500億円で建造・所有している。驚くことに25年かけて返済する予定だった工事費は9年半で完済した。これによりすべての収益を、チームクオリティの向上に使用でき、最高のチームを保持できている。日本との規模の違いやドイツ国民のサッカー熱に驚愕した。

私たちは一生に一度の体験に感動しつつ、当初予定にはなかった買い物時間をとっていただき、家族・友人へ本場ドイツのサッカー土産を購入した(口絵写真44)。

スタジアムを後にした私たちは、ドイツ最後の観光地バツァ宮殿へと向かった。予定外の買い物時間を確保したため、ここでは30分という短時間の見学となったが、ヴェルテルスバツァ王家の歴史を堪能した。

これを持って弾丸4泊6日のドイツ旅行が終了した。

7. ドイツのお食事

ドイツの食事一言でいうと「暴食」、味を堪能するなんて言葉は全く似合わないといつも少ない量の多さであった。ビールを飲む前提のせいだろうか、味付けは全体的に塩辛く、日本人にはビールを差し引いてもからかった。ドイツ滞在中完食は一度もできなかった。



ある日の夕食

8. ドイツの土木

ドイツを旅する中で日本とは違うドイツならではの土木に触れる機会があったので少し紹介したい。

(1) 塗替え

ドイツでは鉄橋の多くに部分塗替えの跡が見られた。日本では全面塗替えが主流であるが、ドイツでは長寿命化を考慮してだろうか、少しでも腐食が見られると局部的に塗替えをしているようであった。そのおかげか見かけた橋に腐食しているものは見られなかった。

(2) 防護柵

ドイツでは街中の道路で歩車道境界に防護柵が見られなかった。逆に高速道路(アウトバーン)には、防護柵がしっかり設置されていた。この防護柵の端部処理が面白かったので紹介したい。日本の防護柵の端部は、端部用部材を用いるか、取り合わせ擁壁にすり合わせている。ところがドイツではほとんどのところで端部を地中に埋めていた。これはドイツならではの光景だろうか。

(3) アウトバーン

ドイツといえば交通工学で世界最先端を突っ走る国として有名である。そんなドイツでは高速道路でレースが行われていたのだ。このレースではベンツが世界最速をかけて自動車を開発し、およそ750km/hを記録したと言われている。高速道路に観客席があるのは、自動車大国ドイツならではの光景である。

(4) 橋梁の排水処理

橋梁の維持管理を行っているとき、端部の水処理がいかに重要かを思い知らされるが多々ある。BMWを見学した時、博物館とショールームをつなぐ橋の端部で面白い処理を見つけた。伸縮装置からの漏水を支承に一切影響させないように側面に排水する装置(壁?)が作られていた。水を排除する目的で製作したのだろう。幅員が広いのでこの装置内に土砂が堆積すると処理ができないのではと疑問を持ったが、幅員の狭い橋ではかなり有効かもしれない。いろいろ課題は見られるがなかなか面白い発想に出会えたと感じた。



ドイツの橋梁排水処理

9. おわりに

出発時ソーセージに胸を弾ませ向かったドイツ。旅行を終え、むしろソーセージの印象がないことに気づいた。ドイツは日本と違い、食・文化・観光地どれをとっても規格外であった。しかしドイツを堪能することで、日本という国の良さ、さらには高知という地域の良さにも気づけた気がする。

思い返せば思い返すほど、訪れた場所それぞれの感想がたくさん出てくる。それらを総括するとこの一言に限る。「またいきたい」。

圧倒されたドイツ旅行

設計部 橋梁調査課
乾 隼輔 (2017年入社)

1. はじめに

私は、平均年齢が一番若い第3班のメンバーとともに、人生初の海外旅行をドイツで経験した。

私たち3班は社員旅行に行く最後の班であった。不安を少なくするため、イタリア、フランスに行った社員に準備物や必要となるものを聞きとり、期待を抱き旅行に参加した。

2. 1日目

ヨーロッパへは高知龍馬空港からの直通便が出ていない。そのため羽田空港を経由し、11時間以上の時間をかけてドイツの首都ベルリンまで移動した。ドイツと日本では時差が7時間あるため、時計だけを見ると4時間ほどで着いたことなる。時差のない日本では体験できない海外旅行ならではの感覚であった。

初日は飛行機に合計3度乗り、疲れが出たためベルリン市内の散策は行わずホテルですぐ横になった。

3. 2日目

(1) 朝食

2日目は朝食バイキングから始まった。楽しみにしていたソーセージがなかったため少し残念ではあったが、日本の味付けと似ていたのでおいしくいただくことができた。

朝食を終えた後は本格的なドイツ観光が始まった。ドイツの国会議事堂や、ブランデンブルク門などの観光名所を回った。

(2) ブランデンブルク門

ブランデンブルク門は幅が65m、高さが26m、奥行きが11mあり、大きさに驚いた。門の上には勝利の女神であるヴィクトリアが乗せられていた。ブランデンブルク門は、かつてベルリンが東西に分断されていた際の象徴で、今回は見ることができなかったが、夜はライトアップされるという。

(3) サンサーシ宮殿

サンサーシ宮殿は290万㎡にも及ぶ広大な庭園がある。宮殿の規模は、全長100m、部屋数12からなる。内部はフリードリヒ式ロココ様式と呼ばれる装飾である。とても豪華で圧倒された。内装以外にもその時代を感じさせる絵画や彫像がいくつも展示されている。

その中で「pan(パン)」と呼ばれる人物の彫像があった。パンが女性を執拗に追いかけていたため、女性が混乱状態になったことが「パニック」という言葉の由来になったようである。パニックという言葉が人の名前を元にできてい

たとは思もしなかった。また、ガイドさんが「世界で初めてのストーカーかもしれない」と言っていたことも印象的であった。



Panの彫像

(4) 夕食

2日目の夕食は「Maximilian's」という店であった。ドイツではプレッツェルというパンが有名で、少し固めで独特の円形をしており、塩がまぶされている。パンにまぶされた塩がドイツビールとともに相性がよかった。シュニッツェルと呼ばれるチキンカツに似た料理もおいしかった。この日(5月22日)は右城社長と営業部の井上さんの誕生日であり、最後にバースデーケーキが出てきた。皆でバースデーソングを歌い、ケーキを食べた。

主役の2人は忘れられない誕生日になったのではないだろうか。



ドイツで誕生日を迎えた右城社長と井上さん

4. 3日目

(1) ベルリンの壁

3日目はチェックポイント・チャーリーと呼ばれる冷戦期に利用されていた国境検問所やベルリンの壁、「ゼウスの大祭壇」などが収蔵されているペルガモン博物館を訪れた(口絵写真35、38)。

この日訪れた観光名所の中で私が一番思い出深かったのはやはりベルリンの壁である。現在でもドイツ各地に残っており、私たちが訪れたのはドイツで特に有名な「イーストサイド・ギャラリー」と呼ばれる約1.3kmの壁が残っている観光地である。私は落書きされたただの壁にも見えたが、高さは約3mあり、実際に近くで見るととても大き

く感じた。冷戦時にはこの壁が総延長で約156kmあったといわれており、ベルリンを2つに分断する壁のすごさを感じた。このギャラリーでは、旧ソ連の書記長と旧東ドイツの書記長がキスをしている絵が最も有名である。東ドイツを支配していた旧ソ連と旧東ドイツの密接な関係を風刺したものである(口絵写真36)。アート作品の中には様々な国がモチーフになっているものもあり富士山や日本語の案内板、日の丸等、日本を表現した絵を見ることができた。

(2) 夕食

3日目の夕食は「Hofbräuhaus」という店であった。楽しみにしていた豚料理はおいしかった。

ドイツでは食事にビールが定番であるが、私はビールが苦手であり、旅行中は少しづらく感じていた。この店でも1Lのビールの試練が訪れた(口絵写真39)。ガイドの方が「ドイツ人にとってビールは水と一緒に」と言っていたが、私には理解できなかった。

5. 4日目

(1) ヴィース教会

4日目は、ユネスコの世界文化遺産に認定されているヴィース教会に向かった。私はキリスト教徒ではないが、内装や天井画などには不思議と魅入ってしまった。ヴィース教会をあとにし、旅のしおりを見た時から気になっていたシンデレラ城のモデルとなったノイシュヴァンシュタイン城に向かった。

(2) ノイシュヴァンシュタイン城

この城はルートヴィヒ2世という国王が住んでいた城だそう。城の完成前に国王が謎の死を遂げたため、工事が中断された。しかし、内装は様々な色合いがあり美しく感じた。他にもルートヴィヒ2世の趣味で室内には人口の洞窟があり、驚かされた(口絵写真41)。

(3) BMW博物館

4日目最後の観光はBMW博物館であった。ここではBMWの車両の歴史を知ることができ、またショールームでは購入もできるようになっていた。購入できる車両の中で最も高い車は1500万円以上する。私にとってはロマンと驚きが溢れた博物館であった(口絵写真42)。

6. 5日目・6日目

(1) FCバイエルン・ミュンヘンのホームアリーナ

ドイツ滞在最終日となる5日目は、まず始めにFCバイエルン・ミュンヘンのホームアリーナに行った。ここでは選手の控室や、フィールドへの入場に使われる通路などを見せていただいた。また、従業員の粋なはからいで社員を2チームに分け、曲に合わせてフィールドの入り口まで入場する体験をさせていただいた。このアリーナには7万人以上が収容可能である。フィールドから7万人もの観客を

眺めると足が竦むだろうと思った(口絵写真44)。私はサッカーについてあまり興味がないが、サッカーファンにはたまらない経験ではないだろうか。

お土産コーナーにはFCバイエルン・ミュンヘンのロゴが入ったパーカーやビールグラスなど様々なグッズがあった。ファンの人はここで奮発して購入していた。私は親戚へのお土産としてビールグラスを購入した。

(2) ヴェルテルスバッハ王家の宮殿レジデント～空港

アリーナの見学を終えた後は、ヴェルテルスバッハ王家の宮殿レジデントに向かった。ここでは飛行場での土産の時間を確保するため質問等の時間はなく、終始小走りで見回ったことが印象的であった(口絵写真45)。

5日目まで購入のタイミングが分からず、買えずじまいであった土産も空港でまとめ買った。

5日目から6日目にかけては飛行機での移動がほとんどであった。座席のスペースが狭いため、体の痛みに耐えながら羽田空港を経由し、高知龍馬空港に帰ってきた。

7. おわりに

今回は創立55周年ということで、会社としても初めてのヨーロッパ旅行であった。この旅行で、あまり話すことがなかった社員との交流を深めることができ、大変充実した6日間であった。また、今回の旅行で発見したことは、建物が全体的に大きいことである。トイレの便器や空港の受付も外国人のサイズであり、私にとっては大きすぎて不便であった。また、夕食のメインディッシュの豚肉料理は漫画でしか見たことがないほどの量で、完食していた人はほとんどいなかった。ただし、料理はおいしく、満足の一語であった。

今回の旅行では様々な観光名所を回ることはでき、歴史や文化について学ぶことができた。またドイツに行く機会があれば街の散策や遊びをメインに観光してみたい。



漫画のような大きさの豚肉料理

Deutschland Reisetagebuch

～人生初のヨーロッパ旅行～

設計部 PPP チーム
又川 嵩哉 (2014 年入社)

1. Einleitung

本旅行は、当社の創立 55 周年を記念した 4 泊 6 日 (H30.5.21～H30.5.26) の社員旅行で、私の人生の中では 2 度目の海外旅行となった。

学生時代に 1 年間ドイツ語の選択科目を専攻していたことと、「ドイツのビールが飲んでみたい!」という単純な理由から、旅行先にドイツ(第 3 班)を選択した。

2. Der erste Tag (Montag, 21. Mai)

現在、私は徳島県に勤務している。本社の同僚や上司への久しぶりの再会と、新入社員との顔合わせを楽しみしながら、徳島空港から一人で出発した。

羽田空港へ到着してすぐに橋梁調査課の片山さんから連絡を貰い、国際線の搭乗口で待ち合わせるようになった。

フランクフルト行きの搭乗手続きと出国審査を済ませて、無事に合流することができた。

羽田空港からフランクフルト空港までの移動中、機内では足を伸ばすことができず、ほとんど寝ることができなかったため、機内での食事時間以外は、映画・音楽鑑賞をしながら過ごした。

14 時 5 分に羽田空港を出発。11 時間 40 分のフライトであったにもかかわらず、到着時刻は 18 時 45 分(日本時間では 1 時 45 分)であった。初日が 31 時間(24h+時差 7h)になることは覚悟していたが、想像以上の疲労感であった。

旅行初日最後のフライトとなった。徳島空港からベルリン空港までのフライトは約 14 時間。1 日の半分以上を機内で過ごした。帰りもほぼ同様なフライトであることを考えると、少し憂鬱な気分になった。

ベルリン空港到着時点で、すでにだいぶ疲れたのか、みんな口数が少なくなったように感じた。ホテル到着後、同室者となる営業課の山本係長、空間情報課の千葉さんと共に一番遠い部屋へ移動。一度ロビーに戻って水を購入し、就寝した。

3. Der zweite Tag (Dienstag, 22. Mai)

(1) ドイツ連邦議会議事堂

8 時 15 分にホテルロビーに集合。午前中はベルリン市内を観光した。特に印象に残っているのは、ドイツ連邦議会議事堂である(口絵写真 30)。

入館には、検問所で手荷物検査やパスポート確認等のセキュリティチェックが必要であり、まるで飛行機搭乗前のチェックを彷彿とさせるほどの入念さであった。

屋上の渦巻ドームは、中央部がガラス張りになっており、

螺旋スロープを登ると本会議場を見下ろすことができた。

この造りには「市民が議会の様子を常に見守っている。あなた方に悪いことはできない」という意味が込められているとのことである。

(2) サンスーシ宮殿

午後からはポツダムを観光した。

サンスーシ宮殿は、18 世紀半ばにプロイセン王フリードリヒ 2 世によって建造された。外から見る規模は小さい。室内装飾はドイツ・ロココ様式の代表例とされている。部屋の装飾の美しさには目を見張るものがあった。



写真 1 サンスーシ宮殿の室内装飾

(3) ツェツィーリエンホーフ宮殿

ツェツィーリエンホーフ宮殿は、ルーマン(米)、チャーチル(英)、スターリン(ソ連)による連合首脳会議(ポツダム会談)が開かれたことで有名である。学生の頃に歴史で習った場所を目の前で見ていると思うと、少し感動した。

夕食時の誕生日サプライズ

夕食時には、サプライズで右城社長と井上さんの誕生日祝いが行われた。用意されたケーキの蝋燭の火柱は豪快で、お店の方も一緒にバースデーソングを歌ってくれた。



写真 2 サプライズの状況

(4) 夜のベルリン

夕食後、数人でホテル近くの「Barman」という Bar に行った。21 時をまわっていたにも関わらず外が明るかったことがとても印象に残っている。暗くなる頃には、ホテルの

中にある Bar に行ってさらにお酒を楽しんだ。結局、この日の就寝は午前1時になった。



写真3 「Barman」での様子

4. Der britte Tag (Mittwoch, 23. Mai)

(1) ベルリンの壁

ベルリンの壁に描かれていた絵が印象に残っている。最も衝撃を受けたのは、旧ソ連のブレジネフ書記長と旧東ドイツのホーネッカーがキスをしている壁画であった。この壁画が最も人気なのか、常に観光客が集中して写真を撮っていた(口絵写真36)。

(2) ペルガモン博物館

ペルガモン博物館では、案内用に日本語のイヤホンガイドが用意されており、展示品の内容が理解しやすかった。

出土した遺跡をそのまま持ち帰って展示してしまうドイツの規模の大きさに驚愕した。



写真4 ペルガモン博物館 展示品

(3) ミュンヘンでの夕食

ミュンヘン空港到着後、バスでそのままレストランまで移動した。レストランは客がとて多く、前のステージでは時折、演奏・ダンス・鞭のミュージカル講演のような催しがあった。



写真5 ステージでの演奏の様子

食事メインディッシュに差し掛かる頃、片山さんとステージ上部に行ってみようという話になり、駄目元でお店の従業員に直談判した。すると、笑顔で了承をいただき、さらには記念写真も撮ることができた。



写真6 ステージ上部での記念撮影

(4) 夜のミュンヘン①

営業課の小松課長と調査測量課の三浦係長に、ホテル近くの Bar へ誘ってもらった。他課の上司と話をすることは少ない。一緒にお酒を飲むことができ、非常に嬉しかった。

5. Der vierte Tag (Donnerstag, 24. Mai)

(1) ヴィース協会

8時半にホテルを出発。2時間をかけてシュタインガデンのヴィース教会へ移動した。

教会のロココ様式の内装はヨーロッパ随一である。非常に美しかった(口絵写真40)。

(2) ノイシュヴァンシュタイン城

バイエルン王ルートヴィヒ2世によって19世紀に建築された城である。カリフォルニア・香港ディズニーランドにある「眠れる森の美女」の城のモデルの1つとしても有名である。

マリエン橋から見る城が一番美しいと言われている(口絵写真41)。そのスポットで実際に撮影した。マリエン橋の上には大勢の観光客がおり、足場の木板がしなる音がして、少し怖かった。

(3) BMW 博物館・BMW ヴェルト

BMW 博物館では、現在に至るまでの開発の歴史についてゆったりと見て回ることができた。特に、バイクのショーウィンドウ展示は大迫力であった。



写真 7 BMW 博物館(バイク展示状況)

BMW ヴェルトでは、建物内に試乗コースを設けられていた。非常に自由度の高い構造になっていた。日本とは違い、広大な土地がなせる業なのだろうと感じた。



写真 8 BMW ヴェルト(室内試乗スペース)

(4) 夜のミュンヘン②

夕食を終えてホテルに帰ってきた後、先日と同じ店に数名で飲みに行った。終始笑いの絶えないお酒の席で、途中から店員の方ともふざけ合う仲になった。最後には一緒に記念写真も撮ってもらった。上司の方々のコミュニケーション能力の高さには本当に驚いた。



写真 9 店の前での記念撮影

6. Der fünfte Tag(Freitag, 25. Mai)

(1) アリアンツ・アリーナ

朝食後、すべての荷物をバスに預け、バイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムである、アリアンツ・アリーナへ移動した。

スタジアムのガイドさんがユニークな方で、スタジアム内を楽しく見学できた(口絵写真 44)。特に、サッカーグラウンドまでの選手入場のルートを歩かせて貰えたことは、サッカーをしていない自分にとって、後にも先にもこれっきりの経験ではないかと思う。

(1) レジデンツ

バイエルン王のヴィッテルスバッハ家が住んでいた宮殿である。アリアンツ・アリーナに時間を使いすぎたため、あまり時間が無く、早足で説明を聞いて回った。

ヴィッテルスバッハ家の歴代当主121人の肖像画が壁一面にずらりと並んだギャラリーは圧巻であった。金色の豪華な装飾が施された立派な肖像画が並ぶ様子は見事であった(口絵写真 45)。

(2) ミュンヘン空港から羽田空港へ

全観光を終え、ミュンヘン空港へ。荷物の預け入れとチケットの発券が終わったあと、ドイツでの最後の食事をすませ、羽田空港へ出発した。

7. Der sechste Tag(Samstag, 26. Mai)

(1) 羽田空港に到着

11時間35分の長いフライトも終わり、日本時刻10時50分に帰国した。流れてくる日本語のアナウンスに、とてつもない安心感を覚えた。

8. Schlussbemerkung

ドイツ旅行では、日本との環境や文化、生活の違いを学ぶことができた。

特にそれを強く感じたのは、4日目のミュンヘンでの夕食前の自由時間の時であった。今の時期は、20~21時であっても外がうっすらと明るく、歩行者天国が大賑わいであった。ひとたび音楽隊が演奏を始めれば、周りの聴講者も皆ハイテンションになり、最後には皆で拍手喝采。その一連の流れをみて私は「日本で同じ事をやっても、絶対にこうならないだろう」と思った。こうした国ごとの環境や文化、生活が、人間性を構成しているのだと実感できた。

また、旅の軽い目的であったビールも、十分過ぎるほど飲むことができた。6日間、大変充実した旅行になった。

ドイツの歴史や文化に触れた 6 日間の旅

設計部 道路交通課
中平 隆文 (2015 年入社)

1. はじめに

ドイツは、道路事業における先進国である。私たちが道路を設計する上で参考としている基準書「道路構造令の解説と運用(H27.6)」にも多くドイツの道路のことが記載されている。せっかく道路事業先進国ドイツへ行けるのだから、有意義と思える観光にしようと思いつつ出発した。

2. 出発当日の朝

旅行出発当日。いつものように 6 時に目が覚めた。半分寝ている状態で体を起き上がらずと、何も詰められていない状態のキャリーバックが見えた。その瞬間旅行の準備を全くしていないことに気づき慌てた。4 泊 6 日の海外旅行だが荷物は多くない。1 時間弱で準備を終えることができた。朝食と支度を済ませ龍馬空港から羽田空港を経由して、ドイツへと向かった。

3. ドイツへ

ドイツまでは、およそ 12 時間のフライトである。普段から体を動かすことが好きな私には、12 時間座ったままはきついと思っていた。しかし機内に備え付けてあるモニターで映画を見たり、機内食を食べているとドイツのフランクフルトへの到着は、あっという間であった。フランクフルトで、入国審査を済ませ、もう一度飛行機で、宿泊先のベルリンへ向かった。

ベルリンについてのは、21 時 30 分を少し過ぎていた。ドイツは、緯度が高いため、この時間帯でもあたりは少し明るかった。徐々に暗くなっていくベルリンの町並みをホテルに向かってバスの中から見ていると 20 分程でホテルへ到着した。

ホテルに荷物を置いてすぐ外出する予定であったが、12 時間の飛行機移動で疲れきっており、風呂に入るとすぐに眠りについてしまった。

4. ドイツ連邦会議事堂

最初に私たちが訪れたのはドイツ連邦議会議事堂であった(口絵写真 30)。この場所は、現在も議会として利用されているため、警備が厳重で、荷物検査と身分の確認(パスポートの提示)をされた。

厳重な検査をクリアし建物の中へ入る。建物の中はガラス張りの造りで、太陽の光が建物内に降り注いでおり、とても明るい。外装のどっしりとした見た目とは対称的で、とても開放的に感じた。

ドイツ連邦議会議事堂の屋上には、ガラス張りのドームがあり、ドイツ有数の観光スポットになっている。私たちが訪れたのは、8 時 30 分と早い時間帯であったがたくさん

の観光客が来ていた。ドームからベルリンの街が一望できた。ビルがどこまでも続く大都市に田舎育ちの私は圧倒された。

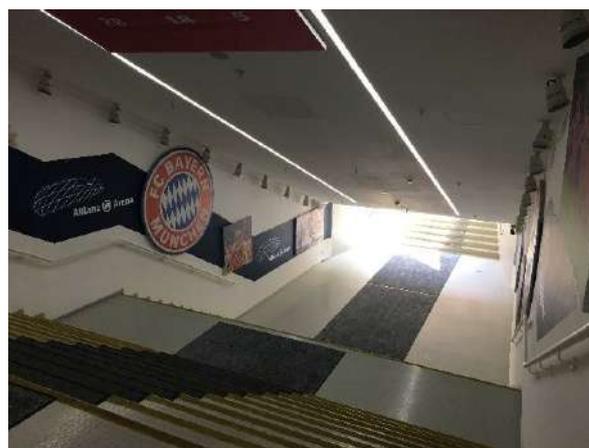
5. ベルリンの壁

ベルリンの街中に、ベルリンの壁が建っていた。壁には、様々なイラストが描かれており、多くの観光客が途絶えることなく写真撮影をしていた。イラストの中で一番有名な、おじさん同士がキスをしている壁の前で記念写真(口絵写真 36)を撮ろうとしたが、人が多すぎてなかなか近づけない。写真を撮るタイミングをずっと待っていたが、次の観光場所への移動の時間となってしまう結局撮れずにベルリンの壁を後にすることになった。バスの窓から改めて壁の方を見てみると、さっきまでいたはずの大勢の観光客がいなくなっていた。今行けば絶好のシャッターチャンスとなるが、無情にもバスは次の観光地へと走っていった。

6. アリアンツ・アリーナ

アリアンツ・アリーナスタジアムは、欧州リーグの強豪チームバイエルン・ミュンヘンのホームグラウンド。世界有数のスタジアムとして多くの人に知られている(口絵写真 44)。試合の日には、スタジアムが様々な色に変わり、幻想的な光景となるそうだ。私たちが訪れた 5 月末は、シーズンオフであり、スタジアムは改装中であった。

改装中であったが内部を見学することができた。しかも普通のサポーターならまず行くことのできないロッカールームや、記者会見会場、さらには選手の入場通路を見学するという貴重な体験ができた。中でも一番すごかったのが、選手が実際に歩いてピッチへ向かう通路を歩けたことだ。本番と同じように二列に並びスタジアムに音楽を流しピッチへ入場して行く。小・中学校とサッカーをしていた私にとっては、夢のような時間であった。



ピッチへとつながる入場通路

7. 早朝ランニング

私は、社員旅行で毎日実行していることがある。早朝のランニングである。高知とは全く違った土地を走ることは、時間を忘れ楽しい。知らない土地を走ると多くの発見ができる。今回の旅行の早朝ランニングでも多くのことに気付

くことができた。

その一つはドイツの歩道についてである。歩道のほとんどは、インターロッキングで舗装されていた。様々な色が着色されおしゃれである。しかしジョギングをする人にとっては、舗装の切れ目が多いため、足がとられ走りにくい。どこを走ってもインターロッキング舗装のため、毎朝これに頭を悩ませた。



ドイツの舗装

次に気づいたことは、ドイツの道路の広さである。実際に計測したわけではないのでどれだけ広いのかはわからないが、日本より少し広い。車道と歩道の間に植樹帯を設けている道路が多い。車道には、自転車専用レーンが設けてあり、歩道を走る自転車はいない。歩行者に気を遣わず心にゆとりをもって走ることができた。



ドイツの道路の様子

8. ドイツの接客

観光の合間や、朝ホテルを出発する前にショッピングをする機会があった。そこで日本の接客の素晴らしさに気づいた。日本は、『素早く』『丁寧』である。しかし、ドイツは日本と正反対であった。これは、私たちが宿泊したホテルの近くにあるスーパーでの話である。

朝食を食べ終えた私は、その日の夜の飲み物などを買いに近くのスーパーを訪れた。ちょっとしたお菓子と炭酸のジュースを持ってレジに並んだ。前に並んでいた人のレジが終わり私の番になった。そこで目を疑う光景を目にした。

私が購入する予定の商品を次から次へと店員が投げているのだ。思わず二度見てしまった。日本なら怒られるぞと思いながらその場を後にした。

ほかにもドイツの接客について思ったことがある。雑な割に1人あたりの接客時間がものすごく長いのだ。1人あたりだいたい5分くらいかけて接客をする。客がいくら並ぼうと急ぐ気配は、まったくない。ドイツでレジに並ぶたびに私はイライラしていた。

9. ドイツビール

ドイツのビールには、約500年の歴史がある。地域によって種類も様々でなんと5000種類のビールがあるそうだ。私たちが飲んだビールは、その中のピルスという種類。ドイツの代表的なビールで、ドイツ国内で最も多く飲まれているビールである。日本のビールと比べ苦みが少なく飲みやすい。私は、ビールがあまり好きではないが、このビールなら飲むのが苦ではない。むしろおいしく飲むことができた。



おいしかったドイツビール

10. おわりに

今回の旅行は、多くの観光地を巡るためにとってもタイトな行程であった。しかし、足早ながらも触れたドイツの歴史や文化は、現在の日本にはない余裕が感じられ、新鮮で貴重な体験をすることができた。

夢だったドイツ旅行

設計部 道路交通課
阿部 一輝 (2015年入社)

1. はじめに

私は従伯父がドイツ人で、幼い頃からドイツの話聞いて育ちました。ドイツを旅行するのが夢で、旅行を心待ちにしていました。

現在従事している道路事業の基準には、ドイツの事例を元に決定された事項が多くあり、これらを知る上で、ドイツの道路や歩道を実際に見ることができる貴重な機会が巡ってきたと思いました。

今回の旅行では夢のドイツを観光するだけでなく、学べる場所はしっかり学ぼうと決め、日本を出発しました。

2. ブランデンブルク門

ドイツ観光で私たちがまず向かったのは首都ベルリンにあるブランデンブルク門でした。

ブランデンブルク門は砂岩でできた古典主義様式の門で、ベルリンが東西に分離し、その後統合されたシンボルとして有名です。近くで見ると、思っていた以上に大きく、柱と柱の間には彫刻が施された壁があり、手の込んだ造りとなっていました。また、造られてからかなりの時間が経過しているにもかかわらず、汚れや破損が少なく、地域の方にとっても大事にされてきたのだなと感じました(口絵写真31)。

3. ツェツィーリエンホーフ宮殿

ポツダムではツェツィーリエンホーフ宮殿を見学しました。ツェツィーリエンホーフ宮殿は、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が妻と息子のために建てた宮殿で、戦後の日本の命運を決めるポツダム会談が行われたことで有名で、一度見たいと思っていた場所でした。

実際に見てみると、華やかな宮殿ではなく、あまり着飾っていない普通の屋敷のようでした。宮殿というのは豪華な装飾で飾られているものだと思っていた私は、想像していた宮殿の姿とのギャップに驚かされました(口絵写真34)。

4. ベルリン市内

ベルリン市内では、ベルリンの壁と古代ギリシャやローマの美術品が展示されているペルガモン博物館を訪れました。

ベルリンの壁は、現在オープンギャラリーとして開放されており、アーティストによる多数のイラストが描かれています(口絵写真7)。

ペルガモン博物館では、バビロニアのイシュタル門と凱旋道を見学しました。部分的に複製品を使用していましたが、破損がひどくない箇所は本物の彩釉レンガを使用して

おり、とても美しかったです。

他にもメソポタミア文明の奥深さを伝えてくれる美術品があり、時間を忘れてしまうほど音声ガイドの説明を聞き入ってしまいました(口絵写真38)。

5. ヴィース教会

私はあまり教会には関心がありませんでしたが、ヴィース教会に入ってその考えが一転しました。天井が高く、一面ロココ装飾で飾られている広い空間にとっても感動しました。また、教会は外部の音が遮断され、内部の音がきれいに響くように工夫されており、教会の中と外で流れる時間が違っているような感覚を受けました。

6. ノイシュヴァンシュタイン城

今回のドイツ旅行で私が一番行きたかった場所がノイシュヴァンシュタイン城です。

私が初めて見た城がディズニーのシンデレラ城であり、ドイツに行くならモデルになったお城に是非行ってみたいと考えていたからです。

春先は最も美しい景色が見られると聞いていたのですが、当日は天候が悪く曇っており、きれいな姿を写真に収めることが出来ませんでした。若干の心残りはありましたが、それでも十分に綺麗な姿を見ることができ、旅行に参加して本当によかったと思いました(口絵写真41)。

次回訪れる機会があるならば、晴天時の姿や、冬場の雪景色や霧のなか淡い光を放つノイシュヴァンシュタイン城を見たいと思います。

7. ミュンヘン市内

ミュンヘン市内では、BMW社の博物館を見学しました。この博物館で一番良かったことは、レーシングサイドカーを間近で見ることができたことです。

レーシングサイドカーとは車両の前後方向の操作をするドライバーと、重心移動により左右方向の操作をするパッセンジャーの二人一組で操作する乗り物です。初めて見たのはアニメであったため、空想上の乗り物だと思っていましたが、レーシングサイドカーが実際に存在したことや、ドライバーが持つハンドルの形状など、映像だけでは分からなかったことを知ることが出来ました。

展示場では実際のレースの状況が放映されていました。ドライバーとパッセンジャーの息の合ったコーナリングは非常にすごく、次は今後開催されるレースを実際に行きたいと思いました。



展示されていたレーシングサイドカー

博物館見学後はマリエン広場と新市庁舎を訪れました。市庁舎のあるマリエン広場は、非常に活気がありまるでお祭りのようでした。この活気は毎日のことで、地元の公園広場との違いに驚かされました。

市庁舎については周辺の建物とは違うネオ・ゴシック様式の建物が一際目立っており、市庁舎というよりは、お城という印象でした(口絵写真43)。

残念なことに今回の旅行では、市庁舎にある仕掛け時計が動いているところを見ることができませんでしたが、いつか見てみたいと思います。

8. アリアンツ・アリーナ

ドイツ旅行最終日はサッカーチームFC バイエルンの本拠地アリアンツ・アリーナを見学しました(口絵写真44)。

会場場所、選手ロッカー、選手入場口に案内してもらったほか、実際にグラウンドへの入場を体験させてもらいました。一面に広がる観客席の多さに圧倒さ、サッカーの知識がない私でも少し勉強してみたいと感じました。選手の入場口に立ち、観客席から声援を一斉に浴びるところを想像すると、とても興奮しました。

9. ドイツの食文化

従伯父より、ドイツ人は料理の質に対するこだわりが少ないかわりに、量が日本食の約2、3倍と非常に多いと聞いていました。

私は普段から食事の量が多いこともあり、量が多くても大丈夫だろうと思っていました。実際に食べてみると味付けが非常に濃く胸やけを感じ、食べることが出来ませんでした。もう少し薄い味付けならいけたと思います。残念です。

10. まちづくりと道路に関する考察

ドイツの街並みを観察すると、高層建築物が少なく、道路沿いの建物の壁面が綺麗に揃っているなど、日本との違いが見受けられました。ドイツでは、都市計画において、既存の街並みに沿わせることに重点を置いた施策が進められており、建築物の高さや、建築物の壁面線が指定されているそうです。規制があるおかげで新旧の建物が隣同士でも調和しており、古くからあるヨーロッパの街並みが保たれているのだと思い街作りの考え方がすごいと感じました。



建築高、壁面線が一致している建築物

日本の幹線道路では車道と歩道の構成が一般的ですが、ドイツの幹線道路では車道、自転車道、歩道がしっかりと分かれているなど、自転車に対する考え方に違いがあると感じました。

ドイツは国レベルで自転車交通量を増やし、交通インフラを向上させる施策を実施しているそうです。実際に幹線道路から外れた自転車道のない道路でも、歩道には自転車と歩行者が通行する場所の舗装が区別されていました。

日本でも路肩部に自転車通行帯をカラー舗装にしている道路はありますが、路肩に停車する車両が多いことや、自転車と車両の衝突事故の危険性から、積極的に自転車通行路は推進していないように思えます。

ドイツでは、どこに行っても車道内や歩道内に自転車通行路が設けられており、日本との違いをすごく感じました。



歩道内に設置された自転車通行帯

11. 日本へ ドイツ旅行を振り返って

子供のころから一度は行ってみたいと思っていたドイツを満喫することができました。ただ一つ心残りなのが、もう少し現地の方と話をしてみたかった点です。少しでもドイツ語会話を勉強していましたが、実際の会話は全く理解出来ませんでした。いつかまた旅行する機会があれば、もう少しドイツ語を勉強し、会話なども楽しみたいと思います。



イーストサイド・ギャラリーの独裁者のキス

期待と不安のドイツ旅行

調査部 空間情報課
千葉 辰政 (2014 年入社)

1. はじめに

海外旅行は人生 2 度目である。幼少期の頃に一度行ったことがあるが、ほとんど思い出せない。社会人になってからは初めてである。ヨーロッパには一生に一度行けるかどうかなので非常に楽しみであった。今回の旅行は、イタリア、フランス、ドイツから選択できたが、本場のサッカースタジアムを見たいと思い、ドイツを旅行先に選んだ。

2. ドイツの首都ベルリン観光

日本から約 11 時間、飛行機を乗り継ぎベルリンに到着した。到着したのが夜中であったため、翌日の観光に備えてすぐに就寝した。

翌日は朝食をとった後、バスの出発まで時間があつたため、ホテル周辺を散策した。ドイツということもあり、町中を走る自動車はベンツ、BMW、アウディなど、日本では高級車と呼ばれるものばかりであった。観光バスまでもがベンツであったことには驚いた。日本の自動車であれば、マツダ、トヨタ、スバルなどが走っていた。マツダ車はドイツでも人気があるようで比較的多く見かけた。

ホテルを出発し、ドイツ連邦議会議事堂へと向かった。天気も良くガラスドームのらせん状の歩道及び屋上テラスからは、ベルリン市内を一望することが出来た。また、下を覗くと議場を見ることが出来る特徴的なデザインに驚いた(口絵写真 30)。



ベルリンの風景

次の目的地へと向かう途中で昼食をとった。ドイツといえば、ビールやソーセージといったイメージが強く食事も楽しみの一つであった。ビールは黒ビールや小麦のビールなど数種類あったが、ピルスという種類のビールは日本で飲んでいるビールと似ており飲みやすかった。料理も美味しかったが、ビールや料理など一つ一つの量の多さには驚いた。

昼食後、世界遺産の一つであるサンサーシ宮殿へと向かった。宮殿の周囲に広がるサンサーシ庭園には左右対称に造られた階段式の丘、噴水、豊かな自然などがあり、時間の流れが緩やかに感じた(口絵写真 33)。外観は、あまり装

飾がなく、宮殿内には壁から天井まで豪華に装飾されていた。非常に簡素な造りに感じたが、宮殿内部は壁から天井まで豪華に飾られており、驚いた。

次にツェツィーリエンホーフ宮殿へと向かった。この宮殿も世界遺産に登録されている。ポツダム会談が開かれた場所として有名である。実際に首脳会談が行われた会議場を見学することができ、貴重な体験となった(口絵写真 34)。

研修旅行 3 日目は、ベルリンの壁の見学に向かった。ベルリン市内にはベルリンの壁があった場所には石が埋め込まれ、どこが壁であったのか分かるようになっている。壁がほとんど撤去されているが、一部記念碑として残されており無料で見学することが出来た。世界中のアーティストが壁に絵を描いており、見学に行った際にも多くの観光客が壁の前で写真撮影を行っていた(口絵写真 36)。

その後、ペルガモン博物館へと向かった。2500 年も前にこのような巨大な建造物を建築し、さらに遺跡を発掘した調査団が美術館の中に再現しようと試みたことに驚いた。様々な物が展示されており、レプリカだけでなく、実際に発掘された物まで展示されていた。古代ギリシャ建築、ローマ建築、西アジアやイスラムなど、様々な遺跡や発掘物を一度に見学することができ、とても有意義な時間であった(口絵写真 38)。

博物館を見学後、空路にてミュンヘンへと移動した。ミュンヘンに到着後、夕食のためレストランへと向かった。食事美味しかったが、レストラン内ではバイエルン地方の装束を着た男性たちが独特の音楽を奏でておりビールと共に多くの観光客が盛り上がっていた。また、1 リットルのビールジョッキをいくつも運ぶ豪快なウエイトレスがいるなど、食事以外にも楽しめた(口絵写真 10)。

3. 大都市ミュンヘン観光

研修旅行 4 日目は、まずヴィース教会へと向かった。外観にはほとんど装飾はなく、牧場の中に建つ非常に質素な教会であるが、ロココ様式の内部の装飾はヨーロッパ随一と言われている。特に天井に描かれている絵は「天から降ってきた宝石」とも讃えられている。教会で行われる演奏を聴くととても胸に響き自然に涙が出てくるとガイドの方が言われていた。そのような演奏を聴くことが出来なかったのは非常に残念であった。

ヴィース教会の次は、シンデレラ城のモデルにもなっているノイシュヴァンシュタイン城へと向かった。人気のある観光地であり、城へと向かうシャトルバス乗り場では大勢の観光客で長蛇の列が出来ていた。バスの回転が早くあまり待たずに城へと向かうことが出来た。城内は豪華であった。細かい装飾がされており、この城を建設した人の技術力に驚くものばかりであった。写真撮影が禁止されていた。記録として残すことが出来ず残念であったがしっかりと目に焼き付けてきた(口絵写真 41)。

ノイシュヴァンシュタイン城を見学後、城の下にあるレストランで昼食をとり、次の目的地である BMW 博物館へと向かった。博物館では、BMW の歴史、歴代の車種から

最新の車種、新型モデルを開発する際の工程などを見ることができた。博物館の隣にあるBMW ヴェルトではBMWをはじめ、BMW グループであるロールスロイス、MINIなどの販売、試乗、グッズ販売などが行われていた(口絵写真42)。



天井に描かれている絵

BMW 博物館を見学後、マリエン広場へと向かい、新市庁舎を見学するグループと自由行動するグループに分かれた。私は自由行動を選んだが、ミュンヘンの町並みやショッピングなどを楽しむことができた(口絵写真43)。

研修旅行最終日は、個人的には一番の楽しみであるアリアンツ・アリーナへと向かった。バイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムである。観客席をはじめ、選手ロッカー、選手インタビューの場所なスタジアムの隅々まで見学することができた。中でも選手入場を疑似体験できたことはまるで自分がバイエルンの一員になったかのような気持ちになり、とても興奮した(口絵写真44)。

スタジアムを見学後、ファンショップでお土産を買い、次の目的地であるヴェルテルスバッハ王家の宮殿レジデントへと向かった。時間の都合上、あまりゆっくりと見学することが出来なかったことは残念であったが、ルネッサンス、ロココ、バロック等の様々な建築様式を見ることができた。中でも祖先画ギャラリーにはヴェルテルスバッハ家の肖像画が約120枚飾られており、回廊の至る所が金で装飾されており、とても見応えがあった。今回は見学出来なかったが、ヴェルテルスバッハ家が集めた宝石や王冠を展示している宝物館も一度見学してみたいものである(口絵写真45)。

レジデントを見学後、空港へと向かい、約11時間かけて日本へと帰国した。

4. おわりに

一生に一度行けるかどうか分からないヨーロッパに行けたことはとても貴重な体験となった。ドイツの町並み、歴史、文化など6日間の中で様々なこと見ることができた。

決して忘れることのできない研修旅行となった。

車好きの聖地ドイツ

調査部 空間情報課
徳橋 蓮 (2013年入社)

1. はじめに

海外は何度か行ったことがあるがヨーロッパに行くのは初めてであったので期待が膨らんだ。

今年の旅行は、イタリア、フランス、ドイツの3ヶ国から行きたい国を選ぶという豪華なものであった。何故私がドイツを選んだかという、旅行プランの中にBMW博物館へ行く事になっていたからだ。ドイツといえばBMW・メルセデス・ベンツなどが有名だ。私は車が好きなのでたくさん車が見られると思い、ドイツを選んだ。

2. ベルリン観光

羽田空港の飛行機で12時間後、ベルリン空港に到着した。到着すると既に夜になっており、直ぐにホテルベルリン・ベルリンへと移動した。

ホテルに着くとホテル内にあるカウンターバーでお酒を呑むことになった。長距離移動の疲れと、お酒の力で部屋へ戻るとすぐに寝てしまった。

朝食後、ドイツ連邦議会議事堂へと向かった。議事堂の前には綺麗な芝生が広がっていて、日本の国会議事堂に比べて開放感を感じた。国会議事堂の屋上にはガラスドーム型の展望台があり、その中を見学することができた(口絵写真30)。展望台の直下には国会議場が位置し、議員が座る青い座席を見ることができた。日本は赤色だがドイツでは青色であった。

屋上からは、首相官邸、ソニーセンター、コンサートホールで有名なフィルハーモニーを眺めることができた。



ホテル・ベルリン・ベルリン

次に、ブランデンブルク門(口絵写真31)へ向かった。ベルリンはかつて城郭都市だったそうでこのような門が昔に建設され今でも残されているとのこと。門の前には道路が走っていて強く門の存在感を感じた。門の上にある、女神の像はなんと一度ナポレオンに戦利品として奪われている。その後ナポレオン戦争で勝ったプロイセンが奪い返

している。

門本体には第二次世界大戦時の銃弾を痕がたくさんあり、そのほとんどが修復されていた。

その後、昼食をとり移動している際にスポーツカーを見かけた。アメリカのシボレー コルベット スティングレイという車だ。460馬力もあり、3.8秒で約100kmに加速できる。綺麗な赤色でみとれてしまった。

期待していた通り、ドイツには当たり前のように高級車や希少な旧車が走っている。移動中もついそういった車を探してしまっていた。



コルベット スティングレイ

次に、サンスーシ宮殿へと向かった。ここでは豪華なロココ様式にまとめられたスタイルで建築され、宮殿内は金色の装飾や絵画などで飾られていた。大勢で移動していたので宮殿内の装飾などに触れない様に変な気をつかった。



サンスーシ宮殿内

豪華な外観や装飾に包まれて生活することは幸せなことだと思うが、日々暮らしの中で落ち着ける場所が無いと思った。当時の人たちにも自分と同じ考えの人はいたのだろうか。宮殿内にある庭園は綺麗で、どこからどこまでが庭園かわからない程の広さに驚いた。庭園には噴水や彫刻が配置されていて、無数に道が枝分かれしていた。ゆっくり散歩するには非常に良い場所だと思った。隅々まで歩いてみたいと思ったが、日程の都合上あまり庭園を歩けなかった事が残念である。

ベルリン観光最後の夜は、レストランで夕飯という日程であった。ドイツでは料理をコース形式で食べるため、1

品ずつ食べなければならない。初めに「プレッツェル」というドイツの焼き菓子が出てきた。周りには岩塩がまぶされていて美味しかった。ただ食感がとても硬く、生地が詰まっているのではやくもお腹がいっぱいになりそうであった。2品目は野菜スープが出てきた。優しい味で、つい日本の味噌汁を思い出してしまった。3品目、ようやくメインディッシュが出てきた。仔牛のステーキであったが、脂身が少なく淡泊な味わいであった。仔牛の肉なんて食べたのは人生で初めてで、良い経験ができた。最後にデザートであるエクレアのようなものが出てきた。女性陣がとても喜び、すぐ完食していたのでこれが別腹ということなのかと思った。

この日は、右城社長と帰国後にすぐ誕生日を迎える井上君の誕生日だと言うことで、バースデーケーキを用意してもらい盛大に祝った。



右城社長と井上君の誕生日

小松課長がバースデーコールの音頭をとる準備をしていたが、添乗員の足立さんが音頭をとり始めたため、残念がっていた。バースデーケーキは、イチゴとブルーベリーのタルトケーキでとても美味しかった。

3. ミュンヘン観光

次の日はベルリンの壁にアートが描かれているイーストサイド・ギャラリーへと向かった。

ベルリンの壁には所々穴が開いていて、中の配筋がむき出しになっていた。壁自体の高さは思っていたほど高くなく、数名で協力すれば乗り越えられそうな壁だと感じた。帰って調べてみると当時は2重に壁が建てられていて中には犬や地雷などで厳重に警備していたそうだ。ベルリンの壁は壁内の人を閉じ込めるのではなく壁外(東ドイツ)から壁内(西ベルリン)への進入を防ぐためのものであったようで、自分は先入観から壁内の人を閉じ込める壁だと思っていた。

イーストサイド・ギャラリーでは、118人のアーティストが平和をテーマに壁に描いた絵を見ることができた。観光客だらけでアート作品の前で写真を撮るのに苦労している人がたくさんいた。中には日本の富士山が描かれたものがあり嬉しく思ったが、色々な言語で落書きがされていた。どこに行ってもモラルの無い観光客がいるのだと実感した。

次に、博物館の中に遺跡があるというペルガモン博物館へと向かった。

博物館の中には巨大な遺跡などがたくさん展示されていた。

中でも目を引いたのがシリアの遺跡から発掘されたライオンの壁画であった。様々な色の石があり、一つ一つライオンの見た目が違っていた。

遺跡を見て回る内に、外国から発掘されたものばかりが展示されていることが分かった。外国から遺跡類を発掘しドイツで展示しているようで、発掘場所の国からは返還の要求がきているとガイドさんから聞いた。他国から発掘したものを勝手に展示するのは勝手すぎるのではないかと思った。



ライオンの壁画

ドイツ2日目の夜はベルリンからミュンヘンへと約1時間ほど飛行機で移動し、ホフプロイハウスという大きなビアホールで夕飯であった。そこへ行く道中、マキシミリアン通りというエルメスやアルマーニなどの高級ブランド店が立ち並ぶブティック街を通った。そこには高級車や、珍しい旧車が道淵にたくさん停まっていた。その中でイギリスのトライアンフ・スピットファイヤという車を見つけた。今から45年くらい前に造られた車だが新車並に綺麗な状態であった。多分、塗装の仕直しや部品交換をしているのだろう。自分も古いバイクに乗っているので、少し親近感が沸いた。後ろに停まっている紺色の車は、高級車ポルシェのSUVである。



トライアンフ・スピットファイヤ

ビアホール内はかなり広い空間で、ホール奥には生演奏をしている楽器団までいた。入った瞬間から賑やかな印象であった。

初めにビールが巨大なジョッキで10出てきたのには驚いた(口絵写真39)。店が繁盛しているせいか、コース料理の間隔が長く感じてしまい、早々にお腹がいっぱいになったが料理の味は美味しかった。最後にでてきた大きな豚の丸焼きを食べきれなかった事が残念であった。

次の日は、ホテルから100km以上離れた場所にある世界遺産ヴィース教会へと向かった。標高1000mほどに位置しているので現地に着くと少し肌寒く感じた。教会内に入ると美しい内装の装飾が多く、初日に行ったサンサーシ宮殿とは違い、どことなく落ち着いた印象を受けた。教会の外には牛の牧場が広がっていて少し周辺を歩いていると、角が生えたままの牛がいたので珍しく感じた。



角がある牛

次にシンデレラ城のモデルとなったノイシュヴァンシュタイン城へと向かった。城へと向かうシャトルバス乗り場まで観光バスで移動したが、シャトルバス乗り場には大勢の観光客がいて、長蛇の列ができていた。行き来しているシャトルバス内は人でいっぱいであった。

城内の見学は写真撮影が禁止されていて残念であった。城内は以外と質素というか今まで見た宮殿などの装飾ほど豪華では無かった。ただ小高い山の上に建てられているので城内から見る景色は自然が多く癒やされる風景であった。

城の下にあるレストランで昼食をとった後、BMW博物館へと向かった。博物館では、BMW歴代の車や、航空機のエンジン、バイクなどがたくさん展示されていた。個人的にBMW 320iというアート車に魅力を感じた。今の時代の車には無い角張った無骨なデザインが格好良かった。

博物館内は見所が多かったが滞在時間が約1時間しか無かった。博物館に隣接されているBMWヴェルトショールームにも行きたかったので足早に観なければならず、できれば一つ一つゆっくり見たかった。いくつか見逃したものもあり、少し後悔している

ショールームでは、BMWグループのロールスロイスやMINIの最新車種が展示されていた。他にもBMWのバイクが展示されていて、いくつか跨がり、記念写真を撮った。



BMW320i 1977(アートカー)

BMW を見学後、マリエン広場へ向かった。そこから新市庁舎見学と自由行動グループに別れることになったが、友人からお土産を頼まれていたので自由行動を選び買い物をした。

ドイツ滞在最終日は強豪サッカーチームバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムである、アリアンツ・アリーナへと向かった。選手のロッカールームや、スタジアム入場の際行進する通路などテレビでしかみたことのない場所を見学することができた(口絵写真44)。

見学後、ヴェルテルスバッハ王家の宮殿レジデンツへと向かった。ルネサンス、ロココ、バロック、新古典主義の各様式が混在した建物。400年以上かけて建築されていて、緻密な彫刻や装飾に迫力を感じた。

宮殿レジデンツを後にし、日本へと約11時間かけて帰国した。旅の疲れからか機内ではほとんど寝てしまっていた。



宮殿レジデンツの緻密な装飾

4. おわりに

今回人生で初めてのヨーロッパ旅行であったが、また訪れたいという気持ちよりも住んでみたいという気持ちを感じた。日本では見ることのできない希少な車や高級車がたくさん走っているこのドイツに住めば、毎日そういった車たちを眺めることができるからである。歴史を感じさせる建物や美しい景色を背中に、いつか自分の車でドライブできることを夢に生きていきたいと思う。

ドイツの圧倒的な世界観

調査部 調査課 係長
三浦 貢一 (1994年入社)

1. はじめに

生涯行く機会はないと考えていたドイツへ期待と不安を胸に、旅路にでた。行く前は雨の予報となっていたが、天候にも恵まれ、良い研修となった。世界遺産に指定されている宮殿、城など中世ヨーロッパを感じられる場所や有名な観光スポットの見学。私の中でどうしても行きたい場所にも行くことができた。特に印象に残ったことについて以下に報告する。

2. 日本とドイツ

所要約12時間の遠く長いドイツの地。日本との時差は-7時間。気温は9月ぐらいの涼しさであった。日中は半袖で十分過ごせたが、朝夕は薄い長袖が必要であった。太陽のあたる時間が長く21時の時間帯でも、日本の17時ぐらいの明るさであった。

飛行機から見た風景は日本の北海道に近い感じがした。都市部でもそうなのだが、高さ約20m以上の植樹が多くみられ、上空からでは道路がみえないくらい植えられていた。また、道路と歩道の境目がわかりにくい所や10秒ほどで変わる歩行者の赤信号。危険度が高い。特に残念だったのがタバコの吸い殻がいたる所に捨ててあったことだ。まるで20年くらい前の日本を見ている様だった。

3. ベルリンでの2日間

はじめに訪れた場所は、開かれた議会の象徴となっているドイツ連邦議会議事堂。見学者には常時会議を上から覗き見ることができる巨大な渦巻き状のガラスドーム。太陽の動きにあわせて常時角度を変え、真ん中に広がるガラス下の議場に直射日光が入らないような設計になっている。よくこのような考えが思いついたものだ。ガラスドームも周囲の景色に同調しており違和感はなかった。



中心部のガラス下が議場

バス移動を兼ねた観光後に向かったさきは、2つの宮殿である。

サンサーシ宮殿は近代ドイツの歴史を彩った建造物の代表作であり、庭園を合わせると東京ドーム約60個分の敷地。宮殿は平屋建てで装飾面が比較的少なく、明るい黄色を主体としていた。室内は簡素な外観と違い壁から天井まで豪華に装飾されていた(口絵写真33)。

ツェツィーリエンホーフ宮殿では第二次世界大戦終結のため1945年にポツダム会談が行われた歴史的重要な場所である。なかでも特に会議場は上座下座を設けないよう円卓にしており、その場にいるだけで重厚な雰囲気を感じられた(口絵写真34)。

移動中にも見られた現在でも残っている世界的に有名なベルリンの壁。第二次世界大戦の敗戦後に東ドイツにより建設された東西を分断した壁である。崩壊から28年経つが当時の壁跡が残っていた。なかには道路面まで埋め立てられた場所もあり貴重な歴史に触れた瞬間だった。



ベルリンの壁での1枚

ベルリン最後の観光先はペルガモン博物館である。博物館の島と呼ばれ、島全体を世界遺産に指定しており、数ある中で人気の博物館にきた。古代ギリシャ、古代バビロニアなどの巨大な遺跡や美しい宝飾品などを展示しており見るもの全てに感動した場所であった(口絵写真38)。

4. ミュンヘンでの2日間

初日はベルリンより少し寒く高地にあるヴィース教会に訪れた。ドイツ語で「草原の教会」と言う意味である。教会の周囲は草原一色で、牛やニワトリなどが放し飼いにされていた。教会内部はロココ調で装飾されていて、白と金を基調とした空間は繊細かつ優雅であった。ロココ調とは、岩や貝などで曲線状にかたどった華やかなインテリア装飾のこと(口絵写真40)。

次に社員皆が楽しみにしていたノイシュヴァンシュタイン城に到着。ディズニーランドのシンデレラ城のモデルとして山頂にある緑に囲まれたメルヘンチックな佇まいの白亜の城である。19世紀に築城され鉄骨コンクリート造だと言う。バイエルン王となった城主ルートヴィヒ2世にはこだわりがあり、騎士物語の憧れが強く、財政難にも関

わらず城、宮殿を造りまくっていたらしい。居間と執務室の間には人工鍾乳洞まで造らせていた。何でもありだ。絶好の撮影スポットに案内された場所は、高さ約90m、幅約1.5mのマリエン橋。ここではたくさんの観光客が撮影していた。内心、この橋大丈夫なのかと不安のなか、絶景を眺望した(口絵写真41)。

昼食後にBMW博物館、ミュンヘン本社に向かった。博物館の建物は円柱4本により立っており、エンジンの4気筒をイメージして建設されている。館内に入ると大きな吹き抜けになっており、昔ながらの車が歴史とともに展示されていた。プロダクションカー、コンセプトカー、レーシングカー、オートバイのほかに、航空機のエンジンも多数並んでいた。さすがに簡単に購入できる代物でもない。ただ眺めているだけの時間だったが、いつかは乗ってみたいと夢を感じられる場所でもあった。



4気筒をイメージしたBMW本社

今回の旅行先をドイツに決めた理由のひとつであるサッカーの聖地アリアンツ・アリーナでの見学。

名門バイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムである。ホームカラーを赤と基調しているため、試合当日は赤くライトアップする構造のスタジアム。外壁は特殊素材が使用され日本の企業が貢献している。

2006年ワールドカップドイツ大会の開幕戦を行った場所である。観客収容人数は約76,000人。ドイツのリーグでは今シーズンも優勝している世界最高峰のビッグクラブチームだ。胸の高鳴りをおさえながら、スタジアム内へ入った。観客席からの眺めは、グラウンドが小さく見えるほどの大きな施設だった。サッカー専用グラウンドのため、観客とプレーする選手間の距離が近く、試合を見ている人の興奮が伝わってきた。

記者会見場、ロッカールーム、選手入場通路なども見学でき、世界の有名選手の仲間入りができた。1時間程度であったが、有意義な時間を過ごせたことは人生の大きな思い出となった。心残りなのはリーグが一週間前にシーズンオフとなり試合観戦できなかったことだ。いつか叶えたいものだ。



インタビュー中

5. 食事

ドイツでは、どの料理も予想以上の大きさ、量で出てくる。そして必ず推してくる名産ジャガイモが添えられている。前菜、主菜、デザートとの配膳なのだが、主菜までに満腹になる量だった。特に3日目の夕食では1リットルのジョッキビールが運ばれてきて社員一同驚いた。



巨大な1リットルビール

ビアガーデンみたいな所での食事だったので従業員の手間を省いたのか？またはビール好きの国ならではの光景なのか？たぶん後者だろう。水よりビールが安いのがわかる。ほとんど肉系の料理であったためミュンヘンではホテル近場のイタリア料理店でピザを味わった。

羽田空港には土曜日の昼に到着した。日本食が恋しかったのか、多くの社員がそば屋で昼食を摂っていた。帰宅後は肉料理から離れての食事をしようと思った。しかし、帰ってみると焼き鳥パーティーの準備がされていた。家族は楽しんでしたが、私は少し微妙な感じでの食事となった。

6. おわりに

人生でヨーロッパに赴く機会があるとは想像もしていなかった。過去に社員研修で海外に何度も行ったがドイツは別格の世界観だった。基本的にスケールが大きく、かつ、繊細で中世から伝わる伝統文化を守る思想に感化された。

この経験は人生の中で最も貴重な存在となる。行って、見て、聞いて、感じてみないと分からないと言うのは本当のことだと再認識した。家族との海外旅行は経験ないが、今後一緒に行きたいと考えてしまうほど楽しかった。

ドイツの建築を巡る

設計部 橋梁構造課
児玉 翔 (2018年入社)

1. はじめに

私にとって、今回の研修旅行は、中国、スペイン、台湾に続き、4回目となる海外旅行である。

ドイツでは、古くから残る宮殿や教会、ヘルツォークのアリアンツ・アリーナやヘルムート・ヤーンのSONYセンター、ノーマンフォスターの国会議事堂の見学でヨーロッパにおける近代建築に触れることができるようだ。文化や風土の違い、地震の有無などで建築や土木、景観などさまざまな分野でのヨーロッパと日本での違いが楽しみだ。

私は、今回の研修旅行では、社員の方々との懇親を深めるとともに、構造物へ視線を向け、構造的な考察も踏まえながら旅行を楽しみたいと考え、初めての研修旅行の準備を進めた。

2. ドイツ連邦議会議事堂

ドイツ観光初日は、ベルリンのドイツ連邦議会議事堂を訪れた。パウル・ヴァルトが設計を行い(1894年竣工)、第二次世界大戦時に爆破され廃墟となっていたが、ベルリンの壁崩壊後、ノーマンフォスター設計の元(1999年竣工、延床面積61,166㎡)、外観を維持しつつ再建されている。

この建築で特徴的なのは、ガラスのドームで、頂部へと続く二重螺旋構造のスロープは、展望台としての機能だけではなく、ドームの補強の役割も担っているようだ。

ガラスのオブジェは、下階の議事堂内部へと光を落としているらしく、実際にどれくらい明るさが違うのかを確かめたかった。

ドームを上っていくと眺めがよく、気持ちの良い空間だった。スロープを上っていく途中には構造材が手の届く範囲にあり、いたずらされないのか不安になる。



スロープから手の届く範囲にある吊り材

3. SONYセンター

SONYセンターは、ポツダム広場にある住宅を含む複合商業施設となっている。

この目玉は、大きな屋根のついたフォーラムだろう。約4000㎡の広さを持つフォーラムはテントのような構造で、議事堂の展望台から見ると富士山を連想させる形になっている。

オフィスビルの中には映画館や、博物館、カフェなどが入っており、通常のオフィスビルのように、仕事が休みの時に寂れた印象を与えないよう、オフィス以外の施設が入っているらしい。テーマパークのようで実際に日中人が来た場合、オフィスビルからどう見えるのか、音などの対策はどうしているのかが気になった。

このビルの横には、レンゾ・ピアノが設計を行ったダイムラーシティもあったが、見に行くことができず、残念であった。



中庭から見上げた様子

るを得ない建築であった。ルートヴィヒ2世のロマンティック趣味のためだけに建設されたもので、このような内部になっているようだ。

ペラート峡谷にかかるマリエン橋が視点場として利用されており、ここから見る城が最も美しいとされている。

また、周辺の散策路では、手すりや電柱が木で作られており、現地の方々の景観への配慮にも驚かされる。



木で作られた手すり



木で作られた電柱

4. ヴィース教会

世界文化遺産にも登録されているヴィース巡礼教会は、内装のロココ装飾によって有名である。ロココとは、美術史でバロックに続く時代の美術様式で、貝殻の曲線を多用する繊細なインテリア装飾を指すそうである。

この建築の内装は質素な外観からは想像もできないようなもので、非常に美しい内部空間だった。

5. ノイシュヴァンシュタイン城

ディズニーランドのシンデレラ城のモデルにされたと言われるノイシュヴァンシュタイン城は、周辺を自然に囲まれ、その中に浮かぶ白色の城が非常に美しく感じた。

いざ、中に入ってみると、これでもかというほどのバロックやゴシック、ルネサンスなど様々な装飾、さらには人工の洞窟など、建築を全く知らない人でも、興味を持たざ

6. BMW 博物館、BMW ヴェルト

BMW 博物館、BMW ヴェルトは、ミュンヘンのオリンピアパークに隣接する自動車博物館、ショールームとなっている。

BMW 博物館は、大きな吹き抜けの中に通路が設けられ、スロープに沿うように展示スペースのボックスが配置されているような空間であった。2階のエントランスから入り、スロープを下っていきながら展示スペースを見ていくという流れで、非常に単純でわかりやすい動線計画となっていた。そのおかげで無駄なサイン等は無く、展示の内容に集中できるようになっているように感じた。

博物館を見た後は、その後建てられたBMW ヴェルトへと向かった。

設計はコープ・ヒンメルブラウで、まるで宇宙船のような近未来的な建築物だった。

博物館からは、大きくうねった橋を渡り、ガラスが多用されたエレベーター室を横目に建物のエントランスへ向かうような形となっている。

また、この周辺には、ギュンター・ペーニッシュとフライ・オットーの設計であるミュンヘン・オリンピックシュディオンが隣接していた。時間の許す限り近くまで近づいてみたが、傍まで行き、ゆっくりと見るができなかったため、次の機会に訪れてみたい。



ミュンヘン・オリンピックシュディオンの一部

7. アリアンツ・アリーナ

このスタジアムは、ミュンヘンのサッカー専用スタジアムでヘルツォークとド・ムーロンの設計である。外観は白いフィルムが貼られており、青空によく映える外観だった。このフィルムは、フッ素樹脂フィルムで、光線透過性に優れるため、天然芝でも育成ができるそうだ。

また、試合の日には中に埋め込まれたLEDでスタジアム全体が赤に照らされ非常に美しいのだろう。夜どのように照らされるのか実際に見てみたいものである。

スタッフの案内で、選手の控え室から、ピッチへ向かう通路なども通ることができ、貴重な経験ができた。サッカーがお好きな方にはたまらない経験になったのではないだろうか。

8. おわりに

私は初めての研修旅行ということもあり、事前準備段階から、期待とともに、様々な不安もあった。しかし、いざドイツに着き、普段見られない景色や建築を前にすると、社員の方々との会話も進み、純粋にドイツ旅行を楽しんでいた。事前準備を行っていたものの、タイトなスケジュールの中では、十分には情報を得ることができなかったように感じた。それは、まだまだ準備不足であったことと、自分の知識や経験が足りていなかったということだと考える。加えて、もっと歴史的知識があればこの旅行をさらに楽しめたのではないかと感じた。

この研修旅行では、社員の方との懇親を深めるとともに、様々な構造物を見、文化に触れることができ、非常に多くのことを学ぶことができた。

ドイツには、今回の旅行では見ることができなかったシュライヒやレオンハルトなどの橋梁が多くある。ヨーロッパに行くのはなかなか大変だが、是非とも次の機会を設け、見学に赴きたい。

ドイツ文化と日本と異なる建築物

設計部 橋梁調査課
山中 公貴 (2018年入社)

1. はじめに

私は、過去に数回飛行機に乗った事があるが、海外旅行は初めてである。初の海外旅行がドイツである。日本との時差は7時間。ドイツに到着したのは、羽田空港を出発して11時間後だった。今回の社員旅行は、ベルリンとミュンヘンを拠点として観光地を巡った。

2. 1日目

ドイツのベルリンは、午後7時を回っていた。昼間のように空が明るく、日本との違いに驚かされた。

ホテルに到着した時刻は午後9時を過ぎていた。チップを払うためにお金の両替をしたかったのでホテルから歩いて10分くらいにあるコンビニに向かった。コンビニは電気が灯っておらず閉店時間を過ぎていた。ホテルに戻って明日の予定の確認や準備をした。すぐに時間が過ぎ、ドイツ旅行初日は夜のベルリンを少し散歩して終了した。

3. 2日目

2日目はドイツ連邦議会議事堂、ブランデンブルク門、サンサーシ宮殿、ツェツィーリエンホーフ宮殿を観光した。

ドイツ連邦議会議事堂は周囲を柵で囲われていた。入場するには空港で行うような厳重な手荷物のチェックが必要だった。屋上まで登り、ベルリンの町を見渡ししながらガイドの説明を受けた。屋上の中央部分は、鏡で作られた大きな柱があり、オブジェの役割を担っていた(口絵写真30)。床がガラスになっている箇所を覗くと、実際に会議をしている人を確認できた。屋上にしか入ることが出来なかったため、議事堂に入場した実感がわかなかった。ドイツ連邦議会議事堂の入り口で写真撮影を行った。

ブランデンブルク門は、ドイツ連邦議会議事堂から歩いて行ける距離にあった。1788年に建てられ、高さは26m、幅は65.5m、奥行きは11mの砂岩でできた古典主義様式の門である。古典主義では均整・調和が理想とされている。私は均整・調和と聞き、左右対称な門と出発前に予想していた。実際に見たブランデンブルク門は、左右対称であることに加え、屋根もきれいな直線で、全体の形を見ても直方体の形になっており、均整・調和を意識して建築されている事を強く感じた。ブランデンブルク門は要塞としての役割も担っていた歴史があり、柱には銃弾の痕が残されていた(口絵写真31)。

次に訪れたサンサーシ宮殿は、土地が広大で、宮殿内部も非常に豪華だった。入口の天井には一面に絵が描かれており、どの部屋の壁にもきれいな額縁に入った絵画が飾られていた。日本とは異なる装飾や文化は、新鮮で非常に興味深く、今でも強く印象に残っている。

ツェツィーリエンホーフ宮殿はポツダム会談が行われた場所である。外観は宮殿よりも屋敷に近かった。宮殿内を巡りながら、ポツダム会談の内容や3カ国の関係性の説明を受けた。円卓の座る位置で3カ国の力関係が分かることである。背後に通路やトビラがあり、暗殺者がいても気づかない位置に座る人は立場の弱い人、背後が壁で、暗殺される可能性の低い位置に座る人は立場の強い人とのことである。



ヴィクトリア像と鉄十字の杖



サンスーシ宮殿の内部



実際にポツダム会談が行われた円卓

夕食を食べている時、右城社長と井上敬士さんに誕生日ケーキのプレゼントがあった。私も突然のケーキの登場に驚いた。

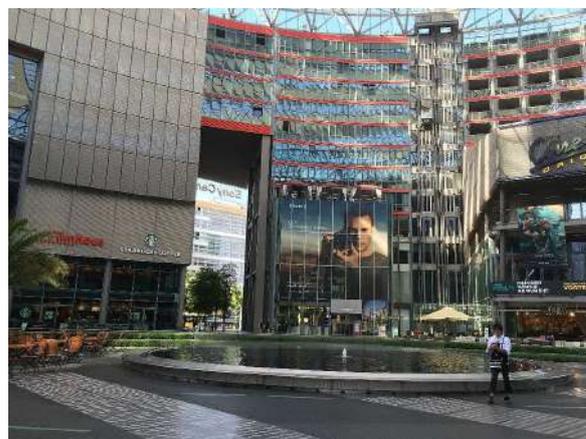
ホテルに帰ると、出発前に置いていたチップが机の上に置かれたままだった。帰国後、調べてみた。机の上にチップを置いて盗難と間違われまいように受け取らない人もいるとのことであった。チップを置くときは、一緒にメモを残しておくのと良いとのことである。

4. 3日目

3日目はバスの出発の時間が遅く9時出発だった。朝食をとった後、1人でベルリンの町を1時間ほど散歩した。多くの店はまだ開店しておらず買い物を楽しむ事は出来なかった。ドイツに住む人が出勤する姿と、賑わう前のベルリンの町を見た。1日目や2日目とは違った楽しさを感じる事が出来た。

3日目はポツダム広場、ベルリン大聖堂、ペルガモン博物館に訪れた。

ポツダム広場は、冷戦時代の東ドイツと西ドイツの境界近く、ベルリンの壁付近に位置していた。冷戦の終結までは真っ平らな土地があるだけだった。ベルリンの壁の崩壊後、ポツダム広場はすさまじい速度で開発されていった。今ではベルリン国際映画祭が開かれ、ベルリンの顔としての役割を果たしている。噴水の周りには、建物がぐるりと噴水を囲むように建てられていた。屋内と屋外の中間の印象を受けた。



ポツダム広場にある噴水



イシュタル門の壁の模様

ベルリン大聖堂は、ブランデンブルク門と同じく左右対

称な建築物だった。近づくとその大きさに圧倒された。私は、ベルリン大聖堂の外観を、時間をかけて見たかった。ベルリン大聖堂の前で写真撮影をした後、ペルガモン大聖堂に向かった(口絵写真 37)。

ペルガモン大聖堂は、ベルリン大聖堂から歩いて行ける距離にあった。展示品は、遺跡から発掘された物を買って集めた物だ。手を伸ばせば触れることができる距離まで近づいて眺めることができた。1つ1つの展示品に時間をかけて見るができないほど展示品の数が多かった。

5. 4 日目

4 日目は、ヴィース教会、ノイシュヴァンシュタイン城、BMW 博物館、新市庁舎を訪れた。

ヴィース教会は、宿泊したホテルから離れた位置にあった。周囲は平坦な土地が続き、牧場が多く存在していた。移動中のバスの窓から牛を何匹も確認できた。

ヴィース教会には、涙を流したと言われる鞭打たれるキリスト像があり、世界遺産として登録されている。ヴィース教会は巡礼地であって観光地ではない。写真撮影や私語は、極力慎むよう指示を受けた。ヴィース教会の外観からは想像できないほど、内部は豪華絢爛で色鮮やかだった。飾られている像や天井画の説明を受けた。内部の絵と像が、1つの物語を説明している事が分かった。

ノイシュヴァンシュタイン城は、崖の上に建設されていた。周囲は、平坦で広大な土地が広がっていた。他の観光地では人の多さは気にならなかった。ノイシュヴァンシュタイン城は、シンデレラ城のモデルとなっていることもあり、観光客が特に多かった。城に続くバスや有名な観光スポットは、長い行列が出来ていた。城の内部も観光することができた。入場するまでの内部のイメージは、外観と同じようにシンプルだと予想していた。実際は柱や床は朱色、壁は壁画になっていた。外観とのギャップが大きかった。

BMW 博物館には、BMW 製の自動車と飛行機のエンジンなどが展示されていた。私は、車に興味は無かった。目的もなく展示品を眺めていた。内部は非常に広く展示品も多く、集合時間まで退屈せずに時間を過ごすことができた。



城の外壁は思っていた程白くなかった



展示されている BMW 製の自動車

新市庁舎は、城のような外観でありながら市庁舎として機能している。実際にそこで働いている人もいる。予定よりも早く到着したため、買い物をする時間が設けられた。ゆっくりと散歩をしたり、店を渡り歩いて知らない町を満喫した。楽しく時間を過ごすことができた(口絵写真 43)。

6. 5 日目

5 日目は、ドイツ旅行の最終日。荷物をすべてバスに載せて出発した。観光先はアリアンツ・アリーナとレジデント宮殿の2カ所であった。

アリアンツ・アリーナは、サッカークラブのFCバイエルンがホームとして使用しているサッカードームである。座布団のような形をしていた。外観の色は、赤、青、白に変化する。私たちが訪れた日は白い色であった。ドームの中を見学することが出来た。選手がグラウンドに移動している道を通ってグラウンドに移動した。選手の控え室も見学した。ホームカラーが赤色であるため、控え室の壁は全面赤色だった。

飛行機に乗る時間が迫っていたため、レジデント宮殿は急ぎ足で観光した。ガイドの説明も、歩きながらであった。ゆっくりと内部に飾られていた絵画を眺めたりすることは出来なかった。すぐに空港に向かい、時間通りに飛行機に乗った。翌日、無事に日本に到着する事ができた。

7. 最後に

最終日は忙しかったが、今回のドイツ旅行は、飛行機の遅れなどの大きなトラブルも無かった。不安を感じる事無く、社員旅行を堪能することが出来た。初の海外旅行は新鮮な景色と初体験の連続だった。文化が異なると、町の景色が大きく変わることを改めて思い知った。

ドイツに做う旅

設計部 防災まちづくり課
岩瀬 誠司 (2018 年入社)

1. はじめに

ドイツは、日本人にとってなじみ深い国である。それは、歴史・文化が物語っている。明治維新後、日本を近代国家にするためつくられた日本国憲法は、君主制の強いドイツ憲法を倣ってつくられている。また、日本で上演回数が多く、日本人の耳になじみのある「第九」は、ベートーヴェンの交響曲第九番のことである。そのベートーヴェンはドイツ出身である。

先の世界大戦においては、日本、イタリアと同盟を組み、イギリス、アメリカを中心とする連合国と戦った。いわば日本とドイツは共に戦った「同士」でもある。ドイツは1914年からの第一次世界大戦においても、世界を相手に戦った。2度の世界大戦の中心にあったのがドイツである。1度ならず2度の世界大戦を起こしたドイツ人のメンタリティーには驚かされる。当時のドイツ軍の軍事技術は、高度なもので、その技術力は現在のドイツのモノづくりにも生かされている。

2. ドイツの治安

私が、海外に行くのは今回が5回目である。初めての海外は、家族でハワイに行った。しかし、幼い頃であり記憶にはない。2回目の海外は、中学の頃に兄と中国・上海万博に行った。3回目は、大学1年の夏にイタリアで40日ほど滞在し、大学連携のプログラムに参加した。4回目は、大学3年の夏にタイへ余暇を過ごしに行った。そして今回のドイツである。

私の少ない海外での経験から、ドイツの治安は良いと感じている。私がそのように感じる一つの理由はサイレンの音である。救急車両や警察車両が緊急走行する場合にサイレンを鳴らすが、5日間の滞在の中でサイレンの音を聞く回数は少なかった。ミュンヘンで滞在したホテルの前の駅に、朝の時間を利用して訪れたが、駅のホームにはゴミが少なく、路上滞在者も見かけることはなかった。ドイツは第二次世界大戦後、東ドイツから難民が流出した。その難民を中東地域で受入れた。そのような歴史から、移民の受け入れに寛容な国として知られている。移民の受け入れ人数はアメリカに次ぐ二番目である。一般的に、移民が押し寄せると治安が悪くなるといわれるが、行政によるコントロールがされているのであろう。

3. ベルリン観光

「ベルリン」といえば「ベルリンの壁」を思い浮かべるほどベルリンを象徴するものである。ベルリンの壁はドイツを東西に分断していた壁であり、30年前まで実際に存在していた。第二次世界大戦直後、アメリカとソ連を中心と

した対立が世界を巻き込む形で起こっていたからである。西側がアメリカ、東側をソ連が統治するような形をとり、不意に分断された。私が生まれる前の話である。ベルリンの壁が、東西冷戦、米ソ対立の象徴となっていた。現在、朝鮮半島情勢が不安定な中、似たような歴史をたどったドイツ、ベルリンの壁を見学したことは意義があり、世界平和を考えるきっかけとなった。ベルリンの壁は現在、壁として残されているエリアもあるが、ほとんどは道路にブロックが埋め込まれ、跡として残っている状態である(写真1)。

ドイツ帝国時代からベルリンは首都であり、首都機能のほとんどが西側に立地していた。ブランデンブルク門を取り囲むようにベルリンの壁があった。ブランデンブルク門(口絵写真31)は、王宮への通り道にあり、交通の要所であった。そのため、関税門として利用された時代もあった。ナポレオン1世による支配の時代には、パレードを行う場所として利用された。門の上には、4頭立ての馬車に乗った女神ヴィクトリア像があったが、フランスへの戦利品としてナポレオン1世によって持ち去られた。その後、再びブランデンブルク門の上に戻された。

ブランデンブルク門のすぐ近くには、ドイツ連邦議会(写真3)がある。連邦国家は、自治共和国や州のような政治単位から連邦憲法によってコントロールしている。行政の長として政治を行うのが首相である。

連邦議会の屋上には、「渦巻きドーム」がありベルリンを一望できる。ベルリンは平坦な土地である。しかし、街並みの中に山のように見えるところがあった。それは、大戦による瓦礫によって形成された山である(写真4)。これも歴史遺産の一つである。

歴史遺産といえば、東西ドイツの検問所であるチェックポイント・チャーリーも訪れた(口絵写真35)。主に西側の軍事関係者が通行するための検問所である。かつて、東ドイツでは社会主義の体制をとっており、「秘密警察」が存在し言論の自由などは認められなかった。東西ドイツの境界線の東側では、有刺鉄線や壁や監視塔がつけられ、西側への移動は厳しかった。ジョージオーウェルの小説「1984年」の世界のようである。東ドイツは、西ドイツに比べて住みにくく感じるが、最近では、東ドイツを懐かしむお年寄りが多いようだ。過去が良いとか悪いとかではなく、懐古することが良いようだ。



写真 5 ベルリンの壁跡のブロック(道路中央)



写真2 連邦議会



写真3 瓦礫によって形成された山(中央奥)

4. ポツダム観光

ポツダムでは、ポツダム会談の舞台となったツェツィーリエンホーフ宮殿を訪れた(口絵写真34)。ポツダム会談は、第二次世界大戦の戦後処理について話し合った会談である。参加者は、アメリカのトルーマン、イギリスのチャーチル、ソ連のスターリンで、当時の世界を取り仕切るトップ会談である。ソ連は連合国側であったが、日本と日ソ不可侵条約を結んでいた。1945年の8月に入りソ連は日本に宣戦布告をし、侵入してきた。トルーマンはスターリンに対して、対日参戦を前から要望していたが、参戦に対する明確な理由がないため、踏み切れなかった。また、アメリカの原子爆弾開発の期限も迫っていた。当初の想定通り会談は難航した。ソ連が早期に対日参戦をしていれば、アメリカは楽に大戦を終えることができた。しかし、アメリカとしては、結果的に会談が難航しなければ、原子爆弾を実践使用する機会は得られなかった。それぞれの政治的な思惑が重なる中での重要度の高い会談が行われた場所である。

ポツダムではもう一つ、サンスーシ宮殿も訪れた(口絵写真33)。宮殿内部には、大理石や金をふんだんに使った作りになっており、豪華であると感じたが、平屋建てであり、フランスのベルサイユ宮殿などに比べると作りは簡素なようだ。フリードリヒ2世が、2年の建設期間でつくらせた宮殿である。日本の城のように、縦に大きい作りではなく、横に大きい作りになっているので、外観から見るよりも、内観の作りは大きかった。宮殿内部は、たくさんの部屋があり、それぞれの役割に合わせて作りになっている。絵画の配置や遠近法を活用した空間づくり

になっていた。

ポツダムの街並みは、ベルリンやミュンヘンとは違った古い街並みのように感じた。街中には、トラムが走っていた。レンガ造りの建物も見られた。そのレンガ造りの建物は、「オランダ街」である。フリードリヒ1世の時代に宗教迫害などでやってきたオランダからの移民が住むために、オランダ人建築家につくらせたものである。移民でやってきたオランダ人が、気持ちよく故郷を思い出して暮らせるようにした気遣いを感じることができた。

5. ミュンヘン観光

宗教改革で知られるルターも、ドイツ出身である。カトリックから分離し、プロテスタントを創った人物である。私は宗教に対してそれほど大きな関心を持たないが、教会に行くとなぜか心が洗われるような感覚になる。旅行では、世界遺産でもあるヴィース教会へ行った。ヴィース教会はカトリックの教会である。天井の壁画や彫刻はどれも素晴らしいものであった。「鞭打たれるキリスト像」が涙したというキリスト像が安置されている。キリスト教徒にとっては神聖な場なのだと感じた。ヴィース教会は、のどかな草原に位置し、外観やその周囲の雰囲気と礼拝堂の神聖な雰囲気との違いに驚かされた(写真5)。そのような草原を抜けた山間部に、ノイシュヴァンシュタイン城がある。

ノイシュヴァンシュタイン城は、ルートヴィヒ2世が、趣味とワーグナーを置くために建設した城であり、軍事的な要塞や政治的な執務を行う所謂「城」というものではない。城の中に人工的な洞窟を創るほど、城の建設にこだわりを見せていただけに、外観だけでなく、城内の創りもすばらしく、圧倒されるばかりであった(口絵写真41)。

ミュンヘンは、ドイツ3番目の都市であり、BMWの本社がある。BMW博物館の見学では、会社の歴史から歴代の名車まで展示がされていた。BMWは、かつて軍用機のエンジンを制作していた。ドイツの軍事技術は高度であった。特にロケットの技術は高度なもので、米ソが宇宙開発に応用するために、ドイツを東西に分割したとまで言われている。現代においてもドイツの自動車は世界的に人気が高く、モノづくりに対するドイツ人の思いにも触れられた。

ドイツで驚いたことはトイレである。諸外国に比べてドイツのトイレはきれいだ。洗面は自動で水が出るようになっていた。ジェットタオルまでついているところもあった。日本では当たり前であるが、海外では珍しい。

当然ながらドイツは日本と文化も生活様式も違う。また想定される「災害」にも大きな違いがあり、その違いがまちづくりに生かされている。ドイツ人は、建物に日光を取り入れるために、ガラス張りを特徴とした建築物をよく見かける。しかし、日本のように地震が頻発する国では、そのような建築物は敬遠される。他にも、鉄道の高架の橋脚も日本の物と強度が違うことは一目瞭然であった。

ミュンヘンの街並みはベルリンと比較して中世の雰囲気があり、ヨーロッパらしい景観であった。中心部には、ヴェルテルスバッハ王家の宮殿があり、博物館や、大学、

オペラ座、官公庁が集積している。石畳やブロックでできた道路と、入り組んだ路地も多く、古くからの街並みに新しい街を形成したような都市であった。市庁舎の屋上から見ると、その街並みはよくわかる(写真6)。市庁舎の周囲は歩行者天国となっている。車社会であるドイツでは当初、商業が衰退するといった理由で、歩行者天国にすることに反対の意見が多かったようだ。しかし、実際はトラムを部分的に利用しショッピングに出かける人が多く、商業も賑わい、新たな出店も増えたようだ。思い込みや理論で社会将来を予測するのは難しい。今後の仕事の参考になる事例であると思った。



写真5 草原に建つヴィース教会



写真6 市庁舎屋上からの景色

6. おわりに

私は音楽が好きで、ベートーヴェンをはじめ、好きなドイツ出身の作曲家はたくさんいる。また、学生時代に戦後史に興味を持ち、第二次世界大戦の戦後処理について、ニュルンベルク裁判、東京裁判の文献や世界大戦開戦時のドイツ、イタリアとの諸外国との関係について調べたことがある。そういった意味で、今回の旅程ではポツダム観光が一番印象に残った。ドイツに行けたことは幸運であった。

今回の旅程はとても密度が濃く、充実した旅行であった。レポートでは書ききれなかったベルリンのペルガモン博物館、ベルリン大聖堂、ミュンヘンのアリアンツ・アリーナ、どこも見応えがあった。ミュンヘンは雨の多い地域であったが、天候にも恵まれ傘を使うことはなかった。当初入場できるかどうかわからなかった、連邦議会や宮殿にも入ることができた。本当に運の良い旅行であった。入社1年目でこのような体験ができたことに感謝したい。今後5年後、10年後にも同じような想いをするようにこれからの仕事に励みたいと思う。

ドイツの歴史と文化を知る

設計部 橋梁調査課
池 愛夫 (2018年入社)

1. はじめに

私は第一コンサルタンツに入社して初めての社員旅行でドイツ班に参加させていただいた。海外に出ることがなかった私にとって、今回の社員旅行は人生初の海外旅行となった。そんな私にとってのドイツ旅行は目に映るものすべてが新鮮であった。5日間の日程のうち、前半2日はベルリン、後半3日はミュンヘンと、ドイツ主要都市を巡った。

2. ベルリン

ドイツに到着してまず驚いたのが、その日照時間の長さだった。経由地であるフランクフルトに到着した時間が、現地時間で午後6時頃だったが、日本のお昼頃のような明るさであった。改めて異国へ来たのだ、という実感が湧いた。

フランクフルト到着後、飛行機を乗り継ぎ、初日に宿泊するホテルのある首都ベルリンに向かった。ホテル到着後にも日本との違いを感じた。店舗の閉店時間が早いことである。日本では24時間営業のコンビニエンスストアや、午後12時まで開店している店舗が多く存在しているが、ドイツでは午後9時の時点で多くの店舗が営業を終了していた。どんな時間でも食料や雑貨品が手に入れられる日本との生活スタイルの差には、最初こそ不便さを感じはしたものの、社員旅行終盤においては、あらかじめ必要なものを店舗の営業時間中に買うようになっていき、不便だと感じなくなっていた。「ある」のが当たり前な生活から、「ない」ことが当たり前になる生活は新鮮なものである。

ドイツ到着の翌日の朝、早くに目が覚めた。前日に見ることのできなかったベルリンの街並みを少し見渡してみた。そこで目に映るものは、行きかう人々の話す言語も、建造物も、日本とはなにかもが違う光景だった。もちろん、海外に出ているのだから当たり前のことかもしれないが、初めて海外に出た私にとっては、そこにあるもの全てが目新しく感じられた。

2日目から3日目にかけて観光したのはドイツの首都、ベルリンである。恐らくベルリンという名前を聞いて多くの人々が連想するのは、「ベルリンの壁」ではないだろうか。第二次世界大戦後の米ソ冷戦時代に設置され、多くの悲劇を生みだしたベルリンの壁の痕跡は至るところで確認することができた。壁の崩壊から今年で30年という節目の年にこうした戦後の歴史に触れることは重要なことである。

ベルリンを後にし、次に向かったのはポツダムだった。その道中にも先述した米ソ冷戦の歴史に触れることができた。特に印象的だったのは、東西ドイツ分断後、米ソの

スパイ交換の舞台となったハーフェル川に架かるグリーンニッケ橋である。この橋の特徴として中央部に境に、舗装の色が違うことが挙げられる。東西ドイツ分断によって生じたこの特殊な光景は、当時のドイツの状況を今に伝える重要なものだといえる。



グリーンニッケ橋

グリーンニッケ橋を渡り、ポツダムに到着すると、昼食の時間になった。私が今回のドイツ旅行の中で楽しみにしていたのが、本場ドイツで飲むビールである。大学時代、私が所属していたゼミの教授はドイツに留学していたことがあったようで、その当時のお話を聞く機会が多々あり、その中でもお酒、とりわけビールに関するお話をしてくださったためである。ポツダムの飲食店で飲んだ初めてのドイツのビールはフルティで飲みやすく、日本のビールとは違う味わいがあった。また、食べ物に関しても、ビールに合わせた味付けがなされているようで、基本的に塩味が強めな味付けであり、日本食との違いを感じた。



ドイツビールと料理

昼食を終え、次に向かったのは18世紀のプロイセン王国時代にフリードリヒ二世によって建立され、現在では世界遺産にも登録されているサンスーシ宮殿である(口絵写真33)。サンスーシとはフランス語で「憂いなし」という意味の言葉だそう。これは当時のプロイセン王国と対立関係にあったオーストリアに対するフリードリヒ王の挑発の意が込められているとも言われている。それを裏付けるように、広大な庭園を有し、宮殿内もその名に恥じない豪華な彫刻や調度品で溢れていた。

サンスーシ宮殿の観光を終え、2日目最後の観光地となったのがツェツィーリエンホーフ宮殿である(口絵写真

34)。第二次世界大戦中、米英ソの首脳陣が一同に会し戦後処理を決定するためのポツダム会談が行われた場所である。実際にポツダム会談が行われた会議場にも入ることができた。ここで印象的だったのが、ソ連首脳スターリンがこだわった座席位置である。会議場内のテーブルの中央には、三国の国旗が設置されており、それぞれの首脳陣がどの位置に座っていたかを表している。会場左奥にイギリスのチャーチル、手前にアメリカのトルーマンを座らせ、この会場において死角が少なく、暗殺されるリスクの少ない最も安全な右奥の席にスターリンが着座していたという。歴史の授業であれば、日本にポツダム宣言を突きつけるための会談が行われた、としか学習しなかったが、やはり現地へ行きその場所を実際に見ること、その裏側を知ることが大変有意義であると改めて感じた。



ポツダム会談が行われた会議場

ベルリンではこれら2つの宮殿以外にも多くの場所を観光したが、総じて歴史に関する観光地が多かった。これまでの文字のみの歴史ではなく、実際にその地に赴かなければ見えてこない部分が存在する、ということに改めて実感した。

3. ミュンヘン

ドイツ旅行後半は、ミュンヘンに移動し、その周辺の観光地を巡った。首都であるベルリンとは異なり、落ち着いた都市というのがミュンヘンに対して持った第一印象である。ベルリン同様ここでも特に印象に残っている2つの観光地をピックアップしてレポートする。

まず、紹介したいのが、ミュンヘン到着の翌日に赴いた世界遺産ヴィース教会である(口絵写真40)。

キリスト教の巡礼地として有名な教会であるが、その神聖な空間、荘厳な雰囲気は、キリスト教徒ではない私でも心打たれるものがあった。日本人はよく無宗教だ、といわれている。私はこれを無関心に由来する無宗教ではなく、寛容に由来する無宗教ではないだろうかと考えている。日本の歴史を紐解いてみても、過去多くの宗教、宗派が乱立した時期もあれば、国家宗教として神道を重要視した時代もあった。これらの歴史から日本人には、多くの宗教に対して寛容な心を持ち、各々が継るべき対象をどのように設定するか、という文化を持っているのが日本のもつ国民性と捉えることができるだろう。ヴィース教会へ立ち入り、

私は改めて日本人の宗教に対する価値観の根源を考える機会を得られたように感じた。また、この教会にはパイプオルガンが設置されていたが今回その音色を聞くことは叶わなかった。今後、パイプオルガンを有する教会を訪れたときには、是非その音を聞いてみたい。

最後に紹介したいのがシンデレラ城のモデルであるともされているノイシュヴァンシュタイン城である(口絵写真41)。この城は、バイエルン王ルートヴィヒ二世によって建立されたものであり、ロマンティック街道の終点としてドイツでも有名な観光地の一つとなっている。この城の特徴として、一般に城と呼ばれるような軍事拠点としての機能は無いということが挙げられるだろう。これはこの城が建立された理由がルートヴィヒ二世の趣味を具現化したものであるからだ。これだけの城を作るにも関わらず、その根底の設計理念が王族の趣味だというのは、にわかに信じがたいが、城内を見学すると、人口洞窟を始めとした、当時の設計思想が垣間見える部分が点在していた。

ミュンヘンの街並や自然はベルリンとはまた違うドイツの顔を見せてくれたように感じる。それぞれの都市にそれぞれの歴史があり、またドイツを訪れる機会があれば、別の地方、別の観光地にも行ってみたい、そう思いながら、日本への帰路について。

4. 今回の旅行での学び

これまでの人生において日本という国しか知らなかった私にとって、初の海外となった今回のドイツ旅行は衝撃と感動の連続だった。ドイツでは、ここまで紹介してきたもの以外にも多くの観光地に足を運んだ。その多くに共通するのが、歴史的な建造物である、ということである。これらを見て、ただその美しさに目を惹かれるのではなく、なぜ作られたのだろうか、なにを示しているのだろうか、という、先人達の考えを知ることは、非常に有意義であり、重要なことではないだろうか。今の時代、インターネットで多くの情報を得ることが可能である。それは確かに便利な時代であると言える。しかし、実際に現地へ赴き、その土地の言語に囲まれ、文化に触れ、歴史に触れるという経験は、インターネットで調べるだけでは得ることが出来ないものであるということを改めて実感した。

実物に触れること、現地へ赴くことの大切さと、背景や歴史を知り、先人の教えや失敗を学び、次につなげることのできる部分を能動的に知ろうとする姿勢の必要性を学ぶことができたことが、私にとっての収穫である。

ドイツの縁と歴史

調査部 空間情報課
森木 雅陽 (2018年入社)

1. はじめに

私は新入社員であり行き先を自ら選択しておらず、確固たる理由があつてドイツ行きを決定したという訳ではない。しかしながら、経済的に欧州の優等生と評される点、テレビで見た美しい街並み、発明やモノづくりの先進国である点など、ドイツという国には様々な魅力があり、それについて普段から実際に見てみたいという思いは自分の中にあつた。したがって決して望んでいなかった訳ではなく、むしろドイツ行きが決まったと知ったときは期待と興奮の気持ちを覚えていた。6日間という期間を無為に過ごす訳では無く、自分の中で何かを得たいと思いながら出発の日を迎えた。

2. 到着

ドイツへはフランクフルトを経由して最初の目的地ベルリンまで向かった。フランクフルトからベルリンの間は窓際の席であつたので、空から景色を一望することが出来た。飛行機の中で早速日本との違いを感じた。ドイツという国は非常に平坦な地形をしており、山がほとんど見当たらなかった。その代わり森や農耕地が非常に多い。街の中にも木が植えられている所がたくさんあり、空から見ると画用紙の上に書いた絵のように感じた。一面の平坦なところどころ突き出たものがある。風力発電用の風車である。密になっているところでは80個ほど群立していた。空の上からでもドイツの人達の環境への関心の高さはうかがう事が出来た。飛行機で1時間ほど経つと最初の目的地ベルリンに到着した。



ベルリンという都市の中にはこのような森がたくさんある

3. ベルリン旅行

ベルリンに到着するとホテルベルリンへバスで向かった。ビュッフェ形式の朝食を食べた後、早速ベルリンの街を観光した。

最初の目的地は国会議事堂である。検問を抜けエレベーターを上がると屋上にガラスドームがある。日の位置によってひさしの様な物が回転し、直射日光がきつくなならないようになっているらしい。屋上は眺めも良くベルリンの街

を俯瞰することが出来た。都市でありながら緑が豊かで日本とは違っていた。ガイドの解説を聞きながらメルケル首相の官邸など様々な場所を教えてもらった。

国会議事堂の屋上からは遠くに山が確認出来た。ドイツにしては珍しいと思った。ガイドの話によると第二次世界大戦の後の瓦礫で出来た山らしく納得がいった。山になるほどの破壊をもたらした戦争を二度と繰り返さないためにも、このような戦争の遺物を残して伝える姿勢は素晴らしいと思った。

街中を移動していると、レンガ造りの細い道が街を分断するように続いていた。これ有名なベルリンの壁の跡である。東ドイツから西ドイツへ逃亡する人が後を絶たなかったため東ドイツによって作られた。かつてはこの道のどちら側にいるかによって人々は引き裂かれた。1989年に東ドイツが突然国境検問の無効を発表した事によって、あっけなく崩壊した。

途中フランデンプルク門で写真を撮った。すぐ近くにあるホテルアドロンはマイケルジャクソンが自分の子を窓から出して有名になった場所だ。迫力ある門は絶好の写真スポットらしく、様々な人が写真を撮ってほほえましく思った(口絵写真31)。



赤枠の中の山は戦争によって出来た瓦礫で出来ている

サンサーシ宮殿という名前の由来は「憂いなし」を意味するとガイドに教えて頂いた天候に恵まれており、宮殿の噴水の前で気持ち良く写真を撮ることが出来た(口絵写真33)。

ポツダム会談の場所となったチェツィリエンホーフ宮殿では中でガイドの話をききながら歴史を知ることができた。サンサーシ宮殿とチェツィリエンホーフ宮殿では写真を撮影するだけでお金がかかる。お金を払ってバンドを貰い装着する。そうすると撮影をしても警備員からつまみ出されない。ガイドがドイツ人はお金が好きであると言っていたのを思い出す。

4. ミュンヘン旅行

ミュンヘンはいにくの曇り空だった。眠れる森の美女の城のモデルになった事でも有名なノイシュヴァンシュタイン城へ向かった。この城は中世の城かと思いきや、19世紀に建築されていたようで、鉄筋コンクリートや鉄製の窓枠など案外近代的な造りになっている。この城の近くには絶好の撮影スポットであるマリエン橋がある。そこで

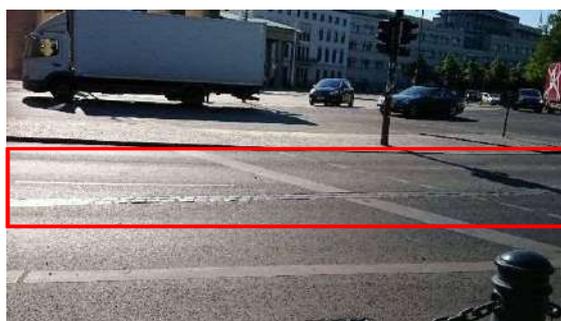
ノイシュヴァンシュタイン城を撮影することが出来た(口絵写真41)。

バイエルン・ミュンヘンの本拠地であるアリアンツ・アリーナを見学した。特殊ガラスで出来たドームは丸みを帯びており、美しい。試合の日にはチームカラーの赤にライトアップされる。現在グレーの観客席は赤色に塗られる予定だそうだ。スタジアムでは入場音楽に合わせて選手入場を体験させて頂いた。現地ガイドの人柄の良さもあって非常に楽しめた。

BMW博物館ではBMWの様々な年代の車を見ることが出来た。車には興味が無い私でも高級車であることは知っている。デザイン的にスポーツカーのように格好いい車が多いと感じた。いずれはこんな車に乗りたいと思ったが、ただで貰ったとしても維持費を払うのも難しいと思う。仕事を頑張っていずれはBMWとまではいかなくても良い車を買いたい。

5. おわりに

私がドイツ旅行で印象に残ったのは街の景観の美しさや歴史的な遺産だった。経済的成長や人々の暮らしやすさのためにはインフラというものは絶対に欠かせない。そのために自然や景観を犠牲にする方法もあっただろうが、ドイツでは人々が守ろうとしているからこそ、都市の中でも美しい自然や建物がまだ守られている。ベルリンの壁の跡や世界大戦の瓦礫で出来た山も人々から戦争の記憶を失わされないために今も街中に残されている。残すべきものを次世代に残しながら住みやすい街にする、そういった方法を我々建設コンサルタントの人間も一緒に考えなければならぬのではないかと感じた。



ベルリンの壁の跡が車道に残っている

ドイツの歴史に触れて

営業部 営業課
井上 敬士(2018年入社)

1. はじめに

入社してすぐの社員旅行、初の海外ということもあり前日から緊張と不安を抱えつつ当日を迎えた。

2. 高知-東京-ドイツ(1日目)

龍馬空港へ集合し受付を済ませ、いざ出発。羽田到着後、ユーロへの換金等を行い10時間以上のフライトがスタート。時差調整もあり飛行機内では寝られなかったが、映画を数本見たこともあり思ったほど長くは感じずフランクフルトへ到着。そこから飛行機を乗り継ぎベルリンへ到着し、そのままホテルへ直行。

3. ベルリン-ポツダム(2日目)

思ったほどの時差ボケもなく朝食後ドイツ連邦議会議事堂へ。入場までにパスポート等の確認などもありびっくりしたが、無事に入り、すぐ建物も見えてきた。全焼などもあり崩壊していたものを修復したとのことで見ごたえのある建物であった。



ドイツ連邦議会議事堂

議事堂を後にし、徒歩でブランデンブルク門に到着(口絵写真31)。ベルリンのシンボルとされているのもうなずけるほど立派な門だった。街中に溶け込んだその景観には驚いた。

ベルリンからバスで20~30分ほど移動しポツダムへ入りサンサーシ宮殿へ(口絵写真33)。広々とした庭園の中に一際目立つフリードリヒ2世の居城の宮殿が見えてきた。フリードリヒ2世自らが設計の一部を行ったそうだ。

サンサーシ宮殿を離れ、バスで数十分の所にあるツェツィーリエンホーフ宮殿へ(口絵写真34)。ポツダム会談が開かれた場所として有名な場所だ。宮殿の中を歩きながら第2次世界大戦の結末などを考えることの出来る場所であった。広い庭園もあり閑静な場所にあり印象深かった。

2日目の見学も終わり夕食を食べるためにレストランへ。食事を済ませビールを飲んでいるとまさかの出来事が。社長と私の誕生日とのことでサプライズ。シャンパンで乾杯し、ケーキも登場。驚きと嬉しさでこの時は気持ちが高ぶ

っていた。入社1年目の私のことも祝っていただき、素晴らしい会社に入社させていただいた。



みんなからのサプライズ

4. ベルリン(3日目)

3日目、少しずつドイツの旅の行程にも慣れてきた。ホテルを後にし、ベルリンの主要な広場のポツダム広場に寄りつつ、ベルリンの壁へ(口絵写真36)。どういった場所にあるのか楽しみだったのでバスの窓から終始周りを見ていた。

ドイツの歴史の中で避けては通れない場所だ。壁一面にはあらゆる人が絵を描いておりその中でもホーネッカーとブレジネフが接吻している場所が有名で、やはり1番の人だかりができていた。

ベルリンの壁以外で印象に残ったのは横断歩道の信号が2~3秒で変わり、片側ずつでしか渡れないことだ。自動車が優先のようで、日本では絶対あり得ないと思った。

その後、再び中心街に戻りペルガモン博物館(口絵写真38)。イシュタル門を含め展示物は歴史を感じることができ想像以上によかった。

その近くにはベルリン大聖堂がある(口絵写真37)。一際目を引くドームが印象的な建築物であった。

ペルガモン博物館・ベルリン大聖堂での見学が終わり、空港へ。明日からのミュンヘン観光のために飛行機でベルリンを後にした。

5. ミュンヘン(4日目)

4日目はミュンヘン郊外の観光のため、朝早くに出発した。ミュンヘン中心部から40分ほどバスで移動しヴィース教会を見学(口絵写真40)。外観は非常に質素な教会だが、中に入ると驚くほど雰囲気の違いロココ様式の内部の装飾はヨーロッパ随一と言われている。特にその天井画は「天から降ってきた宝石」とも評されている。

ヴィース教会を後にし、さらにバスを走らせること1時間。シンデレラ城のモデルにもなったノイシュヴァンシュタイン城に到着(口絵写真41)。人気観光スポットであり入場時間に厳しく、かなりの人だかり。マリエン橋からノイシュヴァンシュタイン城が眺めるのがもっとも美しいと

されている。橋の上は観光客で満員状態であり落ちないか心配だった。実際に見るとやはり綺麗で感動した。遠くまでの移動であったがそれ以上に見応えがあった。

ミュンヘンの中心部へ戻り、BMW の博物館とショールームを見学(口絵写真 42)。BMW 車のクラシックカーから最新の車種まで展示されていた。実際に乗車できたりして想像以上に楽しめてよかった。私は車が大好きというわけではないが、それでも十分楽しめる。さすが世界の BMW だと感じた。

その後ミュンヘン新市長庁舎へ移動(口絵写真 43)。この建物は 1867~1908 年にかけて建設されたネオ・ゴシック様式の建物で、3 つの建物からなる。中央の高さ 85m にある仕掛け時計が、新市長庁舎の最も有名な見どころ。ドイツ国内では最大、ヨーロッパ全体では 5 番目に大きい仕掛け時計である。毎日 11 時、12 時、17 時からの約 10 分間、仕掛けが動き出す。訪問時はタイミングではなかったため聞けなかったが建物を見るだけでも十分な見ごたえはあった。

6. ミュンヘン(最終日)

最終日はドイツのサッカーチーム、FC バイエレン・ミュンヘンのホームスタジアム。私がサッカーをしていることもあり 1 番の楽しみであった。実際のヨーロッパチャンピオンズリーグでのテーマ曲に合わせてみんなと入場、ピッチ横やロッカールームまで入ることができ終始興奮(口絵写真 44)。

建物は蕨のような外観で、半透明の特殊フィルム ETFE (旭硝子製) で覆われているようで、スタジアム内から景色を眺めることができ、試合開催日はクラブカラーであるバイエルン・ミュンヘンの赤に発光する。

そしてアリアンツ・アリーナを離れ、旅行最後の見学場所であるヴェルテルスバッハの王家の宮殿レジテンツの見学(口絵写真 45)。現在は博物館や劇場として公開。教会美術、勲章や王冠王笏、金細工技術で作られた食卓の調度品や芸術品などが展示されており見学時間は短かったが見応えがあるものだった。

7. おわりに

今回のヨーロッパ旅行を経験し日本では味わえない貴重な経験ができた。現地の建物、文化にも触れることができた。さらには社長と同じ誕生日ということで社員の皆様にも祝っていただき忘れることのできない思い出となった。

初めての海外旅行

設計部 河川砂防課
木村 卓 (2018 年入社)

1. はじめに

5 月 21 日~5 月 26 日までの 6 日間の日程で社員旅行に行きました。行き先はドイツで、僕にとって初めての海外旅行です。

ドイツはビールやソーセージ、チョコレートが有名というイメージしかありませんでしたが、実際に行ってみて多くの歴史的な建造物が街中にあり、身近に歴史を感じられることを体験できました。

2. 1 日目

高知龍馬空港へ 8 時半に到着し、10 時 15 分に羽田空港に向けて出発しました。初めての海外に早くも胸が高鳴っていました。

羽田空港へ到着し、国際線へ乗り換えるまでの間に昼食をとりました。

14 時 05 分いよいよドイツに向けて出発です。機内食が出てくるような長距離のフライトは初めてでした。座席は少し狭く窮屈でしたが映画を見たり、音楽を聴くなどリラックスして過ごすことができました。

11 時間 40 分のフライトでフランクフルトに到着しました。そこで飛行機を乗り継ぎベルリンのテーゲル空港に 1 時間 10 分で到着し、約 13 時間にもおよぶフライトが終わりました。

次にバスに乗り換えホテルへと向かいました。泊まったホテルの内観はとてもオシャレでした。長時間の飛行機の疲れもあり、シャワーを浴びるとすぐに眠りにつきました。



写真 1 泊まったホテルの部屋

3. 2 日目

早朝ホテルの周りを散策しました。どの建物もオシャレで大きかったです。路上にタバコの吸い殻などのゴミが多く落ちているのが気になりました。ドイツは喫煙者に比較的寛容というのを聞きました。確かに周りの人もあまり気にしていないようでした。

朝食はビュッフェ形式でパンやハムなどのバリエーションも豊富で美味しかったです。

朝食を終え、待ちにまつ観光に出発しました。

(1) ドイツ連邦議会議事堂

ドイツ連邦議会議事堂では、建物の屋上にある「渦巻ドーム」を見学しました。渦巻ドームはガラス張りで中心に鏡の柱があり真下にある本会議場へ効率よくたくさん光を取り入れる構造になっていて、とても明るかったです。



写真2 渦巻ドーム

この場所からはドイツの街並みを見渡すことができました。屋上だったため開放感があり、気持ちよかったです。

写真には写っていませんが、遠くに山がありました。それは戦争の時に出土した瓦礫の山だ

そうです。このような山が至る所にあるとのことでした。

(2) サンスーシ宮殿

サンスーシ宮殿はプロイセン国王であるフリードリヒ2世という人の宮殿です。宮殿の前にはとても広い庭があり、その真ん中には噴水があります。また宮殿のすぐ隣にはフリードリヒ2世が可愛がっていた11匹のグレーハウンド犬のお墓もありました。フリードリヒ2世は11匹の犬と一緒に埋葬してほしいのですが、その願いは無視され父親と同じ所に埋葬されてしまったそうです。

サンスーシ宮殿の内部にはたくさんの部屋がありました。そのどれもが白を基調とし金などを使用して高級感のあるものばかりでした。音楽を聴くためだけに造られた部屋もありました。

国王に送られた絵や似顔絵などもありました。



写真3 音楽を聴く部屋（天井）



写真4 国王に送られた絵など

4. 3日目

この日はベルリン最終日だったのでホテルをチェックアウトし、観光に出発しました。

ペルガモン博物館へ行く途中にベルリンの壁やSONYセンターを見学しました。

(1) ベルリンの壁

1989年11月09日に市民の自主的な行動によって崩壊したベルリンの壁は一部が保存されています。そこにはたくさんの絵が描かれていました。ここはイーストサイド・ギャラリーと呼ばれ、他の国からの観光客もいて賑わっていました。

ベルリンの壁に描かれている絵を車にペイントしているものも見かけました。



写真5 ベルリンの壁の一部

(2) SONYセンター

SONYセンターの中にはたくさんの施設があります。そのうち五割が商業施設、三割が飲食店、そして二割が宿泊施設です。

また、特徴的な屋根は夜になるとライトアップされます。さらに、一色だけではなく時間によって変化するそうです。

創立した時はSONYがこの建物を保有していましたが、現在は売却し別の会社が保有しているそうです。それでもSONYセンターの名前は残っています。



写真6 SONYセンター

(3) ペルガモン博物館

ペルガモン博物館にはギリシャやローマ、中近東などの歴史的な建物や道具などがあり、実際に使用されていたものもありました。



写真7 実際に使われていた陶器など

その後、飛行機でミュンヘンへと移動し夕食のためレストランへ向かいました。

レストランはとても広く、ステージもありました。演奏を聴きながら楽しく夕食を摂ることができたのでよかったです。

5. 4日目

4日目はヴィース教会やノイシュヴァンシュタイン城、BMW ミュージアムに行きました。

教会まで速くバスで2時間以上かかりましたが、その道中でアルプス山脈を見ることができました。ガイドさん曰く、いつもは霧がかかることが多いそうですが、今回は運良く見ることができたとのことでした。



写真8 バスから見たアルプス山脈

(1) ヴィース教会

ヴィース教会の外観はとてもシンプルな建物でしたが、中に入ると外観からは想像できないほど華やかでした(口絵写真40)。正面には派手な額縁に入った絵があり、天井にはキリストが描かれている絵もありました。



写真9 ヴィース教会

(2) ノイシュヴァンシュタイン城

ノイシュヴァンシュタイン城はディズニーのシンデレラ城のモデルになったといわれています(口絵写真41)。

内部は撮影禁止だったため写真はありませんが、ひとつひとつの部屋が広くとても美しいデザインだったのを感じています。



写真10 ノイシュヴァンシュタイン城

(3) BMW ミュージアム

僕は車が好きなのでこの社員旅行の中でBMW ミュージアムの訪問を一番楽しみにしていました。

ミュージアムにはBMWの古い年代の車から最新の車まであり、とても興奮しました。今回の時間では足りないぐらいでした。夢中になり過ぎたため時間が無くなってしまい、隣接しているショールームの方に行けなかったのが残念です。



写真11 BMW ミュージアム

6. 5日目

ドイツ最後の日になりました。この日はサッカーチームのFCバイエルンの本拠地であるスタジアムへ行き、ヴェルテルスバッハ王家の宮殿へ行きました。

(1) FCバイエルン本拠地

FCバイエルンのスタジアムは変わった形をしていました。半透明なドームのような所は、とても強いひし形のビニールをひとつひとつ膨らませて作っているようですが、このスタジアムが完成した時から今までで2枚しか壊れていないそうです。

この場所では実際に選手が使っているロッカールーム

を見たり、選手がピッチに出るときのように通路を通ったりなど最終日に相応しい特別な体験ができました。



写真12 選手が使用しているロッカールーム

(2) ヴェルテルスバッハ王家の宮殿

ヴェルテルスバッハ王家の宮殿には貝殻などが付いた岩で作ったような彫刻など独創的なものもありました。また、ほとんどの部屋に金が使われていて40キロも使っているのではないかとされている部屋もあるそうです。



写真13 宮殿内部 (左:独創的な彫刻
右:金で装飾された部屋)

(3) 帰国

6日目は機内泊となりました。帰りの飛行機は行きの時よりも広くて快適に過ごすことができました。そのためか飛行時間を短く感じました。11時間40分で羽田空港に着き、1時間30分で高知龍馬空港に到着しました。その後荷物を受け取り、解散しました。

7. 終わりに

初めての海外に不安もありましたが事故もなく帰ってこることができたのでよかったです。文化の違いや言葉の違いがありましたが、どれも新鮮で楽しかったです。

長旅で疲れましたが他の社員の方との距離を縮めることができ、関係を深めることができたので有意義なものになりました。

海外での生活もしてみたいなと思いました。

またチャンスがあればプライベートで行ってみたいなと思います。

ドイツの歴史巡り

設計部 道路交通課
宮崎 卓巳 (2018年入社)

1. はじめに

私は、ベルリン、ミュンヘンを観光するドイツ旅行に参加しました。参加に際して私は、歴史ある建造物の観光と食文化を楽しみたいと思いながら日本を旅立ちました。

2. 1日目

午前10:15に高知龍馬空港を出発して、ベルリンに到着したのは午後9:25でした。ドイツとの時差が7時間あるので実際には17時間もかかっていた。飛行機での移動のため自由に立つことができず、1日がとても長く感じ移動だけで疲れてしまいました。

3. 2日目

朝6時にモーニングコールによって目が覚めました。前日の疲れを残しながらのベルリン観光初日となりました。

はじめにドイツ連邦議会議事堂を訪れました(口絵写真30)。「議員達が決めごとをする職場は、常に国民の目の下にある。」という思想から、屋上をガラス張りにして議会の部屋を見通せる構造になっていました。屋上のドームのガラスは太陽の動きに合わせて常に角度を変えられるようになっており、直射日光が職場に入らないように設計されていました。議場を利用する方々への様々な工夫がなされていて、学ぶべき点が多くあると感じました。

続いてポツダム会談が開かれた場所であるツェツィーリエンホーフ宮殿を訪れました。ベルサイユ宮殿などの豪華絢爛な姿を想像していましたが、実際は地味な外観で宮殿とは思いませんでした。

建物内部に入ると装飾は上品で落ち着いた雰囲気です。「こういう宮殿もあるのか」と思いました。

正面の庭にソ連を連想させる、円の中に赤い星がある花壇がありました。とても美しいと感じましたが、支配されていた事実を考えると少し複雑な気持ちになりました。



宮殿と星が描かれた花壇

次に2日目最大の目玉スポットであるサンスーシ宮殿を訪れました。屋根は青、壁はクリーム色、その他の部分は白で塗装されていてシンプルな外装でした。宮殿自体はそれほど大きくはないのですが、庭はとても広く噴水越しに見た宮殿はすごく綺麗でした。私はこの光景を写真に収めたと思います、様々な角度から撮影をしました。この結果、自分の中で満足出来る写真を撮ることが出来ました。



噴水越しに見たサンスーシ宮殿

4. 3日目

ベルリン最終日ということもあり、はりきりすぎて午前5:00に目が覚めてしまいました。二度寝を試みたものの眠ることが出来ず朝食の時間までホテルの周辺を散歩しました。全員で移動する観光地としてまずポツダム広場を訪れました。

広場内にあるSONYセンターは全面ガラス張りになっており、屋根が特徴的なテント形式でした。それを見て富士山を連想しました。夜になるとライトアップもされるらしく周辺にはオシャレなカフェも見受けられましたので次に行く機会があれば行ってみたいです。



SONYセンター

ポツダム広場にある東西ベルリンの境界に建てられていた検問所の跡、チェックポイント・チャーリーにも行きました。実際に残っていたのは交差点の一画だけなので、周辺を歩いてみてもどこが検問所なのか気づきませんでした(口絵写真35)。

注意して観察してみるとベルリンの壁があった部分に

は今でも当時の壁の石が道に埋まっており、それは街の様々な場所で見ることができました。学生時代に習った歴史を身近に感じることが出来ました。

5. 4日目

4日目は朝から2時間程バスに揺られシュタインガーデンにあるヴィース教会に向かいました。

ヴィース教会はのどかな草原に囲まれていました。外観のシンプルさと相反して内装はとても色鮮やかでした。

ガイドさんの説明から天井に描かれている絵一つ一つに意味があることを知り関心を持ちました。

教会を訪れたのは初めてで、その神秘的な雰囲気にな少しのまれてしまいました(口絵写真40)。

教会から30分程バスで移動して到着したのは、今回の旅行で一番楽しみにしていたノイシュヴァンシュタイン城でした。ディズニーランドのシンデレラ城のモデルとして世界中から観光客が訪れる大人気スポットです。

外から綺麗な写真を撮りたいと思い谷底から約90mもの高さに架けられたマリエン橋に行きそこから広大な自然をバックに良い写真を撮ることができました。少し曇っていた事が心残りでしたが、それでも絶景スポットから見た城はとても美しく感じました。城内の写真も納めたかったのですが撮影禁止ということで諦めざるを得ませんでした(口絵写真41)。

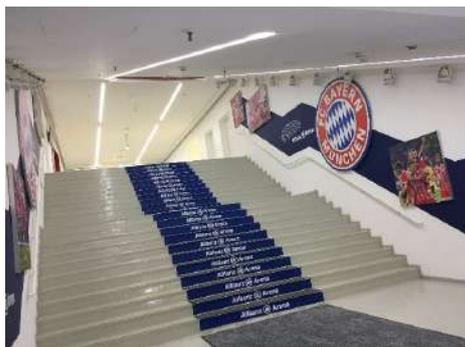
それからまた2時間程かけてミュンヘン中心部のマリエン広場に移動しました。その貫禄とスケールから「城なのかな?」と、一瞬疑ってしまうぐらい大きな市庁舎がありました。市庁舎には威厳を感じさせる塔があり、塔上部にはからくり時計が設置されていました。残念なことに私達が訪れた時間帯では、からくり時計が動く光景を見ることは出来ませんでした。塔に登ることも出来ませんでした。高さが85メートルもあり塔の上からはミュンヘンの街を一望できるそうです(口絵写真43)。

夕食の場所が市庁舎の近くで、少し自由時間があつたのでデパートにお土産を探しに行きました。そこで念願のドイツビールを購入することができました。

6. 5日目

前日は疲れており、ベッドに寝転んで1分もたたないくらいで寝てしまい、荷物の整理をしておらずバタバタと慌ただしくミュンヘン観光最終日を迎えました。

観光する時間が午前中だけしかなく、時間のない中訪れたのは世界の中でも強豪と言われているサッカーのクラブチーム、バイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムでした。観客席からスタジアムを見学するだけで終わっていましたが、選手達が実際に入場する場所から本当の試合のように入場する体験をすることができました。ピッチに続く階段を登りきって周りを見渡したときスタジアムの壮大さに高揚感を抑えきれませんでした。



アリアンツ・アリーナの選手入場口

ドイツ旅行最後に訪れたのはヴェルテルスバッハ王家の宮殿レジデンスでした。外観はとてもシンプルですが、宮殿内は洗練された豪華な装飾で溢れていました。

100 部屋以上もあるので全部をじっくりと見ようとすると1日が終わってしまいます。広大な宮殿を30分という短い時間の中急ぎ足でまわったので説明も短く内容があまり分かりませんでした。次来る機会があれば時間をかけて見学したいです(口絵写真45)。

ドイツでの全日程を終了し空港に向かいました。空港では、換金できない少額の余ったユーロを使い切ろうと思いきやお菓子などお土産を大量に購入しました。

7. 6日目

夕方に出発したおかげか帰路はぐっすり睡眠を取ることができました。日本に到着したのが午前10:00ぐらいであったこともあり時差ぼけもなく帰国することができました。飛行機を乗り継ぎ午後3:30に高知龍馬空港に到着しました。

8. 食事

ドイツと言えばやはりソーセージで、どれも肉厚で絶品でした。ドイツに来るまで、主食はジャガイモやソーセージというイメージをもっていました。実はパンであることを知りました。



昼食に食べたソーセージとポテト

9. おわりに

海外は馴染みにくいものだと勝手に自分の中で思い込んでいました。ドイツのゆったりとした雰囲気はとても自

分に合っており、また行きたいと思いました。

ドイツの文化と歴史

設計部 橋梁構造課
杉本 梨菜 (2018年入社)

1. はじめに

国内旅行にはよく行くことがあったが、初めての海外旅行であり、楽しみに満ちた気持ちで旅行に向かった。

ドイツに関しては、ビールとソーセージが有名という知識しかなかったので、旅行先について多少調べていた。今回の旅行で訪れた場所について、いくつかピックアップして述べる。

2. 食事

ドイツでは、じゃがいもとソーセージが有名で、滞在中何度か食べる機会があった。味付けは、その場所によって少し異なるように思った。全体的に塩が多く使われていて濃く感じたが、ビールとの相性がとてもよかった。

じゃがいもは塩で茹でたものやポテトフライなどの料理があった。じゃがいも団子というもちもちとした食感の料理がとても美味しいと感じた。夕食に白ソーセージが出てくる機会があった。日本ではソーセージの皮はそのまま食べることが普通であるが、ドイツでは皮を剥いてから食べることを知り驚いた。白ソーセージの皮を上手く剥げず苦労したが、マスタードを付けて食べるととても美味しかった。

ビールには様々な種類があった。その中でもピルスというビールは日本のビールに似ているような気がした。ドイツでよく飲まれているビールでとても飲みやすく、何度か飲む機会があった。私が一番飲みやすいと思ったのは、ラドラーと呼ばれるビールをレモネードで割って作られたものである。苦味が少なく、甘めで飲みやすいビールであった。ビールが苦手な方に勧めたい。



白ソーセージ

3. 観光

私が一番楽しみにしていたのは、シンデレラ城のモデルとなったノイシュヴァンシュタイン城である。ノイシュヴァンシュタイン城の建設の歴史などについては、パンフレットを一読したのみでありあまり詳しいことはわからないままであった。しかし山々に囲まれた城の美しい景色を見る

ことができ、とてもよかったと思った。城の内部を見学できるのは、時間指定制のガイドツアーのみで個人で入ることは難しいようであった。この旅行で見学したことをしっかりと記憶に残しておきたい(口絵写真41)。

ミュンヘンにあるマリエン広場とレジデンツでも素敵な建物を見ることができた。マリエン広場からノイハウザー通りはミュンヘンの観光の起点となる場所で、たくさんの人がショッピングなどを楽しんでいた。マリエン広場に面して新市庁舎が立っていた。尖塔がネオ・ゴシック様式で建てられているようで、他の建物と違い威厳のある雰囲気がとても良かった(口絵写真43)。

レジデンツは時間の関係で簡単にしか見ることができなかったのですが、プライベートで行くことができれば、その時に観光したい。

サンスーシ宮殿には様々な部屋があり、どの部屋も素敵な装飾が施されておりとても美しいと感じた。ガイドさんが大きな部屋は隅々まで金箔を使用した装飾などがされているが、客間は少し劣ると説明していた。確かに客間である天井を見上げると装飾がされていない部屋がありとても驚いた。部屋にあった装飾を考えて作られていることがわかった。

ドイツの建物では金箔をたくさん用いて豪華に作られている部屋などがあり、日本との違いを見ることができた。日本の和を大切にした建築も素敵だと思うが、ドイツの様々な建物を見ることができてよかったと思った。今後世界の建物などを見て自分の興味関心を広げていきたい。

4. 教会

ヴィース教会の外見は、草原の雰囲気を壊さないような素朴な雰囲気であった。しかし中はあまりの美しさに圧倒された。外見とは違い華やかな雰囲気であった。しかしどこか落ち着いているような感じもあった。祭壇は華やかな装飾であったが、天井には青を基調とした空が描かれており美しかった。空に架かる虹に天使たちが描かれている様が、天国の明るい様子を示しているようであった。宮廷画家だった兄ヨハン・バプティスト・ツィンマーマンが考えた「キリストの復活や最後の晩餐」を表現している。朝早くの到着だったため巡礼者はほとんどおらず教会の雰囲気をしっかりと堪能することができた(口絵写真40)。

マリエン広場で自由行動があったので近くの聖ミヒャエル教会を訪れた。お祈り中だったため祭壇の近くまで行くことはできなかったが、ヴィース教会よりも落ち着いている様子であった。装飾が白を基調としたものが多く、金箔は少なかったように思う。天井画もなく全く違っていると感じた。なによりこのような落ち着く雰囲気もあるのかと驚いた。実際にお祈りを捧げている光景を見ることができてよかった。

私は教会を訪れたことがなく、宗教にもあまり興味はなかった。教会は日本でいう仏教の寺院などと同じように、神様を崇拝する場所のイメージしかなかった。実際に教会の様子を見ることで宗教に対する気持ちが少し変化した。

ひとつひとつの絵や装飾に深い意味があることを学んだ。



聖ミヒャエル教会

5. 歴史

ドイツの歴史で私が知っていたのはベルリンの街が壁で分断されていたということぐらいであった。ベルリンの壁が崩壊したのは1989年で意外と最近であることに驚いた。東ベルリンと西ベルリンの境界線上に置かれていた国境検問所になっていたチェックポイント・チャーリーにも訪れることが出来た。分断されていたことをあまり感じさせなかった。しかし道路にはそこに壁があったことを示す石が埋められた場所をいたるところで見ることがあった。

ベルリンの壁は現在でも一部残されている。イーストサイド・ギャラリーは絵を書くための場所として残されており、数キロメートル続く壁に描かれている絵はとても迫力があった。しかしこれが国を分断するための壁であったということ考えると、少し悲しい気持ちになった(口絵写真36)。

歴史関係の建物で私が忘れてはいけないと思ったのは、ポツダム宣言の場所となったツェツィーリエンホーフ宮殿である。ポツダム宣言は小学校の頃から社会の授業などを通して耳にすることがあった。日本の終戦に関わることだと聞いていたためポツダム宣言が重要なことは知っていた。しかしポツダム宣言がどういった経緯で行われたのかなど詳しいことまでは覚えておらず、歴史を振り返ることができてよかった(口絵写真34)。

ドイツの歴史の中でユダヤ人の虐殺のこともガイドさんの話で聞くことがあった。歴史について詳しいことはわからなかったため、もっと知識を持っていなければならないと思った。また戦争という過去があったことを忘れてはいけないということを痛感した。

6. 終わりに

私はこの社員旅行を通して様々なことを学ぶことが出来た。テレビや本などでは分からない現地の様子を実感することができて本当によかった。世界はとても広く、日本だけで満足してはいけないとも思った。ドイツでは今回ピックアップしたもの以外にも様々な場所を訪れることができた。自動車のBMWの博物館やサッカーのスタジアムであるアリアンツ・アリーナなどを訪れて良い経験になった。

今回はドイツの音楽に関わるができなかったため、機会があればプライベートで訪れ音楽にも触れてみたい

と思った。

初夏のドイツ旅行

調査部 空間情報課
坪田 沙希 (2018 年入社)

1. はじめに

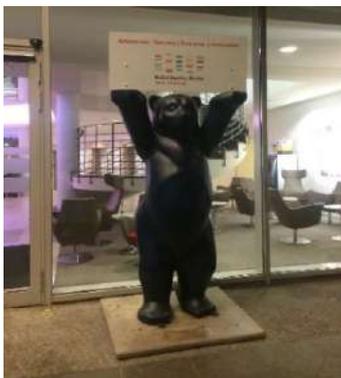
ドイツのミュンヘンは一昨年12月に訪ねたことがあり、このたびの社員旅行が訪独2回目である。初夏のドイツを堪能することができ、非常に嬉しく思う。

5月21日、高知を出発してから約15時間後、ドイツの首都ベルリンに到着し、宿泊先の Hotel Berlin ではベルリンのシンボルであるベルリン・ベアが歓迎してくれた。ドイツとの時差はサマータイム期間(2018/3/25~2018/10/28)のため日本時間よりマイナス7時間である。ドイツは北海道よりも緯度が高く、滞在中は夜9~10時までは空が明るかった。

2. ベルリン観光

今回、ドイツでの最初の食事はホテルの朝食であった。オーソックスな献立が並べられていた。他の宿泊客を見ているとパンをナイフで半分に切り、野菜、生ハムを挟み、オリジナルのサンドウィッチを作って食べる人、コーヒーだけを飲む人と、さまざまであった。私はお皿に生野菜、生ハム、ベーコン、マッシュルーム、パン2個を盛り付けた。日本でも同じような食材を食べているはずだが、気候や文化が違うと味付けの仕方、風味が変わり、全く別の料理のように感じられた。

朝食後、バスに乗り込み、向かった先はブランデンブルク門、ドイツ連邦議会議事堂である。早朝は少し冷たい風が吹いていたが、天候は快晴であり、昼頃になると夏を感じる程の暑さになった。私の想像以上にベルリンは気温が高く、太陽の日差しが強かった。



ホテル入口で歓迎してくれたベルリン・ベア

ベルリンからは放射状に各地に向かう街道が伸びており、壁と交差するところには、18か所の関税門が設けられ、ベルリンを出入りする物資に関税を課していた。訪れたブランデンブルク門も関税門のひとつであった(口絵写真31)。

ドイツ連邦議会議事堂を見学することができるのは一部のエリアのみである。今回、ガラスドーム内部に入場することができた。ドーム内部のスロープを上りきった頂上ではベルリンを360度見渡し、ビルがところどころ建ち並んでいるが、どこか中世の面影を残す街並みに感動した(口絵写真30)。

バスでの移動中に現地ガイドの方に車内で流していただいたフランツ・フォン・シューベルトの歌曲“菩提樹”は初めて聴いた曲である。ベルリンの菩提樹の並木通りの風景に溶け込んでいき、作曲家たちが見ていた風景を目の前にして、この曲を聴くことができよかつたと思う。

ベルリン観光のなかで印象的であった観光地は第二次世界大戦後、東西ドイツを分断していたベルリンの壁である。イーストサイド・ギャラリーにて、芸術家たちが壁に平和へのメッセージをストレートに描いた作品を観覧することができた。作品の内容は戦争のことだけではなく、環境問題、核兵器問題、人種差別などさまざまであった。また、ベルリンの壁以外にもユダヤ人大量虐殺により亡くなった方々の慰霊碑や東西に分断されていた当時の史跡など、ベルリンには戦争の記録を多く残していた。



菩提樹の並木通り



ベルリンの壁に描かれた作品



ユダヤ人の方々の慰霊碑

3. 南ドイツ観光

5月24日、ベルリン-ミュンヘン便に搭乗し、バイエルン州の州都ミュンヘンに到着した。ミュンヘン空港は近代的なデザインであり、南ドイツのハブ空港の役割を担っており、日本への航路もANA羽田直行便が就航している。

ミュンヘン空港まではミュンヘン中央駅よりバス、列車が運行されている。南ドイツののどかな風景の中を自動車道が横断しており、ミュンヘン中心部に到着するまでにドイツの基幹産業を担うメルセデス・ベンツ、フォルクスワーゲンのショーウィンドウを見ることができた。

アウトバーンから観光地に向かう行程がベルリンやミュンヘンでもいくつもあり、アウトバーンは日本の高速道路とは交通ルールが異なっていた。アウトバーンの速度制限表示が普通車は100km/hとなっており、場所によっては80km/hで制限されているが、実際の速度は無制限であることには驚いた。これにはドイツの歴史が関わっている。第二次世界大戦で敗戦した際、最初に開通したのがフランクフルトからダルムシュタットまでの40kmにも満たない短い区間であった。この区間でメルセデス・ベンツなど自動車会社が自社の車の最高速度を競い合った歴史がある。このようなことからアウトバーンの走行速度は200km/hが当たり前であり、日本では考えられない速度である。非常に驚いたことは交通事故数が日本よりも少ないことである。

ミュンヘン中心部はベルリンと違い、石畳の道、建物、街頭の灯り、どこを見ても気品さ、優雅さを感じ、また国内・国外出身者問わず就職のしやすさ、交通機関の発達度などが高いことから、ミュンヘンは毎年発表される「世界で最も住みやすい都市ランキング」で常に上位であり、その結果も納得である。しかしながら、富裕層が多く、街並みに華やかさがある一方で、ミュンヘン中央駅付近には難民、浮浪者が多く滞在しており、家がないために地べたに座っている方が目についた。華やかさのなかに、麻薬が行き交ったり、難民、浮浪者が多かったりという暗い一面も持つ街である。

中心部マリエン広場周辺はやはり芸術と音楽の都市と云われるだけあって沢山のミュージシャンたちが路上ライブをしており、より一層ミュンヘンを楽しませてもらった。今回、訪れることはできなかったが、ミュンヘン工科大学に隣接しているノイエピナコテークにはゴッホのひまわり、ピカソ、フェルメールなど絵画の知識がない私でも知っている画家たちの作品が展示されている。次の機会にぜひとも訪れたい。

ミュンヘン滞在中に夕食で訪れた世界一有名なビアホール“ホフプロイハウス”では1リットルの大ジョッキに注がれたビールには度肝を抜かれた。店内一番奥にあるステージでは南ドイツの伝統衣装を身に纏った奏者たちによるバンド演奏が行われており、鞭を楽器として演奏していたり、外国人観光客の団体が曲に合わせて歌ったり、とても楽しい時間を過ごした(口絵写真39)。

旅行4日目、世界遺産のキリスト教のヴィース教会、そしてドイツで一番人気の観光地ノイシュヴァンシュタイン城を訪れた。ドイツ国内の宗教人口の割合はキリスト教が占めている。宗教や教会毎に造りが違い、それぞれの特徴があると教えていただいた。ヴィース教会は「草原の教会」という意味であり、ロココ調の建物である。外観はシンプルだが、内部の壁、天井には外観からは想像ができないような華やかな絵画・装飾があった。そのため、世界遺産登録の経緯は宗教的にも芸術的にも価値が高いことから登録された。



世界遺産のヴィース教会

ノイシュヴァンシュタイン城はルートヴィヒ2世により19世紀に建築された。ノイシュヴァンシュタイン城のような白亜の城は兵庫県の姫路城しかり、人々を引きつける魅力がある。残念ながら、城内は写真撮影禁止のため、内部の様子を残すことはできなかったが、城内に作られた洞窟や豪華絢爛な大広間など、財を存分に費やしたルートヴィヒ2世の住処を見学することができた(口絵写真41)。

4. お土産

ドイツのお土産はベルリンの地元民御用達のスーパーマーケット Netto と観光地で購入した。食べ物やビールなどをお土産にしたい場合はスーパーマーケットでの購入をぜひ推奨したい。地元民が普段から使用するスーパーマーケットにはドイツならではのお菓子や飲み物を購入することができ、価格も観光地で購入するよりも安い。熊の形をしたグミ“ハリボー”、赤ワイン、プレッツェルのスナック菓子、チョコレートなどを購入した。また文房具が有名であり、自分へのお土産としてLAMYの万年筆を購入した。ガイドの方の説明に何度も登場した作曲家ワーグナーの歌劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」にもパン屋や鍛冶屋、靴屋などの職人(マイスター)が登場するが、ドイツは伝統文化・技術の継承を政策として行っており、職人の国であるとても感じた。

5. 最後に

ドイツの色彩豊かな自然、歴史ある街並のなかを歩き、さらにボリューム満点のドイツ料理やビールから沢山のエネルギーをいただきました。これを励みとして、日々の業務に精一杯取り組んでいきたいと思ひます。

社員旅行の思い出

代表取締役社長 右城猛

まえがき

第一コンサルタンツに入社して 32 年、社長に就任して 10 年が経つ。ようやく社員と一緒にヨーロッパ旅行ができる会社になれたかと思うと感無量である。

最近入社した社員には、わが社に苦しい時代があったことなど想像もできないと思う。わが社の経営がここまで来るには、長い年月と先輩社員たちの血のにじむような努力があった。そのことを若い社員たちにも是非知ってもらいたいとの思いで、これまでの社員旅行を振り返ることにした。

はじめての社員旅行

私が第一コンサルタンツ(当時は第一測量設計コンサルタンツ)に入社したのは昭和 61 年である。社員は 41 名であった。それでも高知県内では最大規模を誇るコンサルタンツであった。経営は破綻状態にあり、社員の給料は驚くほど安かった。

昭和 62 年に社長が創業者の矢野利男氏から新名義弘氏に代わった。矢野社長による経営が行き詰まったためである。ところが、新名社長の誕生直後からバブル経済が始まり、ゴルフ場や住宅団地などの大規模開発が急増した。そのお陰で、昭和 63 年度決算は 1 千万円を超える利益が出る見通しがたった。新名社長から、「利益が出るが右城さんどうしましょう」と相談されたとき、即座に「全員で旅行しましょう」と提案し、「伊勢神宮と伊賀の里」へ行った。

利益が出たといっても借入金がたくさんあり、社員の給料を上げられる状態ではなかった。社員の苦勞に報いられるのは、旅行が精一杯だったのである。

その後、平成元年に「沖縄」、平成 3 年には「熱海」へ旅行した。

はじめての海外旅行

平成 4 年 10 月に新名社長が肺癌のため他界した。そのあとを引き継いだのは小田義人氏であった。

平成 4 年にバブル経済は崩壊したが、国土交通省の公共事業関係予算は大幅に増えた。アメリカから日米貿易不均衡を是正するため内需拡大を求められ、10 年間で総額 630 兆円という「公共投資基本計画」が策定されたためである。

この影響で平成 4 年には過去最高の 7 千万円を越す利益を上げることができた。社員は 74 名に増え、会社には勢いがあった。

創立 30 周年となる平成 5 年の社員旅行は、小田社長の提案で「ハワイ」に決定した。初めての海外社員旅行

である。

恒例行事となった社員旅行

平成 6 年からは社員旅行を毎年の恒例行事とし、偶数年は海外、奇数年は国内と決め、平成 12 年までの 7 年間に、「香港・マカオ」、「北海道(道央)」、「シンガポール」、「宮崎」、「オーストラリア」、「北海道(道東)」、「グアム」と社員旅行を続けた。

受注が順調で、会社経営にゆとりがあったのは平成 11 年までであった。それ以降は公共事業費が毎年削られ、平成 13 年からは社員旅行をする余裕がなくなっていた。それでも創立 40 周年の平成 15 年にはカナダへ行く計画を立てていたのであるが、鳥インフルエンザが猛威を振るい始め、急遽取り止めた。その代わり、翌年の平成 16 年に二度目となるハワイへ 40 周年記念旅行をした。

社員旅行を中断

平成 16 年のハワイ旅行以外は、平成 13 年からずっと社員旅行を中断していた。その最大の理由は会社経営の悪化であるが、その他にも理由があった。

平成 5 年から旅行のため社員に毎月 3,000 円の積み立てをしてもらい、旅行費用の不足分を会社が負担していた。最初は喜んでくれていたが、ある頃から参加率が 50%を切るようになってきた。旅行に行かなければ 1 年間の積立金 36,000 円が返金されるためである。支給されるボーナスが年々減少していたため、返金される積立金が社員の生活を支える上で必要だったのである。

参加率が 50%を切れば、福利厚生として認められなくなる。半分以上の社員が希望しない旅行を無理矢理に続ける必要は無いという判断で平成 13 年以降、社員旅行を取りやめることにしたのである。

創立 50 周年記念旅行とその後の社員旅行

平成 20 年を底に公共事業予算は少しずつ回復し、平成 21 年からは利益が出せる状態になっていた。そうした中、平成 24 年 12 月の笹子トンネル天井板崩落事故による道路施設点検特需で仕事が増え、これを契機に当社の経営は一気に軌道に乗ることができた。

創立 50 周年の平成 25 年には、9 年振りの社員旅行として台湾へ行った。「台湾を愛した日本人土木技師 八田興一」の著者である古川勝三先生に同行していただき、台南市にある八田興一の銅像や彼が造った烏山頭ダムを見学してきた。

小泉政権時代に「公共投資基本計画」が廃止され、そ

これを契機にインフラ不要論が叫ばれるようになっていた
のであるが、民主党の鳩山政権が「コンクリートから人
へ」をキャッチフレーズに誕生すると、さらにマスコミ
が「公共事業悪玉論」「公共事業絶対悪論」を煽りだし、
土木技術者は肩身の狭い思いを余儀なくされていた。大
学や高専から「土木工学科」の名称が消えるまで「土
木」の人気は低下していた。

戦前、日本が台湾を統治していた時代に、土木技術
者・八田與一が台南市に烏山頭ダムを造り、不毛地帯で
あった嘉南平野を15万ヘクタールの大穀倉地帯に変
え、台湾経済の発展に大きく貢献している。70年以上経
った今でも八田與一は台湾の人々から尊敬され、中学校
の教科書にも紹介されているのである。

烏山頭ダムのほとりに、地元の人たちが建立した八
田與一の銅像と八田夫婦の墓がある。台湾に行き、その
前に立てば、土木技術者としての誇りと自信を取り戻せ
るのではないかと思ったからである。

台湾旅行以降は社員旅行を再開し、「東京・横浜」、「北
海道(道央)」、「グアム」、「立山・黒部アルペンルート」
に行っている。

過去の経験から、平成25年以降の旅行については、
費用を全額会社が負担している。

創立55周年記念ヨーロッパ旅行

序文でも述べているが、私は数年前から社員に対して、
「55周年には全員でヨーロッパへ行こう」と夢を語り、
高い経営目標を掲げてきた。社員はこれによく応え業績を
伸ばし、平成29年度には念願であった20億円の受注目
標を突破することができた。

旅行先は社員の希望を優先させ、イタリア、フランス、
ドイツへ3班に分かれて行くことにした。1カ国より3カ
国に社員が行けば、より多くの情報を集めることができ、
それが会社の財産になるという思いもあった。

ヨーロッパ旅行に参加した社員は、イタリアが30名、
フランス27名、ドイツ31名(この内の10名は新入社員)
であった。旅行に同伴した家族は、イタリアが6名、フラ
ンスが2名、ドイツが1名であった。社員全員で行くこと
が私の目標であったが、自身の健康、子供の世話、親の介
護などの問題を抱え参加できなかった社員がいた。本当に
悔しい思いがした。

過去の海外社員旅行では、必ずなにかしらのトラブルが
あった。平成5年のハワイ旅行では、社員の一人がパスポ
ートの入ったセカンドバックを置き引きされた。平成6年
に香港へ行ったときも社員の一人がスリにあった。平成
25年の台湾旅行では、社員が途中ではぐれて大騒動にな
った。平成28年のグアム旅行では、航空機のトラブルで
帰国時間が大幅に遅れ、ご家族に心配をおかけした。

ヨーロッパは、日本のようには治安が良くない。2~3名
はスリや置き引きに遭うだろうというのがJTBの当初の
予想であった。

しかし、親睦会役員とJTB添乗員による事前の準備と
現地での気配り、社員の協力のお陰で誰一人被害に遭遇す
ることなく、体調を崩すこともなく無事に帰ってこられて、
ホッとした。

あとがき

平成25年の社員旅行以降、参加者全員に旅行記を執筆
していただいている。

社員が書いたレポートを読むと、社員がどのような視点
でものを見、そして考えているのかを知ることができる。

抜群の文章力を持った社員、独特の感性を持った社員、
優れた論理的思考をする社員、日常業務とは関係ない分野
の専門知識を持った社員などを発見すると嬉しくなる。

小学生のような文書を書いていた社員が、旅行記を書く
たびに成長する姿を見るのもまた楽しいものである。

人間の幸せは「愛されること」「褒められること」「役に
立つこと」「必要とされること」だと言われている。

第一コンサルタントは、建設コンサルタントの仕事を通
じて社会に貢献できる人材の育成を目指している。毎年、
多忙な仕事の間隙を縫って社員旅行に行っているのは、知
らない場所で社員同士が助け合いながら見聞を広めれば、
大きく成長すると期待しているからである。

5年後には創立60周年を迎える。社員全員で再びヨー
ロッパに行くことを目標にして、さらなる社業の発展を目
指してゆく決意である。

創立 55 周年記念社員旅行 イタリア・フランス・ドイツ

平成 30 年 11 月 29 日 発行

発行・編集 株式会社 第一コンサルタンツ
〒781-5105 高知県高知市介良甲 828 番地 1
TEL 088-821-7770
FAX 088-821-7078

印刷・製本 有限会社 西村謄写堂
〒780-0901 高知県高知市上町 1-6-4
TEL 088-822-0492
FAX 088-825-1888

